沼袋遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 216 集

2015

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

ぬ　ま　ぶくろ

沼袋遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 216 集

平成 27 年

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、沼袋遺跡の調査成果をまとめたものです。

沼袋遺跡は山形県中央部に位置する東根市にあります。東根市は風光明媚な田園都市です。さくらんぼの生産量が日本一を誇る一方で、主要国道や高速道路、新幹線、空港など、本県の交通の結節点として多くの交流があります。

このたび、高速道路・東北中央自動車道（東根～尾花沢間）の建設事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される沼袋遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、川沿いに連なる古代集落の居住域と、中小規模の屋敷が密集する中世の村が見つかりました。遺跡は最上川の氾濫原に位置し、川に寄り添う古代の生活から、中世には洪水で村が流失するという経過が見て取れます。これらの成果は、古代・中世に展開した東根市域の歴史を考える上で重要です。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　菅野　滋

凡　　例

1　本書は東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に係る「沼袋遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報・速報会資料・調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が実施した。

4　本書の執筆は菊池玄輝が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、伊藤邦弘、斉藤敏行、須賀井新人が監修した。

5　遺構図の座標値は平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）に基づく。また方位は座標北を、高さは海抜高を表す。

6　遺構記号の表記は『発掘調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課編 2010a）に倣い、次のとおりとした。

SA…柵　SB…建物（竪穴建物以外）　SD…溝・堀　SE…井戸　SI…竪穴建物

SK…土坑　SL…炉・カマド　SP…柱穴・ピット　SS…礎石　NR…自然流路

個々の遺構が組み合って一つの遺構を構成する場合は、掘立柱建物と個々の柱穴、竪穴建物とカマドなど、個々の遺構記号の頭文字を「E」に変え EP や EL とした。

7　遺構図・遺物図の縮尺は各図に示し、対応するスケールバーを付した。

8　遺物図の無地網の用法は次のとおりである。遺構図の無地網の用法は各図に示した。

【土器・陶磁器】

断面…須恵器　内面…黒色処理　…漆　…火襷　…釉薬

…コゲ　←→…砥面・漆継ぎ範囲　…打欠き方向

【石製品】

…ガジリ　…油脂状付着物　…被熱　…砥面（強）　…磨面

…磨滅光沢　…砥面（弱）　…砥面範囲　…敲打痕範囲

9　土色の表記は『新版標準土色帖』（小山・竹原編著 2008）によった。

10　日本建築学会・中村隼人氏より SB 建物について御寄稿いただき、第Ⅴ章に掲載した。

11　整理等作業に際し、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。（順不同、敬称略）

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター　鈴木信

札幌市教育委員会　榊田朋広

＊　引用文献は 15 ページに収録した。

調 査 要 項

遺跡名	沼袋（ぬまぶくろ）遺跡		
遺跡番号	211-070		
所在地	山形県東根（ひがしね）市大字長瀞（ながとろ）字沼袋		
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 23 年度）		
	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年度以降）		
受託期間	平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日		
	平成 24 年 4 月 6 日～平成 25 年 3 月 29 日		
	平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日		
	平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日		
現地調査	平成 23 年 5 月 17 日～ 11 月 17 日		
調査担当者	平成 23 年度	調査課長	安部実
		考古主幹	伊藤邦弘
		調査研究員	菊池玄輝（調査主任）
		調査研究員	川崎康永
		調査研究員	尾形知哉
		調査員	安部将平
		調査員	濵田純
		調査員	山田和史
	平成 24 年度	整理課長	黒坂雅人
		調査研究員	菊池玄輝（整理主任）
		調査員	山田和史
	平成 25 年度	整理課長	黒坂雅人
		調査研究員	菊池玄輝（整理主任）
		調査員	山田めぐみ
	平成 26 年度	整理課長	伊藤邦弘
		調査研究員	菊池玄輝（整理主任）
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課（平成 23・24 年度）		
	山形県教育庁文化財・生涯学習課（平成 25 年度以降）		
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所		
	東根市教育委員会		
	山形県教育庁村山教育事務所		
	村山東根土地改良区		
業務委託	基準点・水準測量業務　株式会社中央測量設計事務所（平成 23 年度）		
	空中写真測量業務　株式会社パスコ（平成 23 年度）		
	遺構図作成業務　株式会社パスコ（平成 24 年度）		

	自然科学分析業務（材質分析）	株式会社パレオ・ラボ（平成 24 年度）
	自然科学分析業務（年代測定）	株式会社パレオ・ラボ（平成 24 年度）
		株式会社加速器分析研究所（平成 24 年度）
	保存処理業務（鉄製品）	株式会社東都文化財研究所（平成 24 年度）
	保存処理業務（木製品）	株式会社吉田生物研究所（平成 26 年度）

発掘作業員	明石謙也	安孫子稔	池田菜穂子	伊藤久美	浦山晃	大泉芳子	太田邦子
	岡田真菜	小川勝男	小野隆	柿崎次男	片倉富代	岸健一	木村保
	後藤光夫	後藤恵美	笹原俊一	佐藤彰	志賀昭夫	篠原政一	柴田與志夫
	鈴木里美	鈴木つね子	髙橋きゑ	武田静子	縄正治	葉山健	布施勝彦
	松本榮	村山良三	森谷紀子	山口裕美子	横尾吉信	渡辺佳子	（五十音順）
整理作業員	青木昭一	安達久恵	安孫子道子	荒木由里子	荒木恵理子	伊藤あかね	稲村美子
	加藤道雄	川崎ちづる	関東美由樹	黒坂孝一	齋藤佳奈	佐藤律子	鈴木貴文
	髙木孝純	髙橋美法	東海林正裕	中島美恵子	林真世	平塚京子	布川絢美
	堀浩子	山口敦子	渡部真紀	（五十音順）			

目　次

Ⅰ　調査の経過
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　発掘作業の経過（日誌抄） …… 1
　3　整理等作業の経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の方法と成果
　1　調査の方法 …… 7
　2　層序 …… 8
　3　遺構と遺物 …… 9
Ⅳ　自然科学分析
　1　土器付着物の材質分析 …… 96
　2　放射性炭素年代測定（1）…… 100
　3　放射性炭素年代測定（2）…… 103
Ⅴ　沼袋遺跡で検出された礎石建物跡及び掘立柱建物跡の復元考察
　1　はじめに …… 107
　2　検出された礎石建物跡・掘立柱建物跡 …… 107
　3　まとめ …… 110
Ⅵ　総括
　1　発掘調査で得られた事実関係の整理 …… 112
　2　地域の中での歴史的評価 …… 114
　3　課題 …… 115
報告書抄録 …… 巻末

表

表 1　遺構番号対照表 …… 85
表 2　古代土器観察表 …… 86
表 3　中世陶磁器観察表 …… 92
表 4　石製品観察表 …… 95
表 5　鉄製品観察表 …… 95
表 6　土製品観察表 …… 95
表 7　木製品観察表 …… 95
表 8　赤外分光分析を行った付着物とその特徴 …… 97
表 9　生漆の赤外吸収位置とその強度 …… 97
表 10　測定試料および処理 …… 102
表 11　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 102
表 12　放射性炭素年代測定分析試料一覧 …… 105
表 13　暦年較正年代結果 …… 106

図　版

第 1 図　遺跡位置図 …… 5
第 2 図　発掘区概要図 …… 6
第 3 図　遺構全体図 …… 16
第 4 図　遺構図 1 …… 17
第 5 図　遺構図 2 …… 18
第 6 図　遺構図 3 …… 19
第 7 図　遺構図 4 …… 20
第 8 図　遺構図 5 …… 21
第 9 図　遺構図 6 …… 22
第 10 図　遺構図 7 …… 23
第 11 図　遺構図 8 …… 24
第 12 図　遺構図 9 …… 25
第 13 図　遺構図 10 …… 26
第 14 図　遺構図 11 …… 27
第 15 図　遺構図 12 …… 28
第 16 図　遺構図 13 …… 29
第 17 図　遺構図 14 …… 30
第 18 図　遺構図 15 …… 31
第 19 図　遺構図 16 …… 32
第 20 図　遺構図 17 …… 33
第 21 図　土層図（層序断面図） …… 34
第 22 図　竪穴建物（古代）SI5 …… 35
第 23 図　竪穴建物（古代）SI30 …… 36
第 24 図　竪穴建物（古代）SI62 …… 37
第 25 図　竪穴建物（古代）SI72 …… 38
第 26 図　竪穴建物（古代）SI78 …… 39
第 27 図　竪穴建物（古代）SI96 …… 40
第 28 図　竪穴建物（古代）SI116・183 …… 41
第 29 図　竪穴建物（古代）SI124（1） …… 42
第 30 図　竪穴建物（古代）SI124（2） …… 43
第 31 図　竪穴建物（古代）SI203 …… 44
第 32 図　竪穴建物（古代）SI247 …… 45
第 33 図　掘立柱建物（古代）SB66 …… 46
第 34 図　掘立柱建物（古代）SB89 …… 47
第 35 図　掘立柱建物（古代）SB155 …… 48
第 36 図　掘立柱建物（古代）SB173 …… 49
第 37 図　柱穴 SP17 ～ 209 …… 50
第 38 図　土坑（古代）SK50・163 …… 51
第 39 図　土坑（古代）SK201・202 …… 52
第 40 図　竪穴建物（中世）SI254 …… 53
第 41 図　掘立柱建物（中世）SB22・38 …… 54
第 42 図　掘立柱建物（中世）SB56・106 …… 55
第 43 図　掘立柱建物（中世）SB214 …… 56
第 44 図　掘立柱建物（中世）SB224 …… 57
第 45 図　礎石建物（中世）SB236 …… 58
第 46 図　柵（中世）SA117・189 …… 59
第 47 図　井戸（中世）SE194 ～ 200 …… 60
第 48 図　土坑（中世）SK44 ～ 65 …… 61
第 49 図　炉（中世）SL20・123，溝（中世）SD3・4 …… 62
第 50 図　溝（中世）SD37 ～ 54 …… 63
第 51 図　溝（中世）SD55 ～ 114，堀（中世）SD259 …… 64
第 52 図　古代土器 SI5・30 …… 65
第 53 図　古代土器 SI30 ～ 78 …… 66
第 54 図　古代土器 SI96 ～ 124 …… 67
第 55 図　古代土器 SI124 …… 68
第 56 図　古代土器 SI124・183 …… 69
第 57 図　古代土器 SI183 …… 70
第 58 図　古代土器 SI183・203 …… 71
第 59 図　古代土器 SI203 ～ 254，SB，SP，SK19 ～ 163 …… 72
第 60 図　古代土器 SK181・202 …… 73
第 61 図　古代土器 SK202 …… 74
第 62 図　古代土器 SD，NR2 …… 75
第 63 図　古代土器 NR2，グリッド …… 76
第 64 図　中世陶磁器 SI，SE，SK，SD37・51 …… 77
第 65 図　中世陶磁器 SD51・88 …… 78
第 66 図　中世陶磁器 SD88 ～ 259，NR …… 79
第 67 図　中世陶磁器グリッド …… 80
第 68 図　石製品 SI5 ～ 72 …… 81
第 69 図　石製品 SI72 ～ 124 …… 82
第 70 図　石製品 SE，SK，SD，グリッド …… 83
第 71 図　鉄製品，土製品，木製品 …… 84
第 72 図　土器付着物の顕微鏡写真と赤外吸収スペクトル（1） 98
第 73 図　土器付着物の顕微鏡写真と赤外吸収スペクトル（2） 99
第 74 図　礎石建物跡・掘立柱建物跡模式図 …… 110
第 75 図　掘立柱建物跡の分類と略平面・略断面 …… 111

写 真 図 版

写真図版 1　発掘区全景
写真図版 2　竪穴建物 SI5
写真図版 3　竪穴建物 SI30・62
写真図版 4　竪穴建物 SI72
写真図版 5　竪穴建物 SI78（1）
写真図版 6　竪穴建物 SI78（2）
写真図版 7　竪穴建物 SI96（1）
写真図版 8　竪穴建物 SI96（2）・116（1）
写真図版 9　竪穴建物 SI116（2）・124（1）
写真図版 10　竪穴建物 SI124（2）
写真図版 11　竪穴建物 SI124（3）
写真図版 12　竪穴建物 SI124（4）・183（1）
写真図版 13　竪穴建物 SI183（2）・203・247
写真図版 14　掘立柱建物 SB66・89（1）
写真図版 15　掘立柱建物 SB89（2）・155
写真図版 16　掘立柱建物 SB173，柱穴 SP168・171・209
写真図版 17　土坑 SK163・201・202
写真図版 18　竪穴建物 SI254，礎石建物 SB236，炉 SL20・123
写真図版 19　土坑 SK65，井戸 SE194 ～ 196・198
写真図版 20　基本層序断面，溝 SD4・37・64
写真図版 21　溝 SD88，堀 SD259
写真図版 22　古代土器 SI5・30（1）
写真図版 23　古代土器 SI30（2）～ 78（1）
写真図版 24　古代土器 SI78（2）～ 116
写真図版 25　古代土器 SI124（1）
写真図版 26　古代土器 SI124（2）
写真図版 27　古代土器 SI124（3）・183（1）
写真図版 28　古代土器 SI183（2）
写真図版 29　古代土器 SI183（3）
写真図版 30　古代土器 SI203 ～ 254・SB・SP・SK19
写真図版 31　古代土器 SK21 ～ 181
写真図版 32　古代土器 SK202（1）
写真図版 33　古代土器 SK202（2）
写真図版 34　古代土器 SD・NR2（1）
写真図版 35　古代土器 NR2（2）・グリッド（1）
写真図版 36　古代土器グリッド（2），中世陶磁器 SI・SE・SK・SD37
写真図版 37　中世陶磁器 SD51
写真図版 38　中世陶磁器 SD88（1）
写真図版 39　中世陶磁器 SD88（2）～ 259・NR1
写真図版 40　中世陶磁器 NR2・グリッド（1）
写真図版 41　中世陶磁器グリッド（2），石製品 SI5 ～ 72（1）
写真図版 42　石製品 SI72（2）～ 124・SE・SK・SD76（1）・グリッド（1）
写真図版 43　石製品 SD51 ～ 76（2）・グリッド（2），鉄製品，木製品

Ⅰ　調査の経過

1　調査に至る経緯

平成 13 年、東根(ひがしね)市大字長瀞(ながとろ)字沼袋において農道（現市道長瀞大久保線）工事の立会い調査を山形県教育委員会が実施した。竪穴住居や溝・土師器などを検出したことから、東西約 110m・南北約 200m の範囲を沼袋遺跡（平安時代の集落）として同年度に登録した（山形県教育委員会 2003）。

平成 22 年、東北中央自動車道（東根～尾花沢(おばなざわ)間）の建設に伴い、山形県教育委員会が事業区内で確認調査を実施した。赤焼土器や須恵器を含む遺構のほか中世陶器が出土し、隣接する長瀞本楯館(ながとろもとだてたて)（中世城館）との関連が指摘された（山形県教育委員会 2012）。

これを受け、平成 23 年度に国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所と委託契約を結び、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に伴う沼袋遺跡の発掘調査を実施した。

東北中央自動車道の東根～尾花沢間（延長 23km）は東根市羽入(はにゅう)～尾花沢市尾花沢に至る高速道路で、平成 14 年に開通した上山(かみのやま)～東根間と現在事業中の尾花沢新庄(しんじょう)道路を接続し、並行する国道 13 号の渋滞緩和や信頼性の高いネットワークの充実を図る上で重要な区間とされる（国土交通省山形河川国道事務所 online）。

2　発掘作業の経過（日誌抄）

5.17　発掘調査開始。機材搬入。作業環境の整備。
5.18　現況（発掘前）撮影。発掘区（A・B）の設定。外周の線掘り。
5.20　表土掘削開始。
5.24　遺構検出開始。
5.26　基準点測量・水準測量（外部委託）。
6.6　表土掘削終了。
6.7,9　グリッド設定（外部委託）。
6.13　遺構概略図（1/100）作成開始。
6.30　遺構検出全景（A 区）の撮影。
7.1　遺構検出終了。
7.6　遺構検出全景（B 区）の撮影。
7.13　竪穴建物 SI62、区画溝 SD55 の掘り下げ。A 区ピットの段下げ。
7.15　区画溝 SD52 の掘り下げ。
7.19　区画溝 SD51・54 の掘り下げ。
7.20　遺構概略図作成終了。
7.26　大型土坑 SK50、自然流路 NR2 の掘り下げ。
7.29　竪穴建物 SI30、区画溝 SD4 の掘り下げ。
8.1　竪穴建物 SI5 の掘り下げ。基本層序、SI62、SK50 断面の撮影。
8.2　区画溝 SD37 の掘り下げ。SI62、SK50 の断面図作成。
8.3　区画溝 SD54・55 断面の撮影。
8.4　同断面図作成。
8.5　SI5 断面の撮影。土層図（層序断面図）作成。
8.8　A 区ピットの半截。SI5 の断面図作成。
8.9　基本平面図（1/20）作成開始。
8.18　A 区ピット断面の撮影。
8.23　区画溝 SD44 ～ 46 の掘り下げ。B 区ピットの段下げ。
8.24　区画溝 SD64 の掘り下げ。SD4・52 断面撮影。A 区ピットの断面図作成。
8.25　区画溝 SD63 の掘り下げ。
8.26　SD4・52 の断面図作成。
8.30　SI5 機能面の精査。SD37 断面の撮影。
8.31　区画溝 SD88 の掘り下げ。SI5 全景の撮影。
9.1　土坑 SK44・53、区画溝 SD3 断面撮影。SD37 の断面図作成。
9.2　SI30 断面撮影。SK44・53、SD3 断面図作成。
9.6　SI30 の断面図作成。
9.9　SI62 断面の撮影。
9.12　SI5 加工面の精査。
9.13　竪穴建物 SI72 の掘り下げ。SI62 断面図作成。SI30 全景の撮影。
9.14　竪穴建物 SI78 掘り下げ。SI72・SD47 断面、炉 SL20 の撮影。SI72、SD47 の断面図作成。

9.15　SI30 機能面精査。竪穴建物 SI124 の掘り下げ。B 区ピットの半截。
9.28　SI62 全景の撮影。
9.29　SI30 加工面の精査。
10.3　SI72・78 機能面精査。区画溝 SD257・258、堀 SD259 の掘り下げ。
10.4　土坑 SK255、区画溝 SD256 の掘り下げ。自然流路 NR1 トレンチ掘り下げ。SK255 断面撮影。
10.6　SI72・78 全景の撮影。
10.7　竪穴建物 SI96 の掘り下げ。同断面の撮影。
10.11　竪穴建物 SI247 掘り下げ。SI96 機能面・SI78 加工面の精査。SI96 断面図の作成。
10.12　溝 SD211・212 掘り下げ。SI124・247 断面、SI96 全景の撮影。
10.13　SI72 加工面の精査。掘立柱建物 SB173 断面の撮影。SI247 の断面図作成。
10.14　SI247 機能面の精査。
10.17　SI124 機能面の精査。SI247 全景の撮影。
10.18　竪穴建物 SI116 の掘り下げ。SI124 全景、掘立柱建物 SB155 断面の撮影。同断面図作成。
10.19　SI96 加工面の精査。SI116 断面の撮影。
10.20　竪穴建物 SI183 掘り下げ。掘立柱建物 SB89、井戸 SE194 ～ 200 断面の撮影。SI116 の断面図作成。
10.21　SI203 機能面精査。SI116・203 全景の撮影。
10.24　SI203 加工面精査。廃棄土坑 SK202 掘り下げ。SI183、溝 SD210 断面の撮影。同断面図作成。
10.25　空撮に備え全体清掃開始。SD259 断面撮影。
10.28　SB89 の断面図作成。
11.4　空中写真測量（外部委託）。現地説明会の準備。
11.5　現地説明会の開催。約 60 名が参加。
11.7　大型土坑 SK65、区画溝 SD44 の掘り下げ。掘立柱建物 SB66、SD211・212 断面の撮影。
11.9　SK65・163・201・202、　炉 SL123、SD63・64 断面の撮影。
11.10　竪穴建物 SI254、礎石建物 SB236、SD46 断面撮影。SK65・201・202、SD88 断面図作成。
11.11　SD63・64・259 の断面図作成。発掘区仮囲いの撤去。土嚢解体。
11.14　SI254 の断面図作成。機材の洗浄。
11.15　掘立柱建物 SB224、SB236、SL123 の断面図作成。
11.16　炉 SL20 の断面図作成。基本平面図作成終了。
11.17　発掘調査終了。撤収。

3　整理等作業の経過

発掘調査終了後、平成 23 年 11 月 18 日より整理等作業を開始した。この年度は発掘記録類の基礎整理と遺物の基礎整理（洗浄・注記）を行った。

平成 24 年度は接合、選別、登録、復元、実測、遺物実測図のデジタルトレース、遺構図作成（外部委託）、遺物の材質分析（外部委託）、年代測定（外部委託）、鉄製品の保存処理（外部委託）を行った。

また整理等作業の過程で、古代土器の破面に擬口縁（佐原 1967，Stevenson1974）が露呈する個体を多く確認した。そこで事例の蓄積する北海道（鈴木・西脇 2003）で、専門の鈴木信（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）・榊田朋広（札幌市教育委員会）両氏に観察していただき、擬口縁に関する知見を得た。

平成 25 年度は実測、遺物実測図デジタルトレース、復元、遺構の検討を行った。

平成 26 年度は実測、遺物実測図・遺構断面図のデジタルトレース、遺物の撮影、木製品の保存処理（外部委託）、遺物の検討、報告書の作成を行った。

引用文献

佐原真（1967）「山城における弥生式文化の成立―畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』第 50 巻第 5 号，pp.103-127，史学研究会（再録（2005）『道具の考古学』佐原真の仕事 2，pp.308-342，岩波書店）.
鈴木信・西脇対名夫（2003）「北海道縄文晩期後葉の土器製作技法について―江別市対雁 2 遺跡土器集中 1 の事例から」『立命館大学考古学論集』Ⅲ -1（家根祥多さん追悼論集），pp.123-142，立命館大学考古学論集刊行会.
山形県教育委員会（2003）『分布調査報告書 (29)』山形県埋蔵文化財調査報告書第 203 集.
――――――（2012）「沼袋遺跡」『分布調査報告書 (38)』山形県埋蔵文化財調査報告書第 215 集，pp.20-21.
Robert・B・K・Stevenson（佐原真・鈴木公雄訳）（1974）「ヨーロッパ先史時代の土器作り（土器の話 (12)〈土器研究文献 17〉）」『考古学研究』第 20 巻第 4 号（通巻 80 号），pp.69-76・47，考古学研究会.
国土交通省山形河川国道事務所［online］http://www.thr.mlit.go.jp/bumon/j76101/homepage/road/roadmap/index.html#03（参照 2014-12-8）.

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

沼袋遺跡は、東根市大字長瀞字沼袋に所在する（第1図）。東根市は山形県の中央部に位置し、東は奥羽脊梁山脈の白髭山から西は最上川まで東西約20km、北の甑岳から南の面白山まで南北約15kmに渡る（阿子島1989）。面積の3分の2を占める東側の山地は奥羽脊梁山脈の西斜面であり、3分の1を占める西側の平地は山形盆地である。山形盆地の盆地底は、乱川・村山野川・白水川の合作による扇状地（乱川開析扇状地）と、最上川の氾濫原からできている（阿子島1995）。最上川氾濫原は自然堤防・旧河道・後背湿地などから成り、当遺跡は最上川氾濫原にあって小高い自然堤防上に立地する（米地・豊島1981）。当地には果樹園が連なるが、周囲の微低地には水田が広がる。

地元の伝承では、かつて山形盆地に「藻が湖」と呼ばれる大湖があり、「長瀞」地名は湖が後々まで乾かずにどろどろの地だったことから起きたとされる（保角1986）。

2　歴史的環境

山形県遺跡地図のインターネット公開版によると、平成26年9月30日現在で、東根市には86箇所の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）が登録されている（山形県遺跡地図online）。時代別の内訳は、旧石器時代1、縄文時代39、弥生時代1、古墳時代4、古代19、中世22である（山形県教育庁文化財・生涯学習課2014）。第1図では、当遺跡の報告に関わる古代・中世遺跡が多く分布する市域西側の平地を主に表示した。より広範な分布は上述の山形県遺跡地図で確認されたい。

以下では、時代ごとの歴史事象を簡潔に記述する。

旧石器時代　黒鳥山楯は盆地に臨む東側山地（甑岳山地）周縁の黒鳥山山頂に立地する。学術目的調査で、長径50mの環壕と内外二重の土塁及び虎口を持つ平安後期から中世前期の遺跡とされたが、あわせて石器16点（剥片4・砕片12）も出土した（黒鳥山遺跡発掘調査団2002）。

縄文時代　小林遺跡は市街の東根大森工業団地に所在し地形的には乱川開析扇状地の扇央に立地する。遺跡内の西側A地点は前期前葉～中葉（大木2～3式）の集落で、昭和49年の記録保存調査では竪穴住居2棟と土坑3穴が検出された（佐藤・佐藤1976）。遺跡内の北東B地点は中期後葉～末葉（大木9～10式）の集落で、A地点と一連の調査で竪穴住居8棟と土坑43・配石遺構1・列石遺構1が検出された（同上1976）。

このほか、正式な報告書の刊行はないものの、後期後葉から晩期全般の蟹沢熊野堂遺跡・花岡遺跡は出土遺物が充実している（阿部1989）。

弥生時代　蟹沢熊野堂遺跡は乱川開析扇状地の扇端に立地する。前期が主体で、縄文・弥生移行期の変化を知る上で重要である（加藤・佐藤・二瓶1982，1986）。

小田島城跡は盆地に臨む東側山地（甑岳山地）周縁の小起伏山地に立地する。中期前半を中心とした遺物包含層と合わせ口の土器棺墓が検出された（高桑・菅原2004，菅原2005）。

古墳時代　大塚古墳は市街の北村山公立病院敷地内に保存されている。地形的には最上川に近い低湿な名取低地（米地・豊島1981）に立地し、昭和44年の確認調査当時は田（本郷条里制）の中にあった。調査の結果、一辺30mの中期の方墳とされた（伊藤1971）。

扇田遺跡は乱川開析扇状地の前縁部に立地する。昭和47年の確認調査で、住居の一部と推定される炉と柱穴が検出されたほか、150個体以上の土師器が出土した（柏倉1973）。土師器は中期前葉（南小泉式）に限定され、「扇田式」が提唱された（伊藤1972）。

古　代　本郷条里制跡は市街のさくらんぼ東根温泉から長瀞集落に掛けて広がる、東西12町・南北15町の条里型水田である（柏倉1953）。昭和46・47年の記録保存調査で、地表の条里型水田下に埋没条里遺構を検出した（柏倉1973）。坪界の畦畔と2群の杭列及び水口である。平安時代の土器が出土したことから、周辺に分布する同時代の集落遺跡（本郷・宮崎・白金・軍町・

南方・月山堂・上江B・荷渡し）との密接な関連も考慮し、埋没条里遺構を平安時代の条里型水田、諸遺跡を農民の村と解釈した（同上 1973）。

東根市域は古代村山郷に比定されるが（加藤 1982）諸遺跡では部分的な発掘調査にとどまってきた（保角 2009）。沼袋遺跡の調査成果は、古代村山郷に存在した集落の実態を知る上で注目される。

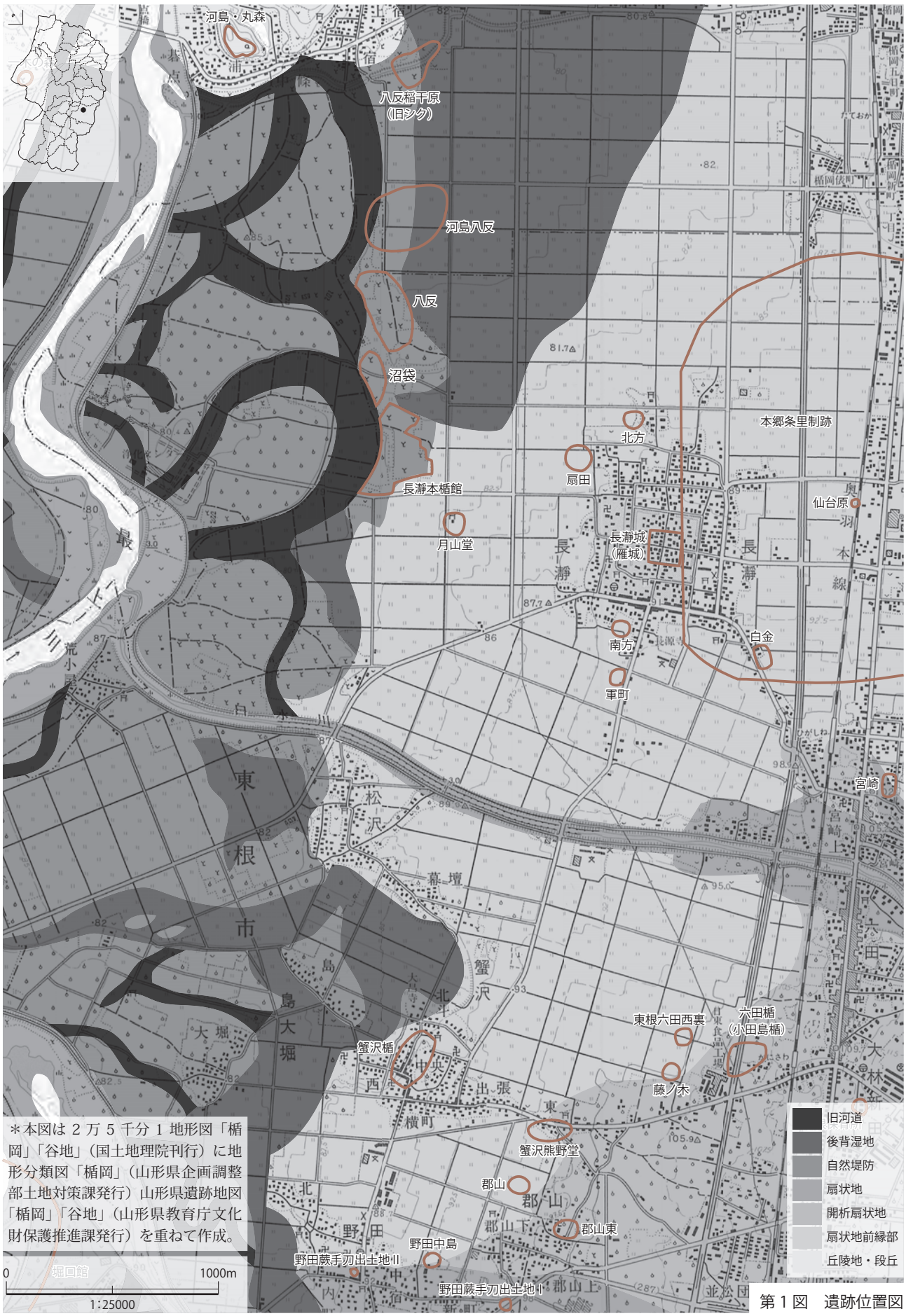
中　世　山形城主・最上満家（最上氏第 4 代当主）が晩年に政務を子息に譲り、応永 22 年（1415）、長瀞城（雁城）に隠退する（奥山 1910）。

長瀞城は平地の輪郭式城郭で少なくとも二の郭まで有するが（保角 1989）、更に三の郭と惣構えの塁線が地籍図の利用と地表観察により復元されている（梅津 2013）。長瀞城は長瀞集落の中央に所在するが、『長瀞村誌』（奥山 1910）に「然ルニ最上川（或ハ白水川）沿岸ノ地、出水毎ニ陥没シテ殆ンド本村ヲ侵サントスルナリシヲ以テ何時ノ頃ヨリカ東漸シテ現今ノ地ニ移転セシナリ」とあり、長瀞城の前身は長瀞本楯館に比定されている（川崎 1948）。当時は本楯館周辺が長瀞の中心だったものの、最上川の洪水などの影響から、館と村は現在地に移転したと考えられる（三浦 1995）。実際に第 1 図を見ると、館の西側半分が旧河道によって流失していることがよく分かる（山形県教育委員会文化財保護推進課編 2011）。ただし、満家が入部したのが長瀞本楯館か長瀞城かは定かではない（梅津 2013）。

本楯館は最上川氾濫原の自然堤防上に立地し、北から河島八反・八反・沼袋と続いて南端に位置する（第 1 図）。館は東西北の三方に堀が巡る単郭式とされてきたが（保角 1989）、字限図の利用により、範囲外にあった南側も郭とする複郭式の構造が復元された（梅津 2010）。沼袋遺跡は本楯館の隣接地に在ることから、調査で関連する遺構の検出が想定された。

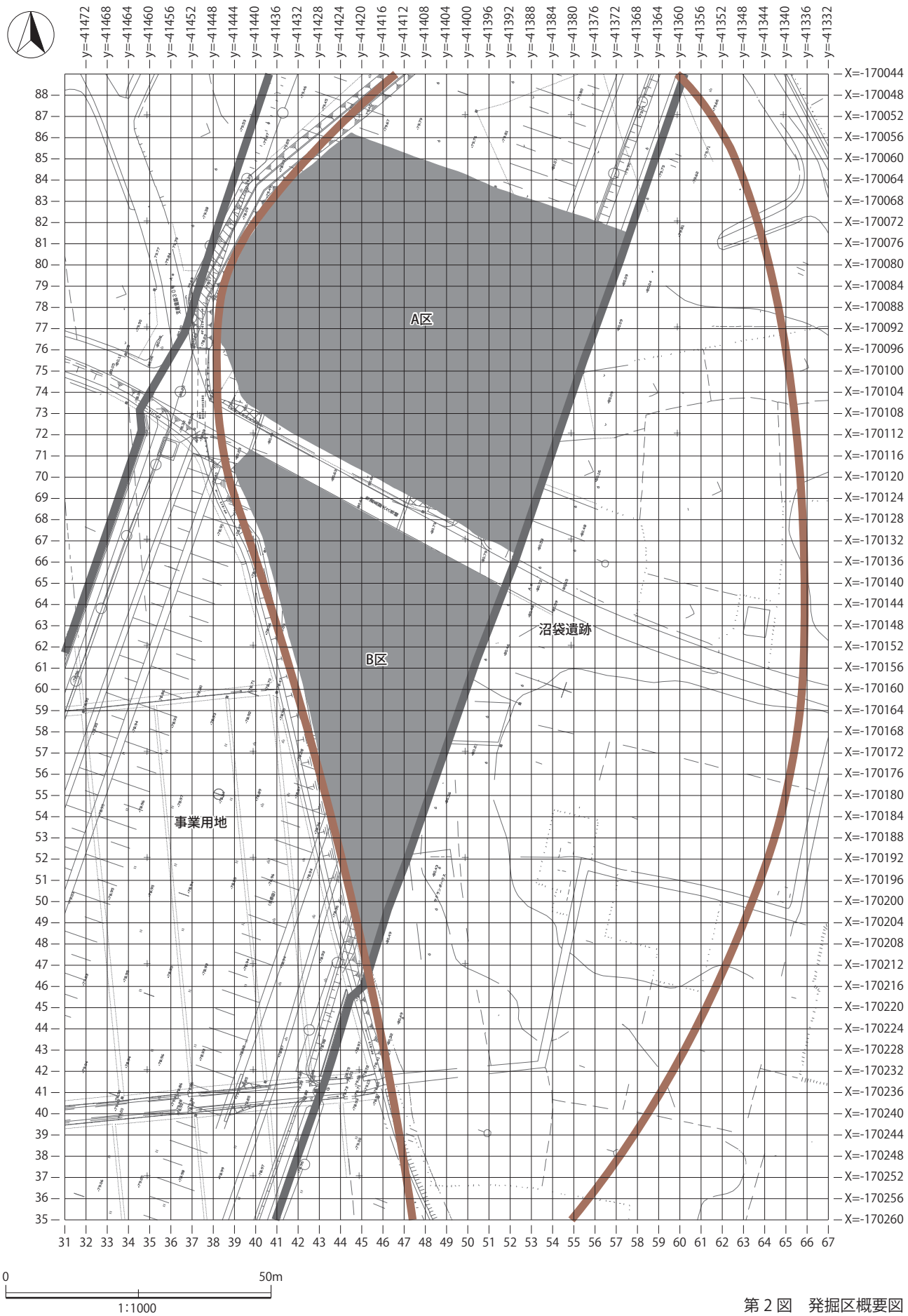
引用・参考文献

阿子島功（1989）「東根市の地形」『東根市史』別巻上（考古・民俗篇），pp.1-10，東根市.
――――（1995）「東根市の地形の概要」『東根市史』通史篇上巻，pp.6-30，東根市.
阿部明彦（1989）「蟹沢遺跡」「花岡遺跡」『東根市史』別巻上（考古・民俗篇），pp.109-172，東根市.
伊藤忍（1971）「山形盆地における発生期古墳の様相―東根市大塚古墳の発掘調査を中心として」『山形史學研究』第 7 号（柏倉亮吉教授退官記念特集），pp.72-85，山教史学会.
――――（1972）「東根市扇田遺跡出土の土師器」『寒河江考古』第 3 号，pp.19-28，寒河江考古友の会.
奥山忠三郎（1910）『長瀞村誌』（再録（1979）『東根市史編集資料』第 6 号，pp.142-179，東根市）.
梅津操（2010）「長瀞本楯の字切図による考察」『さあべい』第 26 号，pp.79-89，さあべい同人会.
――――（2013）「長瀞城の地籍図による復元」『さあべい』第 28 号，pp.44-61，さあべい同人会.
柏倉亮吉（1953）「村山平野の條里制遺跡について」『歴史』第 6 輯，pp.14-28，東北史學會（再録（1997）『草ぶえの考古学―柏倉亮吉先生の足跡とともにたどる山形の考古と歴史』，pp.30-45，柏倉亮吉先生を偲ぶ会）.
――――（1973）『東根市西北平坦部の遺跡群―古墳から条里へ』，山形県教育委員会.
加藤稔（1982）「古代出羽国郷名考証―置賜・最上・村山・出羽・田川・飽海六郡について」『研究紀要』第 23 号，pp.5-24，山形県立山形南高等学校.
加藤稔・佐藤嘉弘・二瓶由佳（1986）「最上川流域の弥生土器集成・資料篇―(Ⅱ) 村山編」『山形考古』第 4 巻第 1 号（通巻 19 号），pp.1-53，山形考古学会.
――――――――――――（1988）「最上川流域の弥生土器集成・資料篇―(Ⅱ) 村山編・遺物解説」『山形考古』第 4 巻第 2 号（通巻 20 号），pp.33-50，山形考古学会.
川崎浩良（1948）『山形の歴史』前篇，出羽文化同交會（再録（1964）『山形の歴史 (上)』川崎浩良全集 2，川崎浩良全集刊行会）.
黒鳥山遺跡発掘調査団（2002）『東根市黒鳥山遺跡発掘調査報告書』.
佐藤鎮雄・佐藤正俊（1976）『小林遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 8 集，山形県教育委員会.
菅原哲文（2005）「小田島城跡出土の弥生土器―出土地点の検討をふまえて」『研究紀要』第 3 号，pp.93-109，財団法人山形県埋蔵文化財センター.
高桑登・菅原哲文（2004）『小田島城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集，財団法人山形県埋蔵文化財センター.
保角里志（1986）『東根歴史の話』，私版.
――――（1989）「長瀞城跡」「長瀞本楯楯跡」『東根市史』別巻上（考古・民俗篇），pp.308-312，東根市.
――――（2009）『東根歴史の話―東根の原始から現代まで』改訂新版（ひがしね叢書 6），東根文学会.
三浦忠好（1995）「長瀞殿と長瀞城」『東根市史』通史篇上巻，pp.219-223，東根市.
山形県教育委員会文化財保護推進課編（2011）『「最上川流域の文化的景観」調査報告書』，山形県教育委員会.
山形県教育庁文化財・生涯学習課（2014）『平成 26 年度埋蔵文化財調整会議』資料.
米地文夫・豊島正幸（1981）「地形分類」『土地分類基本調査』楯岡，pp.17-28，山形県企画調整部土地対策課.
『最上家系図』（宝幢寺本）（再録（1973）『山形市史』史料編 1（最上氏関係史料），pp.55-60，山形市）.
『最上・天童・東根氏系譜』（菊地蛮岳旧蔵）（再録（1973）『山形市史』史料編 1（最上氏関係史料），pp.69-77，山形市）.
山形県遺跡地図［online］http://www.pref.yamagata.jp/bunkyo/bunka/bunkazai/6700015yamagataiseki.html（参照 2014-12-8）.



＊本図は２万５千分１地形図「楯岡」「谷地」（国土地理院刊行）に地形分類図「楯岡」（山形県企画調整部土地対策課発行）山形県遺跡地図「楯岡」「谷地」（山形県教育庁文化財保護推進課発行）を重ねて作成。

第１図　遺跡位置図



第２図　発掘区概要図

Ⅲ　調査の方法と成果

1　調査の方法

A　発掘作業

発掘区とグリッドの設定　発掘区は確認調査の結果（山形県教育委員会 2012）に基づき、市道長瀞大久保線を境にA区（北側 3,700 ㎡）とB区（南側 2,000 ㎡）を設定した（第２図）。

発掘区の地区割りは、山形県全域を包含する当センターの共通グリッドで設定した。これは平面直角座標系第Ⅹ系のX＝-260,000m・Y＝-120,000m を原点とし、40km 大グリッドの下に 400m 中グリッド、更にその下位に 4m 小グリッドを置く方式である。ただし、発掘区全体は大グリッド「CB」及び中グリッド「2496」の内部に収まるため、本書では小グリッド表示（X軸とY軸の平行線上の数字を合わせた４桁表記）にとどめた（第２図）。

表土掘削　表土の掘削は重機（バックホウ）を使用して行った。確認調査の結果を参照し、掘削深度を予測しつつ進めた。掘削の過程で遺物包含層や文化層は確認されなかったため、遺構面の直上まで重機で掘削した。

遺構検出　遺構面を覆う残りの直上層はジョレンなどで薄く削り取り、地山層上面で遺構検出を行った。遺構の分布や性格を大局的に把握しつつ、細部（輪郭）を検討するように努めた。ただ、実際には特にB区で遺構の重複が著しく、輪郭や先後関係を確定し難い場面が続いた。そのため、必要に応じて輪郭が明瞭になるまで平坦に掘り下げながら進めた。この際に出土した遺物は、グリッドごとに出土位置を記録しながら取り上げた。

遺構概略図の作成　遺構検出作業と並行し、発掘区の遺構概略図を作成した。これは位置や寸法の精度がさほど要求されないため、図化縮尺は 1/100 とし、平板測量で実測した。この遺構概略図を基にし、立案した調査計画の見直しを行った。遺構検出の結果、当初の推定に対し、遺構数が倍増したためである。事業者と協議の上、発掘担当者を増員し、測量機器の賃借期間を延長した。

遺構の掘り下げ　掘り下げに際し、掘方の大きな遺構では土層観察用畦（ベルト）を設定した。竪穴建物と大型土坑は、四分法で畦を互い違いにした。一方、小さな遺構は半截で対応した。いずれも主軸に直交・平行する線に合わせている。実際の掘り下げは単層ごとに行い、層理面を検出するように努めた。

遺構の実測　竪穴建物や掘立柱建物などの主要な部分はトータルステーションを使用し、1/20 の基本平面図を作成した。発掘区全体は空中写真測量で図化した（外部委託）。

遺構の撮影　6 × 7cm 判のフィルムカメラと広角レンズを使用し、白黒フィルムとカラーリバーサルフィルムの両方で撮影した。個別遺構の全景の場合、撮影対象は機能面であることから（文化庁文化財部記念物課編 2010a）、竪穴建物では床面まで掘り下げた段階、溝や土坑では底面まで掘りきった状態を撮影した。掘立柱建物は柱掘方と柱痕跡（または柱抜取穴）を段差を付けて掘り分け、機能面とした。土層断面の撮影では客観的な情報を得るため、層序区分の線を引かずに撮影している（同上 2010a）。

遺物の取り上げ　出土状況や層位との関係を観察し、必要な記録を作成した後に取り上げた。出土状況の平面図化は、遺構の機能時に共存したと考えられ、かつ個体残存率の高いものに限定した。取り上げた遺物は、遺跡名・遺構名（またはグリッド）・層位・取上げ番号・取上げ日をラベルに記入し、ビニール袋に同梱して持ち帰った。

B　整理等作業

洗　浄　土器の洗浄では、表面痕跡の消失や破面の摩耗を防ぐため、ブラシを使用しない方法（武田 2003，金田 2008）に準拠した。ぬるま湯と水に交互に浸して乾燥させ（土と遺物の収縮差を利用して土を遊離し）、仕上げに低水圧の電池式噴霧器で洗浄した。

注　記　遺物の外観を損なうことを最小限にするため、ラベルの記載事項のうち、不可欠な情報に限定して注記

を行った。

接　合　基本的に接着力の弱いセルロース系接着剤を使用したが､部分的に強力なエポキシ系接着剤も使用した。

選　別　接合作業の後、遺跡の性格などを明らかにする上で重要な遺物を選択した。中世陶磁器・石製品・鉄製品（鉄滓を除く）・木製品・土製品については全点を抽出している。抽出した遺物は全て資料化した。

復　元　欠損部分に補填材（セメント系修復用素材）を注入し、修復した。選別した遺物のみ、水彩絵具とアクリル絵具を使用し、撮影に備えて補填部分を着色した。

遺物の実測　計測は、接線の方向が変わる変曲点（凹凸の変わり目）や「屈曲点」「屈折点」（深澤 1985）を選択して行った。

土器の実測で、作図の方針と方法は次のようにした。破片の場合、残存率 1/4 以上で反転復元し、未満では中心線を省略した構図とした。欠損部分を空白にすると土器の印象が伝わりにくいため、残存部分から推定して復元した（佐藤・益子・菅原編 2001，佐藤 2013）。復元部分の描線は残存部分に対して一定の間隔を空け、明確に区別できるようにしている。調整の痕跡は全面にわたって図化し、できるだけ土器の印象を受手に伝えられるように配慮した。表現方法は『赤井遺跡Ⅰ』（同上 2001）の報告書に依拠している。須恵器器種の認定は山形盆地の分類に依った（利部 2006）。また実測の過程で一部は拓本を採取した。

石製品の実測では、方針と方法は次のようにした。展開は正面・側断面・横断面の３面を基本とし、裏面・上面・下面に使用痕跡が認められる場合は適宜図化した。砥面の研磨痕跡は摩滅光沢の強弱を２種の無地網で示した。また擦痕方向を描画し、新旧関係が判断できた場合は擦痕が砥面稜線に接する方を新とした。敲打痕跡は新旧関係と範囲を示した。切削痕跡は、擦痕のうち研磨とは異なる断面Ｖ字・Ｕ字・Ｌ字形の痕跡を指し、擦痕との違いに注意して描画した。また研磨痕跡と敲打痕跡は側断面図・横断面図にその範囲を示した。被熱痕跡が認められるものは断面図に無地網で示した。

遺物の撮影　デジタル一眼レフカメラ（キャノン EOS6D）・中望遠レンズ・ストロボを使用し、正確な色調再現のため、RAW 撮影でグレーカードを写し込んだ（文写研デジタル部会 2008）。RAW 現像では、パソコンをキャリブレーションモニタに接続し、カラーマネージメントの下、グレーカード入りの画像を利用してホワイトバランスを調整した。

保存処理（外部委託）　鉄製品の保存処理ではクリーニング後に水酸化リチウム法で脱塩処理し、合成樹脂を含浸して強化を図った。木製品の保存処理は高級アルコール含浸法による。

遺構の検討　個々の遺構の種類や性格・時期を整理し、併存する遺構群を検討した。また掘立柱建物の柱穴群の抽出は、発掘作業時のデータを提示し、日本建築学会の中村隼人氏に委任した。

遺構記号と遺構番号　発掘作業時の遺構名（遺構記号と遺構番号）は仮のものとし、整理等作業で遺構の種類や性格を見直した上で正式な記号と番号を与えた。両者の関係は対照表（表 1）のとおりである。

報告書の作成　『発掘調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課編 2010a・2010b・2013）に準拠した。

2　層　　序

発掘区の土層の重なりを区分し、広がりを対比して基本層序を組み立てた。層序区分は発掘区全体で類似的なことから、第 21 図の土層図（層序断面図）は、発掘区中央部の層序を基本層序として掲載した。

なお遺跡における土層の認識は、『環境考古学マニュアル』（那須・趙 2003）及び『発掘調査のてびき』（同上 2010a）より学んだ。

第 1 層は黒褐色（10YR3/1）腐植質シルトの果樹園作土層：土壌層位 A 層（同上 2010a）で、層厚は 20cm 以下である。第 2 ～第 5 層は自然堤防堆積物で、自然流路（旧河道）NR1 の洪水堆積層（1 ～ 4 層）をそのままとする。第 2 層は暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト層で、層厚は 25 ～ 50cm である。近世陶磁器を含む。第 3 層は暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト層で層厚は 5 ～ 20cm である。第 4 層は褐色（10YR4/4）シルト層で、層厚は 5 ～ 30cm である。第 5 層は黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト層で、層厚は 5 ～ 15cm である。上面では唯一炉 SL123 を検出した。第 6 層は褐色（10YR4/6）シルトの地山層で、炉 SL123 を除く全ての遺構は本層上面で検出した。

3　遺構と遺物

A　概　　要

発掘区北側A区では自然流路（旧河道）NR1が大きく湾曲し、区画の半面を占める。重複関係からNR1は遺跡の中でもっとも新しい。その影響からか、A区は遺構の密度が低く、遺物の出土も少ない。一方、南側B区では遺構の重複が著しく、遺物も多く出土した。

これらの遺構と遺物は、時期が古代と中世に二分される。古代の景観は川（自然流路NR2）沿いに連なる集落の居住域、中世の景観は中小規模の屋敷が密集する村である。以下、時系列に沿って主な遺構と遺物を報告していく。

なお遺構全体図を第3図に、遺構図を第4～20図に掲載した。全体の状況はこれらの図で把握されたい。

B　古代の遺構と遺物

竪穴建物 SI5（第22・52・68図）

A区西側に位置する。平面は長・短軸5.0 mの方形である。竪穴壁の高さは3cmで、北西と南東の対角は残っていない。覆土の範囲で輪郭を検出した。床面は中央から南寄りが貼床で、それ以外は地山をそのまま床面としている。主柱穴4本（EP7～10）は対角線からやや南にずれる。柱掘方の平・断面はともに方形を呈する。平面規模は長・短辺44～52cm、深さは34～50cmである。4本のうち1本で柱抜取穴、3本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は13～20cmである。カマド（EL6）は南東壁に作り付けられている。燃焼部の焼土面と地山削り出しの袖を検出した。カマド脇には灰溜穴（EK13）が位置する。遺物はカマドから土師器椀（4・5）鉢（6）、主柱穴EP7の柱掘方埋土では砥石（339）、覆土からは須恵器杯（1・2）高台付杯（3）が出土した。須恵器杯は9世紀第2四半期に、高台付杯は8世紀第3四半期に位置づけられる。

竪穴建物 SI30（第23・52・53・68・71図）

A区南西隅に位置する。平面は長軸3.9 m・短軸3.2 mの方形である。竪穴壁の高さは28cmである。床面は南西際を整地し、それ以外は地山をそのまま床面としている。柱穴は無い。カマド（EL31）は西壁に作り付けられている。燃焼部の焼土面と地山削り出しの袖、長さ1.4 mの煙道を検出した。カマド脇には甕据付穴（多ヶ谷2002・2007）（EK35）があり、貯水用の赤焼土器甕（13）と水をすくうのに用いたと考えられる須恵器杯（16）が出土した（高橋2012）。須恵器杯は9世紀第3四半期に位置づけられる。またカマドから土師器甕（11）砥石（341）、床面で土師器甕（12）、覆土から土師器杯（17・18）椀（7）甕（8～10）赤焼土器甕（14）須恵器杯（15）刀子（360）が出土した。土師器杯（18）は漆付着土器で、見込みに沈殿した漆が厚く付着していた。

竪穴建物 SI62（第24・71図）

A区南東隅に位置する。発掘区の制限で竪穴部の一角とカマドの検出にとどまった。平面は長軸3.5 m・短軸2.0 m以上の方形である。竪穴壁は高さ80cmである。地山をそのまま床面としている。柱穴は無い。カマドは北壁に作り付けられている。燃焼部の地山削り出しの袖と長さ1.9 mの煙道を検出した。煙道は段差がなく床面からそのまま屋外に延びる。遺物は覆土上層で釘とみられる鉄製品（361）が出土した。

竪穴建物 SI72（第25・53・68・69図）

B区北東隅に位置する。平面は長軸4.3 m・短軸2.6 m以上の方形である。竪穴壁は南壁（高さ5cm）しかなく、覆土の範囲で輪郭を検出した。床面はカマド周りが貼床、それ以外は地山をそのまま床面としている。柱穴は無い。カマド（EL73）は南壁に作り付けられている。燃焼部の焼土面と長さ1.1 mの煙道を検出した。燃焼部に被熱した架構材の礫（砂岩）が散在していた。火床は一段掘りくぼめられている。遺物はカマドから須恵器杯（19～21）赤焼土器甕（24）砥石（343）、床面から土師器鉢（22）赤焼土器甕（23）敲石（342）が出土した。赤焼土器甕（24）は転用支脚で、燃焼部の中央に伏せ置かれていた。カマド出土の須恵器杯（19～21）は9世紀第3四半期に位置づけられる。

竪穴建物 SI78（第26・53図）

B区北東側に位置する。平面は長軸4.3 m以上・短軸3.9mの方形である。全体を中世の溝（SD76）に大きく壊されている。竪穴壁の高さは5cmである。床面は南東際が貼床で、それ以外は地山をそのまま床面としている。主柱穴（EP87）は対角線に位置する。他の主柱穴

は後代の遺構に壊されて無い。EP87 は柱掘方と同規模の柱抜取穴を検出した。柱掘方の深さは 60cm である。カマド（EL79）は南東壁に作り付けられている。燃焼部の焼土面と地山削り出しの袖の一部を検出した。カマド脇には甕据付穴（EK80）があり、貯水用の赤焼土器甕（30）と水をすくうのに用いたと考えられる須恵器杯（27 ～ 29）、蓋（25）が出土した。須恵器杯は 8 世紀第 3 四半期に位置づけられる。また主柱穴 EP87 から土師器甕（31）須恵器蓋（26）が出土した。

竪穴建物 SI96（第 27・54 図）

B 区北東側に位置する。平面は長軸 4.5 m、短軸 4.1 mの方形である。竪穴壁の高さは 5cm である。床面は南西際を整地し、それ以外は地山をそのまま床面としている。主柱穴 2 本（EP101・104）は対角線上に位置する。柱掘方は平面隅丸方形、断面方形を呈する。平面規模は長・短径 58cm、深さ 10 ～ 26cm である。EP101 で柱抜取穴、EP104 で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は 19cm である。カマド（EL97）は南東壁に作り付けられている。燃焼部の焼土面のみ検出した。カマド脇には灰溜穴（EK98）がある。EK102・103 は平面が楕円形の浅い土坑で、EK102 で土師器甕（38）、EK103 から土師器甕（35・36）赤焼土器杯（34）が出土した。ほかに床面で土師器甕（37）、床掘方で須恵器杯（32）、覆土で土師器杯（33）が出土した。床掘方出土の須恵器杯（32）は 8 世紀第 2 四半期に、EK103 出土の赤焼土器杯（34）は 9 世紀第 1 ～第 2 四半期に位置づけられる。

竪穴建物 SI116（第 28・54・69 図）

B 区北側に位置する。南壁を中世の区画溝（SD88）に壊されている。平面は長軸 2.5 m以上・短軸 2.6 mの方形である。竪穴壁の高さは 23cm である。地山をそのまま床面としている。柱穴は無い。カマドも無い。遺物は覆土上層から須恵器杯（39 ～ 41）磨石（344）砥石（345）が出土した。覆土上層出土の須恵器杯（39 ～ 41）は 9 世紀第 2 四半期に位置づけられる。

竪穴建物 SI124（第 29・30・54 ～ 56・64・69・71 図）

B 区中央北寄りに位置する。平面は長・短軸 5.6 mの方形である。竪穴壁は高さ 23cm である。床面は対角の南半面が貼床と床掘方から成り、北半面は地山をそのまま床面としている。主柱穴 4 本（EP131 ～ 134）は対角線に位置する。柱掘方の平・断面は方形を基調としながら、相違も目立つ。平面規模は長辺 35 ～ 74cm・短辺 28 ～ 52cm、深さは 6 ～ 34cm である。4 本全てで柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は 10 ～ 22cm である。カマドは 3 基検出した。南西壁に作り付けられている EL125 がもっとも新しい。燃焼部の焼土面と地山削り出しの袖、短い煙道（0.3 m）から成る。袖の基底上に架構材の袖石が据えられていた。カマド前に灰溜穴（EK152）、火床下には掘方がある。北東壁に作り付けられている EL128 は燃焼部の焼土面と袖石抜取穴（溝）ED129・130、長さ 0.9 mの煙道から成る。袖石が抜き取られているため、EL125 に付け替える前のカマドと判断した。カマド前に甕据付穴（EK143）、脇に灰溜穴（EK144）、火床下には掘方がある。西壁際で検出した EL126 は燃焼部の焼土面と袖石抜取穴（溝）ED127 から成る。抜き取られた袖石は、カマド正面にある付属土坑（EK135）に埋納されていた（堤 2007）。遺物はカマド EL125 で須恵器高台付椀（53）杯（71）、カマド EL128 で土師器甕（44）、付属土坑 EK135 から土師器甕（63・65）砥石（346 ～ 349）、EK136 で須恵器長頸瓶（54）、EK141 で須恵器杯（69）、甕据付穴 EK143 で土師器甕（45）、EK148 で赤焼土器甕（56）、EK150 で土師器甕（43）、床面から土師器甕（60）須恵器高台付杯（52）杯（70）台石（350）、床掘方から土師器皿（47）杯（49）椀（50）鉢（58）甕（62・64・66）須恵器杯（68・73）双耳杯（72）甕（51）、覆土からは土師器高台付皿（48）甕（42・59・61）赤焼土器皿（46）杯（57）須恵器蓋（67）鉢（74）長頸瓶（55）珠洲壺（231）青磁椀（230）鉄製紡錘車（364）が出土した。カマド EL125 出土の須恵器杯（71）と床面出土の須恵器杯（70）は 9 世紀第 2 四半期に位置づけられる。

竪穴建物 SI183（第 28・56 ～ 58 図）

B 区中央に位置する。北壁を中世以降の溝（SD165）に壊されている。平面は長軸 3.4 m以上・短軸 3.0 mの方形である。竪穴壁の高さは 38cm である。地山をそのまま床面としている。柱穴は無い。カマドも無い。遺物は覆土上層から土師器杯（104 ～ 107）甕（113・114・116 ～ 118）須恵器蓋（75 ～ 79・81）杯（82 ～ 92・95・96）高台付杯（97・102）鉢（99）壺（98

・100）甕（101・103）赤焼土器杯（93・108・109）鉢（110）甕（94・111・112）、覆土一括で須恵器蓋（80）が出土した。赤焼土器鉢（110）は灯明の油杯である。須恵器高台付杯（97）は9世紀前半に、杯（82・86・87・92）は9世紀第2四半期に、杯（83～85・89～91）は9世紀第3四半期に位置づけられる。

竪穴建物 SI203（第31・58・59図）

B区南側に位置する。竪穴部は確認できず、カマドEL204と付属土坑（EK205～208）のみを検出した。掘り込みの浅い竪穴建物と考えられる。カマドは南カマドである。燃焼部の焼土面と地山削り出しの袖を検出した。火床下には掘方がある。遺物はカマドで赤焼土器甕（120）、EK205で須恵器杯（124）、EK208で土師器甕（121）、床面（想定）から土師器椀（119）甕（122）須恵器杯（123）が出土した。EK205出土の須恵器杯（124）は9世紀第1四半期に、床面（想定）出土の須恵器杯（123）は8世紀第3四半期に位置づけられる。

竪穴建物 SI247（第32・59図）

B区南側に位置する。平面は長軸3.6 m・短軸3.4 mの方形である。南西を中世後期以降の溝（SD213）に壊されている。竪穴壁の高さは24cmである。地山をそのまま床面としている。柱穴はEP251・252の2本を検出した。カマドは無い。遺物は付属土坑EK253で土師器甕（126）、覆土上層で須恵器壺（125）が出土した。

掘立柱建物 SB66（第33・59図）

B区北東隅に位置する。桁行1間以上・梁間2間の東西棟掘立柱建物で、東面を中世の区画溝（SD51）に壊されている。西妻に近接棟持柱（浅川2013）EP67を持ち、屋内に束柱（EP70）を伴う。柱間寸法は桁行が1.818 m（6.0尺）、梁間は北から1.667 m（5.5尺）1.970 m（6.5尺）である。柱穴は棟持柱と束柱のほかに側柱3本（EP68・69・71）を検出した。柱掘方の平・断面は方形を呈する。平面規模は長辺68～101cm・短辺66～100cm、深さは41～72cmである。棟持柱と側柱EP71で柱抜取穴を、残りの側柱と束柱で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は15～38cmである。遺物は側柱EP71の柱掘方埋土で土師器甕（128）が出土した。

掘立柱建物 SB89（第34・59図）

B区北東側に位置する。桁行・梁間2間以上の掘立柱建物である。北面を中世の区画溝（SD88）に壊されている。東面は発掘区外にあると考える。西妻に近接棟持柱（EP94）を持ち、屋内には束柱（EP90・95）を伴う。柱間寸法は桁行・梁間とも1.818 m（6.0尺）等間である。柱穴は棟持柱と束柱のほか、側柱3本（EP91～93）を検出した。柱掘方の平・断面は方形を呈し、柱位置だけ更に一段掘り下げている。規模は長辺80～105cm・短辺64～85cmで、深さは61～82cmである。柱穴6本全てで柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は20～40cmである。遺物は側柱EP91の柱掘方埋土で須恵器杯（129）が出土した。須恵器杯は9世紀第2四半期に位置づけられる。

掘立柱建物 SB155（第35図）

B区中央に位置する。桁行2間以上・梁間2間の南北棟掘立柱建物で、南面を中世以降の溝（SD165）に壊されている。北妻に近接棟持柱（EP157）を持ち、屋内に束柱（EP160）を伴う。柱間寸法は桁行が北から1.667 m（5.5尺）1.818 m（6.0尺）、梁間は2.576 m（8.5尺）等間である。柱穴は棟持柱と束柱のほか、側柱5本（EP156・158・159・161・162）を検出した。柱掘方の平・断面は方形を呈する。平面規模は長辺60～76cm・短辺55～68cm、深さは20～45cmである。束柱を除く全ての柱穴で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は17～39cmである。遺物は古代の土師器・須恵器小片が出土した（未掲載）。

掘立柱建物 SB173（第36図）

B区中央東寄りに位置する。桁行1間以上・梁間2間の東西棟掘立柱建物で、桁行は発掘区外へ続く。北妻に近接棟持柱（EP175）を持ち、屋内に束柱（EP178）を伴う。柱間寸法は桁行・梁間とも1.818 m（6.0尺）等間である。柱穴は棟持柱と束柱、側柱4本（EP174・176・177・179）を検出した。柱掘方の平・断面は方形を呈し、柱位置だけ更に一段掘り下げている。平面規模は長辺82～113cm・短辺40～78cm、深さは28～57cmである。発掘区内の柱穴3本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は18～33cmである。遺物は古代の土師器・須恵器小片が出土した（未掲載）。

大型土坑 SK50（第38図）

A区中央南寄りに位置する。平面は長軸4.1 m・短軸2.5 mの不整形である。深さは30cmである。覆土が自

然流路 NR2（古代）の洪水堆積層と類似していることから、古代の土坑と判断した。遺物は出土していない。

土坑 SK163（第 38・59 図）

B 区中央に位置する。平面は長軸 2.4 m・短軸 2.0 m の隅丸方形である。深さは 32cm である。遺物は覆土から土師器鍋（142）赤焼土器甕（139・140）須恵器甕（141）が出土した。

土坑 SK181（第 18・60 図）

B 区中央に位置する。中世以降の溝（SD165）に大きく壊されている。平面は長軸 1.3 m以上・短軸 0.5 m以上の隅丸方形（推定）である。遺物は覆土から土師器甕（148 ～ 150）須恵器杯（143 ～ 147）が出土した。須恵器杯は 8 世紀第 2 四半期に位置づけられる。遺構の内容的に、竪穴建物の付属土坑の可能性を考えたい。

廃棄土坑 SK202（第 39・60・61・70 図）

B 区中央南寄りに位置する。平面は長軸 4.1 m以上・短軸 2.3 mの楕円形である。深さは 60cm である。覆土から多量の遺物が出土したため、当時の廃棄土坑（ごみ穴）と判断した。出土遺物は土師器鍋（162）甕（163 ～ 165）赤焼土器杯（152 ～ 154）高台付杯（161）甕（155 ～ 160）須恵器蓋（166・167）杯（168 ～ 174）高台付杯（175）鉢（177・178）壺（176）短頸壺（179）甕（180）砥石（357）である。須恵器杯 168・170 ～ 173 は 9 世紀第 2 四半期に、169・174 は同第 3 四半期に位置づけられる。

C　中世の遺構と遺物

竪穴建物 SI254（第 40・59・64 図）

B 区南側に位置する。平面は長軸 3.6 m以上・短軸 2.8 mの方形である。深さは 39cm である。南壁を中世の区画溝（SD256）に壊されている。地山をそのまま床面としている。柱穴は無い。遺物は覆土から須恵器高台付杯（127）のほか、瓷器系陶器擂鉢（232 ～ 234）壺（235）甕（236 ～ 238）が出土した。瓷器系陶器はいずれも 13 ～ 14 世紀に位置づけられる。

掘立柱建物 SB22（第 41 図）

A 区南西隅に位置する。桁行 2 間以上・梁間 2 間の南北棟掘立柱建物で、南面は発掘区外にあると考える。柱間寸法は桁行が北から 1.970 m（6.5 尺）・1.818 m（6.0 尺）、梁間は 1.818 m（6.0 尺）等間である。屋内に棟持柱（ないし梁下端に収まる柱）を持つ。柱穴は屋内棟持柱（EP23）のほか、側柱 6 本（EP24 ～ 29）を検出した。柱掘方の平面は円形や楕円形・隅丸方形と一様ではない。平面規模は長径 27 ～ 65cm・短径 24 ～ 48cm、深さは 23 ～ 35cm である。側柱 5 本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は 12 ～ 17cm である。遺物は出土していない。

掘立柱建物 SB38（第 41 図）

B 区北西隅に位置する。桁行 2 間以上・梁間 2 間の東西棟掘立柱建物で、西面は発掘区外にあると考える。梁間は見掛けより寸法（2 間分相当）を重視し、平面規模 2 間とした。柱間寸法は桁行が東から 2.424 m（8.0 尺）・3.485 m（11.5 尺）、梁間は 4.394 m（14.5 尺）である。柱穴は 5 本（EP39 ～ 43）検出した。柱掘方の平面形は一様でない。規模は長径 26 ～ 39cm・短径 25 ～ 34cm である。柱穴 4 本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は 8 ～ 18cm である。遺物は出土していない。

掘立柱建物 SB56（第 42 図）

A 区南東隅に位置する。桁行 1 間以上・梁間 2 間の南北棟掘立柱建物で、南面は発掘区外にあると考える。柱間寸法は桁行 2.727 m（9.0 尺）、梁間 1.818 m（6.0 尺）等間である。柱穴は側柱 4 本（EP57 ～ 60）と屋内棟持柱（ないし梁下端に収まる柱）1 本（EP61）を検出した。柱掘方の平面は楕円形基調である。平面規模は長径 37 ～ 54cm・短径 29 ～ 49cm、深さは 10 ～ 34cm である。側柱 2 本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は 13 ～ 44cm である。遺物は出土していない。

掘立柱建物 SB106（第 42 図）

B 区北側に位置する。桁行・梁間 2 間の南北棟掘立柱建物である。梁間は見掛けより寸法（2 間分相当）を重視し、平面規模 2 間とした。柱間寸法は桁行が 3.788 m（12.5 尺）、梁間は 1.818 m（6.0 尺）等間である。柱穴は 5 本（EP107 ～ 111）検出した。柱掘方の平面形は一様でない。規模は長径 30 ～ 64cm・短径 28 ～ 47cm、深さは 21 ～ 55cm である。柱穴全てで柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は 13 ～ 24cm である。遺物は出土していない。

掘立柱建物 SB214（第 43 図）

B区南側に位置する。桁行5間・梁間1間の南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が北から1.818 m（6.0尺）1.970 m（6.5尺）1.818 m（6.0尺）1.667 m（5.5尺）1.667 m（5.5尺）、梁間は2.273 m（7.5尺）である。柱穴は9本（EP215～223）検出した。柱掘方の平面形は一様でない。規模は長径30～50cm・短径22～40cm、深さは8～55cmである。柱穴2本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は15～21cmである。遺物は出土していない。

掘立柱建物 SB224（第44図）

B区南側に位置する。桁行3間以上・梁間2間の身舎に両平1間の廂（ないし下屋）が付く東西棟掘立柱建物である。梁間は見掛けより寸法（2間分相当）を重視し、平面規模2間とした。身舎寸法は桁行が2.273 m（7.5尺）等間、梁間4.394 m（14.5尺）、廂1.818 m（6.0尺）である。柱穴は側柱6本（EP225～229・235）と入側柱5本（EP230～234）を検出した。柱掘方の平面形は一様でない。規模は長径44～80cm・短径34～59cm、深さは19～45cmである。側柱4本と入側柱2本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で直径は15～24cmである。遺物は土師器小片と須恵器小片が1点ずつ出土した（未掲載）。

礎石建物 SB236（第45図）

B区南側に位置する。桁行2間以上・梁間2間の身舎に三面以上の縁が付く東西棟礎石建物で、西面は発掘区外にあると考える。身舎寸法は桁行・梁間とも2.121 m（7.0尺）等間、縁は1.212 m（4.0尺）である。身舎は礎石4個と礎石据付穴4本（EP242～246）、縁は縁束礎石4個と礎石据付穴4本（EP238～241）を検出した。またEP245と240の間に原位置から動いた礎石（ES）がある。礎石据付穴の平・断面は方形を呈する。規模は長辺38～59cm・短辺36～55cm、深さは8～26cmである。礎石はいずれも自然石で、柱座の作り出しは無い。入側柱の礎石は約40cm四方で、縁束礎石は一回り小さい。遺物は土師器小片が1点出土した（未掲載）。

柵 SA117（第46図）

B区中央北寄りに位置する。南北2間の柵で、壁の据付掘方がなく柱穴も小さいことから、掘立柱塀とは区別した。柱間寸法は1.212 m（4.0尺）等間である。柱穴は3本（EP118～120）検出した。柱掘方の平面は楕円形である。規模は長径24～27cm・短径19～24cm、深さは15cm前後である。柱穴1本で柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、直径は9cmと細い。遺物は出土していない。

柵 SA189（第46図）

B区中央南寄りに位置する。南北3間の柵で、壁の据付掘方がなく柱穴も小さいことから、掘立柱塀とは区別した。柱間寸法は2.302 m（7.6尺）等間である。柱穴は4本（EP190～193）検出した。柱掘方の平面は楕円形基調である。規模は長径25～37cm・短径21～30cm、深さは20cm前後である。遺物は出土していない。

井戸 SE194（第47・70図）

B区中央に位置する。平面は長径1.0 m・短径0.9 mの楕円形で、深さは60cmである。土層断面観察で井戸枠抜取穴と井戸枠痕跡を確認したため、井戸と判断した。遺物は砥石（351・352）が出土した。

井戸 SE195（第47・64図）

B区中央に位置する。平面は直径0.9 mの円形で、深さは73cmである。土層断面観察で井戸枠抜取穴を確認したため、井戸と判断した。遺物は珠洲壺（239）甕（240）が出土した。いずれも13世紀に位置づけられる。

井戸 SE196（第47図）

B区中央に位置する。平面は直径0.9 mの円形で、深さは78cmである。土層断面観察で井戸枠抜取穴を確認したため、井戸と判断した。遺物は出土していない。

井戸 SE197（第47図）

B区中央に位置する。平面は長径0.7 m・短径0.6 mの円形で、深さは63cmである。埋土が人為層で深さも周囲の井戸と類似するため、素掘り井戸と判断した。遺物は出土していない。

井戸 SE198（第47図）

B区中央に位置する。平面は長径0.9 m・短径0.8 mの円形、深さは69cmである。土層断面観察で井戸枠抜取穴と井戸枠痕跡を確認したため、井戸と判断した。遺物は出土していない。

井戸 SE199（第47図）

B区中央に位置する。平面は長径0.7 m・短径0.6 m

の円形で、深さは 40cm である。土層断面観察で井戸枠抜取穴を確認したため、井戸と判断した。遺物は出土していない。

井戸 SE200（第 47 図）

B 区中央に位置する。平面は長径 0.9 m・短径 0.8 m の楕円形で、深さは 76cm である。土層断面観察で井戸枠痕跡を確認したため、井戸と判断した。遺物は出土していない。

大型土坑 SK65（第 48・64 図）

B 区北東端に位置する。発掘区の制限で約半分の検出にとどまった。平面は長軸 3.8 m以上・短軸 3.3 m以上の推定楕円形である。深さは 56cm である。覆土は水成層から成る。遺物は覆土から瓷器系陶器壺（241）が出土した。時期は 13 ～ 14 世紀に位置づけられる。

区画溝 SD3（第 6・9・49 図）

A 区中央に位置する。南南東方位の溝で、長さ 20.0 m分を検出した。規模は上幅 0.3 ～ 0.9 m・下幅 0.2 ～ 0.7 m、深さは約 0.4 mである。後出の区画溝 SD4 と平行し、同 SD52 と特徴も類似するため、ある時期の一連の区画溝と判断した。遺物は出土していない。

区画溝 SD4（第 4・5・8・13・49・62 図）

A 区西側から B 区北東へ抜ける。南東方位の溝で、両端 67.5 m間を断続的に検出した。規模は上幅 0.8 ～ 1.9 m・下幅 0.2 ～ 0.7 m、深さは約 0.4 mである。断面は逆台形を呈する。B 区で掘り直しによる 2 時期の変遷（A → B）を確認した。あるいは近接する区画溝 SD63 のつながりかもしれない。遺物は土師器杯（181）須恵器甕（182）が出土した。

区画溝 SD37（第 7 ～ 10・50・64・71 図）

A 区中央から B 区北西隅へ抜ける。西南西方位の溝で、両端 48.4 m間を断続的に検出した。区画溝 SD4 に直交し接続する。規模は上幅 1.4 ～ 2.9 m・下幅 0.1 ～ 0.8 m、深さは 0.8 ～ 1.2 mである。断面は逆台形を呈する。埋没過程で一時的に埋め立てられている。遺物はかわらけ（244）や瓦質土器風炉（243）瓷器系陶器甕（245・246）鉄釘（365）が出土した。かわらけは 14 ～ 15 世紀、瓦質土器風炉は 15 世紀、瓷器系陶器甕は 13 ～ 14 世紀に位置づけられる。

区画溝 SD44（第 7・11・15・50 図）

B 区北西側に位置する。南北溝で、長さ 31.7 m分を検出した。北端で後出の東西溝 SD45・46 に、南端で同 SD115 にそれぞれ接続する。上幅 0.6 ～ 1.5 m・下幅 0.4 ～ 1.0 m、深さは約 0.1 mである。遺物は出土していない。

区画溝 SD45（第 7・8・11・12 図）

B 区北側に位置する。東西溝で、長さ 16.4 m分を検出した。西端は前出の南北溝 SD44 に接続する。規模は上幅 0.4 ～ 1.0 m・下幅約 0.5 m、深さは約 0.1 mである。遺物は出土していない。

区画溝 SD46（第 7 図）

B 区北西側に位置する。東西溝で、長さ 0.6 m分を検出した。前出の南北溝 SD44 に接続する。上幅 0.5 ～ 1.2 m・下幅 0.4 ～ 0.6 m、深さは約 0.1 mである。遺物は出土していない。

区画溝 SD51

（第 9・10・13・14・17・21・64・65・70 図）

A 区南東隅から B 区北東隅へ抜ける。北端が東に折れる L 字形の溝で、東西 7.1 m、南北は両端 39.3 m間を断続的に検出した。規模は上幅 3.5 ～ 6.6 m・下幅 3.1 m前後、深さ約 0.8 mである。遺物は覆土から瓷器系陶器甕（247 ～ 255）須恵器系陶器甕（256）壺（257）砥石（353）が出土した。瓷器系陶器は 13 ～ 14 世紀に、須恵器系陶器は 13 世紀に位置づけられる。

区画溝 SD52（第 10・50・70 図）

A 区南東側に位置する。南南東方位の溝で、両端 15.5 m間を断続的に検出した。上幅 0.6 ～ 1.1 m・下幅 0.2 ～ 0.5 m、深さは約 0.2 mである。延長線上からやや外れるが、北側の SD3 と特徴が類似するため、ある時期の一連の区画溝と判断した。断面は逆台形を呈する。遺物は砥石（354）が出土した。

区画溝 SD54（第 10・12 ～ 14・50 図）

A 区南東から B 区の北端へ抜ける。西南西方位の溝で、両端 34.9 m間を断続的に検出した。前出の区画溝 SD37 と平行するため、ある時期の一連の区画溝と判断した。規模は上幅 1.2 ～ 1.8 m・下幅 0.3 ～ 0.5 m、深さは約 0.5 mである。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

区画溝 SD55（第 10・14・51 図）

A 区南東隅に位置する。西南西方位の溝で、長さ 7.9 m分を検出した。前出の区画溝 SD37・54 と平行する

ため、ある時期の一連の区画溝と判断した。規模は上幅1.6 m・下幅0.4 m前後、深さは約0.6 mである。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

区画溝 SD64（第11～13・51・62図）

B区北側に位置する。西南西方位の溝で、長さ28.6 m分を検出した。前出の区画溝SD37・54と平行し、同SD37とは特徴も類似するため、ある時期の一連の区画溝と判断した。規模は上幅が1.8～3.0 m・下幅0.3～0.5 m、深さは約1.0 mである。断面は逆台形を呈する。埋没過程で人為的に埋め立てられている。遺物は人為層から須恵器杯（184）高台付椀（183）甕（185）が出土した。

区画溝 SD88（第15～17・51・62・65・66図）

B区中央北寄りに位置する。東西溝で、長さ24.2 m分を検出した。前出の区画溝SD45と一連のSD114より新しい。規模は上幅2.4 m・下幅0.5 m前後、深さは約1.1 mである。断面は逆台形を呈する。遺物は須恵器杯（187）かわらけ（275）瓷器系陶器壺（259・260・269）甕（258・261～263・270・272・273・280～284）須恵器系陶器壺（278）甕（265・268・271・279）珠洲擂鉢（274）壺（264・266）甕（267）古瀬戸瓶子（277）肥前陶器皿（276）が出土した。かわらけは13世紀、瓷器系陶器・須恵器系陶器・珠洲は13～14世紀、古瀬戸瓶子は14世紀初頭、肥前陶器皿（276）は18世紀にそれぞれ位置づけられる。

堀 SD259（第20・51・66図）

B区南端に位置する。北端が推定丁字形の堀で、東西8.1 m・南北12.8 m分を検出した。規模は上幅4.0 m以上・下幅1.6 m、深さは約1.7 mである。断面は逆台形を呈する。覆土は上・中・下3層に区分した。中層は地山偽礫を大量に含む人為層で、土塁に起因する可能性が高い（文化庁文化財部記念物課編2010a）。遺物は青磁椀（294・295）瓷器系陶器甕（296・297）が出土した。青磁椀は13世紀前半、瓷器系陶器甕は13～14世紀に位置づけられる。

引用・参考文献

浅川滋男（2013）『建築考古学の実証と復元研究』，同成社.

利部修（2006）「出羽南半山形盆地の須恵器器種」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古稀記念論文集，pp.773-785，匠出版（再録（2008）『出羽の古代土器』，pp.28-42，同成社）.

金田明大（2008）「ブラシを使用しない洗浄法の実践」『台帳の利活用法と土器の洗浄法』埋蔵文化財ニュース132（遺跡調査技術集成・基礎作業編Ⅰ），pp.6-8，独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター.

小山正忠・竹原秀雄編著（2008）『新版標準土色帖』30版，農林水産省農林水産技術会議事務所監修，日本色研事業株式会社.

佐藤敏幸（2013）「土器実測の方法―土師器・須恵器」（宮城県考古学会古墳・古代研究部会平成25年度第2回勉強会資料），pp.1-5.

佐藤敏幸・益子剛・菅原優子編（2001）『赤井遺跡Ⅰ―牡鹿柵・郡家推定地（県道石巻鹿島台大衡線上区改良工事に伴う調査報告）』矢本町文化財調査報告書第14集，矢本町教育委員会.

高橋泰子（2012）「貯蔵穴と甕据付穴の変化―須恵器平底甕・壺類の傾向から」『土壁』第12号（特集：米澤容一氏追悼号），pp.49-54考古学を楽しむ会.

多ヶ谷香理（2002）「貯蔵穴の用途」『土壁』第6号（特集：続・遺構・遺物から古代の集落を見直す），pp.21-35，考古学を楽しむ会.

――――（2007）「貯蔵穴の変遷」『月刊考古学ジャーナル』No.559（特集：カマドをもつ竪穴建物），pp.15-19，ニューサイエンス社.

武田和宏（2003）「ブラシを使用しない洗浄方法について―土器に残された情報を失わないために」『第1回東北文字資料研究会資料』，pp.132-134，東北文字資料研究会.

堤隆（2007）「竪穴建物廃絶時のカマド解体とその意味」『月刊考古学ジャーナル』No.559（特集：カマドをもつ竪穴建物），pp.10-14，ニューサイエンス社.

長瀞郷土史研究会編（1989）「洪水（イガリ）」『今と昔ながとろ』，pp.105-106，長瀞公民館.

那須孝悌・趙哲済（2003）「地層の見方」『環境考古学マニュアル』，pp.33-53，同成社.

深澤芳樹（1985）「土器のかたち―畿内第Ⅰ様式古・中段階について」『紀要』Ⅰ，pp.41-62，財団法人東大阪市文化財協会.

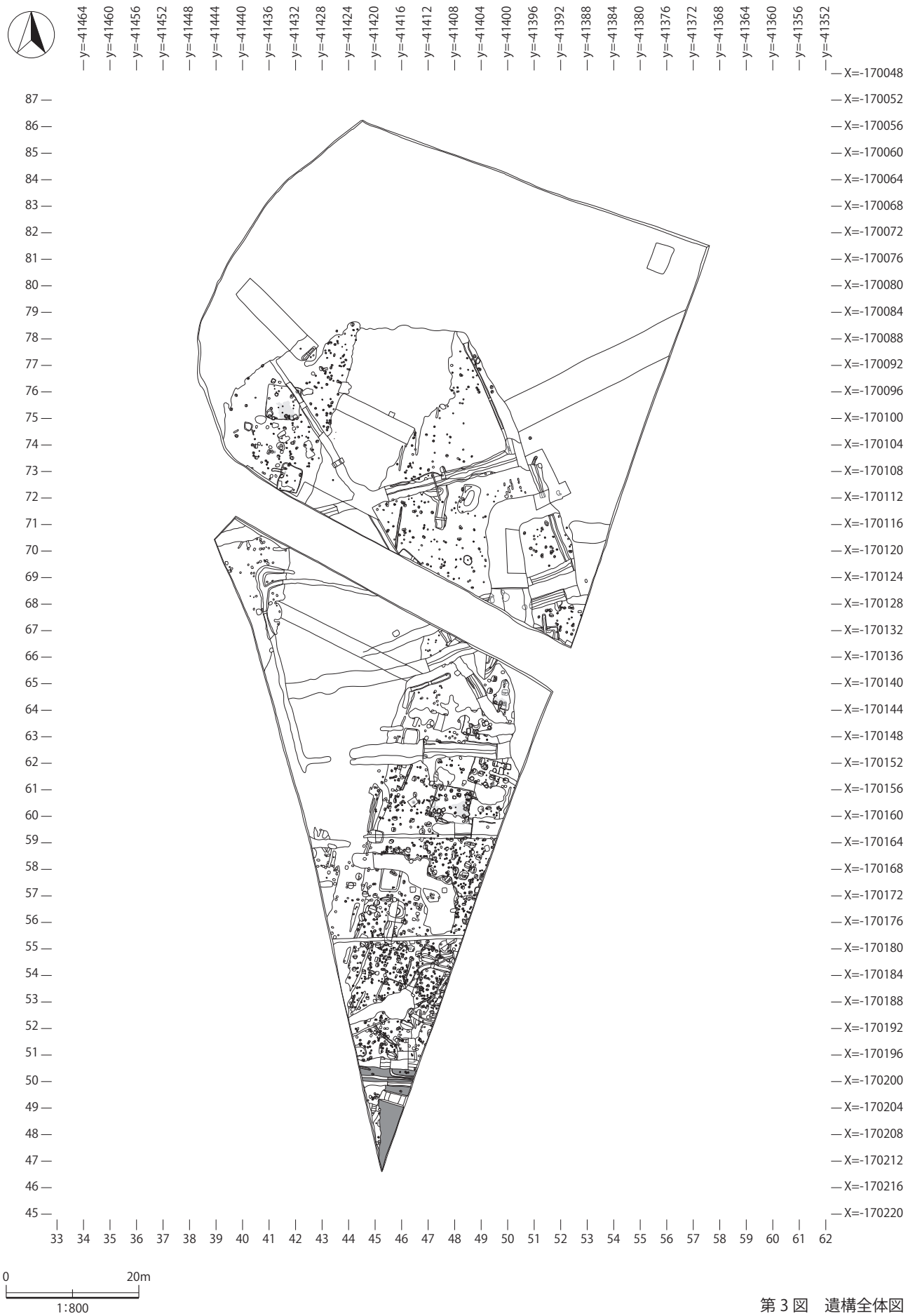
文化庁文化財部記念物課編（2010a）『発掘調査のてびき』集落遺跡発掘編，文化庁文化財部記念物課.

――――――――――（2010b）『発掘調査のてびき』整理・報告書編，文化庁文化財部記念物課.

――――――――――（2013）『発掘調査のてびき』各種遺跡調査編，文化庁文化財部記念物課.

山形県教育委員会（2012）「沼袋遺跡」『分布調査報告書(38)』山形県埋蔵文化財調査報告書第215集，pp.20-21.

文写研デジタル部会（2008）「部会ドキュメントVol.5」（文写研デジタルフォトレポートVol.5）［online］http://prosv9.tok2.com/~maishaken/cgi-bin/diarypro/data/upfile/5-1.pdf（参照2014-12-8）.


y=-41464
y=-41460
y=-41456
y=-41452
y=-41448
y=-41444
y=-41440
y=-41436
y=-41432
y=-41428
y=-41424
y=-41420
y=-41416
y=-41412
y=-41408
y=-41404
y=-41400
y=-41396
y=-41392
y=-41388
y=-41384
y=-41380
y=-41376
y=-41372
y=-41368
y=-41364
y=-41360
y=-41356
y=-41352
X=-170048
X=-170052
X=-170056
X=-170060
X=-170064
X=-170068
X=-170072
X=-170076
X=-170080
X=-170084
X=-170088
X=-170092
X=-170096
X=-170100
X=-170104
X=-170108
X=-170112
X=-170116
X=-170120
X=-170124
X=-170128
X=-170132
X=-170136
X=-170140
X=-170144
X=-170148
X=-170152
X=-170156
X=-170160
X=-170164
X=-170168
X=-170172
X=-170176
X=-170180
X=-170184
X=-170188
X=-170192
X=-170196
X=-170200
X=-170204
X=-170208
X=-170212
X=-170216
X=-170220
87
86
85
84
83
82
81
80
79
78
77
76
75
74
73
72
71
70
69
68
67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62
0
20m
1:800

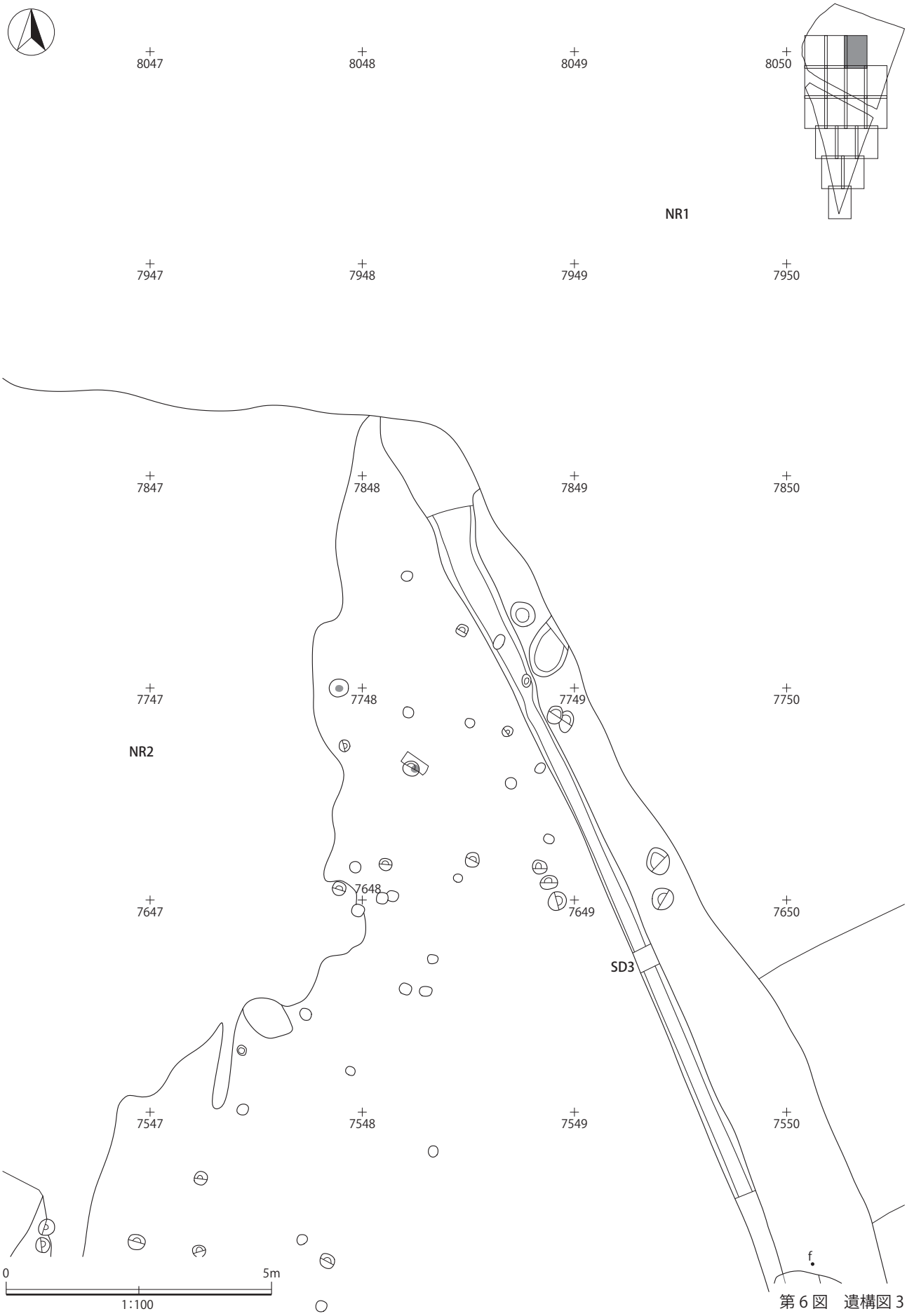
第３図　遺構全体図

8040
8041
8042
7939
7940
7941
7942
7943
NR1
7839
7840
7841
7842
7843
7739
7740
7741
7742
7743
7639
7640
7641
7642
7643
SI5
b'
b
SD4
7539
7540
7541
7542
7543
0
5m
1:100
SP17

第４図　遺構図１

8043
8044
8045
8046
NR1
7943
7944
7945
7946
7843
7844
7845
7846
7743
7744
7745
7746
NR2
7643
7644
7645
7646
7543
7544
7545
7546
SD4
0
5m
1:100

第５図　遺構図２


8047
8048
8049
8050
NR1
7947
7948
7949
7950
7847
7848
7849
7850
7747
7748
7749
7750
NR2
7648
7647
7649
7650
SD3
7547
7548
7549
7550
f
0
5m
1:100

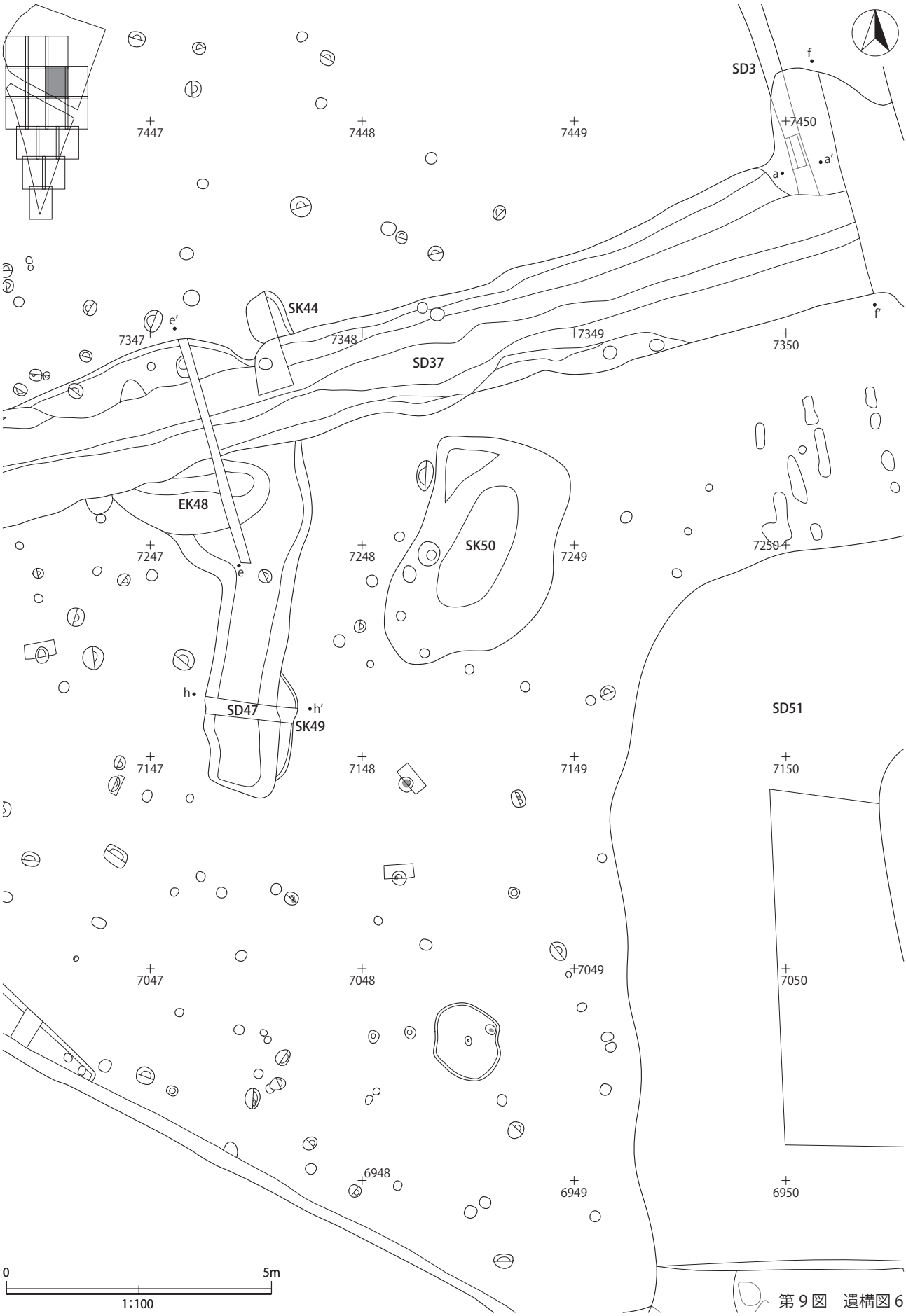
第６図　遺構図３

7440
7441
SP17
7442
SK19
SK21
SL20
SP18
SB22
7341
7342
7343
SI30
NR2
7242
7243
7140
SD37
7040
7041
7042
SD46
NR2
6940
6941
6942
6943
SD45
SB38
0
5m
1:100

第７図　遺構図４

7443
7444
7445
7446
SD4
NR2
c
c'
7343
7344
7345
7346
SD37
7243
7244
7245
7246
SD37
NR2
7144
7145
7146
SD4
7046
NR2
6943
SD45
0
5m
1:100

第 8 図　遺構図 5


SD3
f
f′
7450
a
a′
7447
7448
7449
SK44
e′
7347
7348
7349
7350
SD37
EK48
SK50
7247
7248
7249
7250
e
h
h′
SD47
SK49
SD51
7147
7148
7149
7150
7047
7048
7049
7050
6948
6949
6950
0
5m
1:100

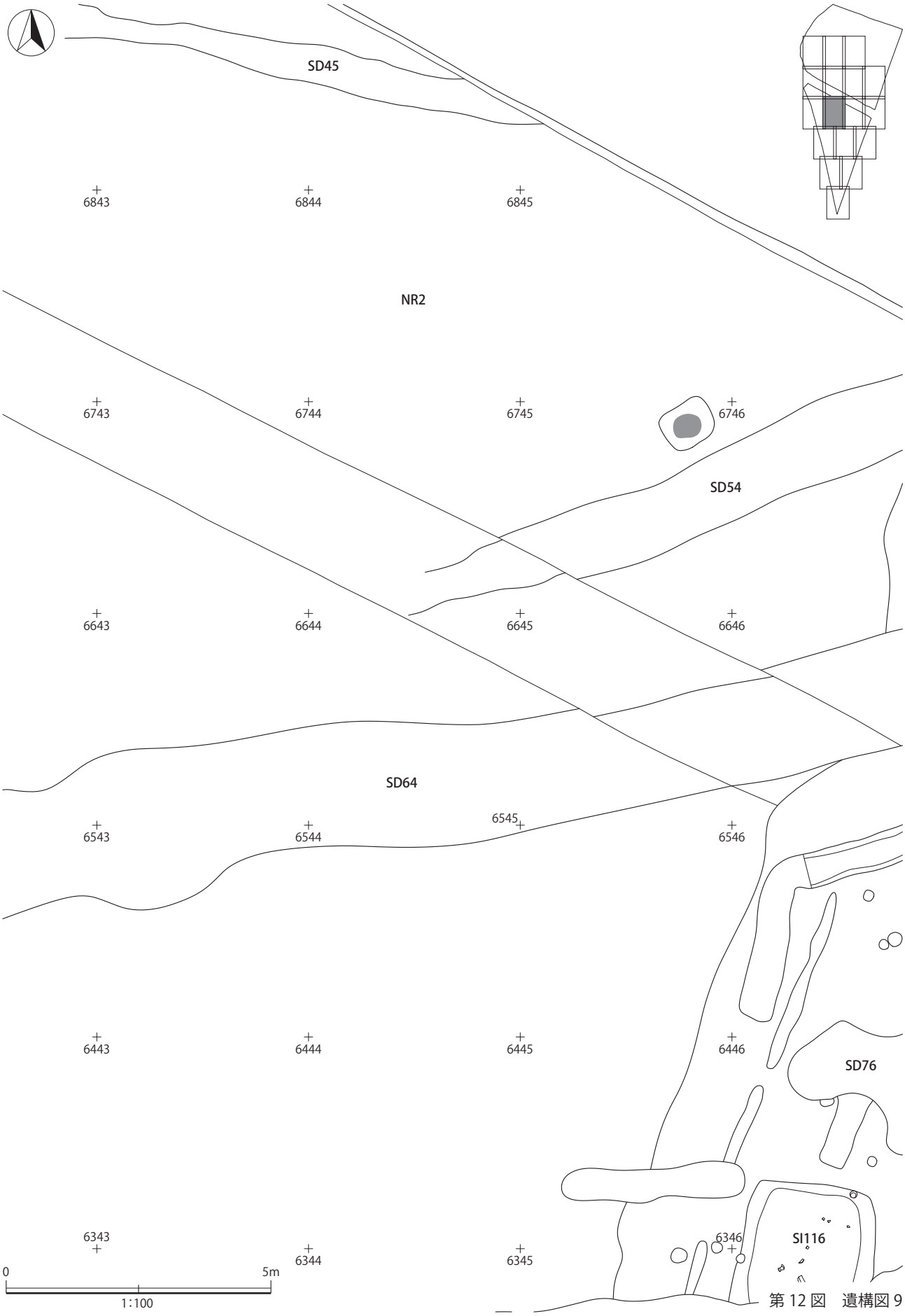
第９図　遺構図６

7451
7452
7453
a′
SD37
NR1
f′
7351
7352
7353
7354
SD52
7251
7252
7253
7254
SD51
SK53
7151
7152
7153
SD52
7051
7052
7053
i′
i
SD54
j′
6951
6952
6953
j
0
5m
1:100
k′
SD55

第 10 図　遺構図 7

SB38
SD45
6840
6841
6842
g′
g
SD44
6741
6742
6743
NR2
6641
6642
6643
6541
6542
6543
SD64
6442
6443
6342
6343
0
5m
1:100

第 11 図　遺構図 8

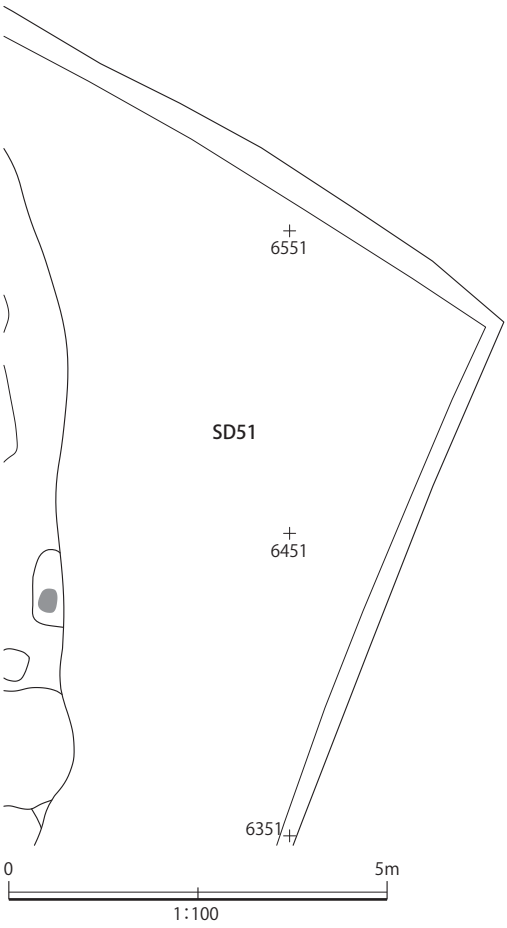

SD45
6843
6844
6845
NR2
6743
6744
6745
6746
SD54
6643
6644
6645
6646
SD64
6543
6544
6545
6546
6443
6444
6445
6446
SD76
6343
6344
6345
6346
SI116
0
5m
1:100

第 12 図　遺構図 9

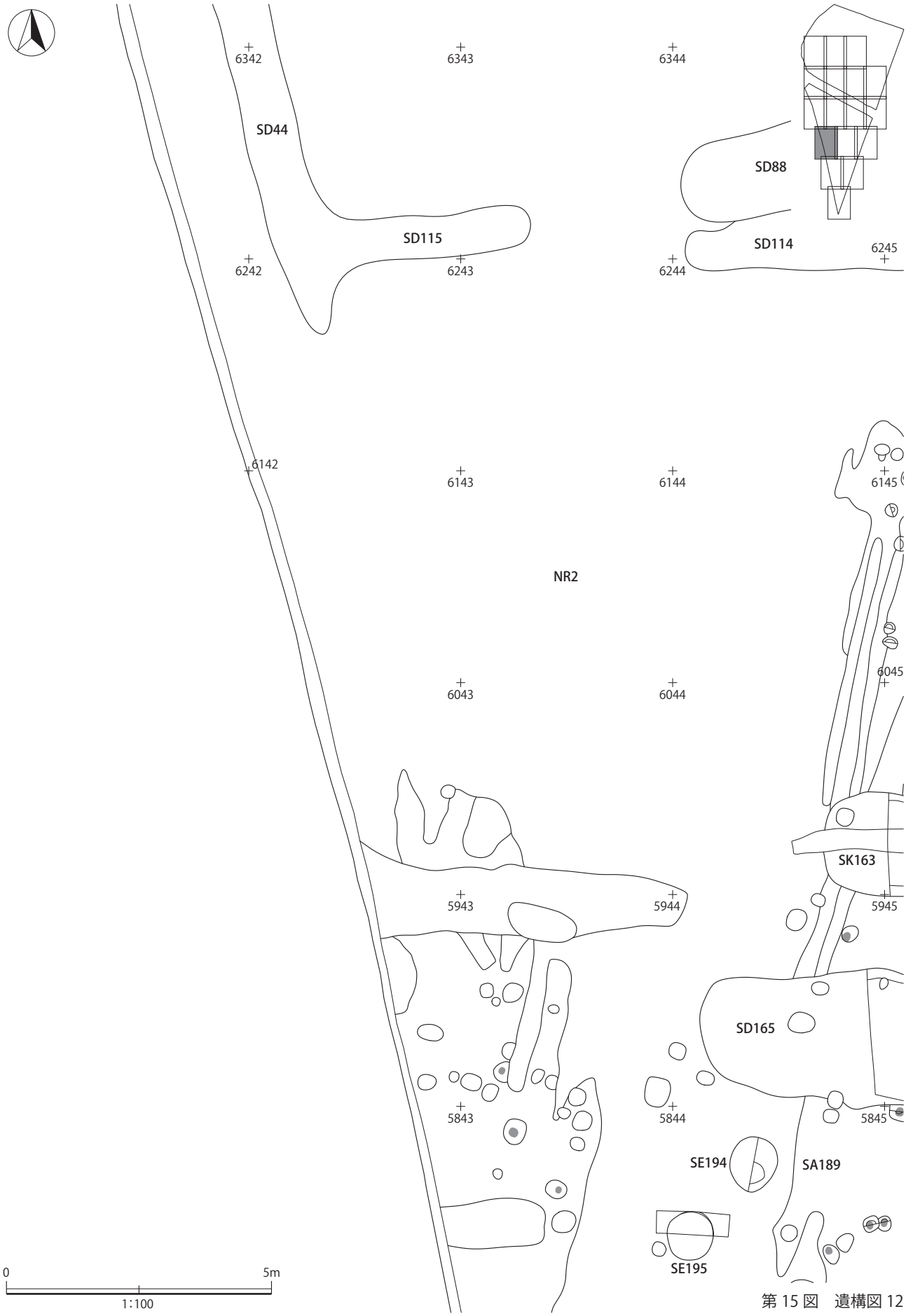
SD54
6850
SD51
SD54
6747
SD4
SD63
NR2
l′
6647
SD64
6648
6649
SK65
l
SD4
d′
d
6547
6548
6549
SB66
6550
SI72
SD51
6447
6448
6449
6450
SD76
SP77
SI78
SI116
m′
6347
6348
6349
6350
0
5m
1:100

第 13 図　遺構図 10

j
k′
SD55
SD51
6851
6852
k
SB56
6752
SI62


6551
SD51
6451
6351
0
5m
1:100

第 14 図　遺構図 11


6342
6343
6344
SD44
SD88
SD115
SD114
6245
6242
6243
6244
6142
6143
6144
6145
NR2
6045
6043
6044
SK163
5943
5944
5945
SD165
5843
5844
5845
SE194
SA189
SE195
0
5m
1:100

第 15 図　遺構図 12

6345
6346
SI116
m′
6347
6348
SD88
SD114
SP112
SB106
6245
6246
m
6247
6248
SD113
SA117
NR2
SK121
6145
6146
6147
6148
SP122
SL123
SI124
6045
6046
6047
6048
SD154
SB155
SK163
5945
5946
5947
5948
SP164
SP166
5845
5846
5847
5848
SD165
SP168
SK167
SP171
SI183
SP169
SK170
0
5m
1:100

第 16 図　遺構図 13

6349
6350
6351
SD51
SD88
SB89
6249
6250
SI96
SK105
SI124
6149
6150
6049
SD154
5949
SB173
5849
SP171
SP172
SK170
0
5m
1:100

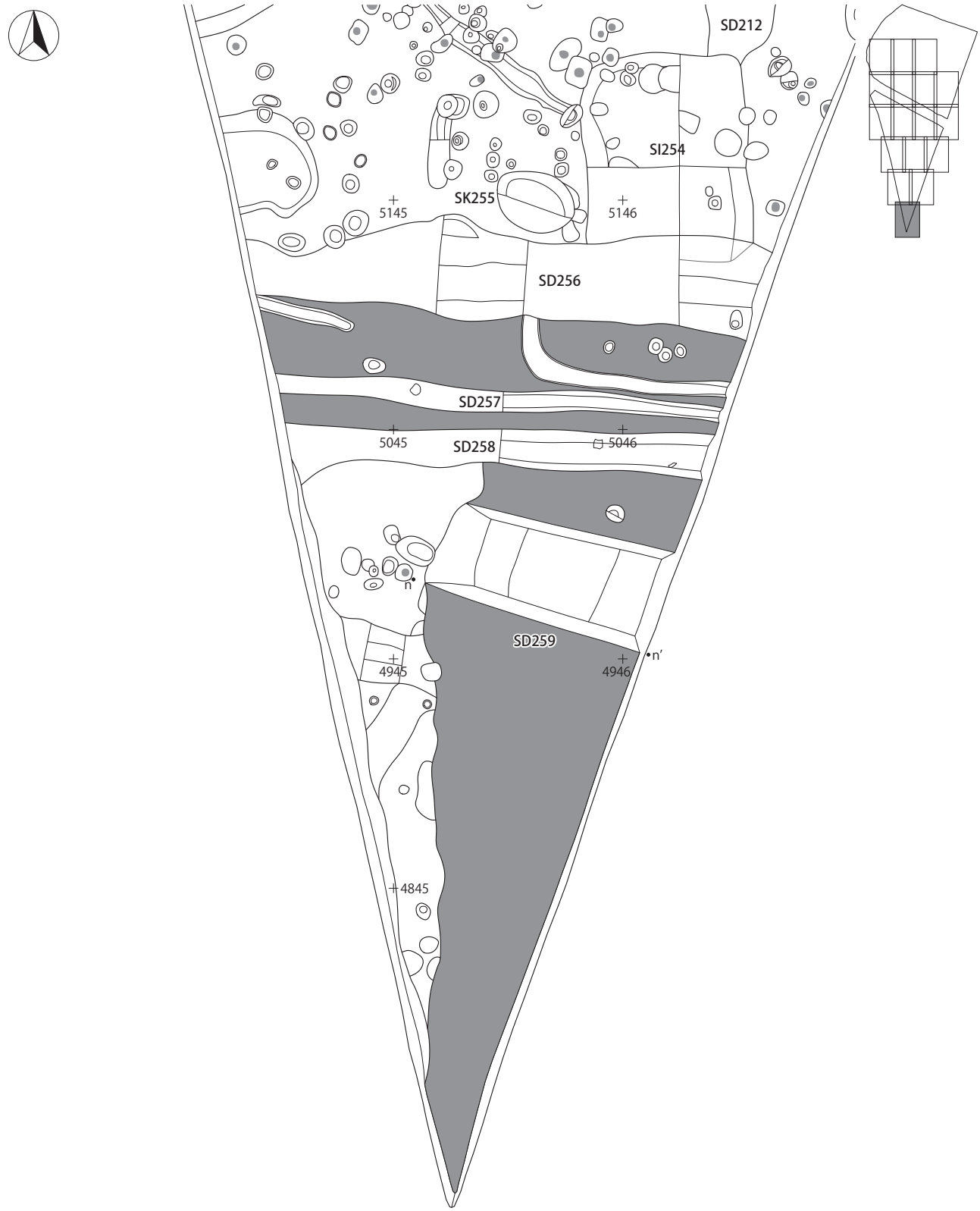
第 17 図　遺構図 14

5746
5747
5748
SP182
SK201
SK181
SD165
5646
5647
5648
SK202
SI203
5546
5547
5548
SP209
SD210
SD211
SB214
5446
5447
SD212
5346
5347
SD213
5246
5247
SD212
0
5m
1:100

第 18 図　遺構図 15

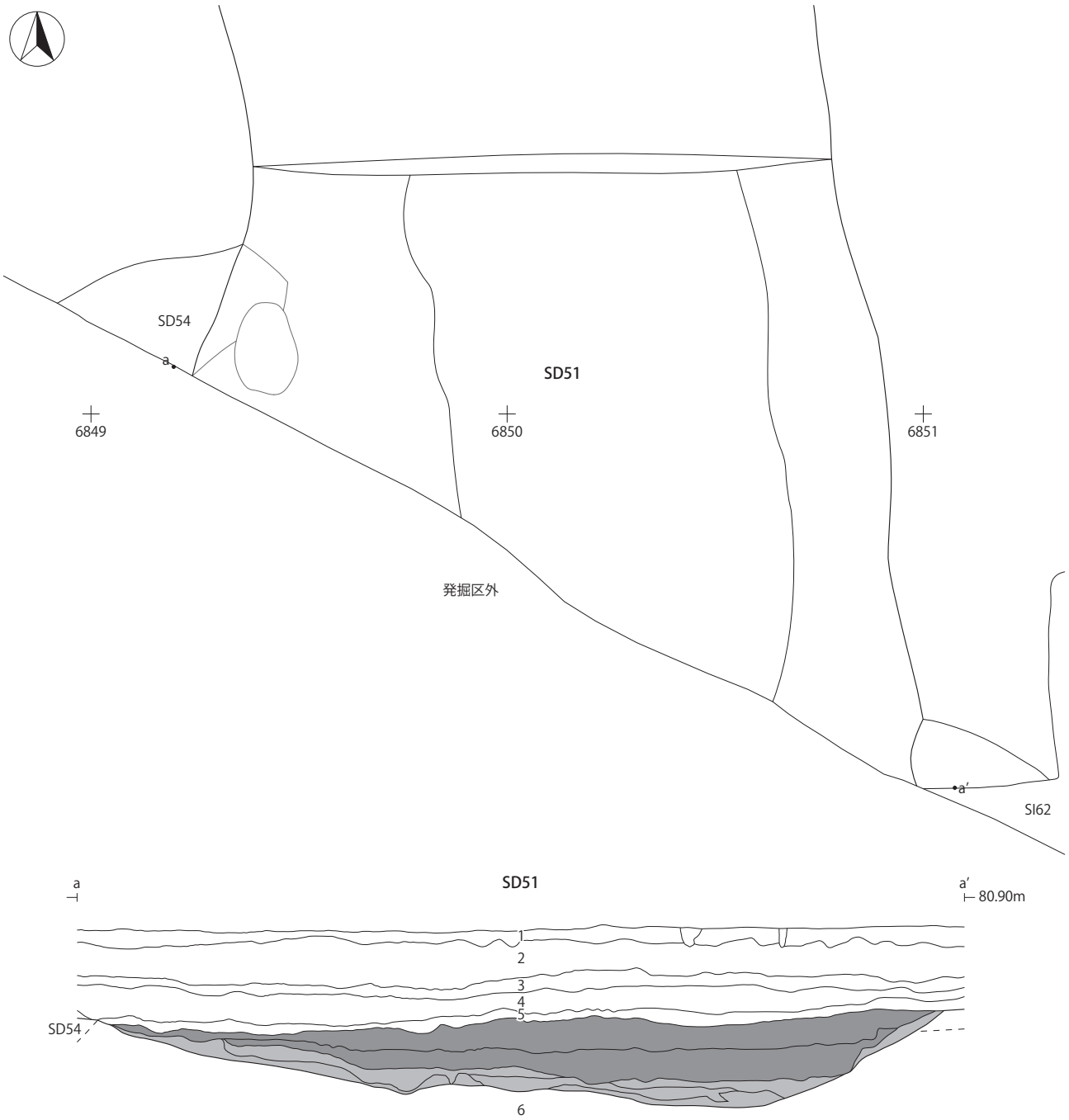
SI183
SE195
SA189
SE196
SE197
5743
5744
5745
5746
SE198
SK201
NR2
SE200
SE199
SK202
5644
5645
5646
5544
5545
5546
SB224
5444
5445
5446
SB236
SI247
5344
5345
5346
SD213
5245
5246
0
5m
1:100

第 19 図　遺構図 16



0　5m
1:100

第 20 図　遺構図 17

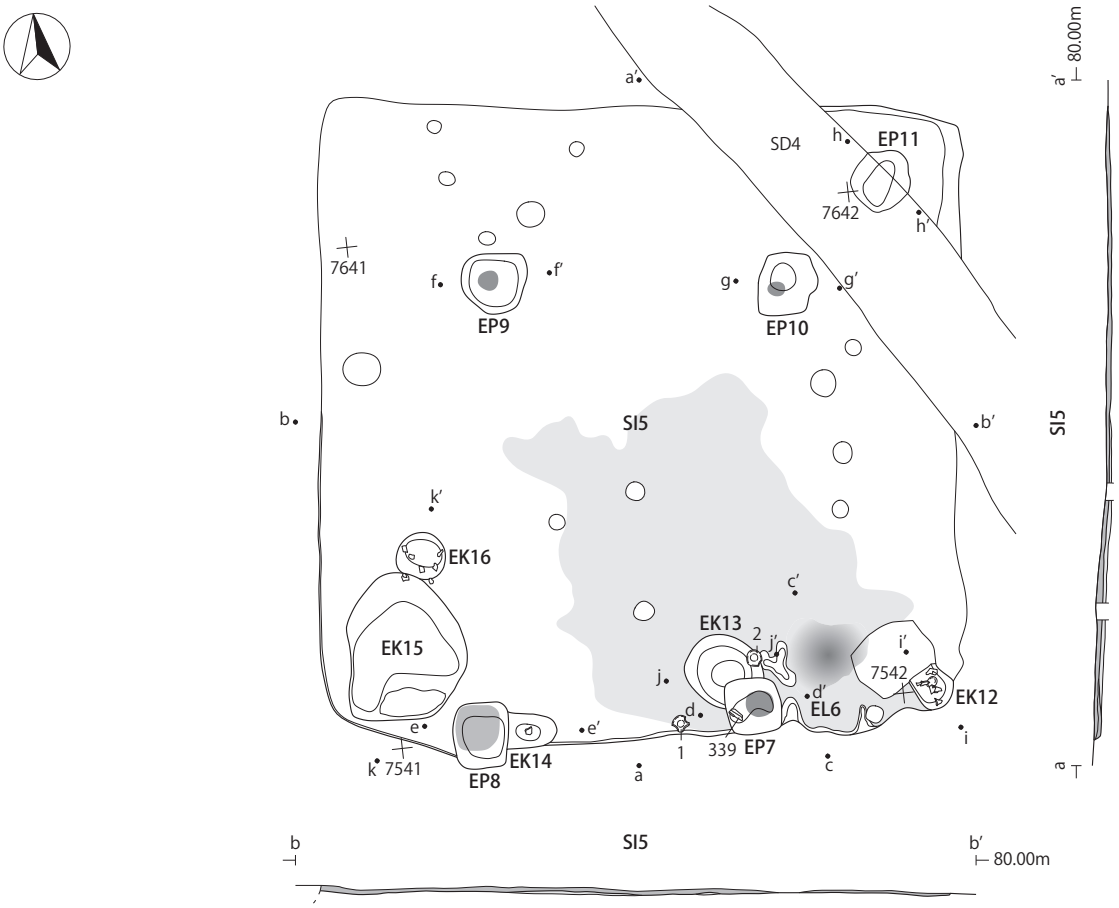


基本層序
第 1 層．10YR3/1 黒褐色シルト (作土層 , 土壌層位)
第 2 層．10YR3/4 暗褐色粘土質シルト (洪水堆積層)
第 3 層．10YR3/3 暗褐色粘土質シルト (洪水堆積層)
第 4 層．10YR4/4 褐色シルト (洪水堆積層)
第 5 層．10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (洪水堆積層)
第 6 層．10YR4/6 褐色シルト (地山層)

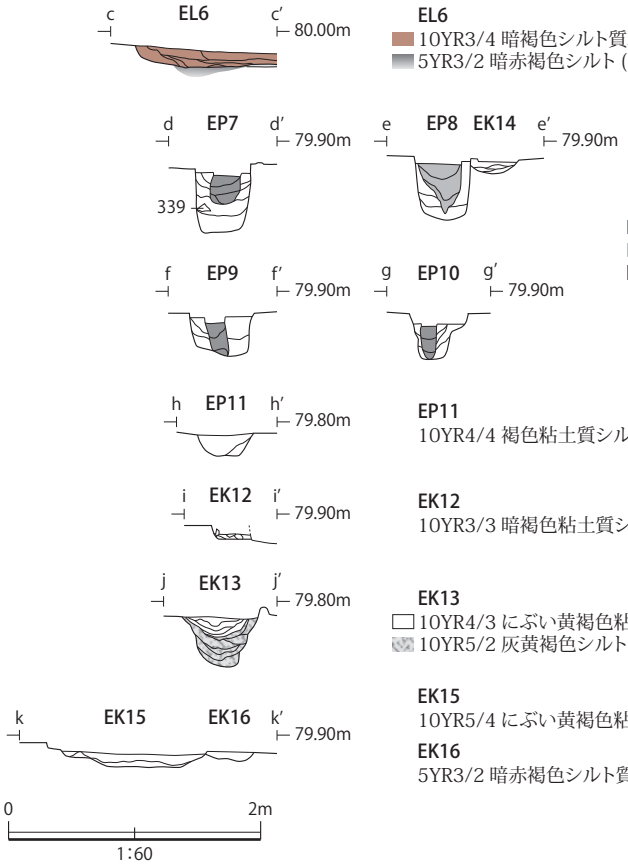
SD51
10YR3/3 暗褐色シルトが基質 (上層)
10YR2/2 黒褐色シルトが基質 (下層)

0　2m
1:60

第 21 図　土層図（層序断面図）



10YR4/4 褐色粘土が基質 , 炭を 1％含む (竪穴部堆積層)
10YR6/4 にぶい黄橙色粘土 , 地山偽礫を 40％含む (貼床)



EL6
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 焼土偽礫を 50％・炭を 1％含む (カマド堆積層)
5YR3/2 暗赤褐色シルト (地山被熱層)

EP7~10
10YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫を 50％含む (柱痕跡)
10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫を 50％含む (柱抜取穴)
10YR4/4 褐色粘土が基質 , 地山偽礫が混在 (柱掘方埋土)

EK14
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 焼土偽礫と炭が混在 (人為層)

EP11
10YR4/4 褐色粘土質シルトが基質 , 地山偽礫を 30％含む (人為層)

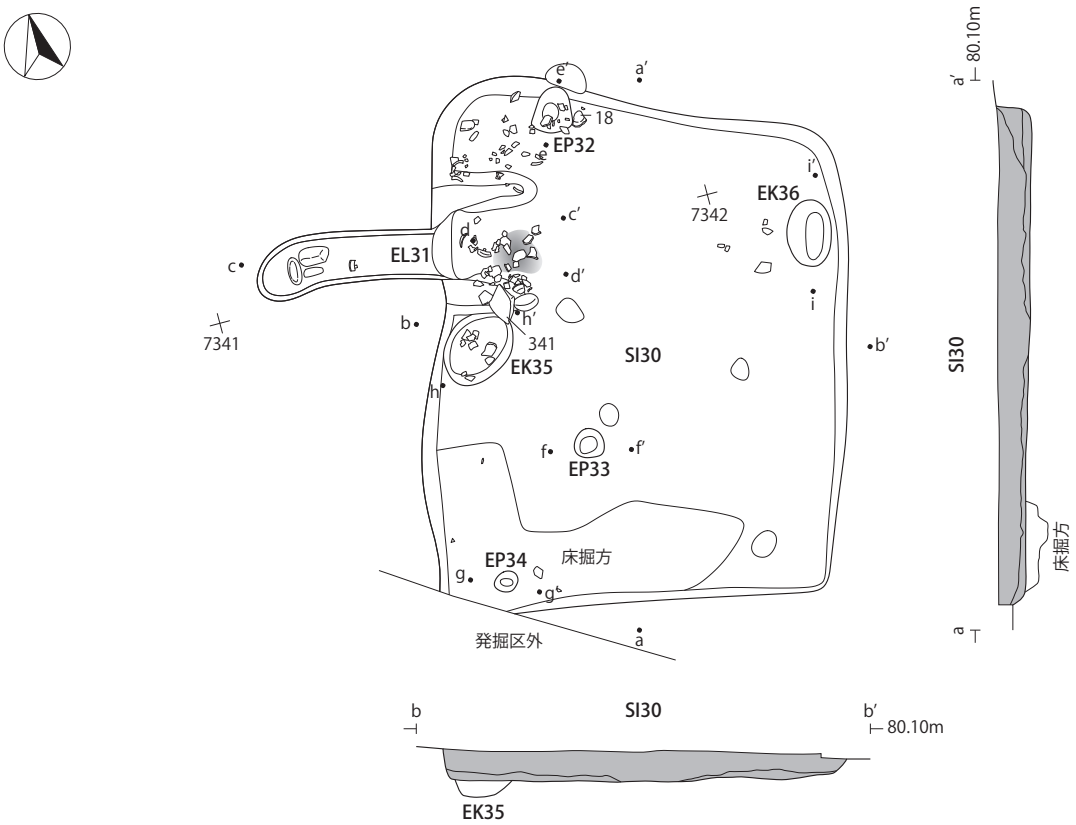
EK12
10YR3/3 暗褐色粘土質シルトが基質 , 地山偽礫と焼土偽礫を 5％・炭を 10％含む

EK13
10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルトが基質 , 地山偽礫との互層 , 焼土を 10％・炭を 1％含む (人為層)
10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土が基質 , 灰色シルト質粘土偽礫を 5 ～ 50％含む (灰溜層)

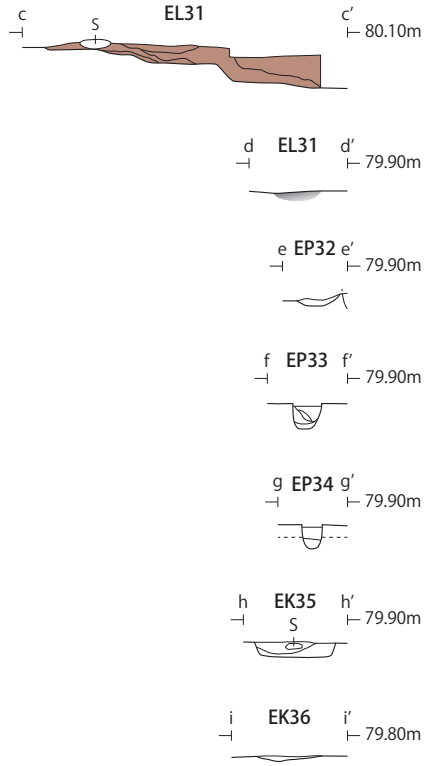
EK15
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土が基質 , 焼土偽礫を 30％・炭を 1％含む

EK16
5YR3/2 暗赤褐色シルト質粘土 , 焼土偽礫を 50％含む (人為層)

第 22 図　竪穴建物（古代）SI5



SI30
10YR4/2 灰黄褐色シルト , 地山偽礫・焼土・炭を 5 ～ 25％含む (竪穴部堆積層)
10YR3/3 暗褐色シルト , 地山偽礫を 10％含む (床整地層)



EL31
10YR3/2 黒褐色シルトが基質 , 地山偽礫・焼土・炭を 3 ～ 25％含む (カマド堆積層)

EL31
2.5YR4/6 赤褐色シルト (地山被熱層)

EP32
10YR3/3 暗褐色シルト , 地山偽礫・焼土・炭を 3 ～ 10％含む

EP33
10YR4/2 灰黄褐色シルトが基質 , 地山偽礫と炭が混在

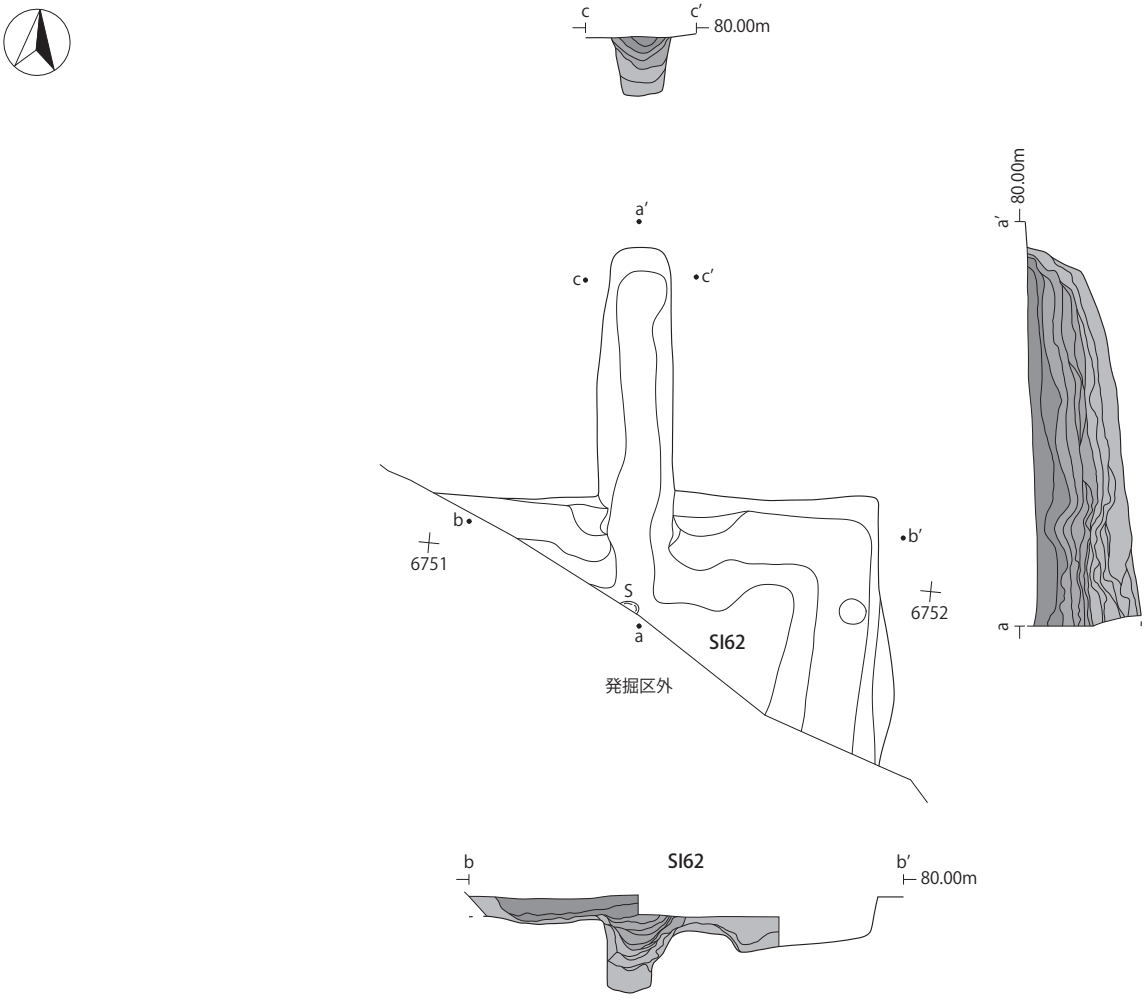
EP34
10YR3/2 黒褐色シルトが基質 , 地山偽礫を 3％含む

EK35
10YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫・焼土・炭を 3 ～ 10％含む (甕据付穴)

EK36
10YR3/3 暗褐色シルト , 焼土を 20％・炭を 2％含む

0　2m
1:60

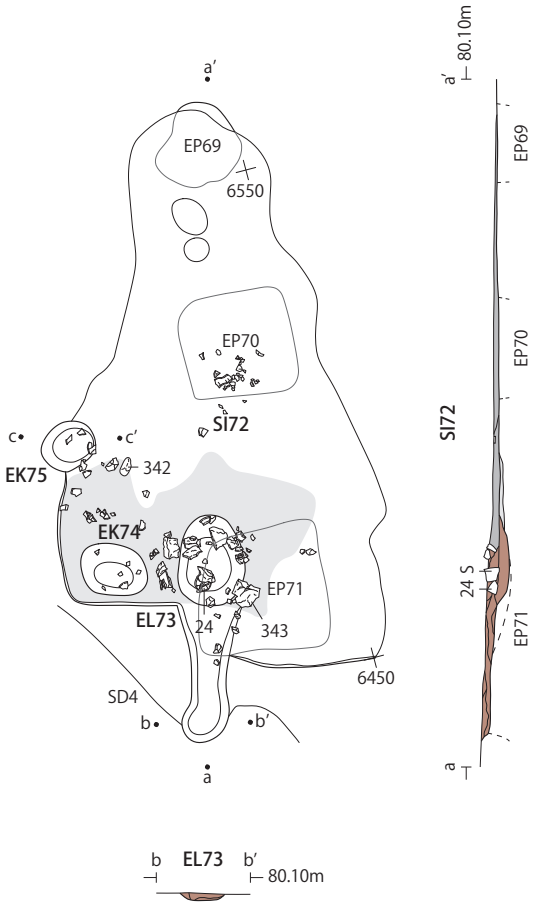
第 23 図　竪穴建物（古代）SI30



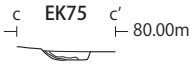
SI62
10YR4/4 褐色粘土が基質 , にぶい黄褐色シルト質砂を含む (上層)
10YR3/4 暗褐色粘土質シルトが基質 , 褐色砂質シルトとの互層 , 地山偽礫を 50％・炭を 5％含む (中層)
10YR4/6 褐色粘土が基質 , 地山偽礫を 1 ～ 50％・炭を 5％含む (下層)

0　2m
1:60

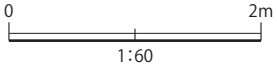
第 24 図　竪穴建物（古代）SI62



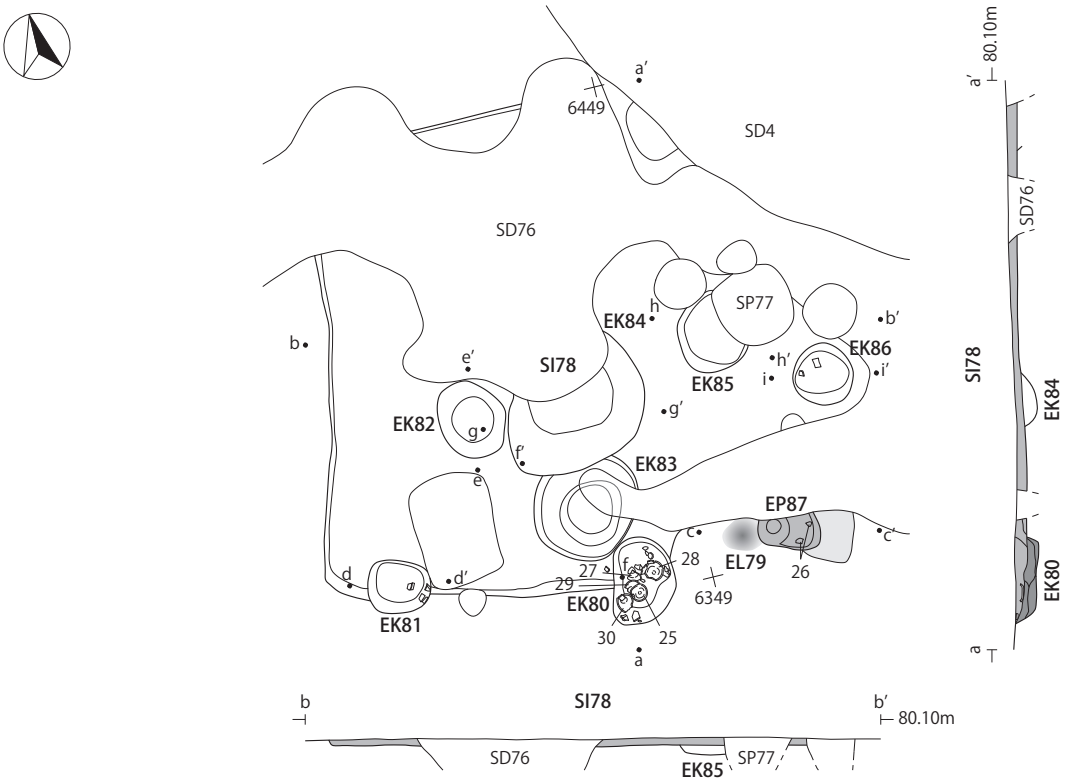
SI72・EL73
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 50％含む (竪穴部堆積層)
7.5YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫・焼土・炭が混在 (カマド堆積層)
10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 20％含む (貼床)



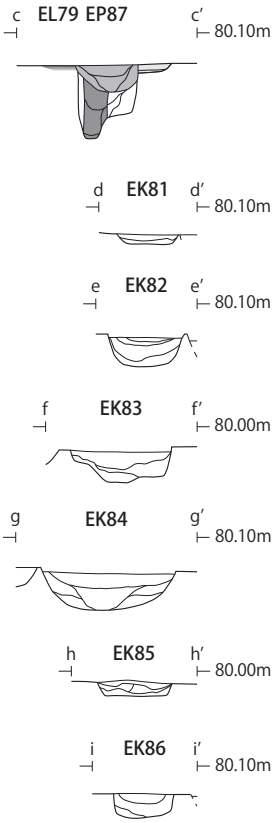
EK75
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土・地山・焼土偽礫が混在 (人為層)



第 25 図　竪穴建物（古代）SI72



SI78・EK80
- 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 50％含む (竪穴部堆積層)
- 10YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫・焼土・炭が混在 (甕据付穴)



EL79・EP87
- 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 10 ～ 50％含む (柱抜取穴)
- 10YR2/3 黒褐色粘土が基質 (柱痕跡)
- 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 10 ～ 20％含む (柱掘方埋土)
- 7.5YR2/3 極暗褐色シルト (地山被熱層)
- 10YR4/4 褐色シルトが基質 , 地山偽礫・焼土・炭が混在 (貼床)

EK81
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土偽礫・地山偽礫・焼土が混在 (人為層)

EK82
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土偽礫・地山偽礫・焼土・炭が混在 (人為層)

EK83
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土・地山偽礫が混在 (人為層)

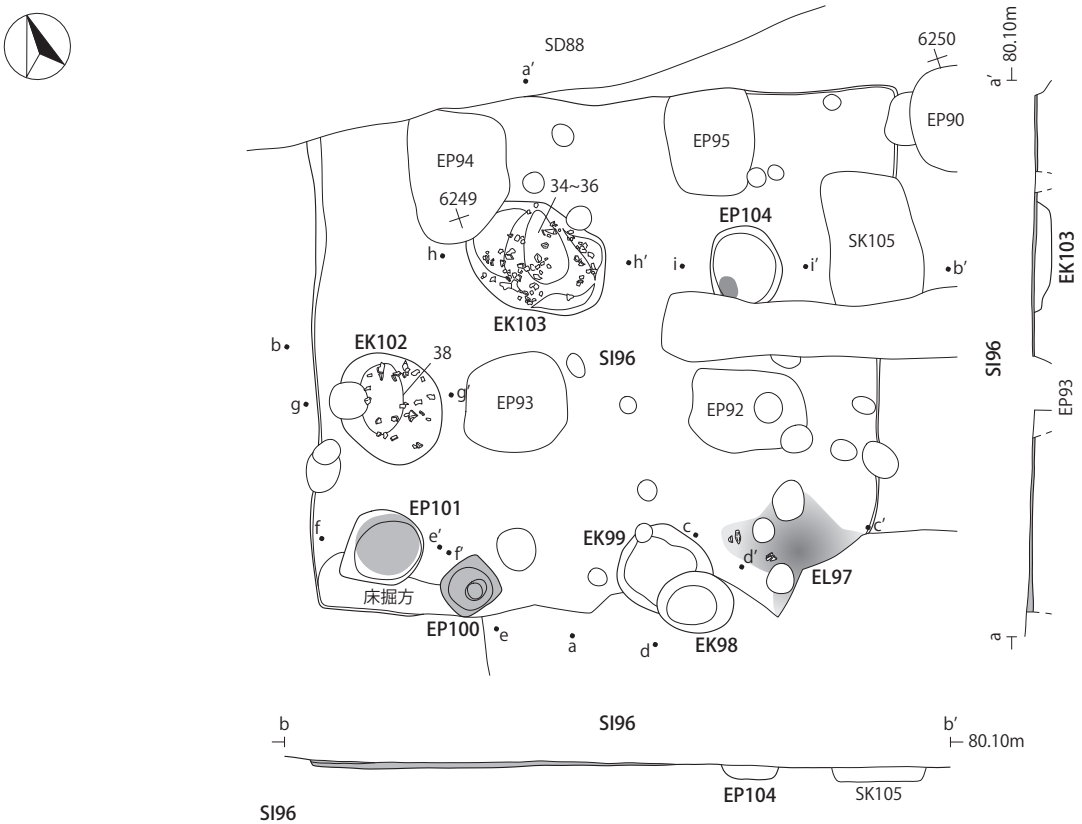
EK84
10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫を 50％含む (人為層)

EK85
10YR3/4 暗褐色シルトが基質 , 黒色粘土・地山・焼土偽礫が混在 (人為層)

EK86
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土偽礫・地山偽礫・焼土・炭が混在 (人為層)

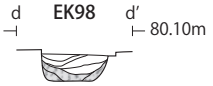
0　2m
1:60

第 26 図　竪穴建物 (古代)SI78

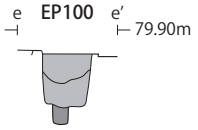


SI96
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土・地山偽礫を 20 ～ 50％含む (竪穴部堆積層)

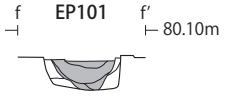
EL97
5YR2/3 極暗赤褐色粘土質シルトが基質 (地山被熱層)



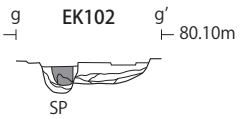
EK98
10YR3/4 暗褐色粘土質シルトが基質 , 地山偽礫・焼土・炭が混在 , 下位に灰層 (灰溜穴)



EP100
10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 40％含む (柱抜取穴)
10YR4/6 褐色粘土が基質 (柱痕跡)



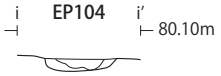
EP101
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫・焼土・炭が混在 (柱抜取穴)
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 40 ～ 50％含む (柱掘方埋土)



EK102
7.5YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 焼土と炭を 1 ～ 20％・土師器を多く含む (人為層)

SP
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトが基質 (柱痕跡)
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 5 ～ 40％含む (柱掘方埋土)

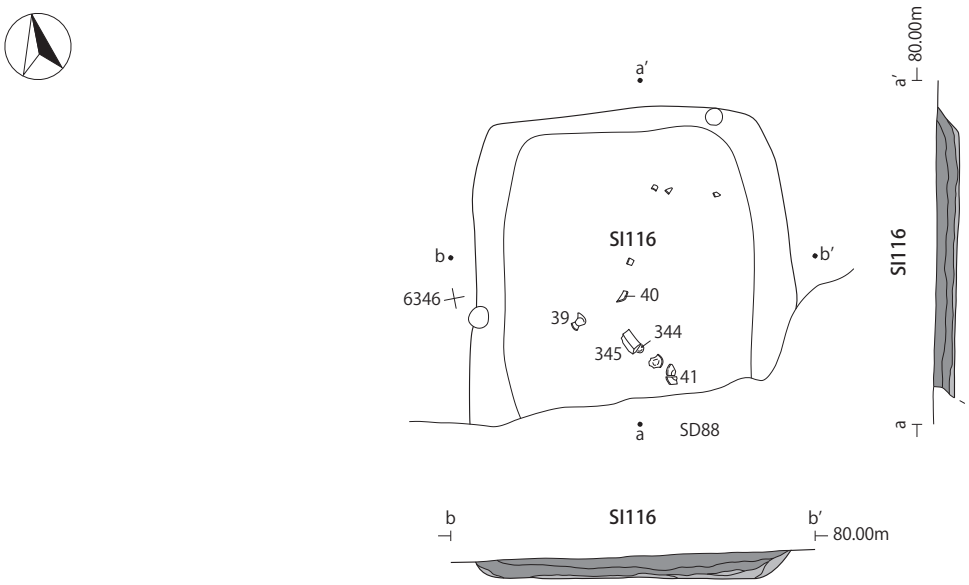
EK103
10YR3/4 暗褐色粘土質シルトが基質 , 地山偽礫・焼土・炭が混在 , 土師器を多く含む (人為層)



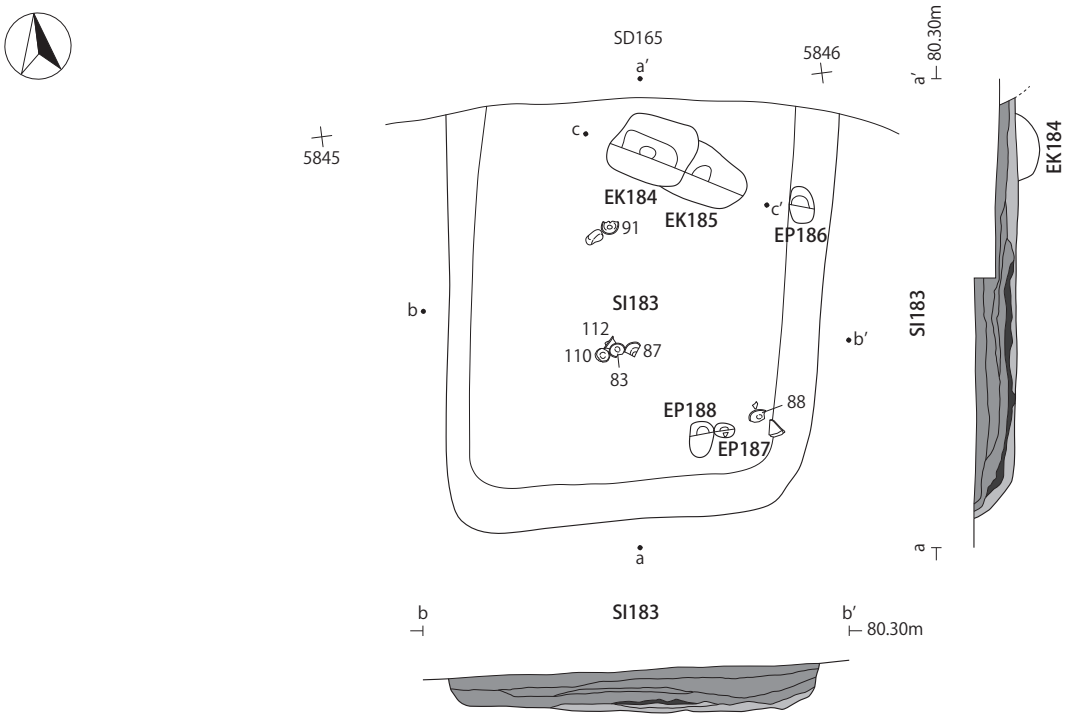
EP104
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 30 ～ 50％含む (人為層)

0　2m
1:60

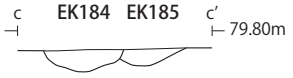
第 27 図　竪穴建物（古代）SI96



SI116
- 10YR3/3 暗褐色粘土が基質 (竪穴部堆積上層)
- 10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 10 ～ 30％含む (竪穴部堆積下層)



SI183
- 10YR3/3 暗褐色シルトが基質 , 地山偽礫を 20％・焼土と炭を 15％含む (竪穴部堆積上層)
- 10YR2/1 黒色シルト , 焼土・炭を 1％含む (竪穴部堆積中層)
- 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 7％・焼土を 20％・炭を 2％含む (竪穴部堆積下層)

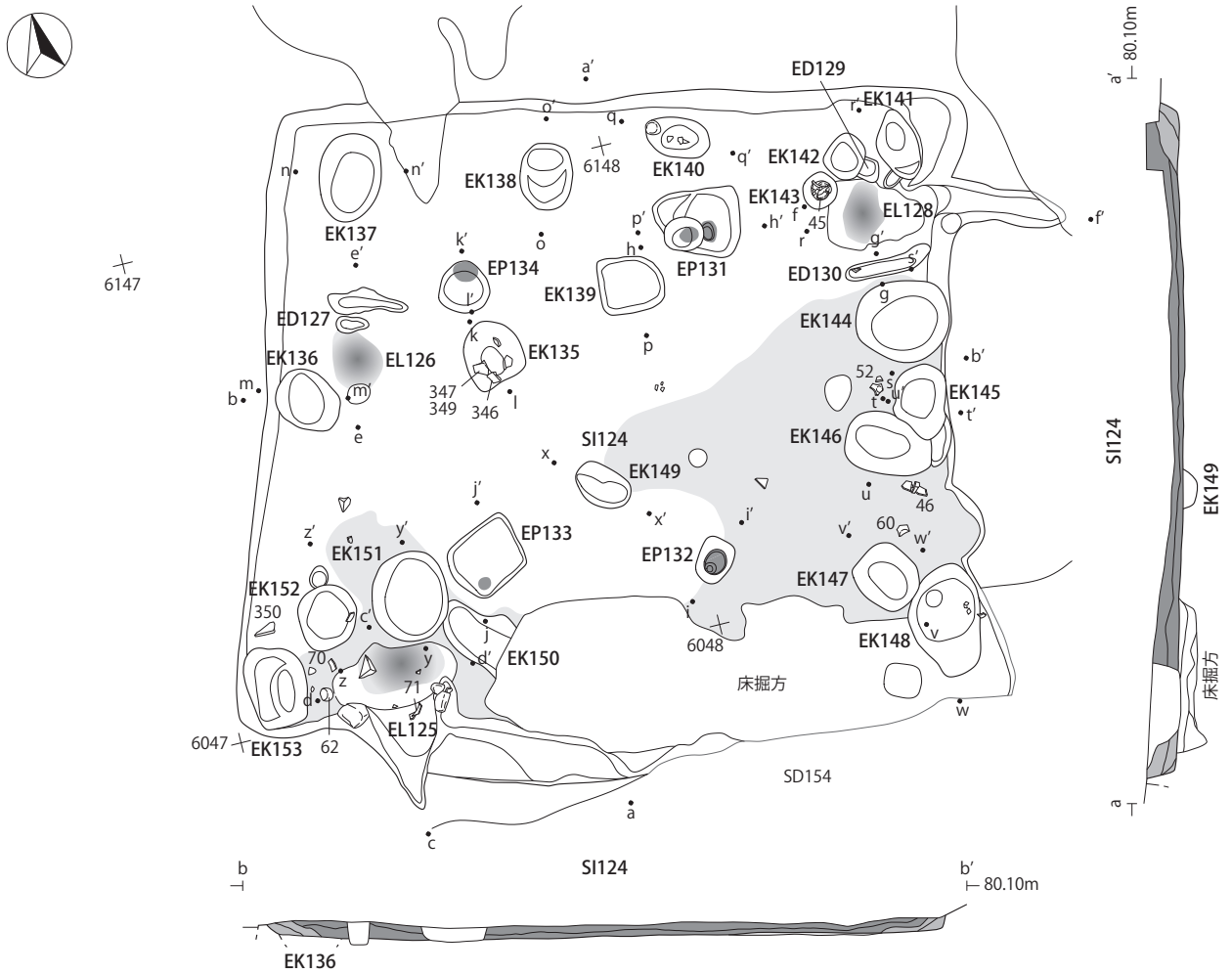


EK184
10YR3/3 暗褐色粘土 , 地山偽礫・炭を 1％含む

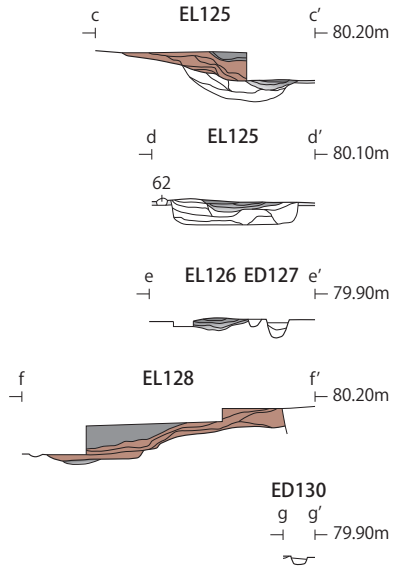
EK185
10YR3/4 暗褐色粘土 , 地山偽礫・炭を 3％含む

0　2m
1:60

第 28 図　竪穴建物（古代）SI116・183



SI124
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 20％・炭を 5％含む (竪穴部堆積上層)
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 40％・炭を 5％含む (竪穴部堆積下層)
5YR3/6 暗赤褐色粘土が基質 , 地山偽礫・焼土偽礫・炭が混在 (床整地層)
10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質粘土 , 黒色粘土偽礫を 10％含む (貼床)



EL125
7.5YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫と焼土偽礫を 50％・炭を 5％含む (カマド堆積層)
5YR 4 /6 赤褐色粘土が基質 (被熱層)
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土・地山偽礫が混在 (カマド火床掘方)

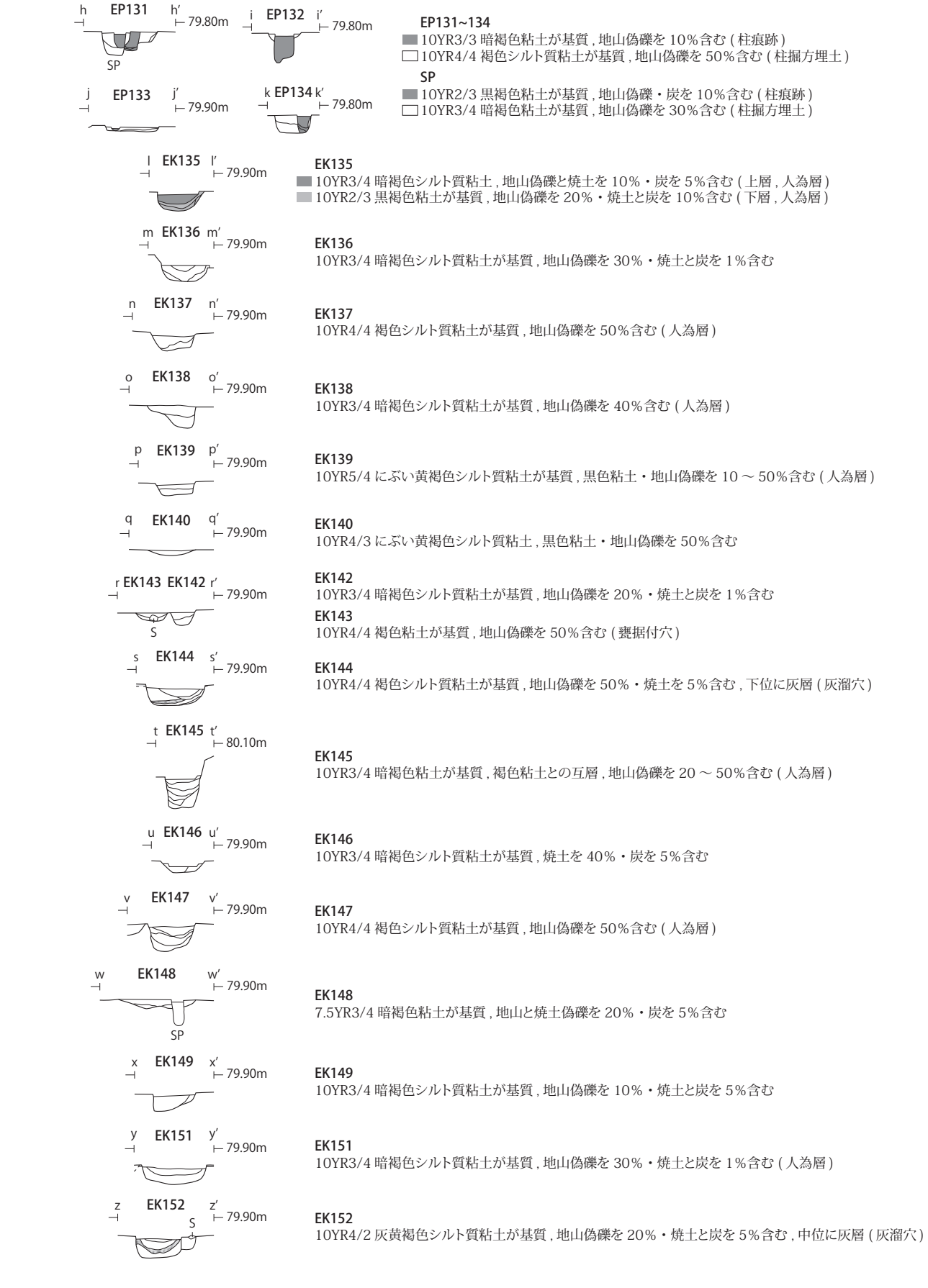
EL126
2.5YR4/8 赤褐色シルトが基質 (地山被熱層)

ED127
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 黒色粘土・地山偽礫・炭を含む (カマド袖石抜取穴か)

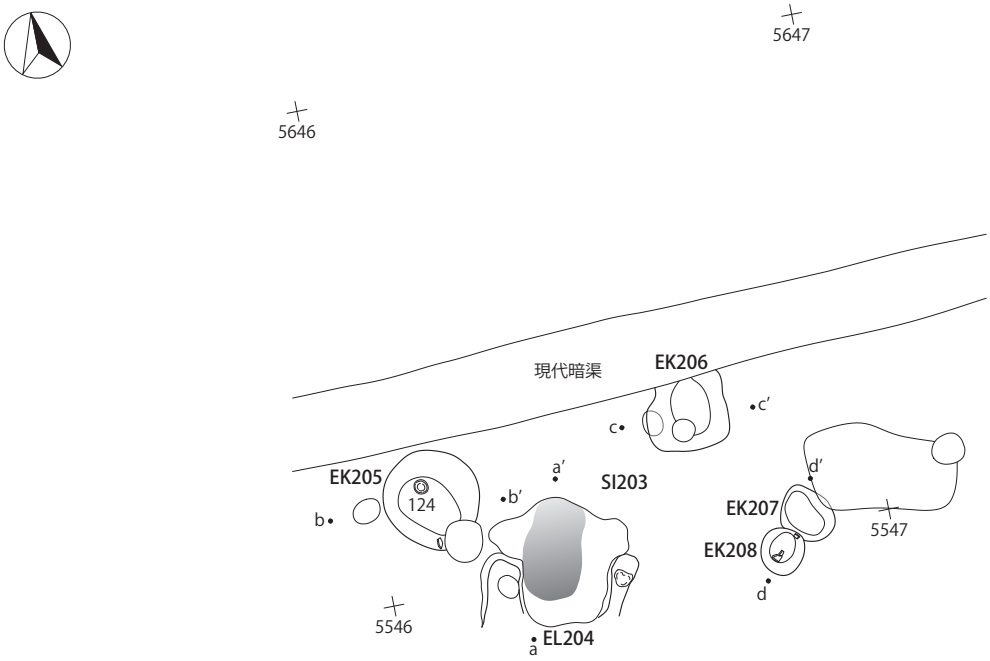
EL128
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を 20％・焼土偽礫を 40％含む (カマド堆積層)
5YR3/3 暗赤褐色粘土質シルトが基質 (地山被熱層)

ED130
10YR4/6 褐色シルト質粘土 , 焼土・炭を 1％含む (カマド袖石抜取穴)

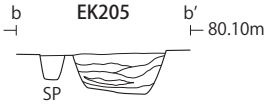
第 29 図　竪穴建物（古代）SI124（1）



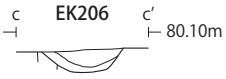
第 30 図　竪穴建物（古代）SI124（2）



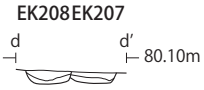
EL204
10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 , 焼土・炭を多く含む (カマド堆積層)
2.5YR4/6 赤褐色粘土質シルト (被熱層)
5YR3/4 暗赤褐色粘土質シルト (カマド掘方埋土)



EK205
10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (人為層)



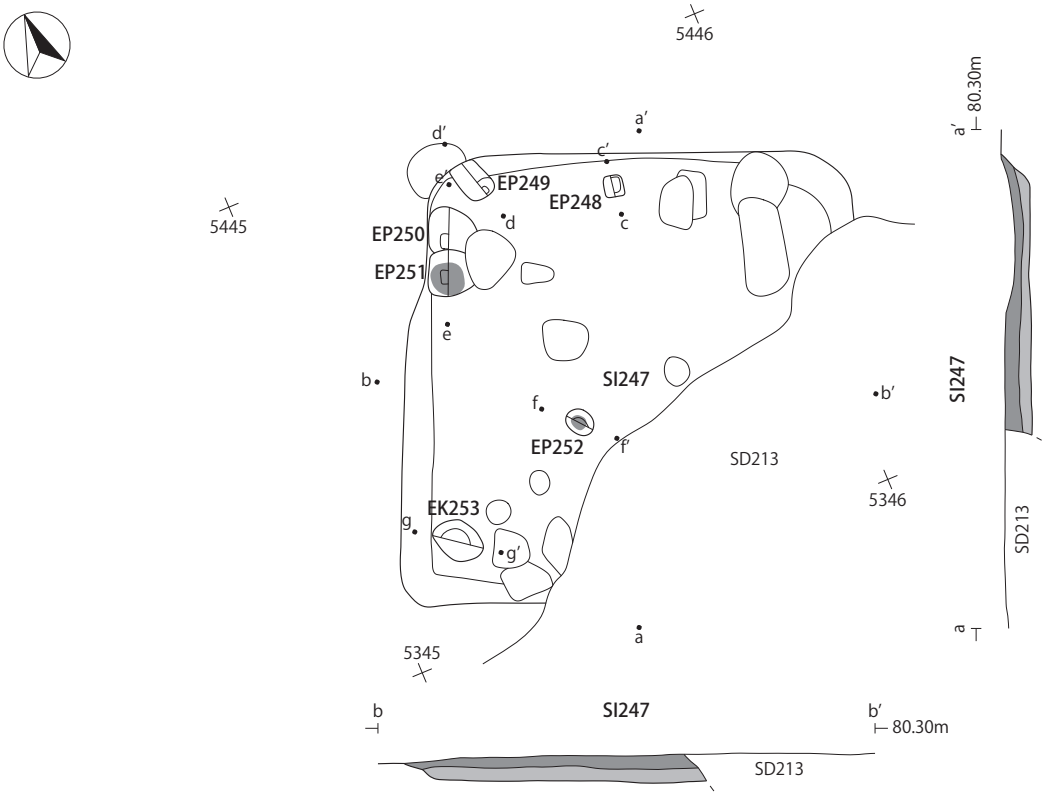
EK206
10YR3/2 黒褐色粘土が基質 , 地山偽礫を含む



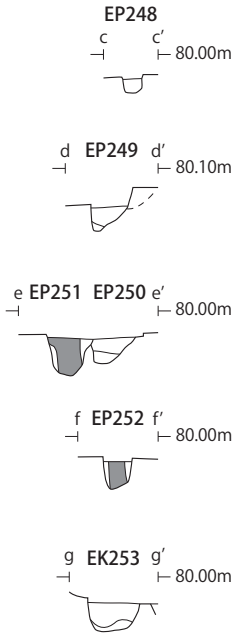
EK207
10YR4/2 灰黄褐色粘土が基質
EK208
10YR4/3 にぶい黄褐色粘土が基質

0　2m
1:60

第 31 図　竪穴建物（古代）SI203



SI247・SD213
□ 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂が基質 , 粒径 5 ～ 20mm の中礫を多く含む (SD213)
■ 10YR3/2 黒褐色シルト , 炭を 3％含む (竪穴部堆積上層)
■ 10YR3/3 暗褐色シルト , 地山偽礫を 20％含む (竪穴部堆積下層)



EP248
10YR3/3 暗褐色シルト , 地山偽礫・炭を 5％含む

EP249
10YR3/3 暗褐色シルトが基質 , 地山偽礫・焼土を 5 ～ 7％含む

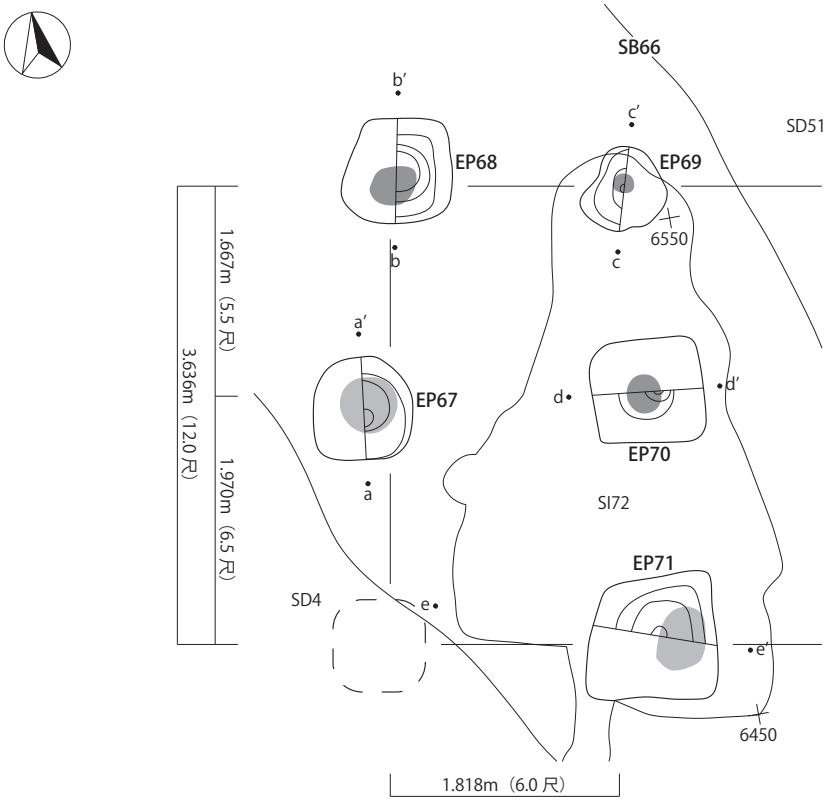
EP250
10YR3/2 黒褐色シルトが基質 , 地山偽礫を 3 ～ 20％含む

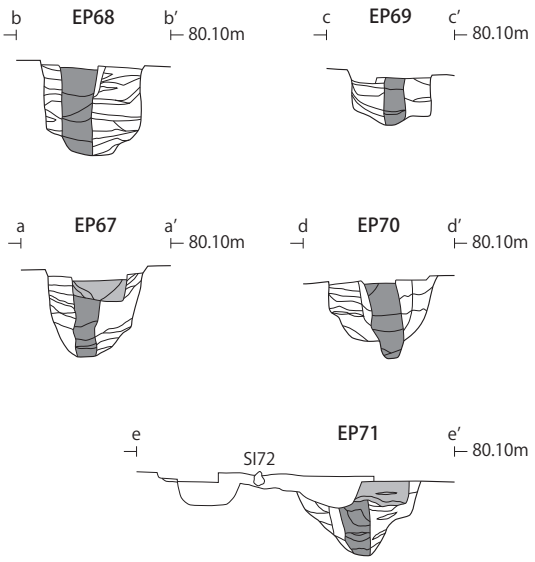
EP251・252
■ 10YR3/3 暗褐色シルト (柱痕跡)
□ 10YR3/4 暗褐色シルト , 地山偽礫を 10％含む (柱掘方埋土)

EK253
10YR3/2 黒褐色シルトが基質 , 地山偽礫を 7 ～ 20％含む (人為層)

0　2m
1:60

第 32 図　竪穴建物（古代）SI247

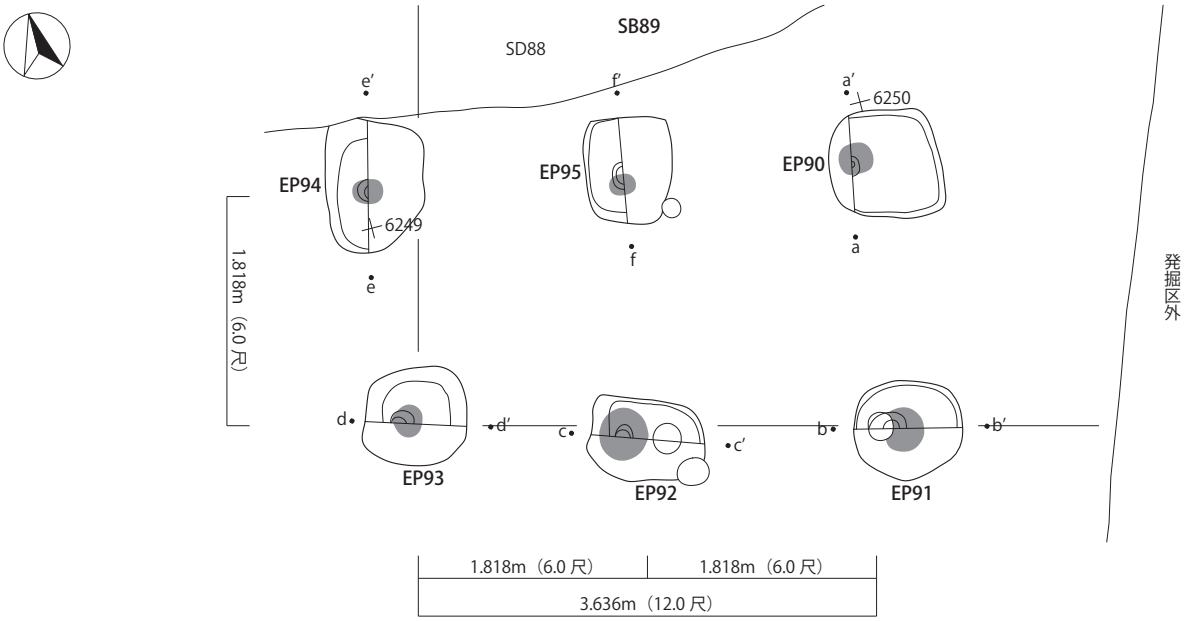


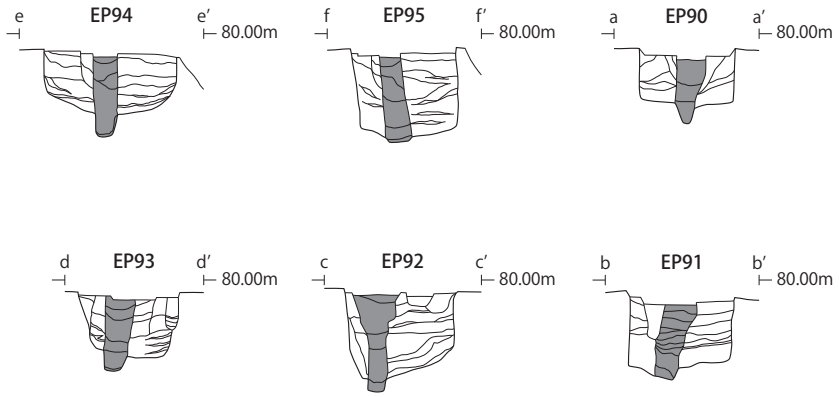


EP67 ～ 71
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 (柱抜取穴)
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 (柱痕跡)
10YR3/1 黒褐色粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (柱掘方埋土)

0　2m
1:60

第 33 図　掘立柱建物（古代）SB66

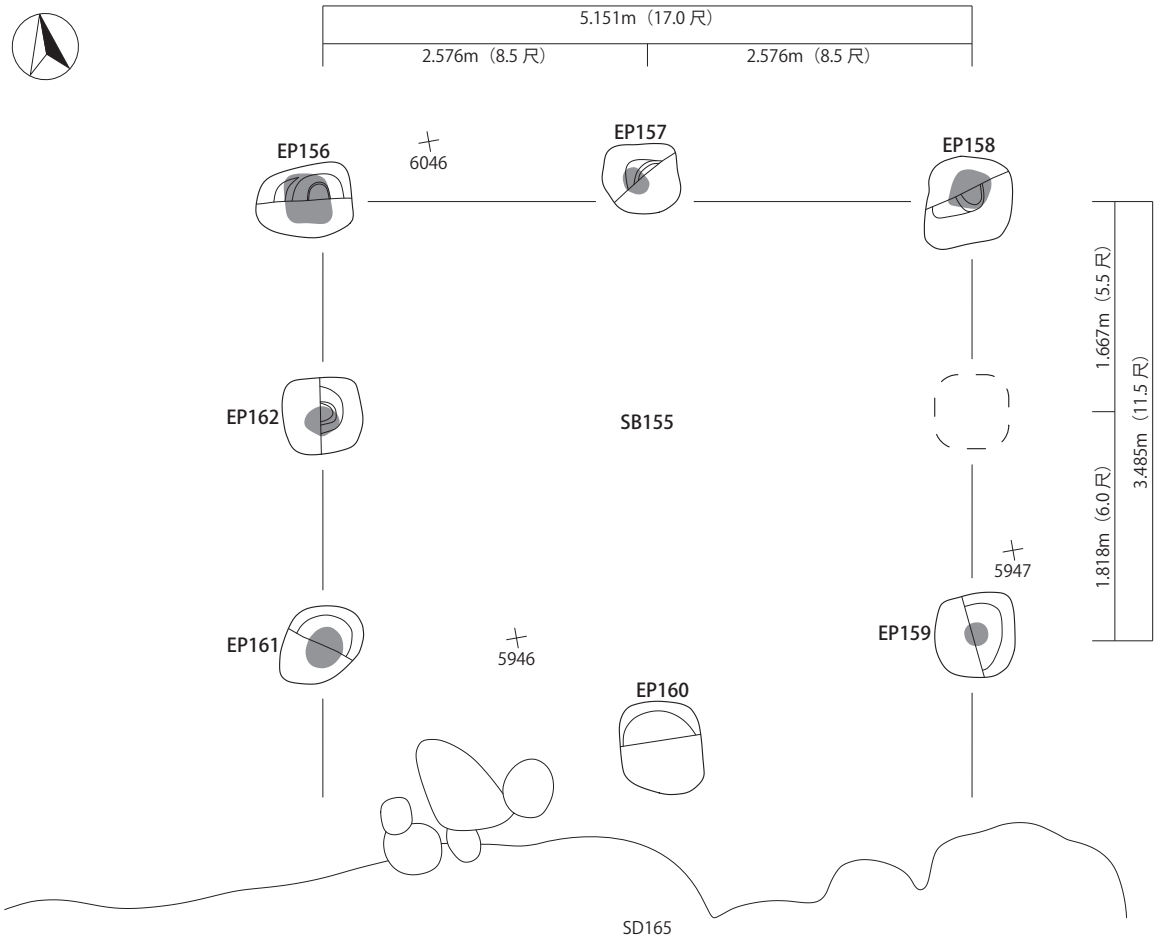




EP90 ～ 95
■ 10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 炭を 1％含む (柱痕跡)
□ 10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 暗褐色粘土との互層 (柱掘方埋土)

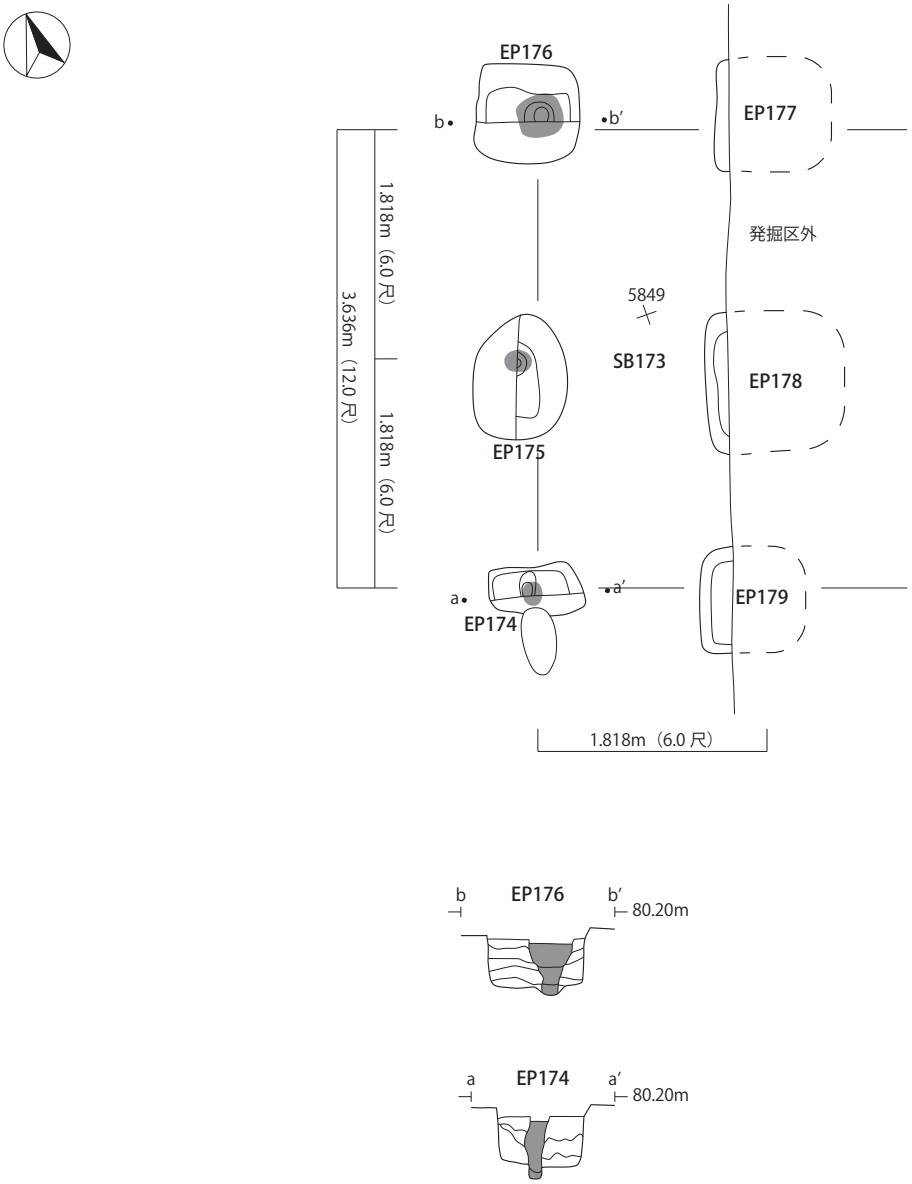
0　2m
1:60

第 34 図　掘立柱建物（古代）SB89

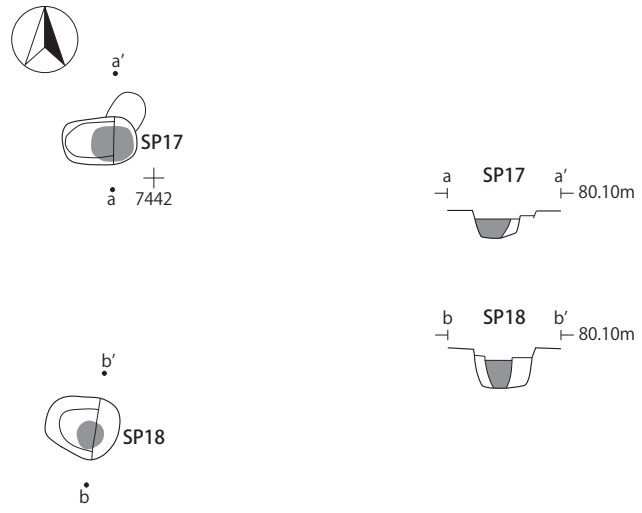


0　2m
1:60

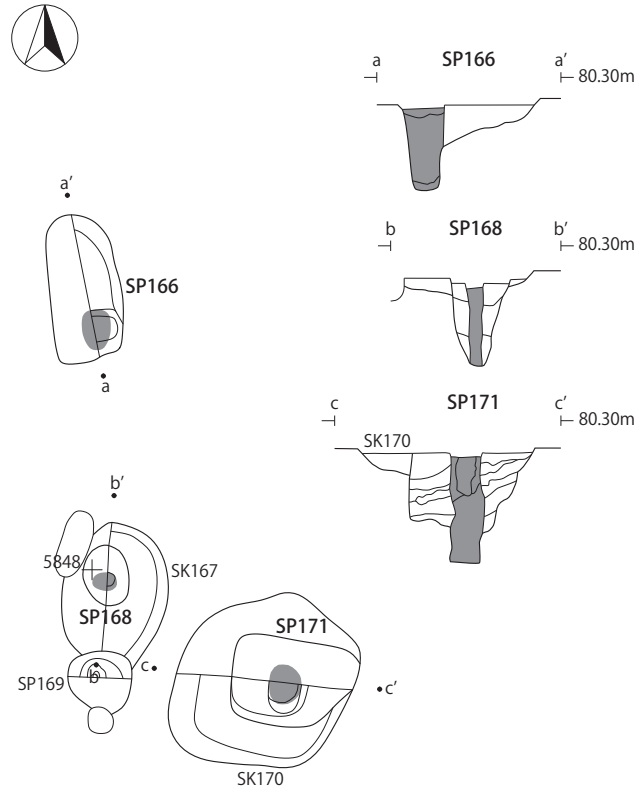
第 35 図　掘立柱建物（古代）SB155



第 36 図　掘立柱建物（古代）SB173



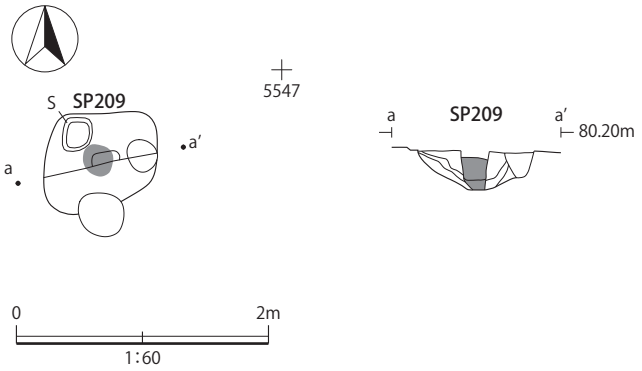
SP17・18
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 (柱痕跡)
10YR4/4 褐色粘土質シルトが基質 (柱掘方埋土)



SP166
10YR4/4 褐色粘土が基質 (柱痕跡)
10YR3/4 暗褐色粘土 (柱掘方埋土)

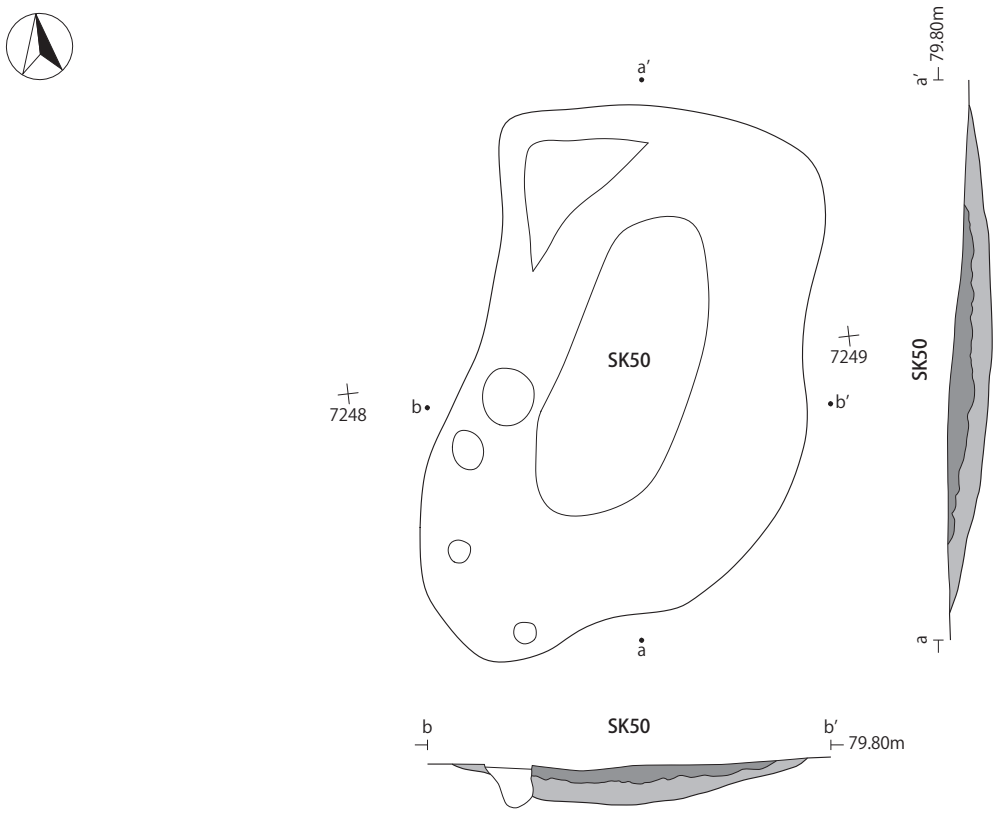
SP168
10YR3/3 暗褐色粘土 (柱痕跡)
10YR4/6 褐色シルト質粘土が基質 , 暗褐色土との互層 (柱掘方埋土)

SP171
10YR3/2 黒褐色シルト質粘土が基質 (柱痕跡)
10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (柱掘方埋土)

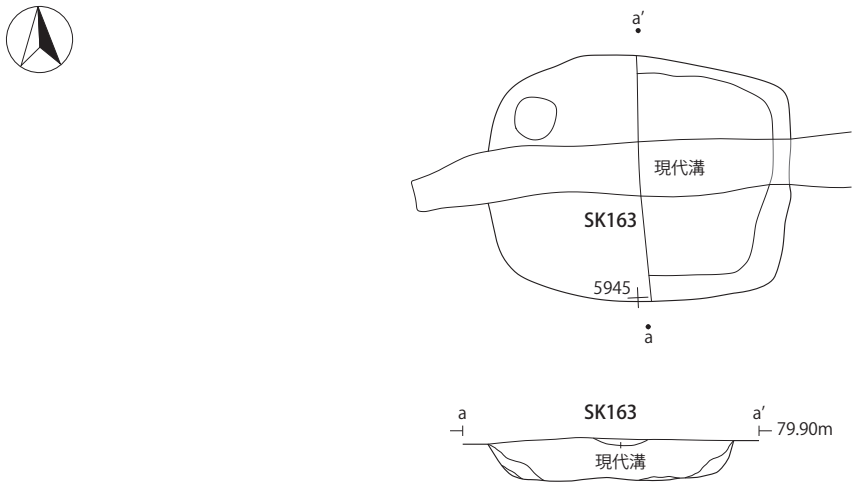


SP209
10YR2/1 黒色粘土が基質 (柱痕跡)
10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫を含む (柱掘方埋土)

第 37 図　柱穴 SP17 ～ 209



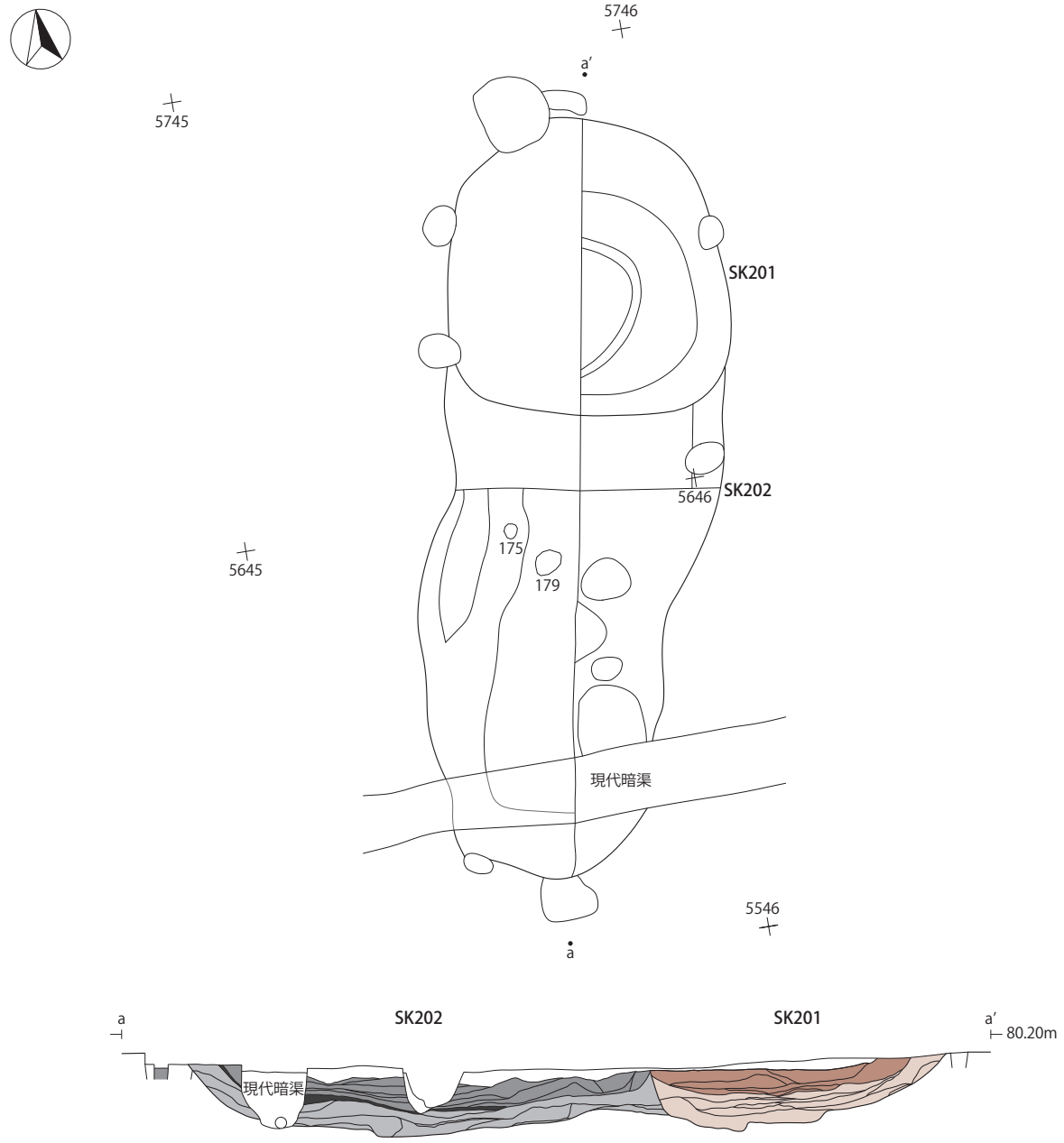
SK50
10YR2/1 黒色粘土質シルト , 灰白色火山灰を 1％以下・地山偽礫を 3％含む (上層 , SD47-EK48 上層と同じ)
2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト , 地山偽礫を 50％含む (下層)



SK163
10YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫を含む

0　2m
1:60

第 38 図　土坑（古代）SK50・163

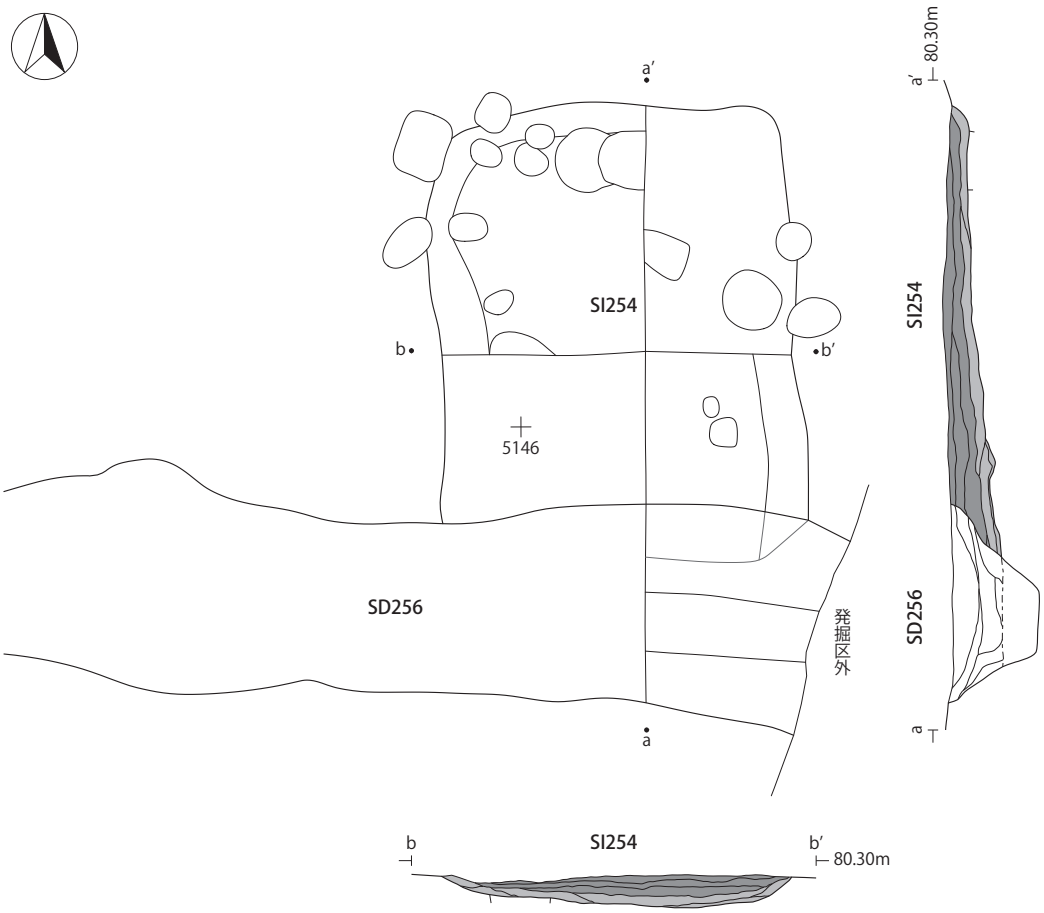


SK201
- 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 (直上層)
- 7.5YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 , 焼土や炭を多く含む (上層)
- 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土が基質 , 焼土や炭・地山偽礫を含む (下層)

SK202
- 2.5Y6/1 黄灰色シルト質粘土が基質 (上層 , 水成層か)
- 2.5Y2/1 黒色粘土 (中層)
- 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を含む (下層)

0　2m
1:60

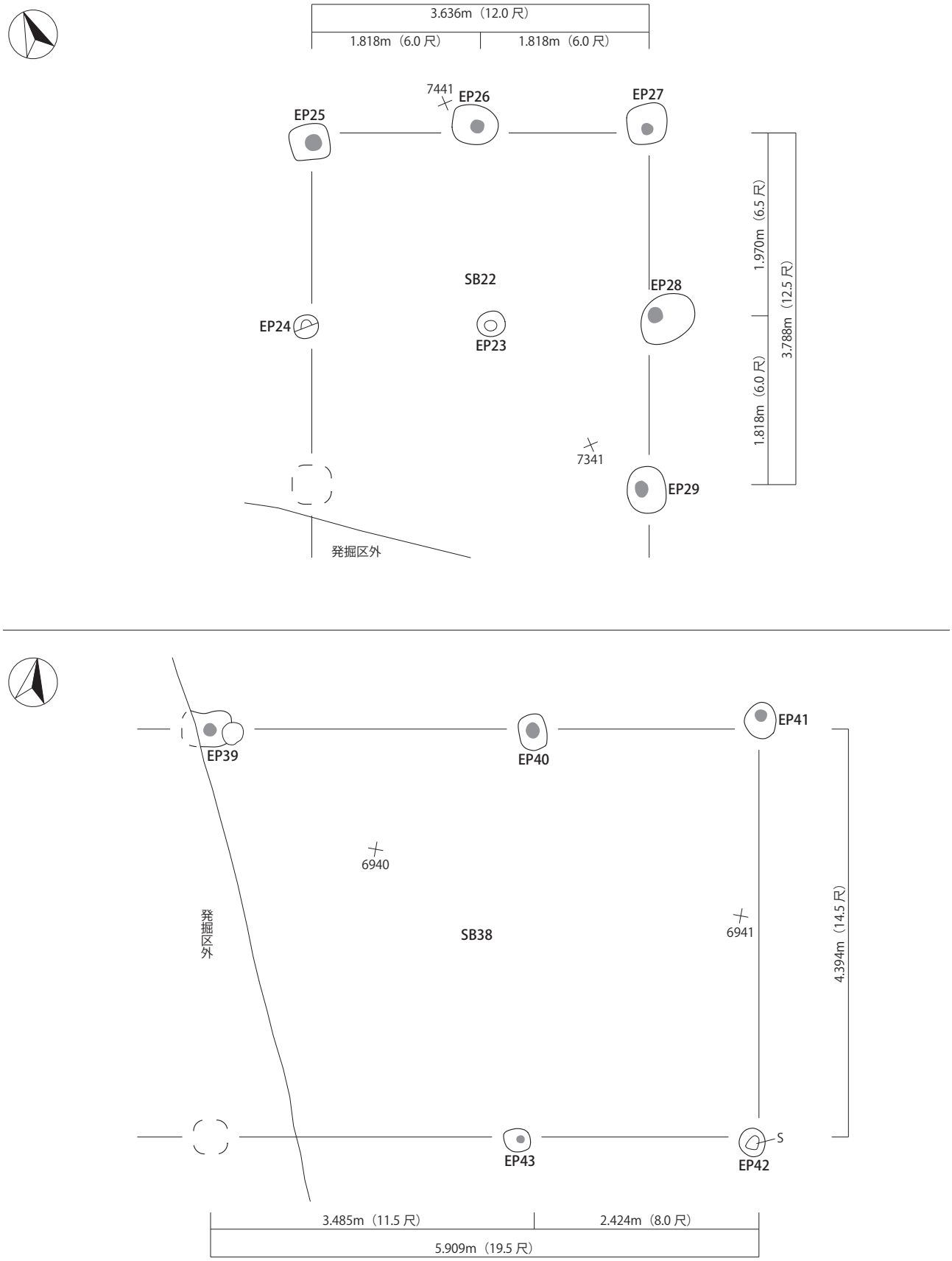
第 39 図　土坑（古代）SK201・202



SI254
10YR2/2 黒褐色シルト質粘土が基質 (上層)
10YR4/3 にぶい黄褐色粘土が基質 (下層)
SD256
2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土が基質

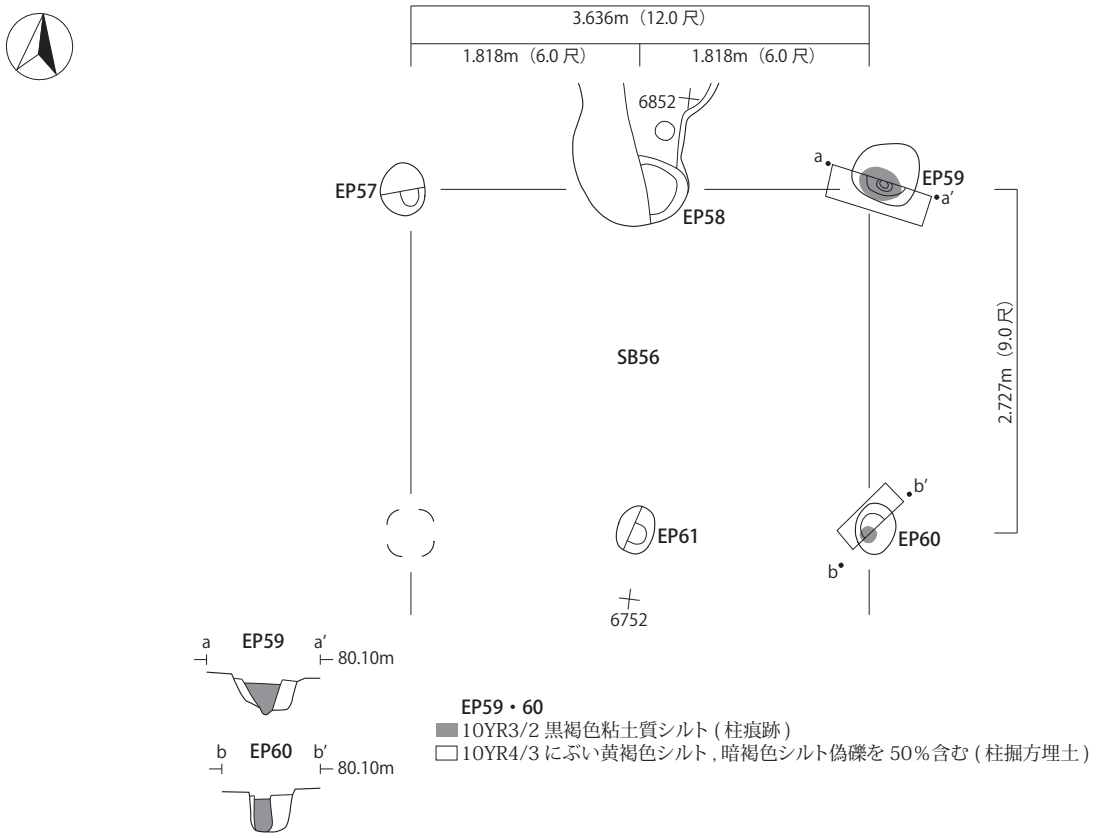
0　2m
1:60

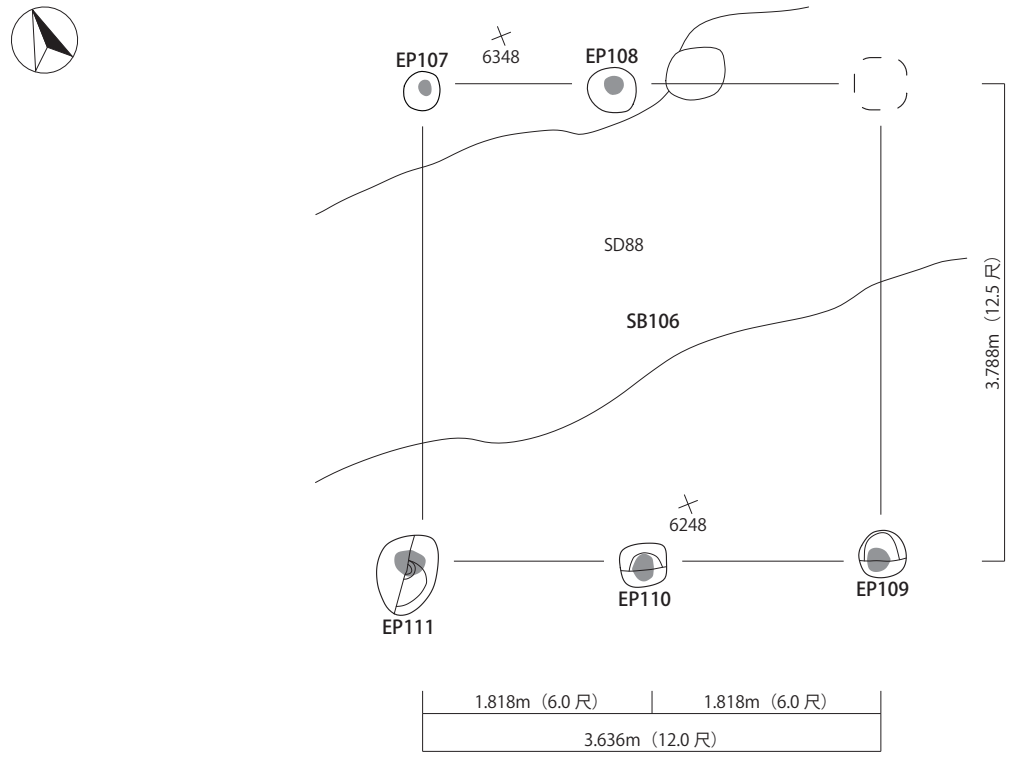
第 40 図　竪穴建物（中世）SI254



0　2m
1:60

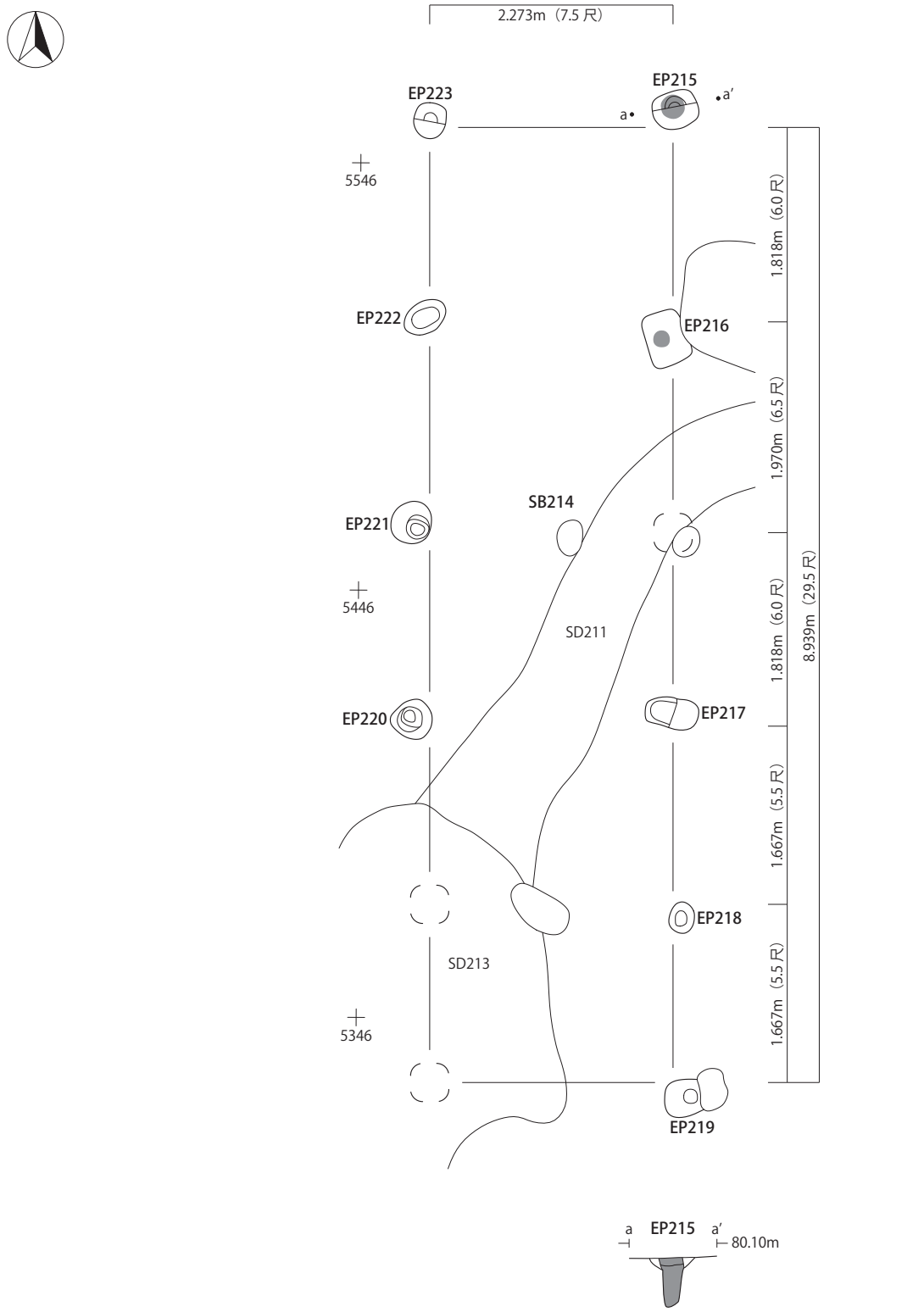
第 41 図　掘立柱建物（中世）SB22・38



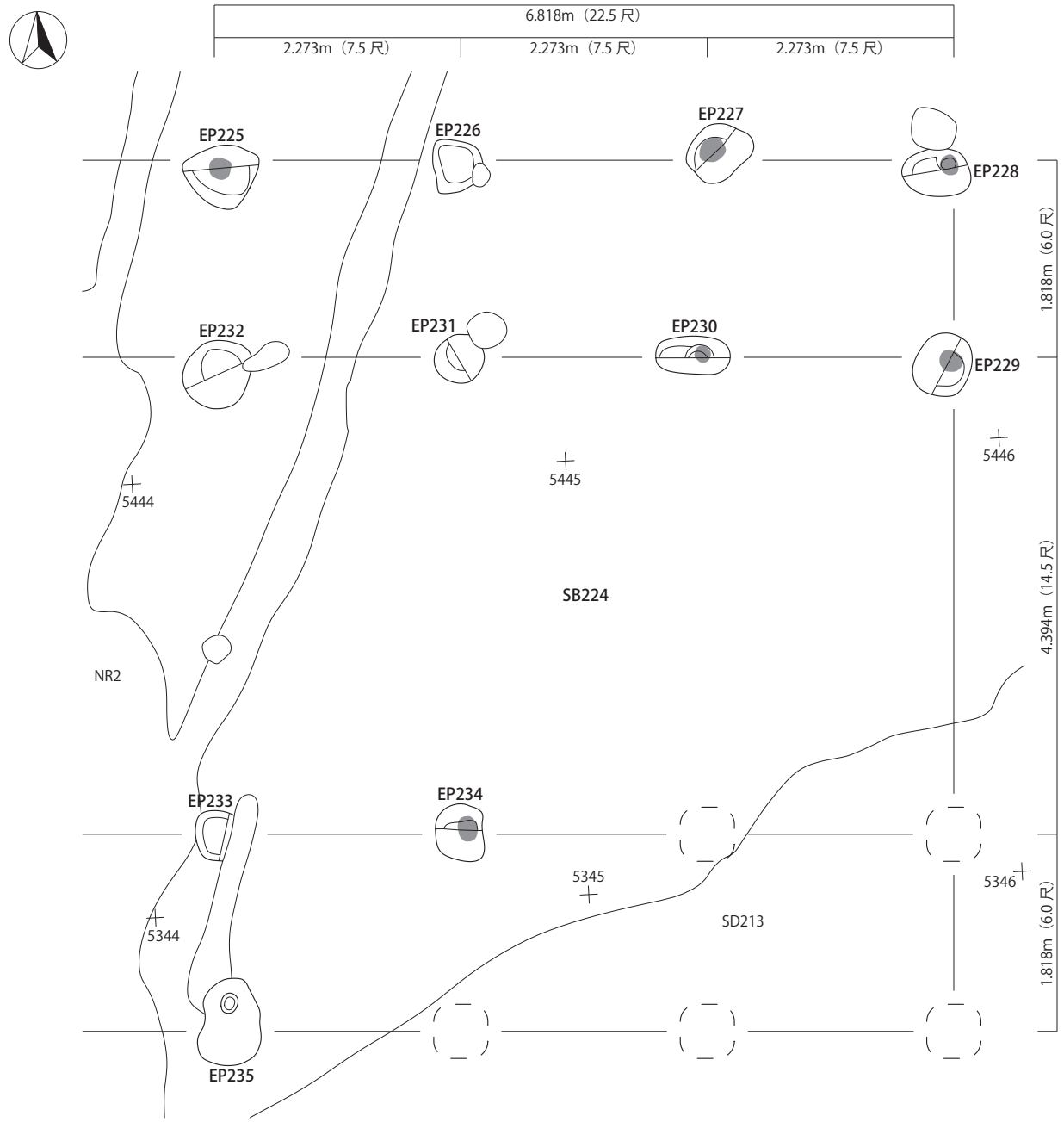


0　2m
1:60

第 42 図　掘立柱建物（中世）SB56・106

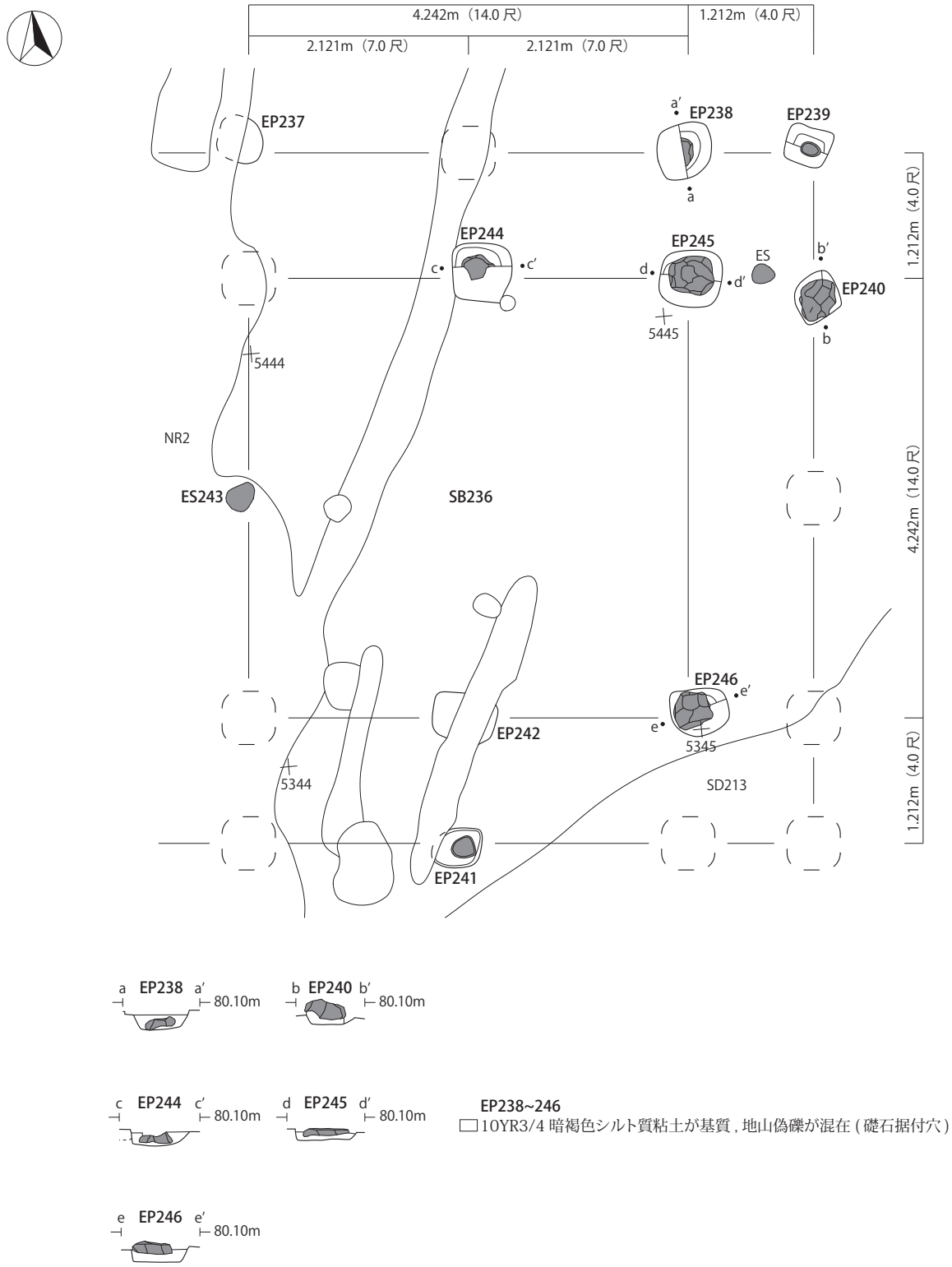


第 43 図　掘立柱建物（中世）SB214

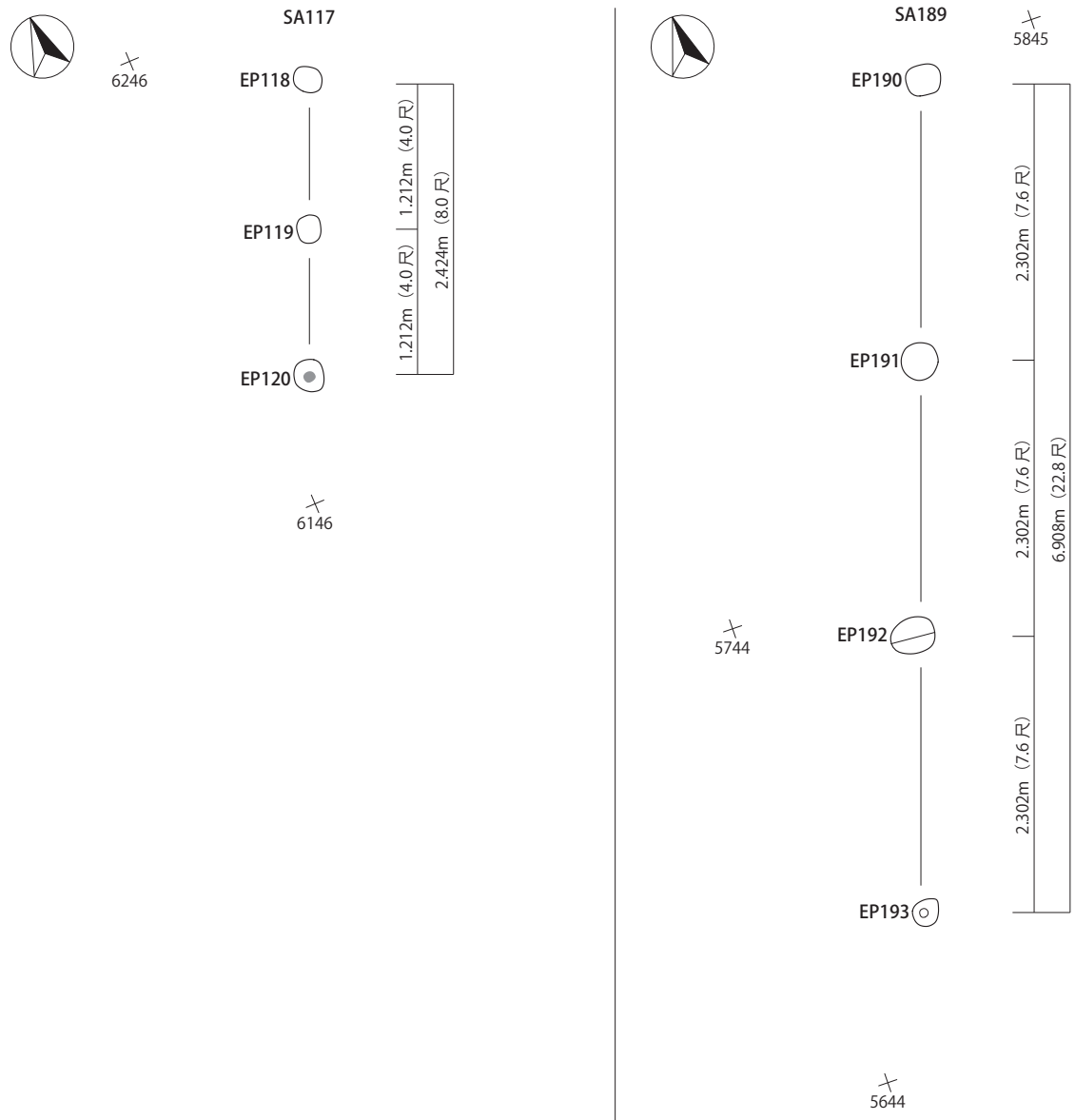


0　2m
1:60

第 44 図　掘立柱建物（中世）SB224

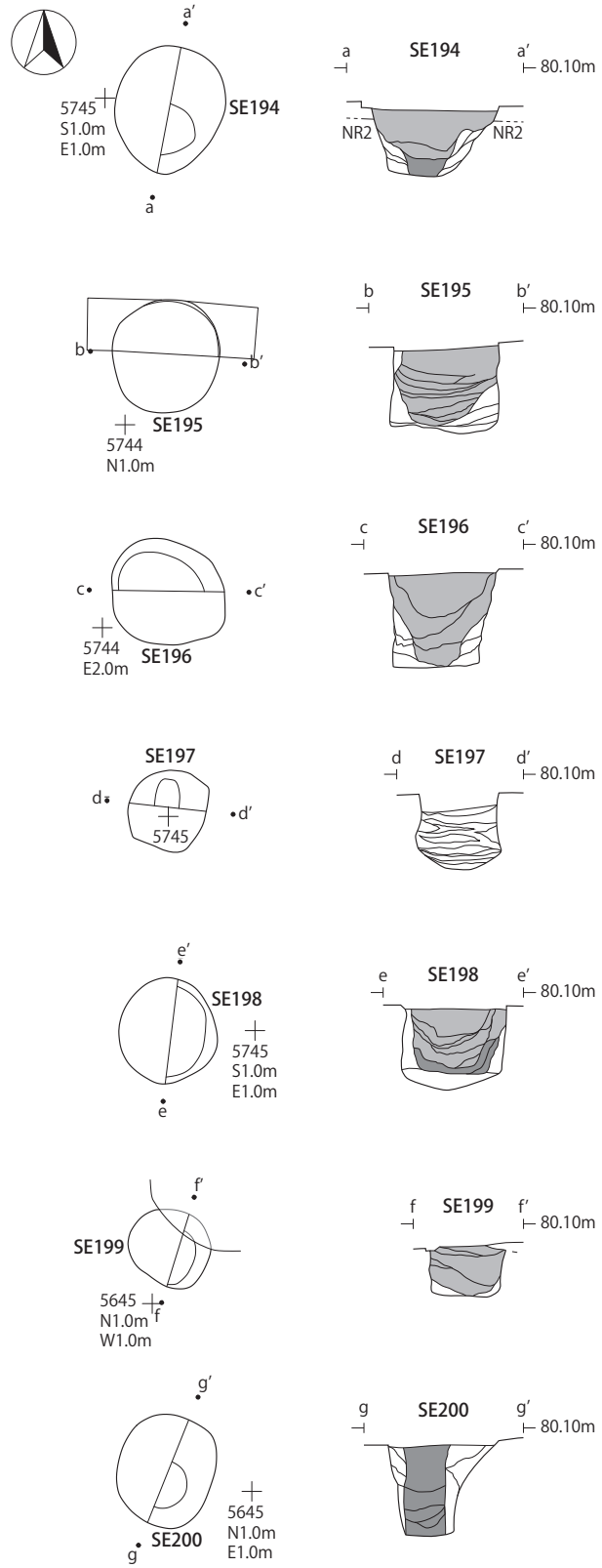


第 45 図　礎石建物（中世）SB236



0　2m
1:60

第46図　柵（中世）SA117・189



SE194
- 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土が基質 (井戸枠抜取穴)
- 10YR2/1 黒色粘土 (井戸枠痕跡)
- 10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (井戸枠掘方埋土)

SE195
- 10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫を含む (井戸枠抜取穴)
- 10YR3/2 黒褐色粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (井戸枠掘方埋土)

SE196
- 10YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫を含む (井戸枠抜取穴)
- 10YR3/2 黒褐色粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (井戸枠掘方埋土)

SE197
10YR3/3 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (人為層)

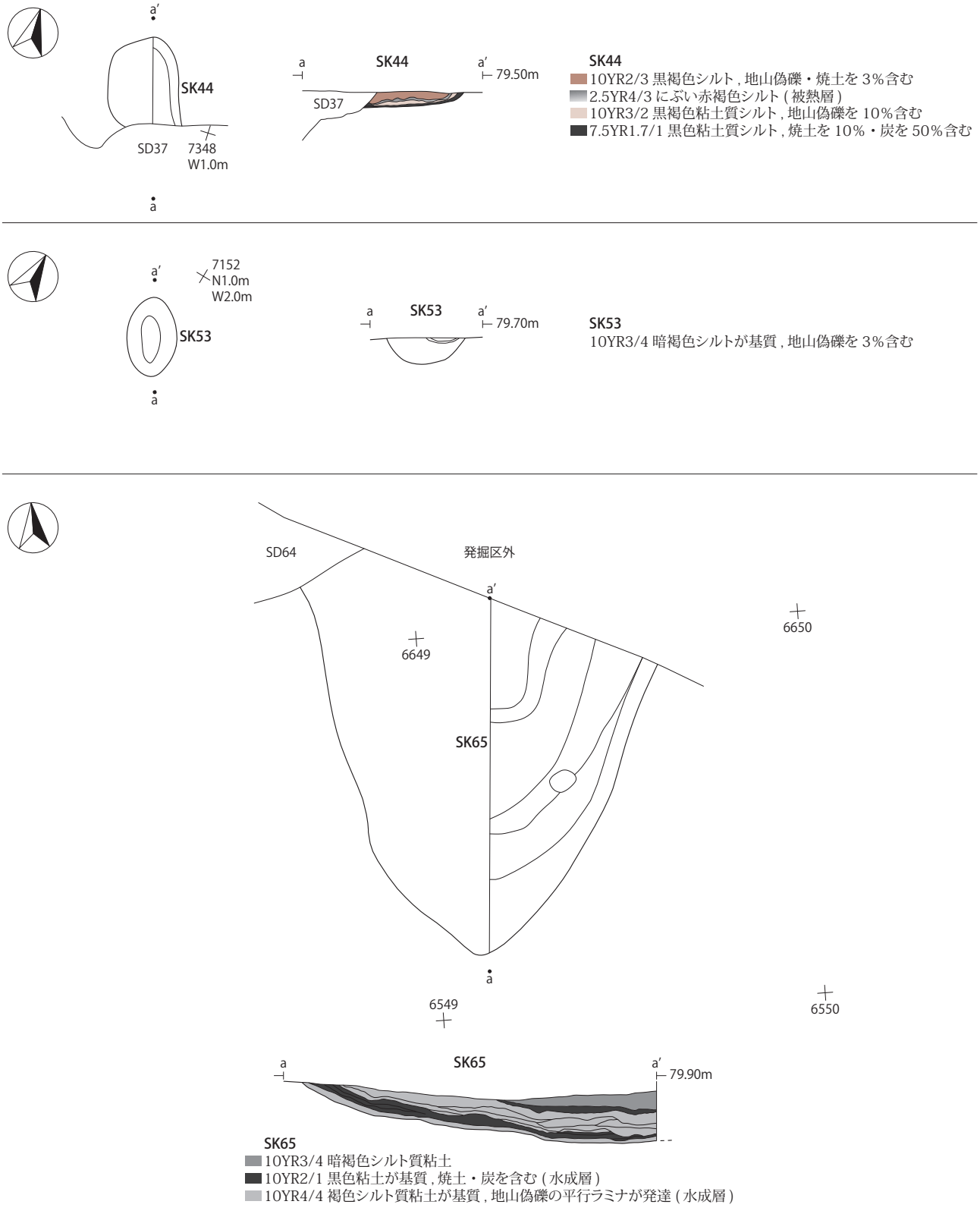
SE198
- 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫との互層 (井戸枠抜取穴)
- 10YR2/1 黒色粘土が基質 (井戸枠痕跡)
- 10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫が混在 (井戸枠掘方埋土)

SE199
- 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 (井戸枠抜取穴)
- 10YR4/4 褐色粘土 , 地山偽礫が混在 (井戸枠掘方埋土)

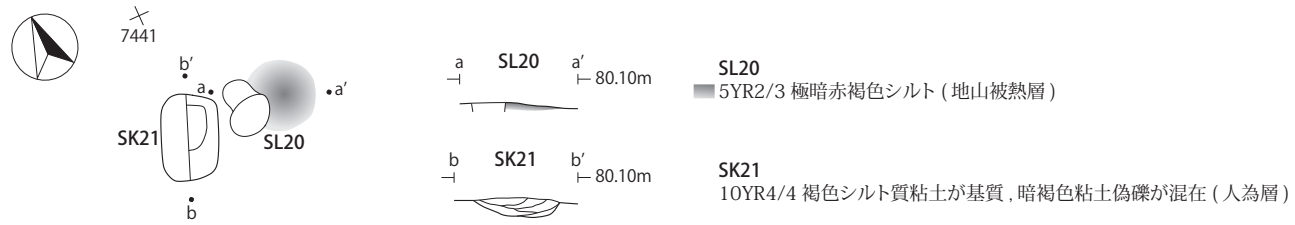
SE200
- 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 (井戸枠痕跡)
- 10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を含む (井戸枠掘方埋土)

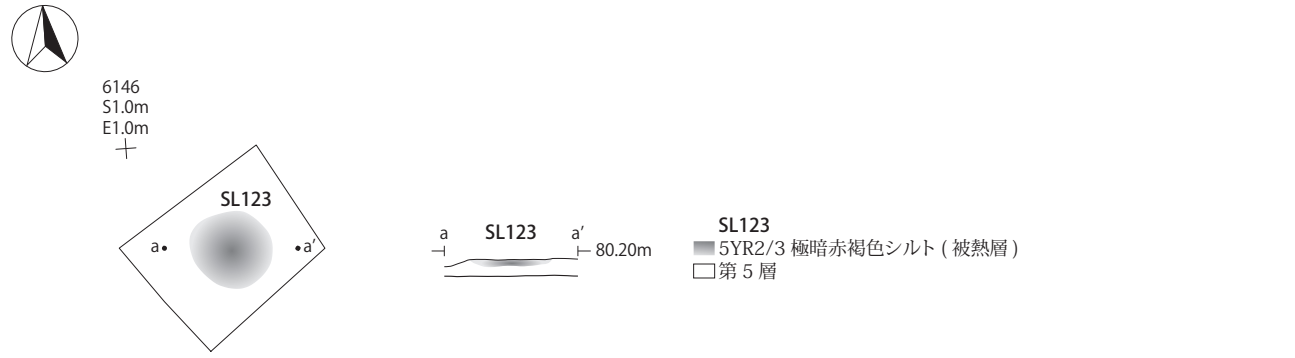
0　2m
1:60

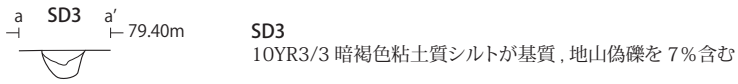
第 47 図　井戸（中世）SE194 ～ 200

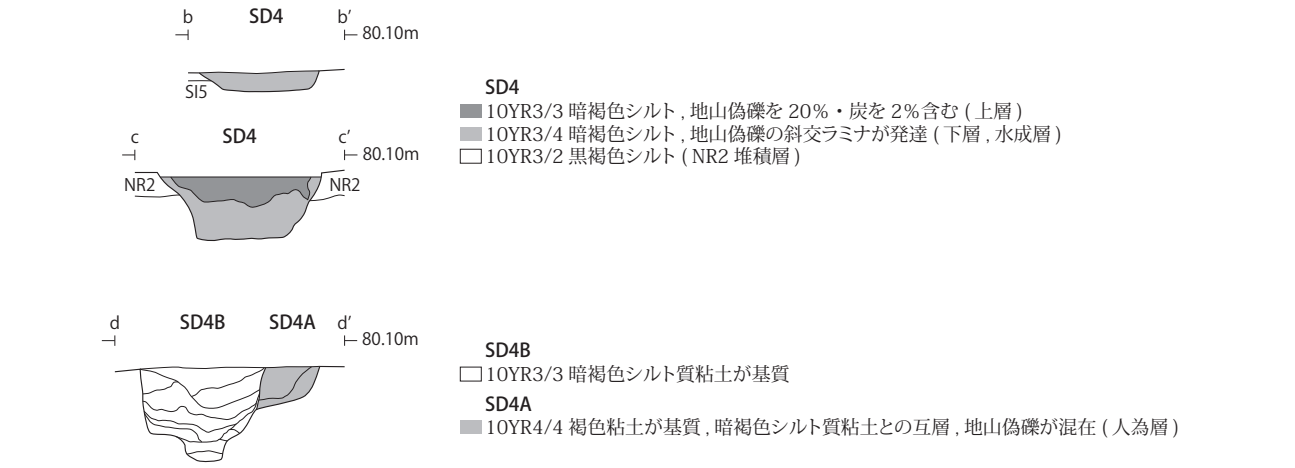


第 48 図　土坑（中世）SK44 ～ 65



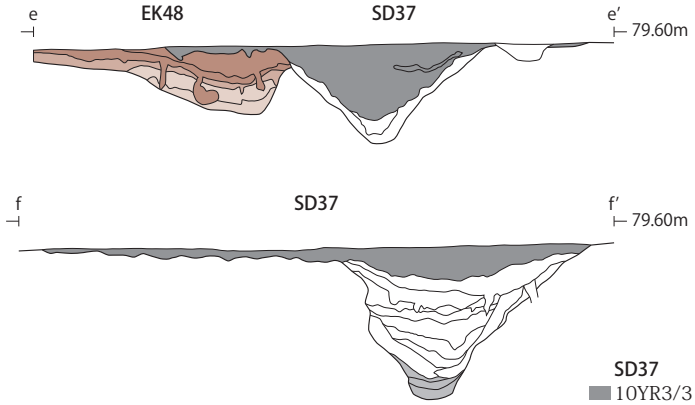






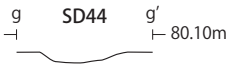
0　2m
1:60

第 49 図　炉（中世）SL20・123，溝（中世）SD3・4

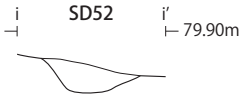


SD37
- 10YR3/3 暗褐色シルト , 地山偽礫を 10%・炭を 3%含む (上層)
- 10YR4/4 褐色砂質シルトが基質 , 暗褐色シルト偽礫と地山偽礫が混在 (人為層)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土が基質 , 暗褐色粘土との互層 (下層 , 水成層)

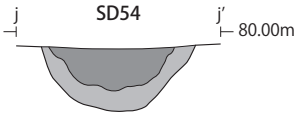
EK48
- 10YR2/1 黒色シルトが基質 , 地山偽礫を 15%含む (上層)
- 10YR3/2 黒褐色シルト , 地山偽礫を 10%含む (SD47 堆積層と同じ)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが基質 , 暗褐色シルト偽礫を 20%含む (下層)



SD47
- 10YR3/2 黒褐色シルト , 地山偽礫を 10%含む



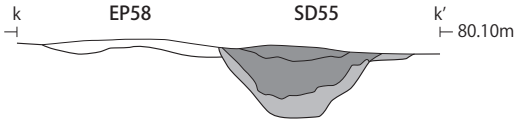
SD52
10YR3/4 暗褐色シルト , 地山偽礫を 7%含む



SD54
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト , 地山偽礫を 3%含む (上層)
- 10YR3/3 暗褐色シルト , 地山偽礫を 40%含む (下層)

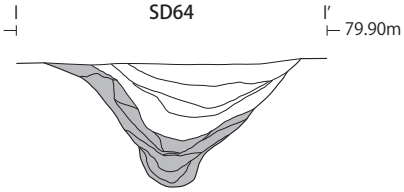
0　2m
1:60

第 50 図　溝（中世）SD37 ～ 54

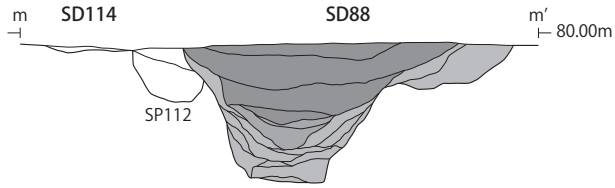


SD55
10YR4/2 灰黄褐色シルトが基質 , 地山偽礫を 7％含む (上層)
10YR3/3 暗褐色シルト , 地山偽礫を 30％含む (下層)

EP58（SB56）
10YR4/3 にぶい黄褐色シルト , 焼土偽礫を 15％含む (柱抜取穴)



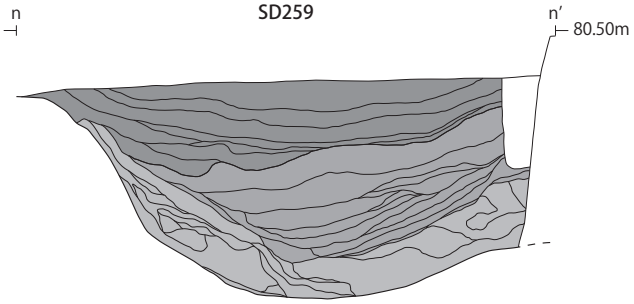
SD64
10YR4/4 褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を含む (人為層)
10YR3/4 暗褐色粘土が基質 , 地山偽礫の平行ラミナが発達 (水成層)



SD88
10YR3/3 暗褐色シルト質粘土が基質 (上層)
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトが基質 , 地山偽礫を多く含む (中層)
10YR3/4 暗褐色粘土が基質 (下層)

SD114
10YR2/1 黒色粘土

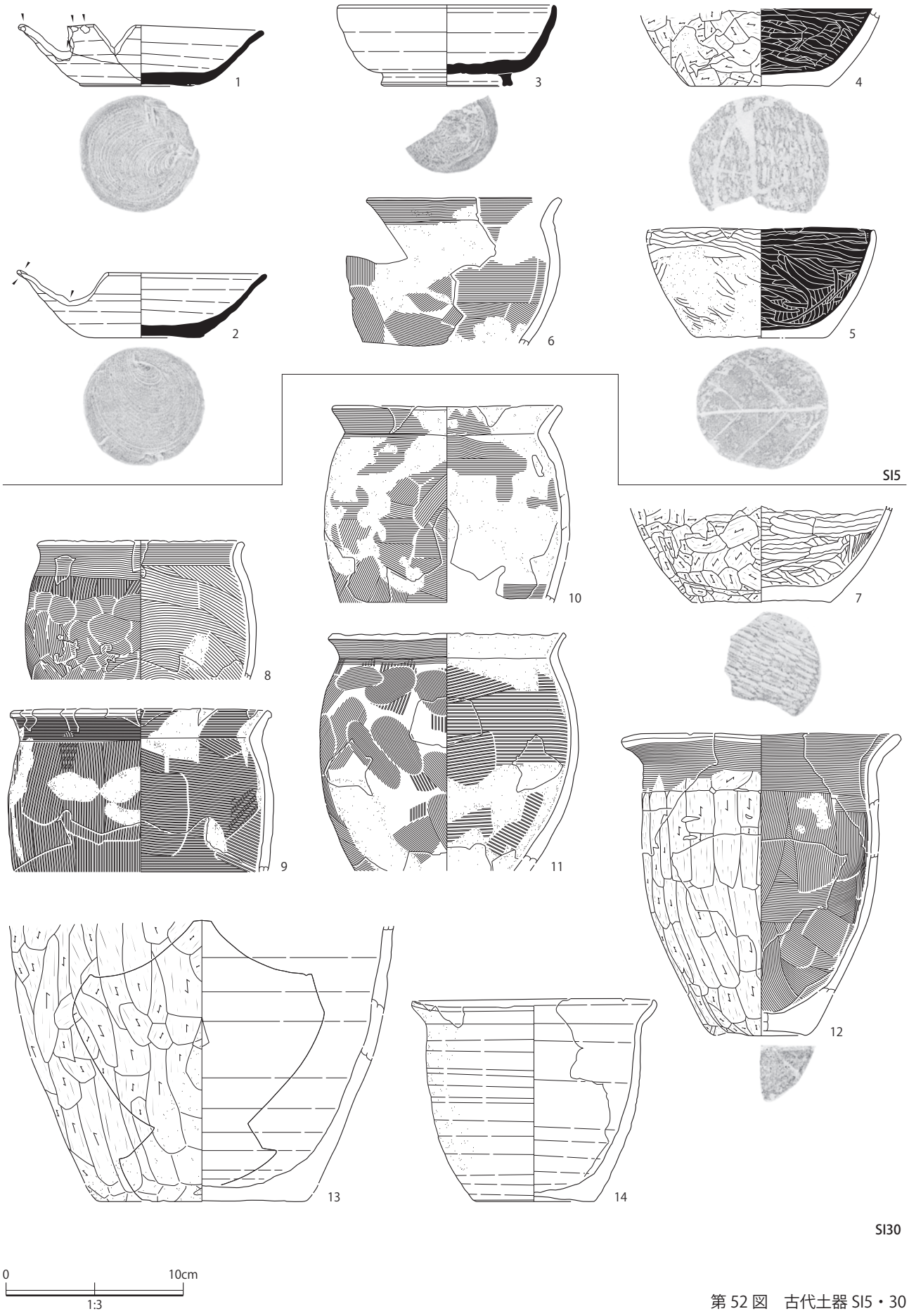
SP112
10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが基質



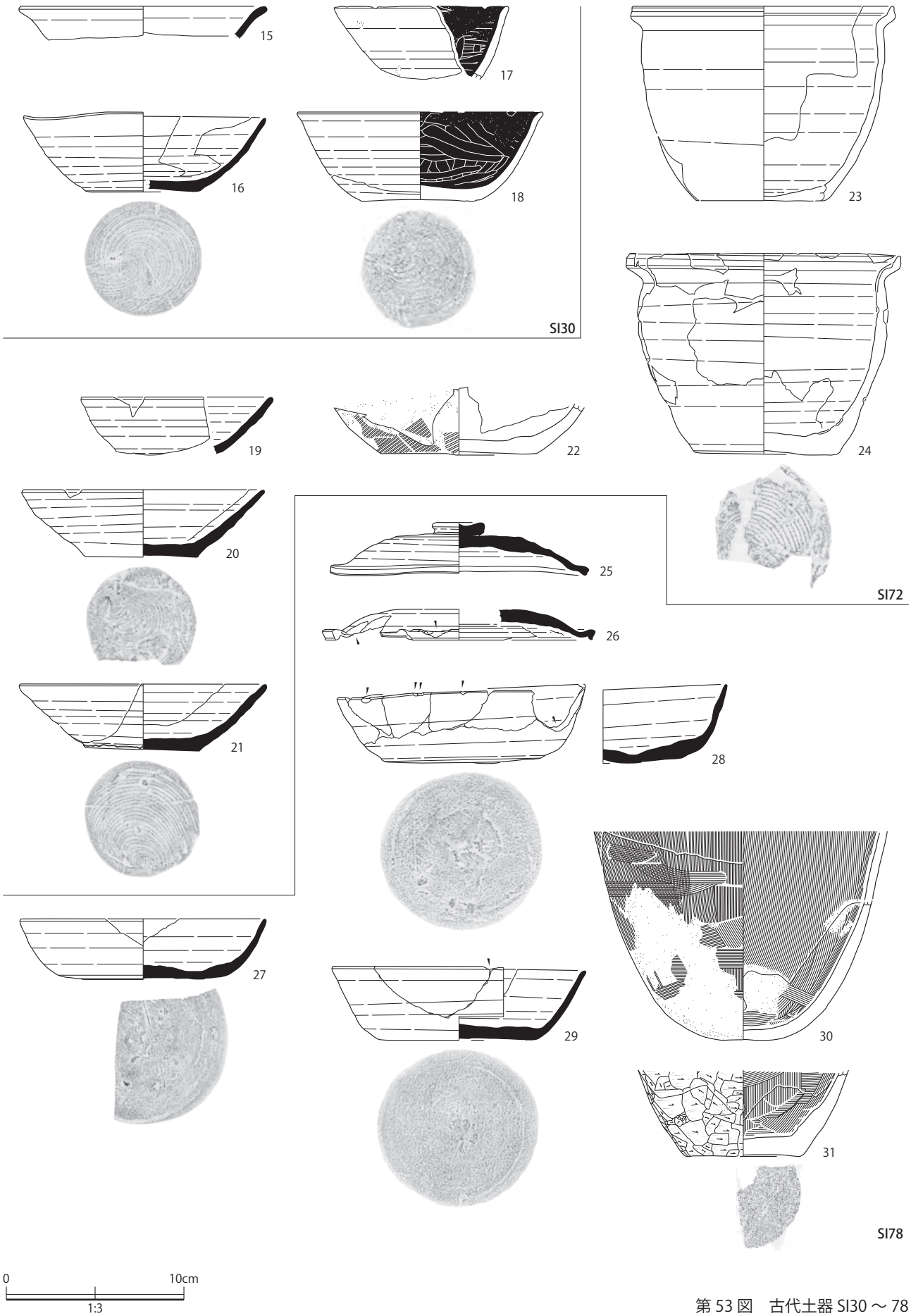
SD259
10YR2/3 黒褐色シルト質粘土が基質 , 地山偽礫を含む (上層 , 水成層か)
10YR4/4 褐色粘土質シルトが基質 , 暗褐色粘土との互層 , 地山偽礫が 50％混在 (中層 , 人為層)
10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト及びシルト質砂が基質 , 斜交層理のうねり模様 (下層 , 洪水堆積層か)

0　2m
1:60

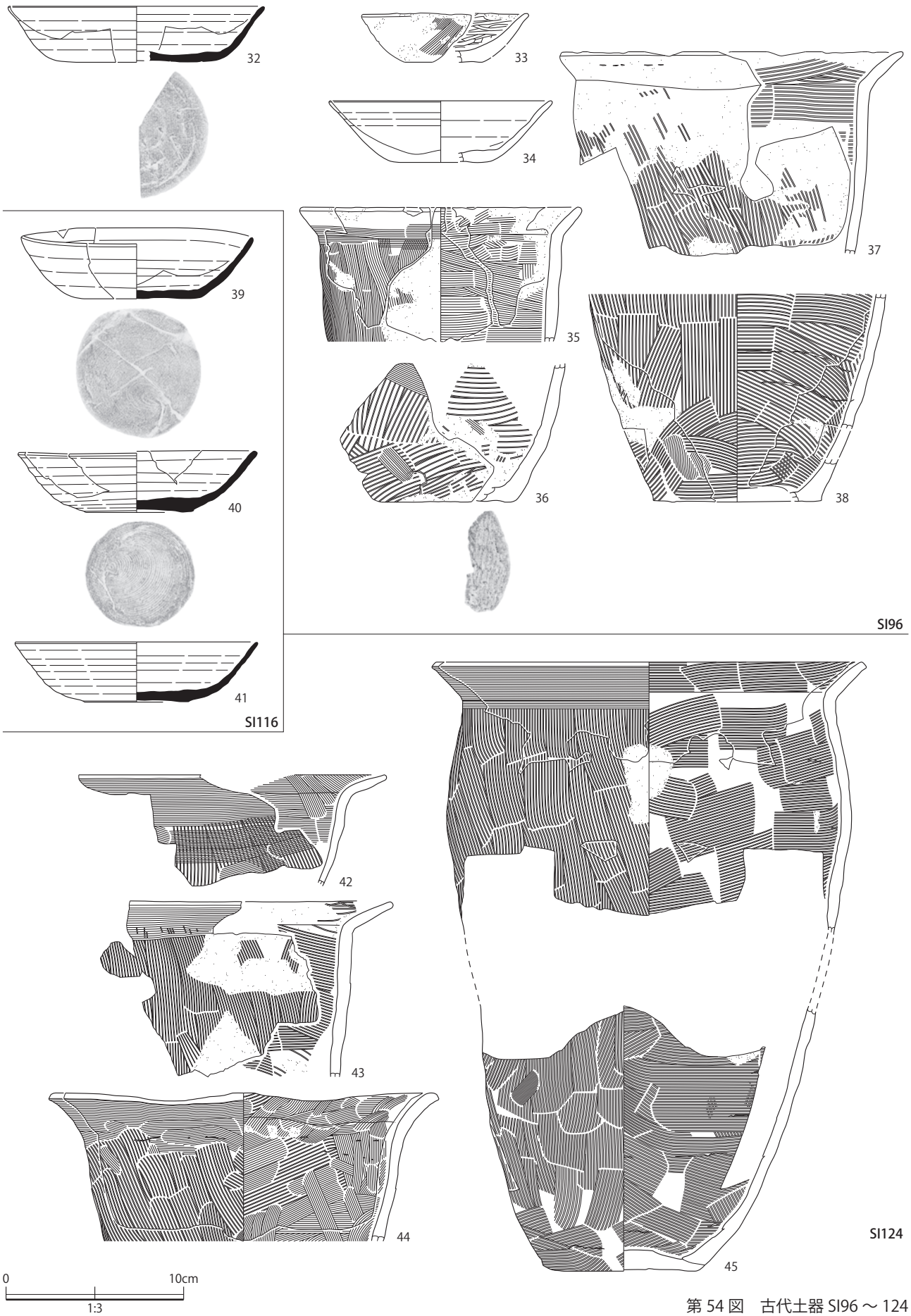
第 51 図　溝（中世）SD55 ～ 114，堀（中世）SD259



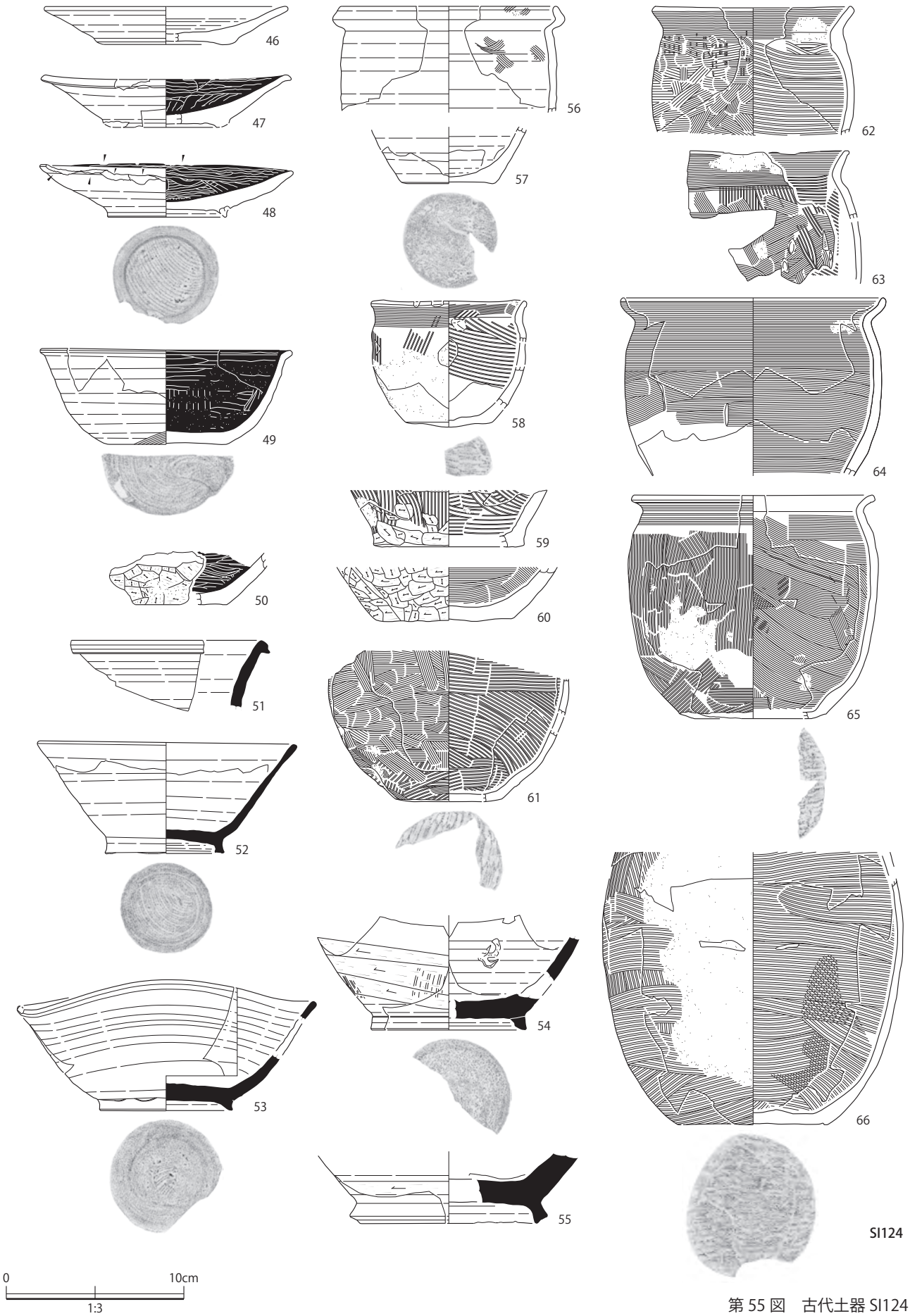
第 52 図　古代土器 SI5・30



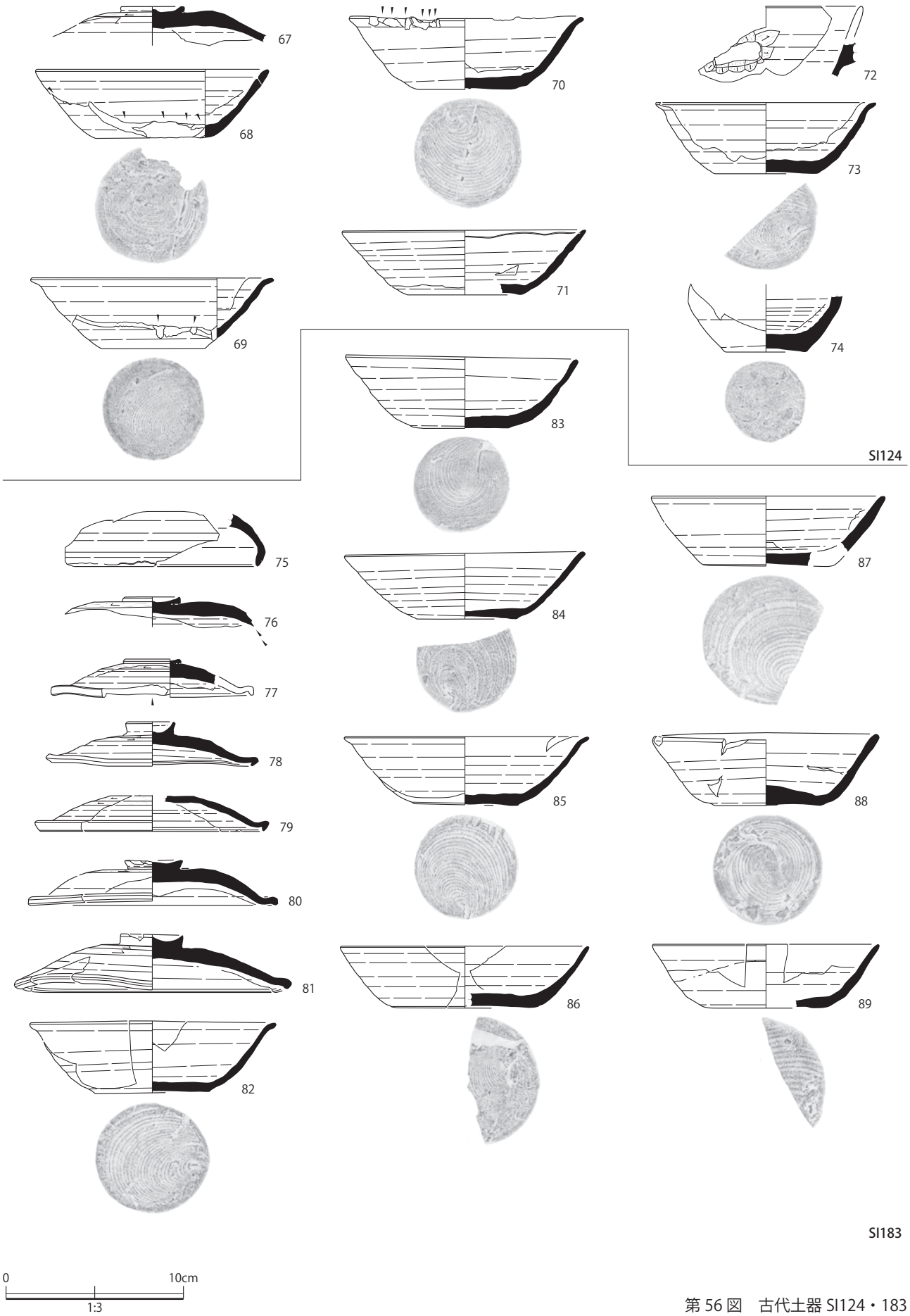
第 53 図　古代土器 SI30 ～ 78



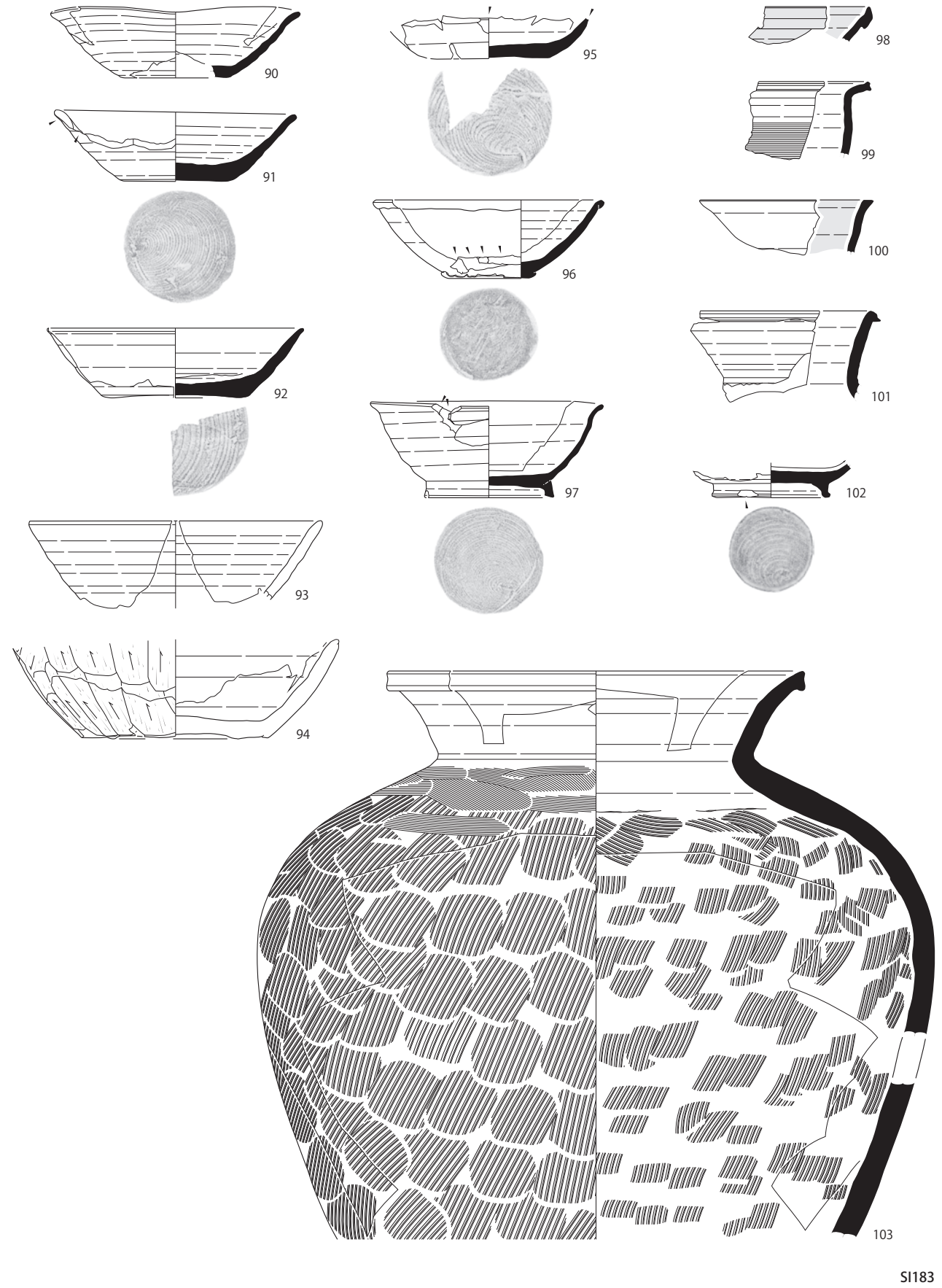
第 54 図　古代土器 SI96 ～ 124



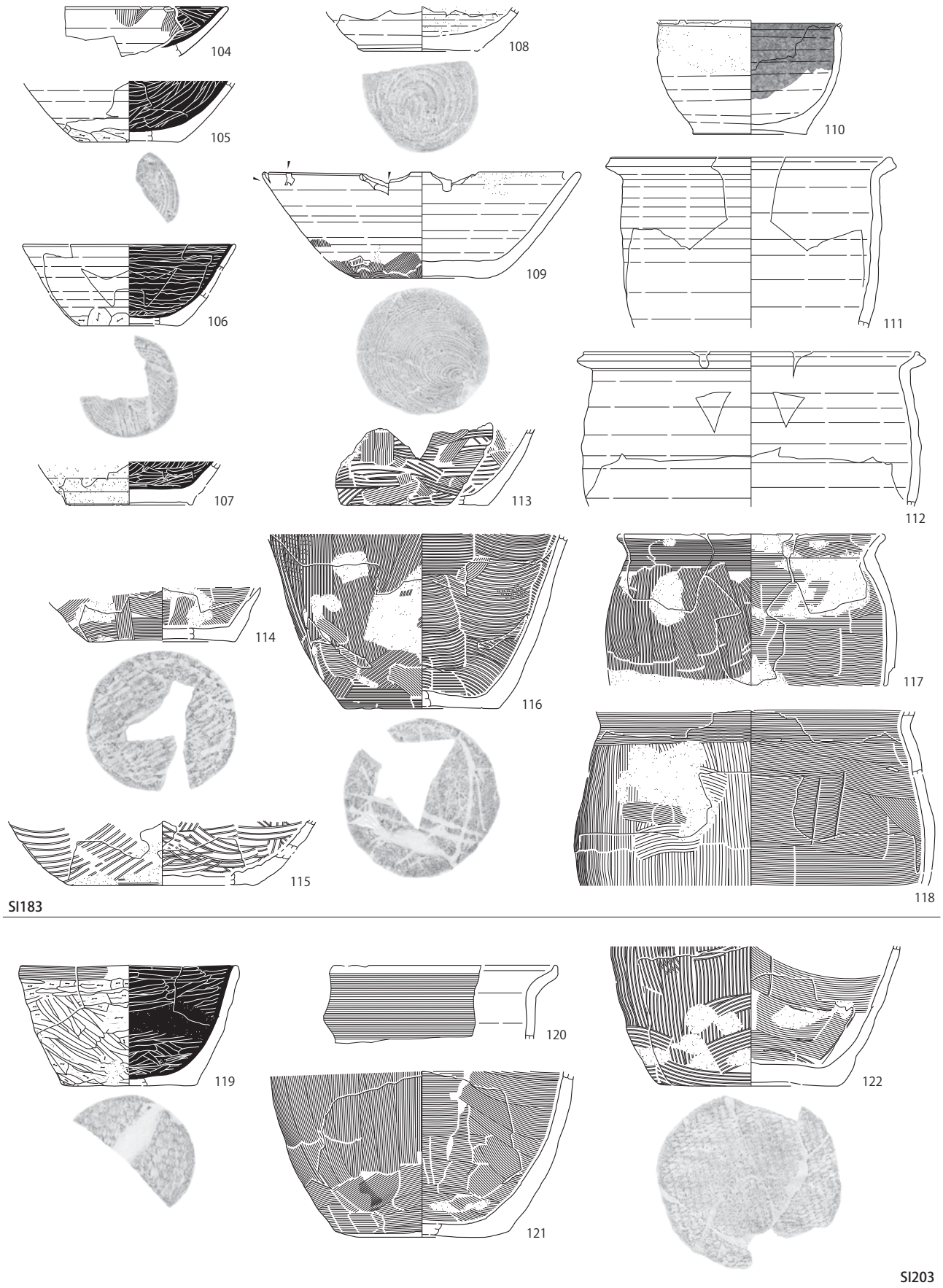
第 55 図　古代土器 SI124



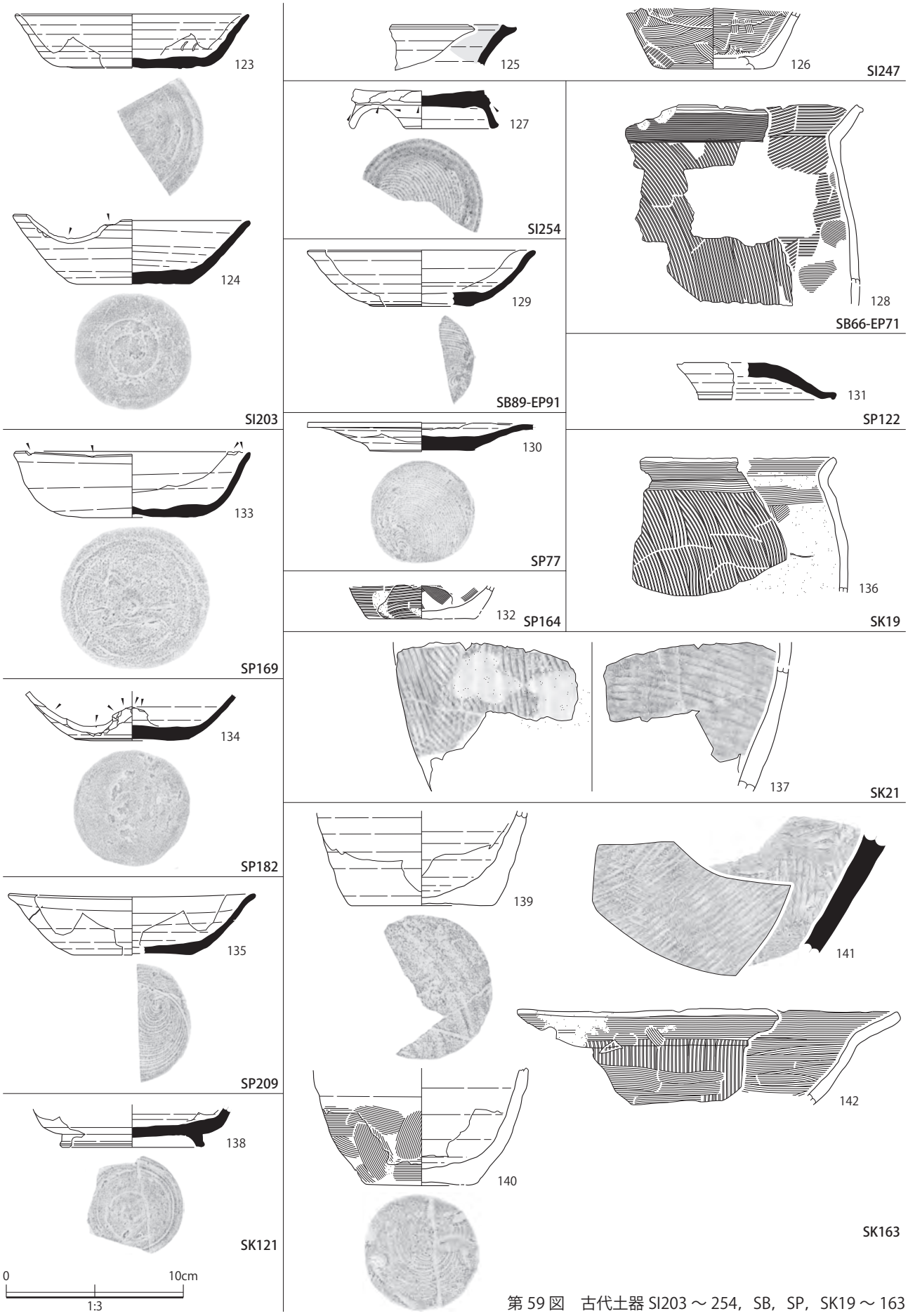
第 56 図　古代土器 SI124・183



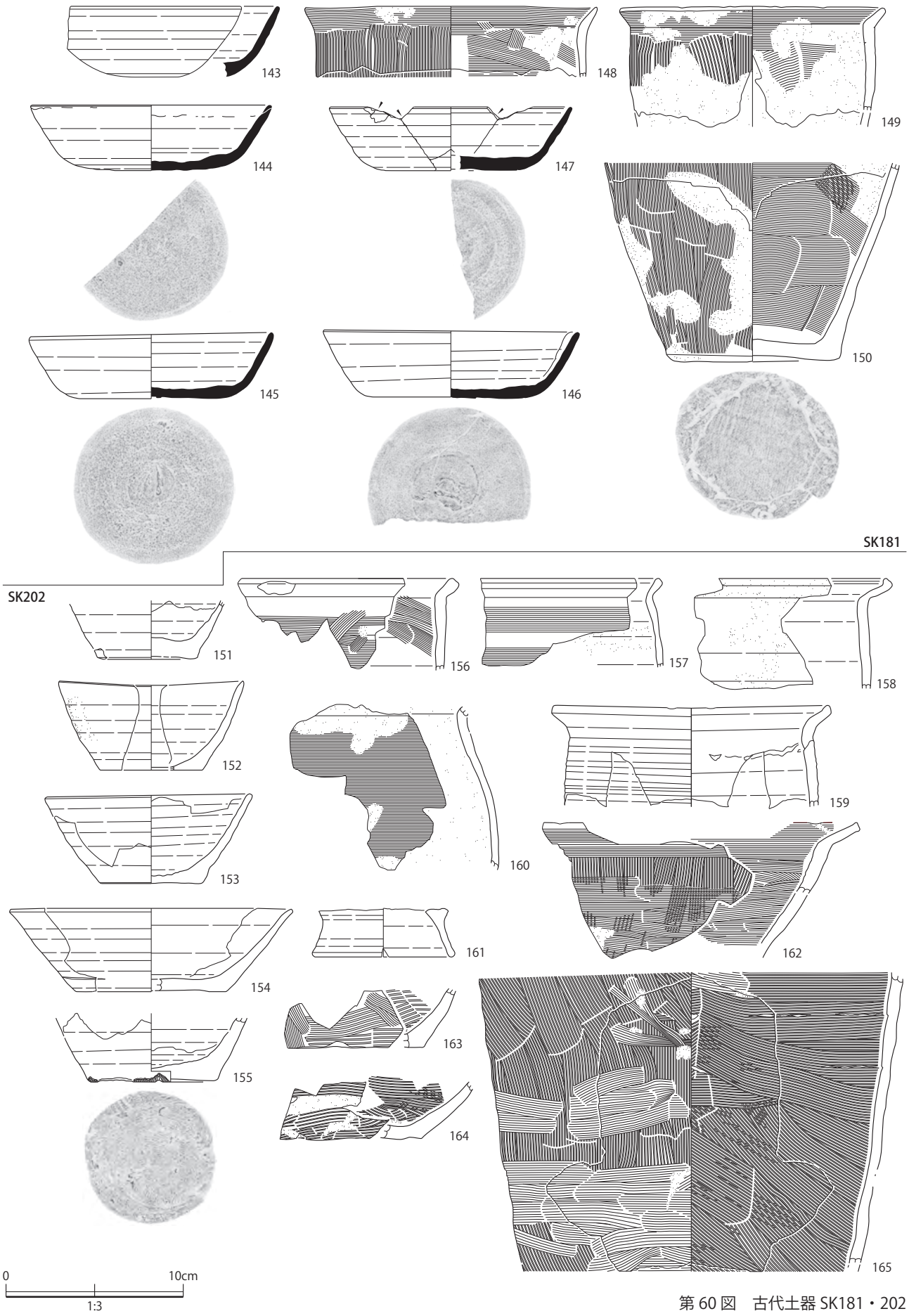
第 57 図　古代土器 SI183



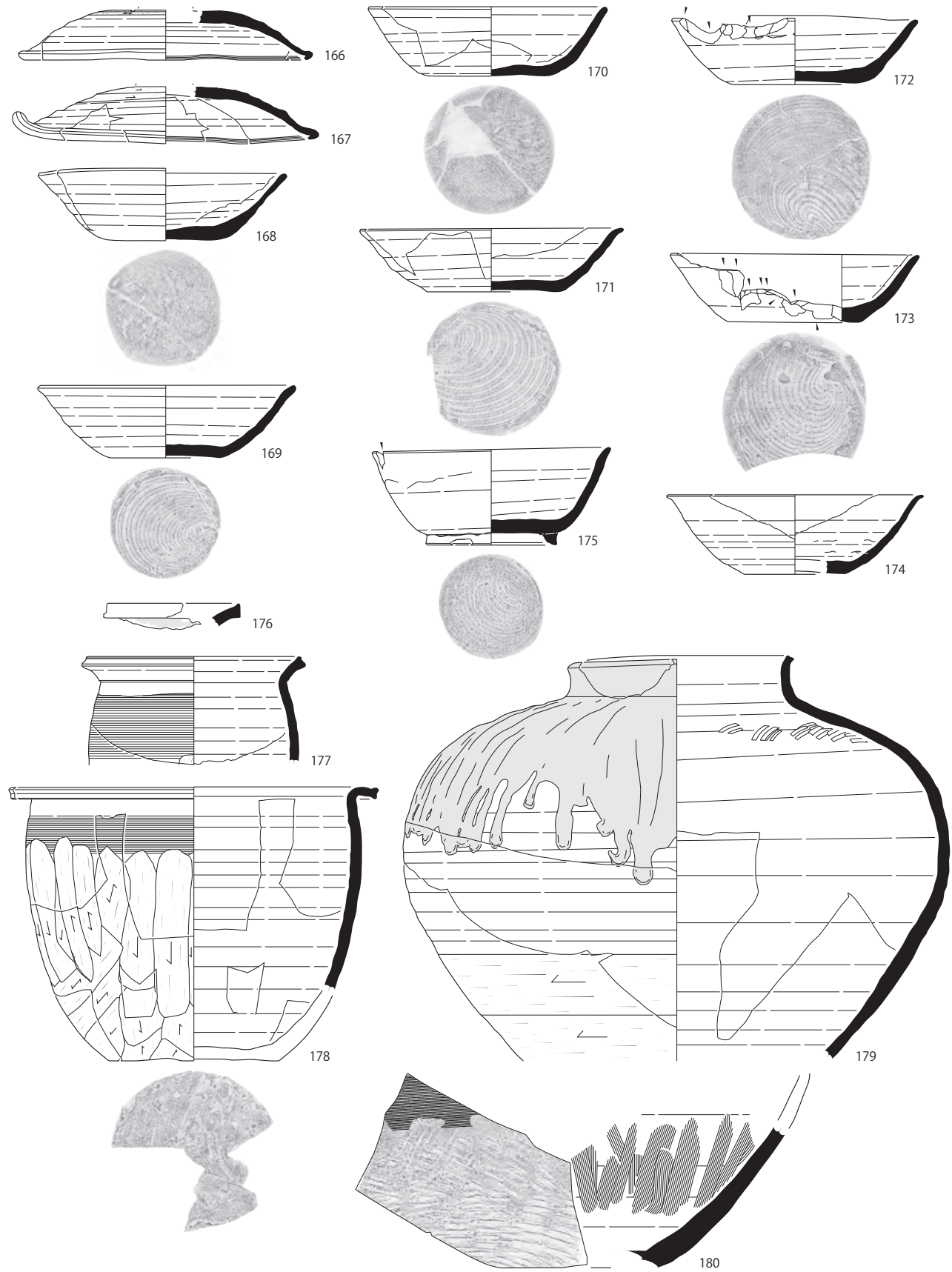
第 58 図　古代土器 SI183・203



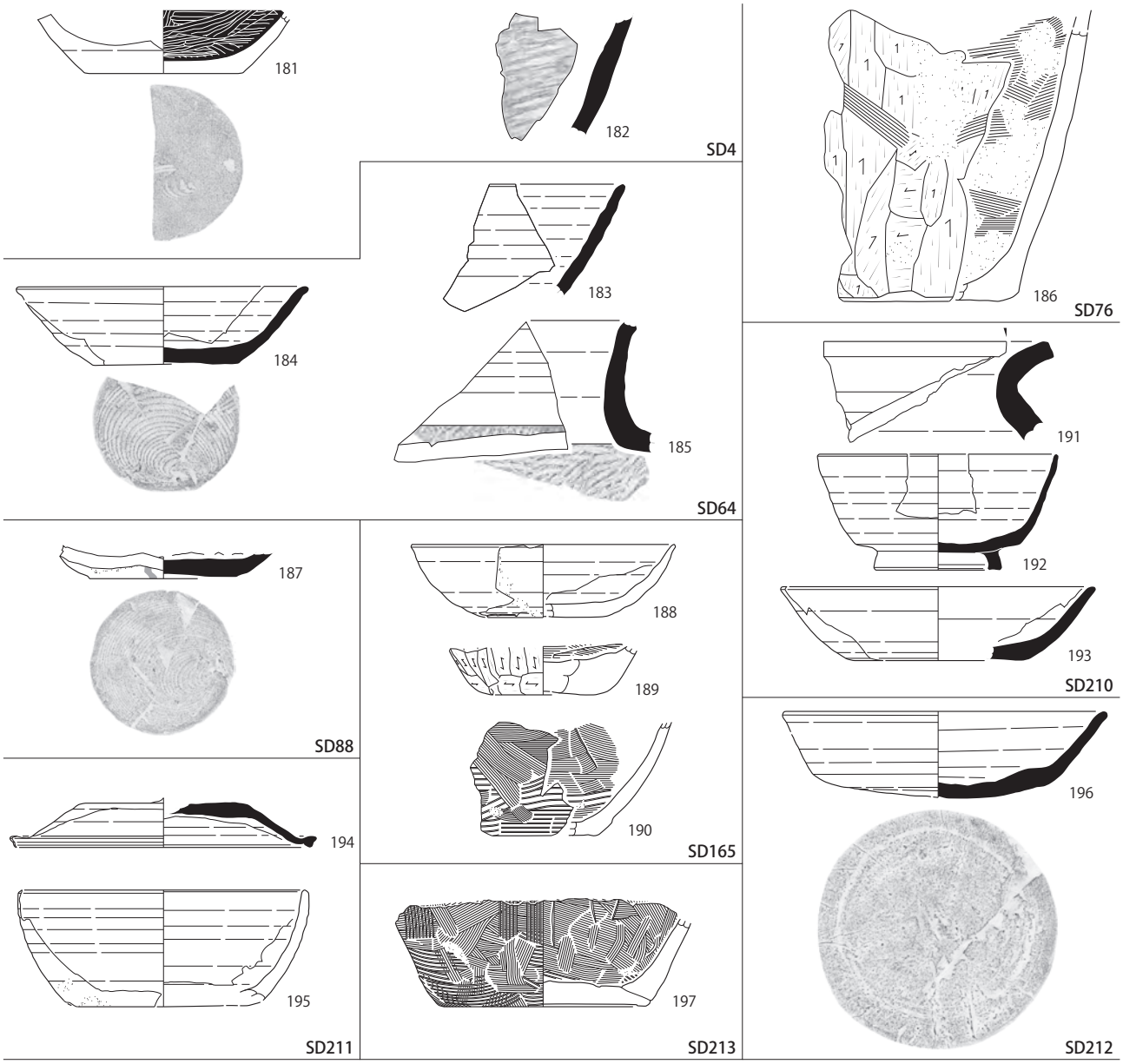
第 59 図　古代土器 SI203 ～ 254，SB，SP，SK19 ～ 163

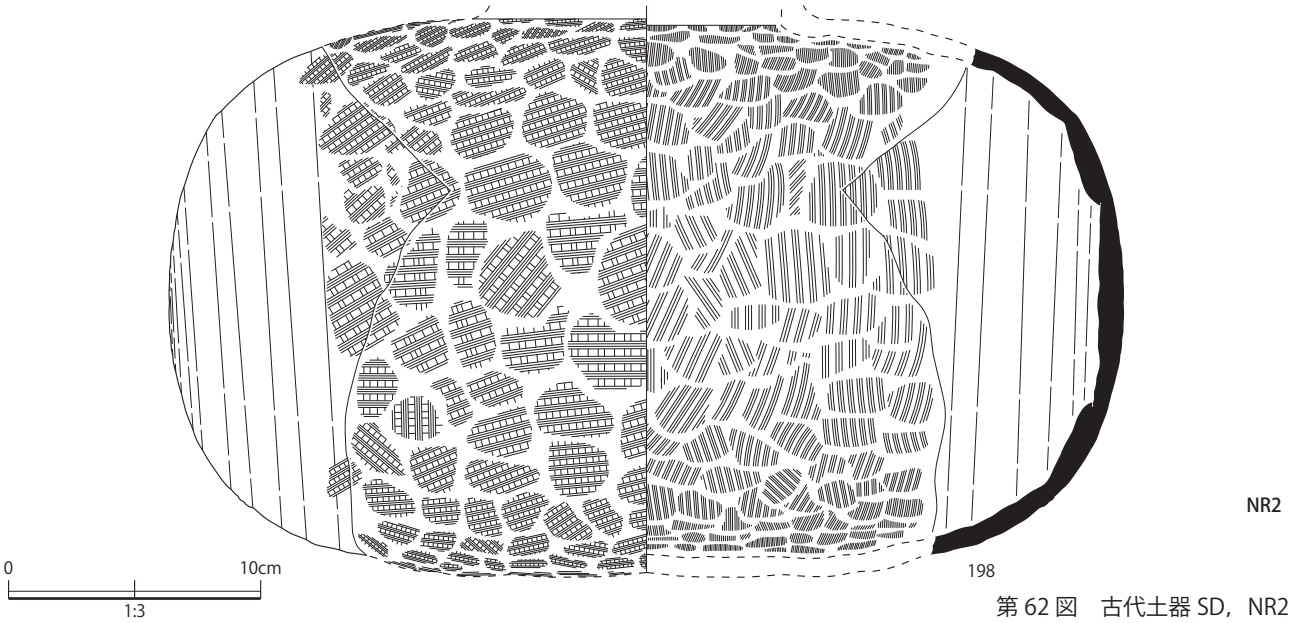


第 60 図　古代土器 SK181・202

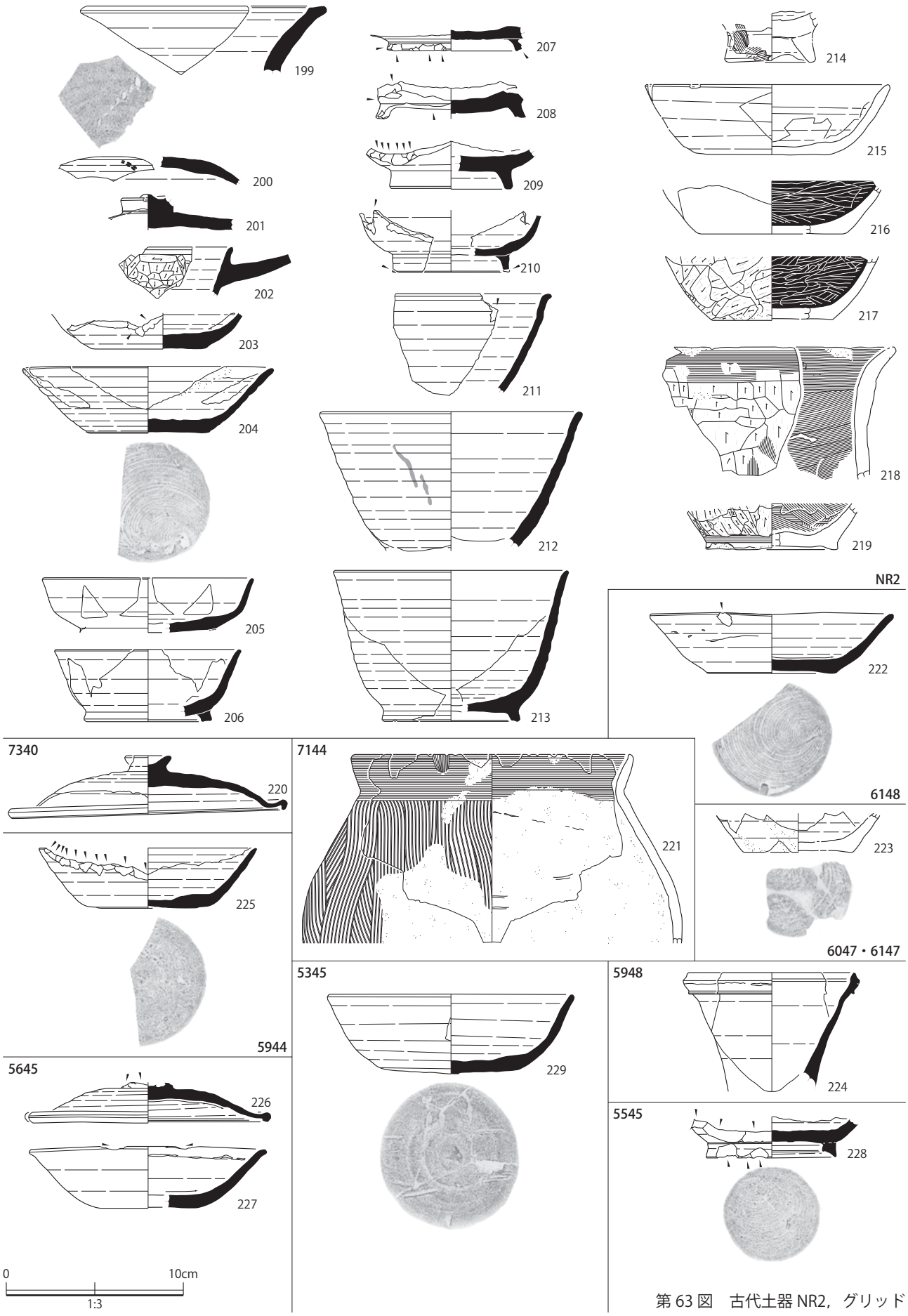


第 61 図　古代土器 SK202

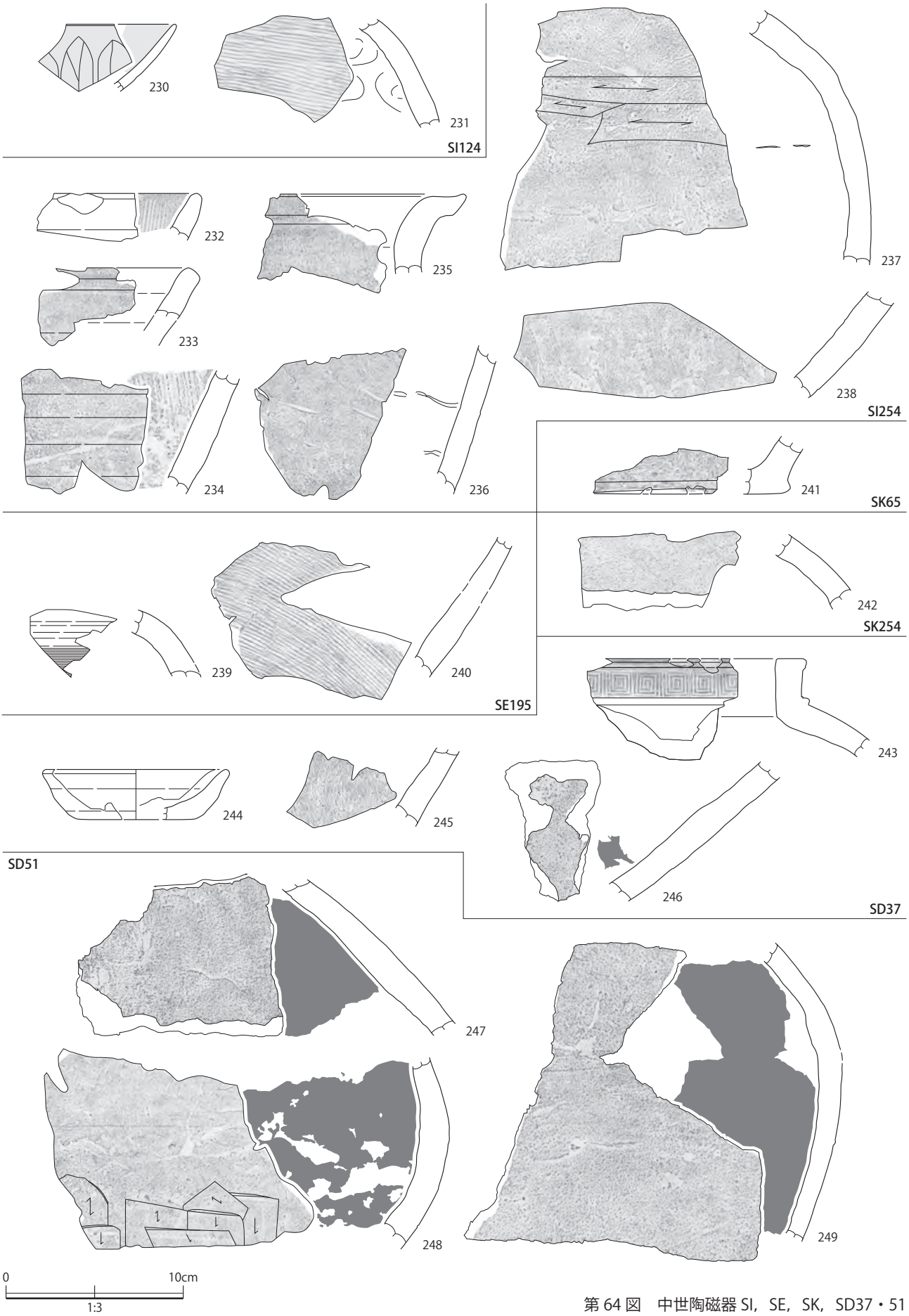




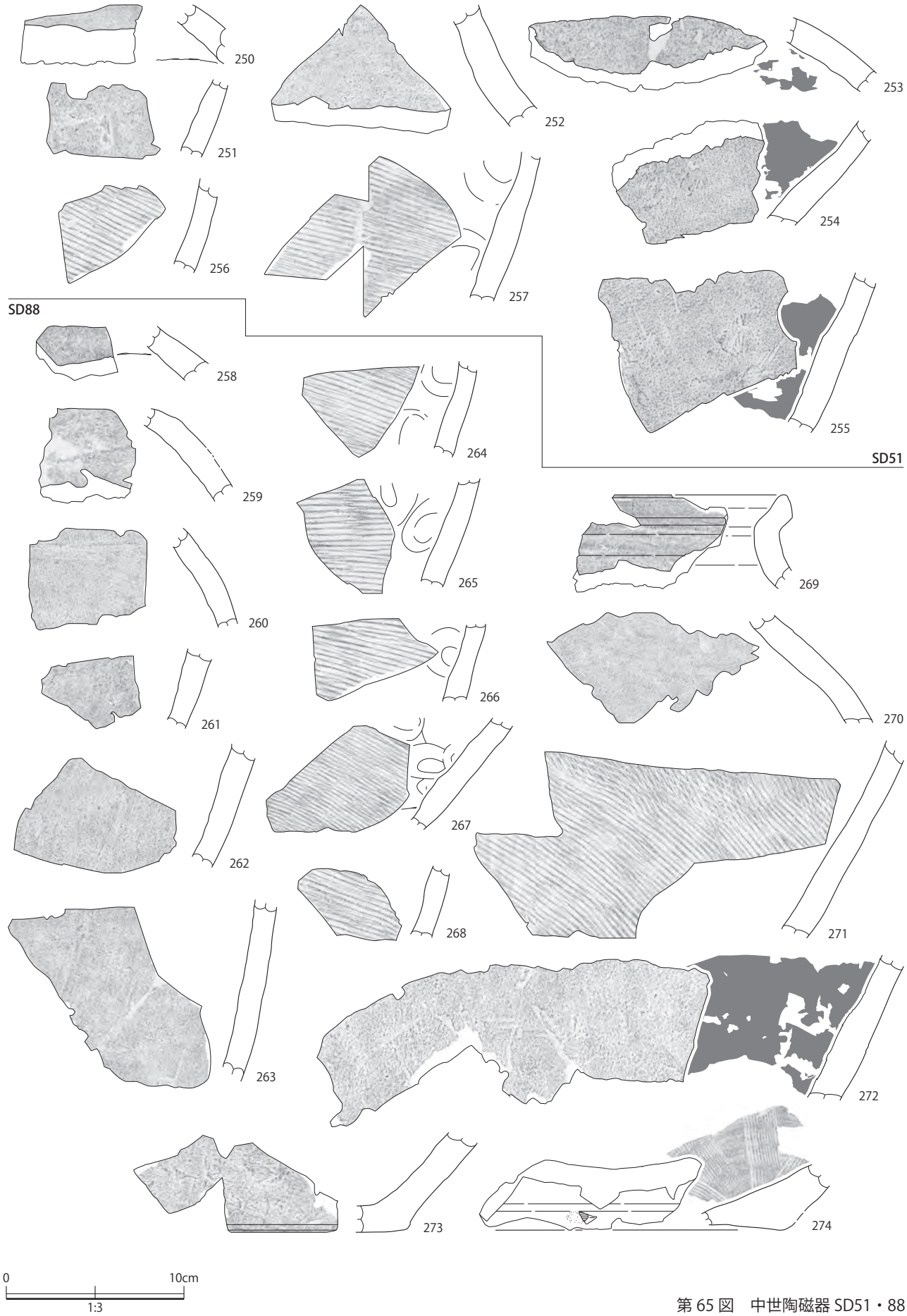
第 62 図　古代土器 SD，NR2



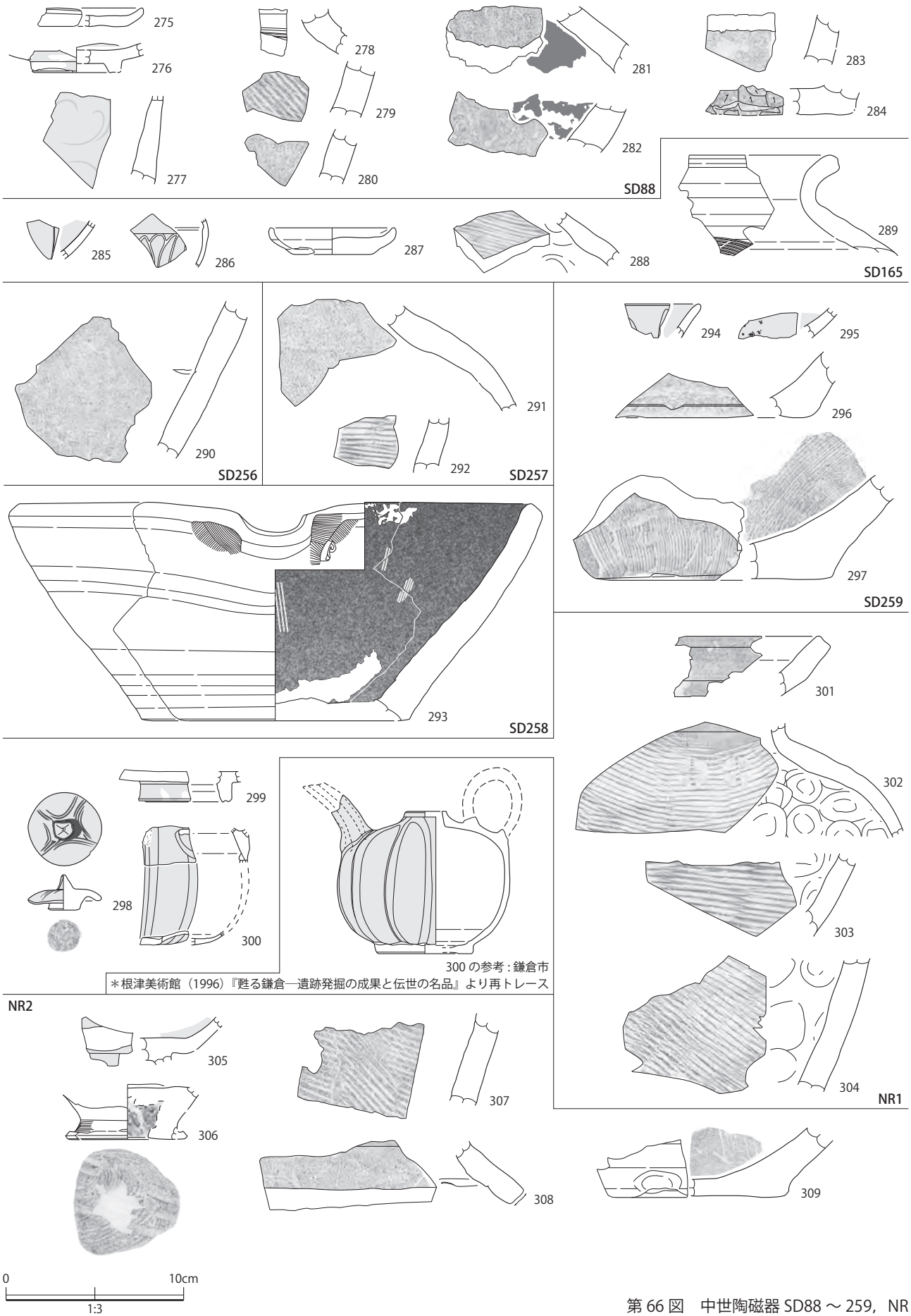
第 63 図　古代土器 NR2，グリッド



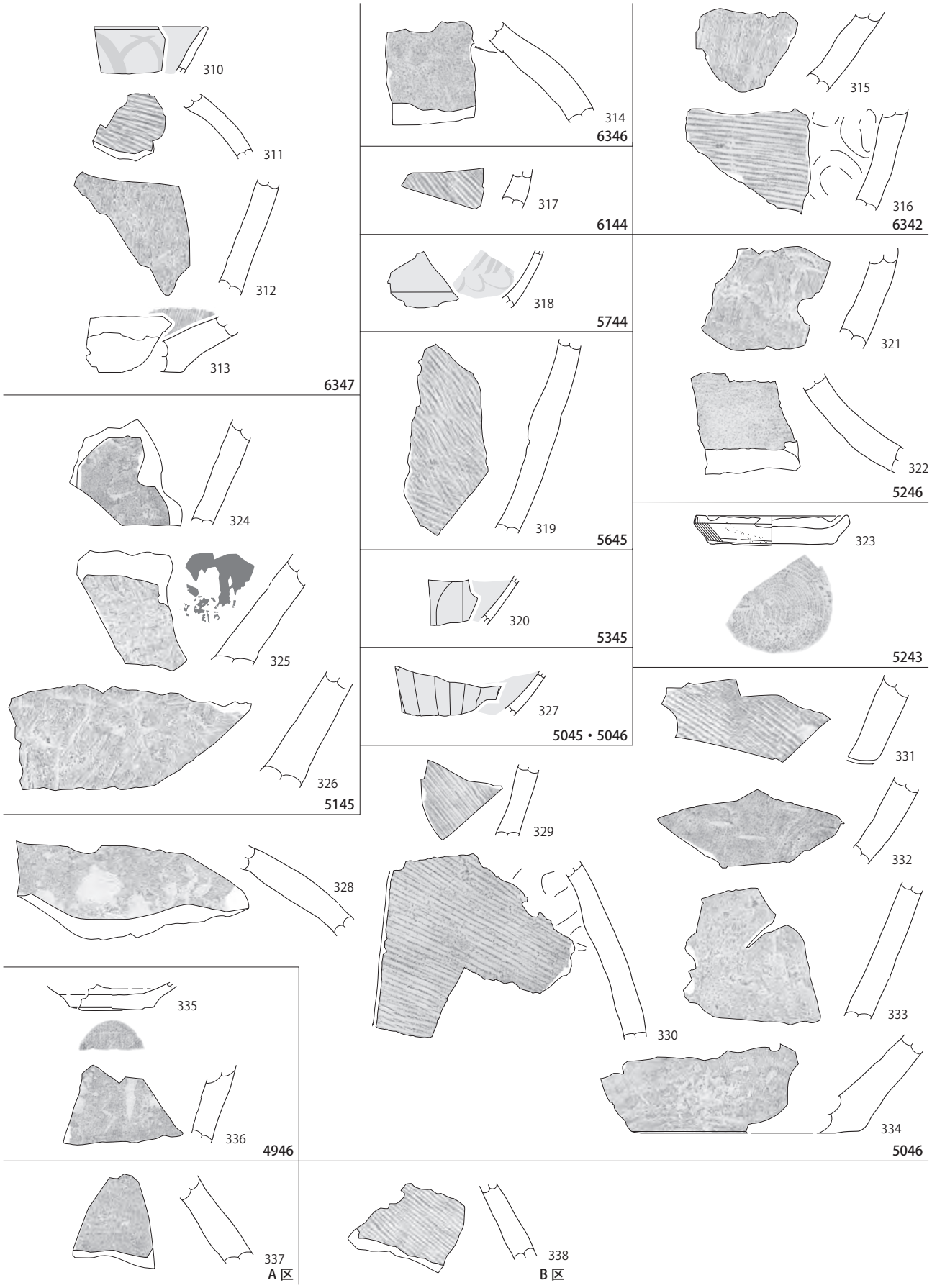
第 64 図　中世陶磁器 SI，SE，SK，SD37・51



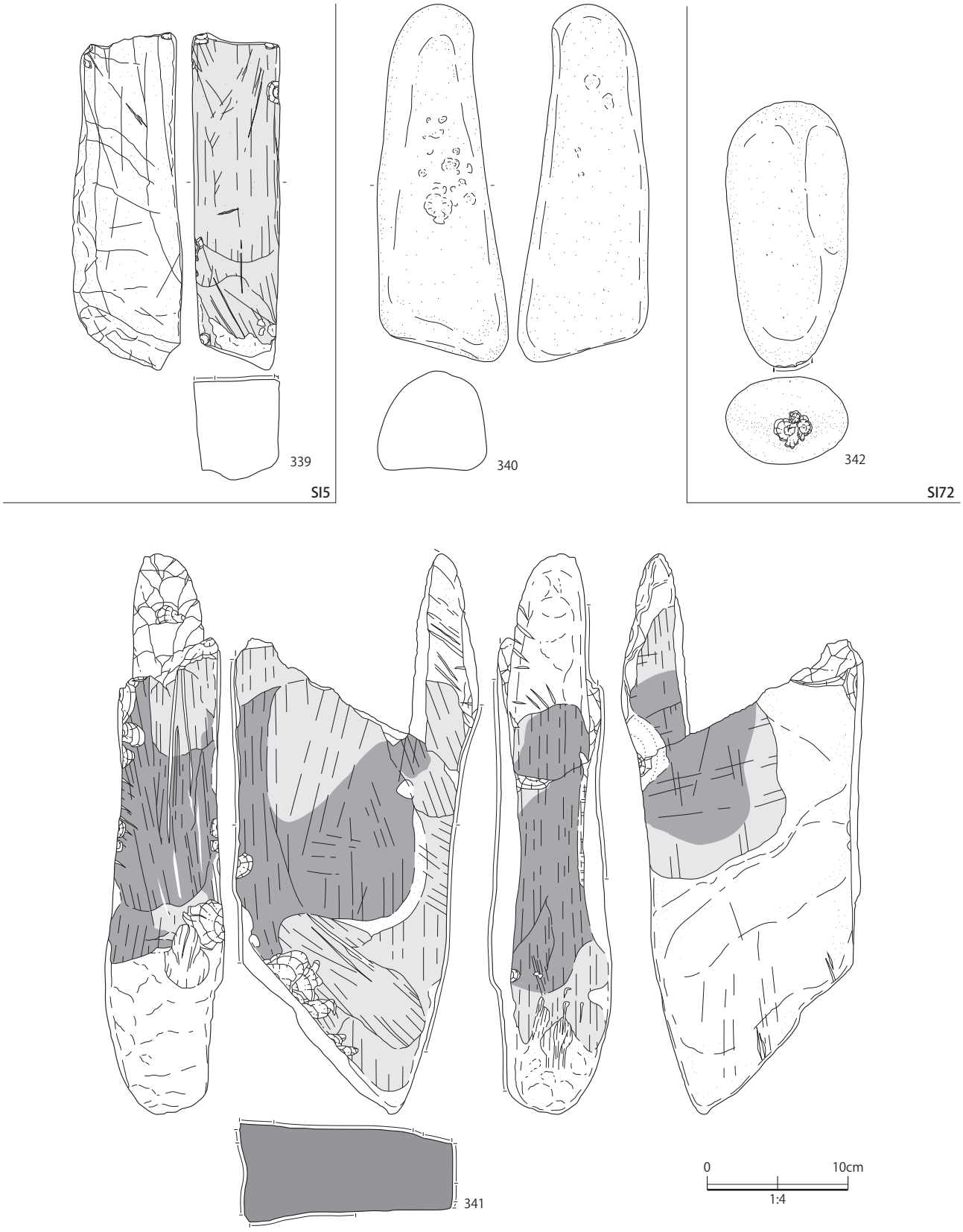
第 65 図　中世陶磁器 SD51・88



第 66 図　中世陶磁器 SD88 ～ 259，NR

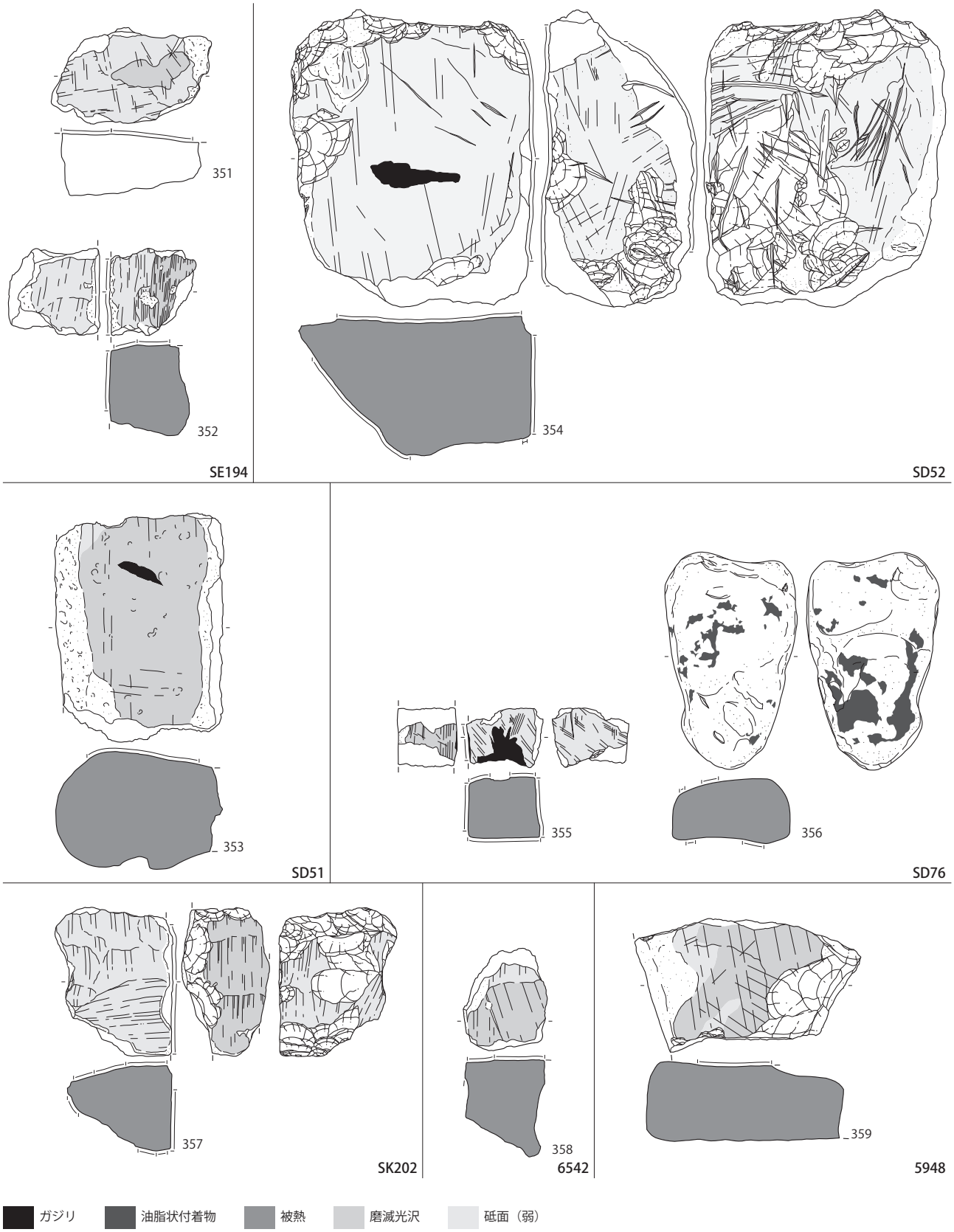


第 67 図　中世陶磁器グリッド

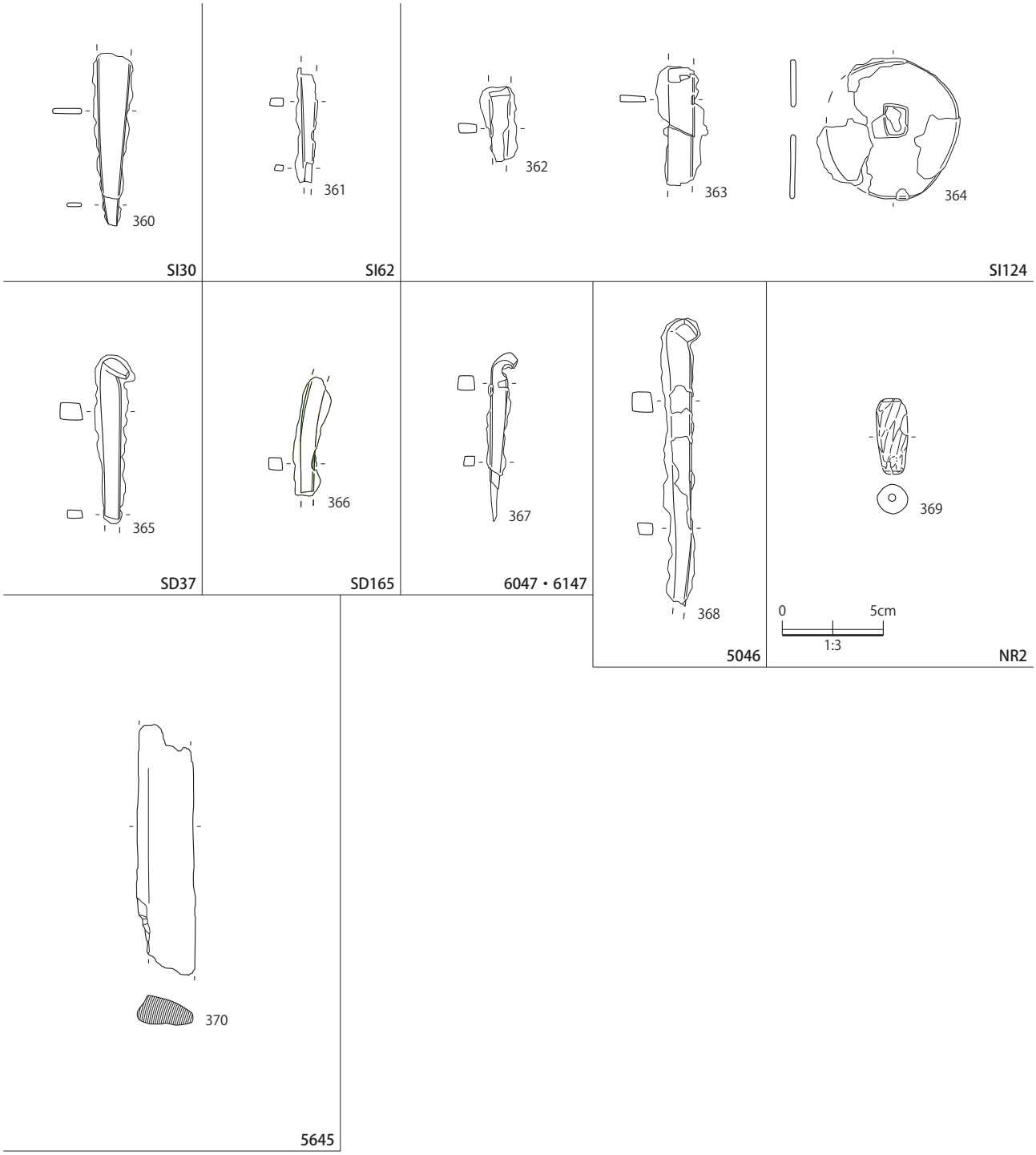


第 68 図　石製品 SI5 ～ 72

第 69 図　石製品 SI72 ～ 124



第 70 図　石製品 SE，SK，SD，グリッド



0　5cm
1:2

第 71 図　鉄製品，土製品，木製品

表１　遺構番号対照表

記号	番号	仮名	記号	番号	仮名	記号	番号	仮名	記号	番号	仮名	記号	番号	仮名
NR	1	SG1	EP	60	SP72	EP	119	SP1524	EP	178	SP717	EP	237	―――
NR	2	SG2	EP	61	SP1486	EP	120	SP1525	EP	179	SP715	EP	238	SP556
SD	3	SD84	SI	62	ST4	SK	121	SP935	SP	180	SP799	EP	239	―――
SD	4	SD58	SD	63	―――	SP	122	SP941	SK	181	EK1067	EP	240	SP619
SI	5	ST66	SD	64	SD203	SL	123	SL391	SP	182	SP697	EP	241	―――
EL	6	EL74	SK	65	SK206	SI	124	ST213	SI	183	ST209	EP	242	―――
EP	7	EP94	SB	66	―――	EL	125	EL297	EK	184	EK394	ES	243	―――
EP	8	EP90	EP	67	SP369	EL	126	EL366	EK	185	EK394	EP	244	SP573
EP	9	EP92	EP	68	SP382	ED	127	ED387	EP	186	EP395	EP	245	SP564
EP	10	EP91	EP	69	SP268	EL	128	EL296	EP	187	EP397	EP	246	SP579
EP	11	SK97	EP	70	SP370	ED	129	ED373	EP	188	EP396	SI	247	ST240
EK	12	EK95	EP	71	SP383	ED	130	ED376	SA	189	―――	EP	248	EP330
EK	13	EK98	SI	72	ST215	EP	131	EP352	EP	190	―――	EP	249	EK315
EK	14	EK89	EL	73	EL216	EP	132	EP359	EP	191	―――	EP	250	EK326
EK	15	EK87	EK	74	EK338	EP	133	EP354	EP	192	SP911	EP	251	EK328
EK	16	EK88	EK	75	EK243	EP	134	EP353	EP	193	SP769	EP	252	EP329
SP	17	SP1069	SD	76	SD222	EK	135	EK285	SE	194	SE341	EK	253	EK317
SP	18	SP1068	SP	77	EK237	EK	136	EK362	SE	195	SE337	SI	254	SX345
SK	19	SK67	SI	78	ST217	EK	137	EK368	SE	196	SE333	SK	255	SK230
SL	20	SL996	EL	79	EL246	EK	138	EK386	SE	197	SE334	SD	256	SD229
SK	21	SP995	EK	80	EL218	EK	139	EK385	SE	198	SE332	SD	257	SD227
SB	22	―――	EK	81	EK238	EK	140	EK355	SE	199	SE342	SD	258	SD226
EP	23	SP1240	EK	82	EK239	EK	141	EK374	SE	200	SE335	SD	259	SD225
EP	24	SP1236	EK	83	EK303	EK	142	EK372	SK	201	SK1660			
EP	25	―――	EK	84	EK247	EK	143	EK371	SK	202	SK348			
EP	26	SP998	EK	85	EK221	EK	144	EK357	SI	203	ST997			
EP	27	SP999	EK	86	EK242	EK	145	EK381	EL	204	EL343			
EP	28	SP1254	EP	87	EP244	EK	146	EK358	EK	205	EK953			
EP	29	SP1008	SD	88	SD207	EK	147	EK360	EK	206	EK954			
SI	30	ST59	SB	89	―――	EK	148	EK375	EK	207	EK1004			
EL	31	EL93	EP	90	SP384	EK	149	EK356	EK	208	EK1005			
EP	32	EK107	EP	91	SP295	EK	150	EK363	SP	209	EK1006			
EP	33	EP108	EP	92	SP282	EK	151	EK377	SD	210	SD212			
EP	34	EP109	EP	93	SP276	EK	152	EK365	SD	211	SD248			
EK	35	EK105	EP	94	SP277	EK	153	EK364	SD	212	SD249			
EK	36	EK106	EP	95	SP279	SD	154	SD208	SD	213	SD214			
SD	37	SD63	SI	96	ST219	SB	155	―――	SB	214	―――			
SB	38	―――	EL	97	EL220	EP	156	SP319	EP	215	EP1003			
EP	39	SP1031	EK	98	EK269	EP	157	SP318	EP	216	SP676			
EP	40	SP1028	EK	99	EK288	EP	158	SP331	EP	217	―――			
EP	41	SP1021	EP	100	EP378	EP	159	SP316	EP	218	SP430			
EP	42	SP1047	EP	101	EP271	EP	160	SP949	EP	219	SP508			
EP	43	SP1039	EK	102	EK275	EP	161	―――	EP	220	SP400			
SD	44	SD202	EK	103	EK278	EP	162	SP970	EP	221	SP406			
SD	45	SD201	EP	104	EK280	SK	163	SK349	EP	222	SP677			
SD	46	SD200	SK	105	EK286	SP	164	SP758	EP	223	EP1007			
SD	47	SD99	SB	106	―――	SD	165	SD210	SB	224	―――			
EK	48	SK82	EP	107	―――	SP	166	SP260	EP	225	SP904			
SK	49	―――	EP	108	―――	SK	167	SP302	EP	226	SP569			
SK	50	SK57	EP	109	―――	SP	168	SP302	EP	227	SP623			
SD	51	SG3	EP	110	SP923	SP	169	SK1019	EP	228	SP483			
SD	52	SD6	EP	111	SP928	SK	170	SP262	EP	229	SP403			
SK	53	SK85	SP	112	SP975	SP	171	SP262	EP	230	SP559			
SD	54	SD5	SD	113	―――	SP	172	SP716	EP	231	SP565			
SD	55	SD8	SD	114	―――	SB	173	―――	EP	232	SK234			
SB	56	―――	SD	115	SD202	EP	174	SP258	EP	233	SP829			
EP	57	EK17	SI	116	ST340	EP	175	SP257	EP	234	SP621			
EP	58	SP68	SA	117	―――	EP	176	SP298	EP	235	SP822			
EP	59	SP23	EP	118	―――	EP	177	―――	SB	236	―――			

表 2　古代土器観察表

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
1	SI5	F	須恵器	杯	13.9	6.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・墨書「井」	打欠き
2	SI5	F	須恵器	杯	14.1	6.7	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
3	SI5	F	須恵器	高台付杯	(12.4)	7.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	
4	SI5-EL6	F	土師器	椀		7.8	(4.4)	ケズリ	ミガキ・黒色処理	ムシロ痕	
5	SI5-EL6	F	土師器	椀	(13.0)	7.5	6.3	ミガキ	ミガキ・黒色処理	木葉痕	
6	SI5-EL6	F	土師器	鉢	(15.6)		(8.3)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		
7	SI30	F	土師器	椀		(7.9)	(5.5)	ケズリ	ミガキ	ムシロ痕	
8	SI30	F	土師器	甕	(11.7)		(7.9)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ		
9	SI30	F	土師器	甕	(14.7)		(9.2)	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ		
10	SI30	F	土師器	甕	(13.0)		(11.1)	ヨコナデ・ナデ	ヘラナデ		
11	SI30-EL31	Y	土師器	甕	13.4		(13.4)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ハケメ		
12	SI30	Y	土師器	甕	15.8	(5.3)	17.1	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	
13	SI30-EK35	F	赤焼土器	甕		(11.8)	(15.9)	ケズリ	ロクロナデ	ナデ	
14	SI30	F	赤焼土器	甕	13.9	6.9	11.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
15	SI30	F	須恵器	杯	(14.0)		(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ		
16	SI30-EK35	F	須恵器	杯	(13.7)	6.6	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
17	SI30	F	土師器	杯	(14.0)		(4.1)	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理		
18	SI30	F	土師器	杯	(13.9)	6.7	5.1	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理・漆膜付着	回転糸切り	漆容器
19	SI72-EL73	F	須恵器	杯	(16.4)		(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ		
20	SI72-EL73	F	須恵器	杯	13.7	6.5	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
21	SI72-EL73	F	須恵器	杯	(14.0)	6.5	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
22	SI72	Y	土師器	鉢		(8.8)	(3.8)	ハケメ	無調整	マメツ	
23	SI72	Y	赤焼土器	甕	(14.9)	7.2	11.0	ロクロナデ	ロクロナデ		
24	SI72-EL73	F	赤焼土器	甕	15.5	8.4	11.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	転用支脚
25	SI78-EK80	F	須恵器	蓋	14.6		3.0	ロクロナデ	ロクロナデ		
26	SI78-EP87	掘	須恵器	蓋	(15.4)		(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ		打欠き
27	SI78-EK80	F	須恵器	杯	(13.9)	(9.6)	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	
28	SI78-EK80	F	須恵器	杯	14.0	8.6	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り・墨書「　」	打欠き
29	SI78-EK80	F	須恵器	杯	14.3	9.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	打欠き
30	SI78-EK80	F	赤焼土器	甕		3.4	(11.8)	ナデ・ハケメ	ナデ	マメツ	出羽型甕
31	SI78-EP87		土師器	甕		(6.4)	(4.9)	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
32	SI96	掘	須恵器	杯	(14.4)	(8.9)	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り・墨書「　」・スノコ痕	
33	SI96	F	土師器	杯	(11.2)	(5.8)	2.8	ナデ	ミガキ	ナデ	
34	SI96-EK103	F	赤焼土器	杯	(12.6)	(5.8)	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	
35	SI96-EK103	F	土師器	甕	(15.9)		(7.6)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ		
36	SI96-EK103	F	土師器	甕		9.8	(7.8)	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	ムシロ痕	
37	SI96	Y	土師器	甕	(20.6)		(11.5)	ハケメ	ハケメ		
38	SI96-EK102	F	土師器	甕		(9.5)	(11.7)	ナデ・ハケメ	ハケメ	ナデ	

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
39	SI116	F上	須恵器	杯	13.1	6.6	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
40	SI116	F上	須恵器	杯	13.5	6.1	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
41	SI116	F上	須恵器	杯	(13.7)	(5.7)	(3.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
42	SI124	F	土師器	甕	(25.0)		(6.3)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ		
43	SI124-EK150		土師器	甕	(23.3)		(9.9)	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ		
44	SI124-EL128	F	土師器	甕	(22.0)		(8.4)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		
45	SI124-EK143	F	土師器	甕	(24.4)	9.2	(34.3)	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ナデ	
46	SI124	F上	赤焼土器	皿	(13.7)	(7.8)	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	マメツ	
47	SI124	掘	土師器	皿	(14.1)	(6.0)	(3.0)	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	マメツ	
48	SI124	F上	土師器	高台付皿	14.3	6.7	3.0	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	ロクロナデ・回転糸切り	打欠き
49	SI124	掘	土師器	杯	(14.2)	(6.9)	5.4	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切り	
50	SI124	掘	土師器	椀		(7.8)	(3.0)	ケズリ	ミガキ・黒色処理	ムシロ痕	
51	SI124	掘	須恵器	甕	(19.4)		(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ		
52	SI124	Y	須恵器	高台付杯	(14.6)	6.7	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	
53	SI124-EL125	Y	須恵器	高台付椀	(16.9)	7.5	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	焼き歪み
54	SI124-EK136	F	須恵器	長頸瓶		8.8	(6.5)	ロクロナデ・回転ケズリ・タタキメ	ロクロナデ・どべ付着	ロクロナデ・回転ケズリ	
55	SI124	F上	須恵器	長頸瓶		(10.1)	(4.1)	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	
56	SI124-EK148	F	赤焼土器	甕	(12.1)		(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ		
57	SI124	F	赤焼土器	杯		(5.4)	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
58	SI124	掘	土師器	鉢	(8.8)	(5.0)	(7.2)	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	ムシロ痕	
59	SI124	F上	土師器	甕		(8.5)	(3.2)	ハケメ・ケズリ	ハケメ		
60	SI124	Y	土師器	甕		7.7	(3.4)	ケズリ	ヘラナデ	無調整	
61	SI124	F	土師器	甕		(6.0)	(8.5)	ナデ・ハケメ	ハケメ	ムシロ痕	
62	SI124	掘	土師器	甕	(11.4)		(7.3)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		
63	SI124-EK135	F	土師器	甕			(7.5)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		
64	SI124	掘	土師器	甕	(14.9)		(10.0)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		
65	SI124-EK135	F	土師器	甕	(13.7)	(6.6)	12.5	ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ	ムシロ痕	
66	SI124	掘	土師器	甕		(8.4)	(15.4)	ハケメ	ハケメ	ナデ・ムシロ痕	
67	SI124	F上	須恵器	蓋			(2.2)	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		
68	SI124	掘	須恵器	杯	(13.2)	6.3	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ケズリ	打欠き
69	SI124-EK141	F	須恵器	杯	(13.7)	5.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
70	SI124	Y	須恵器	杯	13.2	5.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
71	SI124-EL125	Y	須恵器	杯	13.7	6.3	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
72	SI124	掘	須恵器	双耳杯	(10.8)		(4.3)	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ		
73	SI124	掘	須恵器	杯	(12.4)	(6.0)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
74	SI124	F上	須恵器	鉢		4.5	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転糸切り	
75	SI183	F上	須恵器	蓋	(13.0)		(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ		短頸壺蓋
76	SI183	F上	須恵器	蓋			(1.7)	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		打欠き
77	SI183	F上	須恵器	蓋	(11.4)		2.2	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		打欠き

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
78	SI183	F上	須恵器	蓋	12.0		2.5	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		
79	SI183	F上	須恵器	蓋	(13.2)		(2.0)	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		
80	SI183	F	須恵器	蓋	(14.1)		2.6	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		
81	SI183	F上	須恵器	蓋	15.7		3.3	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		
82	SI183	F上	須恵器	杯	(14.0)	6.4	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
83	SI183	F上	須恵器	杯	13.1	5.3	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
84	SI183	F上	須恵器	杯	13.6	5.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
85	SI183	F上	須恵器	杯	(13.8)	6.0	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・スノコ痕	
86	SI183	F上	須恵器	杯	(14.0)	(8.4)	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・墨書「縄」か	
87	SI183	F上	須恵器	杯	(13.3)	7.3	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
88	SI183	F上	須恵器	杯	(12.8)	6.1	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
89	SI183	F上	須恵器	杯	(12.8)	(6.7)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
90	SI183	F上	須恵器	杯	(13.6)	(6.0)	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
91	SI183	F上	須恵器	杯	13.2	6.3	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
92	SI183	F上	須恵器	杯	(14.0)	(7.9)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
93	SI183	F上	赤焼土器	杯	(16.0)		(4.8)	ロクロナデ	ロクロナデ		
94	SI183	F上	赤焼土器	甕		10.2	(5.4)	ケズリ	ロクロナデ	ナデ	破面に擬口縁
95	SI183	F上	須恵器	杯		6.7	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
96	SI183	F上	須恵器	杯	(12.6)	5.2	(4.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転糸切り	打欠き
97	SI183	F上	須恵器	高台付杯	12.7	7.1	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	打欠き
98	SI183	F上	須恵器	壺	(11.8)		(2.1)	ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・自然釉		
99	SI183	F上	須恵器	鉢	(16.8)		(4.2)	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ		
100	SI183	F上	須恵器	壺	(14.0)		(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ・自然釉		灰釉陶器の可能性も
101	SI183	F上	須恵器	甕	(15.0)		(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ		
102	SI183	F上	須恵器	高台付杯		6.5	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ・砥面	ロクロナデ・回転糸切り	
103	SI183	F上	須恵器	甕	(22.9)		(31.0)	ロクロナデ・ナデ・タタキ	ロクロナデ・アテメ		
104	SI183	F上	土師器	杯	(11.8)		(2.7)	ロクロナデ・ナデ	ミガキ・黒色処理		
105	SI183	F上	土師器	杯		(5.1)	(3.3)	ロクロナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	ケズリ・回転糸切り	
106	SI183	F上	土師器	杯	(11.6)	(5.6)	4.4	ロクロナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	回転糸切り・スノコ痕	
107	SI183	F上	土師器	杯		7.0	(2.4)	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切り	
108	SI183	F上	赤焼土器	杯		6.8	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
109	SI183	F上	赤焼土器	杯	(17.4)	7.2	5.8	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	ナデ・回転糸切り	打欠き
110	SI183	F上	赤焼土器	鉢	(10.1)	6.2	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ・コゲ	回転糸切り	油杯
111	SI183	F上	赤焼土器	甕	(15.8)		(9.3)	ロクロナデ	ロクロナデ		
112	SI183	F上	赤焼土器	甕	(18.9)		(8.4)	ロクロナデ	ロクロナデ		
113	SI183	F上	土師器	甕		(8.4)	(4.6)	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	ムシロ痕	
114	SI183	F上	土師器	甕		8.0	(2.9)	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	ムシロ痕	
115	SI183	F上	土師器	鉢		(9.8)	(3.6)	ハケメ	ハケメ	ムシロ痕	
116	SI183	F上	土師器	甕		8.6	(9.5)	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	木葉痕	

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
117	SI183	F上	土師器	甕	(14.6)		(8.3)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ		破面に擬口縁
118	SI183	F上	土師器	甕			(9.6)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ		
119	SI203	Y	土師器	椀	(12.0)	(7.4)	6.6	ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	ムシロ痕	
120	SI203-EL204	Y	赤焼土器	甕	(15.8)		(4.2)	カキメ	ロクロナデ		
121	SI203-EK208	F	土師器	甕		(9.4)	(9.0)	ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ	
122	SI203	Y	土師器	甕		9.8	(7.6)	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ムシロ痕	
123	SI203	Y	須恵器	杯	(13.2)	(8.4)	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ・刻書「　」	ナデ・回転ヘラ切り	
124	SI203-EK205	F	須恵器	杯	13.4	6.6	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	打欠き
125	SI247	F上	須恵器	壺	(14.4)		(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ・自然釉		破面に自然釉
126	SI247-EK253	F	土師器	甕		(6.8)	(3.4)	ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	ハケメ	
127	SI254	F	須恵器	高台付杯		(9.1)	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	打欠き
128	SB66-EP71	掘	土師器	甕	(15.0)		(11.3)	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		
129	SB89-EP91	掘	須恵器	杯	(12.9)	(5.4)	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
130	SP77	F	須恵器	皿		6.0	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
131	SP122	F	須恵器	蓋	(12.8)		(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ		
132	SP164	掘	土師器	甕		(6.0)	(1.9)	ハケメ	ナデ	無調整	
133	SP169	F	須恵器	杯	13.4	8.1	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り・スノコ痕	打欠き
134	SP182	掘	須恵器	杯		6.5	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	打欠き
135	SP209	F	須恵器	杯	(14.0)	(6.7)	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
136	SK19	F	土師器	甕	(17.8)		(7.8)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ		
137	SK21	F	赤焼土器	甕			(8.4)	タタキメ	アテメ		出羽型甕
138	SK121	F	須恵器	高台付杯		(8.2)	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラ切り	
139	SK163	F	赤焼土器	甕		8.1	(5.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切りか	
140	SK163	F	赤焼土器	甕		6.4	(6.6)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	回転糸切り	破面に擬口縁
141	SK163	F	須恵器	甕			(8.3)	タタキメ	アテメ		
142	SK163	F	土師器	鍋	(40.2)		(5.4)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ		
143	SK181	F	須恵器	杯	(13.6)		(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ		
144	SK181	F	須恵器	杯	(13.6)	8.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	
145	SK181	F	須恵器	杯	13.8	8.9	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	
146	SK181	F	須恵器	杯	14.5	9.4	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	
147	SK181	F	須恵器	杯	(13.7)	(7.3)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	打欠き
148	SK181	F	土師器	甕	(16.5)		(3.9)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ		
149	SK181	F	土師器	甕	(15.0)		(6.8)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ		
150	SK181	F	土師器	甕		9.9	(11.2)	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ムシロ痕	
151	SK202		赤焼土器	杯		5.6	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
152	SK202	F	赤焼土器	杯	(10.4)	(5.7)	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
153	SK202	F	赤焼土器	杯	11.7	5.8	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
154	SK202	F上	赤焼土器	杯	(16.0)	(8.4)	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転糸切り	
155	SK202	F	赤焼土器	甕		7.4	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
156	SK202	F	赤焼土器	甕	(17.0)		(5.2)	ロクロナデ・ナデ・カキメ	ロクロナデ・ナデ		
157	SK202	F	赤焼土器	甕	(14.4)		(5.0)	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ		
158	SK202	F上	赤焼土器	甕	(11.2)		(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ		
159	SK202	F	赤焼土器	甕	(15.8)		(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ		
160	SK202	F上	赤焼土器	甕			(9.4)	カキメ	マメツ		
161	SK202	F	赤焼土器	高台付杯か		(8.1)	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ		
162	SK202	F	土師器	鍋			(7.6)	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ		
163	SK202	F上	土師器	甕		(8.8)	3.4	ナデ・ハケメ	ハケメ	木葉痕	
164	SK202	F上	土師器	甕		(9.8)	(3.3)	ハケメ	ハケメ	ムシロ痕	
165	SK202	F上	土師器	甕			(16.9)	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		
166	SK202	F	須恵器	蓋	(15.8)		(2.7)	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		
167	SK202	F	須恵器	蓋	16.4		(3.1)	ロクロナデ・回転ケズリ	ロクロナデ		
168	SK202	F上	須恵器	杯	(13.4)	5.9	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・マメツ	
169	SK202	F	須恵器	杯	13.9	5.7	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
170	SK202	F上	須恵器	杯	(12.8)	6.5	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
171	SK202	F	須恵器	杯	14.2	7.1	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
172	SK202	F	須恵器	杯	13.2	6.8	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
173	SK202	F	須恵器	杯	13.4	7.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
174	SK202	F	須恵器	杯	(13.8)	(5.4)	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
175	SK202	F	須恵器	高台付杯	12.8	7.0	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	打欠き
176	SK202	F上	須恵器	壺	(22.0)		(1.4)	ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ		
177	SK202	F	須恵器	鉢	(12.0)		(5.9)	ロクロナデ・カキメ・ケズリ	ロクロナデ		
178	SK202	F	須恵器	鉢	(19.8)	9.0	14.7	ロクロナデ・カキメ・ケズリ	ロクロナデ	ナデ	
179	SK202	F	須恵器	短頸壺	12.1		21.7	ロクロナデ・回転ケズリ・自然釉	ロクロナデ・アテメ		
180	SK202	F	須恵器	甕		(12.6)	(10.4)	カキメ・タタキメ	ロクロナデ・ナデ		
181	SD4	F	土師器	杯		(7.2)	(2.9)	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	ナデ・回転糸切り	
182	SD4	F	須恵器	甕			(5.8)	タタキメ	オサエメ		
183	SD64	F上	須恵器	高台付椀	(13.0)		(5.2)	ロクロナデ	ロクロナデ		
184	SD64	F上	須恵器	杯	13.4	6.7	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
185	SD64	F上	須恵器	甕			(6.5)	ロクロナデ・タタキメ	ロクロナデ・アテメ		
186	SD76	F	土師器	甕		(7.0)	(13.3)	ナデ・ケズリ	ナデ	無調整	
187	SD88	F	須恵器	杯		6.6	(1.5)	ロクロナデ・火襷	ロクロナデ	回転糸切り	
188	SD165	F	赤焼土器	杯	(12.1)	(6.0)	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
189	SD165	F	土師器	甕		(4.7)	(2.3)	ケズリ	ナデ	スノコ痕	
190	SD165	F	土師器	甕		(6.4)	(4.2)	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ナデ・ハケメ	ナデ	
191	SD210	F	須恵器	甕	(18.4)		(4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ		打欠き
192	SD210	F	須恵器	高台付杯	(11.0)	(5.8)	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ・回転糸切り	
193	SD210	F	須恵器	杯	(14.4)	(7.4)	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	
194	SD211	F	須恵器	蓋	(14.0)		(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ		

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
195	SD211	F	赤焼土器	椀	(13.3)	(8.5)	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	
196	SD212	F	須恵器	杯	(14.9)	11.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り・スノコ痕	
197	SD213	F	土師器	甕		9.6	(4.9)	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ナデ・ハケメ	ナデ	
198	SG2	F	須恵器	横瓶			(20.2)	ロクロナデ・タタキメ	ロクロナデ・アテメ		胴径 (38.0)
199	SG2	F	須恵器	甕	(19.6)		(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ		
200	SG2	F	須恵器	蓋		(7.0)	(1.8)	ロクロナデ・回転ヘラ切り・穂痕か	ロクロナデ		
201	SG2	F	須恵器	蓋			(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ		
202	SG2	F	須恵器	双耳杯	(13.6)		(2.9)	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ		
203	SG2	F	須恵器	杯		6.6	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	打欠き
204	SG2	F	須恵器	杯	(14.2)	(6.6)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
205	SG2	F	須恵器	高台付杯	(12.0)		(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転ヘラ切り	
206	SG2	F	須恵器	高台付杯	(10.6)	(7.3)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	
207	SG2	F	須恵器	高台付杯		(8.0)	1.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	打欠き
208	SG2	F	須恵器	高台付杯			(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	打欠き
209	SG2	F	須恵器	高台付杯		(7.0)	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	打欠き
210	SG2	F	須恵器	高台付杯		(6.6)	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	打欠き
211	SG2	F	須恵器	高台付椀	(13.4)		(5.7)	ロクロナデ	ロクロナデ		打欠き
212	SG2	F	須恵器	高台付椀	(14.9)		(7.9)	ロクロナデ・火襷	ロクロナデ		
213	SG2	F	須恵器	高台付椀	(13.4)	(7.8)	8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	
214	SG2	F	赤焼土器	高台付杯か		(5.2)	(2.9)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	
215	SG2	F	赤焼土器	杯	13.8	7.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	マメツ	
216	SG2	F	土師器	椀		(8.6)	(3.0)	無調整	ミガキ・黒色処理	ムシロ痕	
217	SG2	F	土師器	椀		(6.9)	(3.1)	ケズリ	ミガキ・黒色処理	ナデ・ムシロ痕	
218	SG2	F	土師器	甕	(21.0)		(7.5)	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ		
219	SG2	F	土師器	甕		(7.4)	(2.6)	ナデ・ケズリ	ナデ	木葉痕	
220	7340	検	須恵器	蓋	(15.8)		(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ		
221	7144	検	土師器	甕	(16.0)		(10.7)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ		
222	6148	検	須恵器	杯	(13.8)	(7.4)	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ・砥面	回転糸切り	打欠き
223	6047・6147	検	赤焼土器	杯		(6.2)	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
224	5948	検	須恵器	長頸瓶	(10.0)		(6.7)	ロクロナデ	ロクロナデ		
225	5944	検	須恵器	杯	(12.3)	(6.1)	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り	打欠き
226	5645	検	須恵器	蓋	(13.9)		(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ・砥面・墨痕		打欠き・転用硯
227	5645	検	須恵器	杯	(13.5)	(5.5)	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・墨書不明	打欠き
228	5545	検	須恵器	高台付杯		7.4	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・回転糸切り	打欠き
229	5345	検	須恵器	杯	14.0	7.8	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・回転ヘラ切り・スノコ痕	

＊層位は略号で、覆土を「F」、床面を「Y」、掘方埋土（うめつち）を「掘」、検出面を「検」とした。
＊計測値の単位はセンチメートルである。
＊口径・底径の（　）は復元した数値、器高の（　）は残存部分の数値を示す。

表 3　中世陶磁器観察表

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
230	SI124	F	青磁	椀	(15.0)		(3.8)	鎬蓮弁文・青磁釉	青磁釉		
231	SI124	F	珠洲	壺			(5.1)	タタキメ	オサエメ		
232	SI254	F	瓷器系陶器	擂鉢	(22.0)		(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ・オロシメ		
233	SI254	F	瓷器系陶器	擂鉢	(16.0)		(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ・オロシメ		
234	SI254	F	瓷器系陶器	擂鉢			(7.3)	ロクロナデ	オロシメ		
235	SI254	F	瓷器系陶器	壺			(5.6)	ナデ	ナデ		
236	SI254	F	瓷器系陶器	甕			(8.7)	ケズリ	ナデ		
237	SI254	F	瓷器系陶器	甕			(14.8)	ケズリ・自然釉	ヘラナデ・ナデ		
238	SI254	F	瓷器系陶器	甕			(6.0)	ケズリ	ヘラナデ		
239	SE195	F	珠洲	壺			(3.9)	ロクロナデ・カキメ	ヘラナデ		
240	SE195	F	珠洲	甕			(9.2)	タタキメ	オサエメ		
241	SK65	F 上	瓷器系陶器	壺		(5.5)	(3.3)	ナデ	自然釉	ナデ	
242	SK255	F	瓷器系陶器	甕			(4.5)	ナデ・自然釉	ヘラナデ		
243	SD37	F	瓦質土器	風炉	(32.0)		(5.7)	ミガキ・スタンプ雷文	ヨコナデ・ナデ		
244	SD37	F 上	土師質土器	かわらけ	(10.6)	(6.6)	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	
245	SD37	F 上	瓷器系陶器	甕			(4.5)	ナデ	ヘラナデ		
246	SD37	F 上	瓷器系陶器	甕			(8.0)	ケズリ	ヘラナデ・漆付着		
247	SD51	F 下	瓷器系陶器	甕			(9.0)	ケズリ	ヘラナデ・漆付着		漆継ぎ
248	SD51	F 下	瓷器系陶器	甕			(11.3)	ヘラナデ・ケズリ	ヘラナデ・漆付着		
249	SD51	F 下	瓷器系陶器	甕			(18.0)	ヘラナデ・ケズリ	ヘラナデ・漆付着		
250	SD51	F 下	瓷器系陶器	甕			(3.4)	ナデ・自然釉	ヘラナデ		
251	SD51	F 下	瓷器系陶器	甕			(4.6)	ケズリ	ヘラナデ		
252	SD51	F 下	瓷器系陶器	甕			(7.2)	ヨコナデ	ナデ		
253	SD51	F 上	瓷器系陶器	甕			(4.3)	ケズリ	ナデ・漆付着		
254	SD51	F 上	瓷器系陶器	甕			(7.0)	ケズリ	ヘラナデ・漆付着		
255	SD51	F 上	瓷器系陶器	甕			(9.6)	ケズリ	ヘラナデ・漆付着		
256	SD51	F 下	須恵器系陶器	甕			(6.1)	タタキメ	オサエメ		
257	SD51	F 下	須恵器系陶器	壺			(9.4)	タタキメ	オサエメ		
258	SD88	F 上	瓷器系陶器	甕			(3.1)	ナデ	ナデ		
259	SD88	F 上	瓷器系陶器	壺			(5.3)	ヘラナデ・自然釉	ヘラナデ		
260	SD88	F 上	瓷器系陶器	壺			(5.8)	ヘラナデ・自然釉	ヘラナデ		
261	SD88	F 上	瓷器系陶器	甕			(4.6)	ナデ	ヘラナデ		
262	SD88	F 上	瓷器系陶器	甕			(7.3)	ヘラナデ	ヘラナデ		
263	SD88	F 上	瓷器系陶器	甕			(10.6)	ヘラナデ	ヘラナデ		
264	SD88	F 上	珠洲	壺			(5.4)	タタキメ	オサエメ		
265	SD88	F 上	須恵器系陶器	甕			(6.4)	タタキメ	オサエメ		
266	SD88	F 上	珠洲	壺			(4.7)	タタキメ	オサエメ		
267	SD88	F 上	珠洲	甕			(6.6)	タタキメ	オサエメ		

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
268	SD88	F	須恵器系陶器	甕			(4.1)	タタキメ	オサエメ		
269	SD88	F上	瓷器系陶器	壺	(18.1)		(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ		
270	SD88	F上	瓷器系陶器	甕			(6.2)	ヘラナデ・ナデ	ヘラナデ・ナデ		
271	SD88	F上	須恵器系陶器	甕			(11.1)	タタキメ	ヘラナデ・オサエメ		
272	SD88	F上	瓷器系陶器	甕			(9.6)	ケズリ	ヘラナデ・漆付着		
273	SD88	F上	瓷器系陶器	甕		(11.4)	(4.7)	ケズリ	ヘラナデ	ナデ	
274	SD88	F上	珠洲	擂鉢			(4.1)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・オロシメ	静止糸切り	
275	SD88	F上	土師質土器	かわらけ	(7.8)	(7.2)	1.0	ナデ	ナデ	ナデ	手捏
276	SD88	F上	肥前（陶器）	皿		(4.8)	(1.6)	ロクロナデ・回転ケズリ・銅緑釉	ロクロナデ・銅緑釉	回転ケズリ	
277	SD88	F上	古瀬戸	瓶子			(5.4)	印花唐草文・灰釉	ヘラナデ		中期様式Ⅱ期
278	SD88	F上	須恵器系陶器	壺			(2.7)	ヨコナデ・タタキメ	ナデ		
279	SD88	F	須恵器系陶器	甕			(3.2)	タタキメ	ヘラナデ		
280	SD88	F上	瓷器系陶器	甕			(3.3)	ナデ	ヘラナデ		
281	SD88	F上	瓷器系陶器	甕			(3.8)	ナデ	漆付着		
282	SD88	F上	瓷器系陶器	甕			(4.0)	ケズリ	ヘラナデ・漆付着		
283	SD88	F上	瓷器系陶器	甕			(3.3)	ナデ	ナデ		
284	SD88	F上	瓷器系陶器	甕			(1.7)	ケズリ	ナデ	ナデ	
285	SD165	F	青磁	椀			(2.2)	鎬蓮弁文・青磁釉	青磁釉		
286	SD165	F	青白磁	合子（身）			(3.0)	蓮弁文・青白磁釉	ロクロナデ・青白磁釉（屈曲下）		
287	SD165	F	土師質土器	かわらけ	(7.2)	(4.6)	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	
288	SD165	F	珠洲	壺			(3.0)	タタキメ	オサエメ		
289	SD165	F	珠洲	壺	(13.4)		(5.7)	ロクロナデ・タタキメ	ロクロナデ		
290	SD256	F	瓷器系陶器	甕			(9.1)	ケズリ	ヘラナデ		
291	SD257	F	瓷器系陶器	壺			(6.3)	ヘラナデ	ヘラナデ		
292	SD257	F	須恵器系陶器	甕			(3.1)	タタキメ	オサエメ		
293	SD258	F	瓷器系陶器	擂鉢	(30.0)	(15.0)	12.3	ロクロナデ・ナデ・どべ付着	ロクロナデ・オロシメ・コゲ付着		
294	SD259	F	青磁	椀			(1.9)	鎬蓮弁文・青磁釉	青磁釉		
295	SD259	F	青磁	椀			(1.9)	青磁釉	青磁釉		
296	SD259	F	瓷器系陶器	甕		(17.2)	(3.7)	ナデ	無調整	ナデ	
297	SD259	F	瓷器系陶器	甕		(17.0)	(5.9)	ヘラナデ・ナデ・自然釉	ヘラナデ・自然釉	ヘラナデ・ナデ	
298	SG1	検	古瀬戸	合子（蓋）	4.2	1.8	2.0	櫛描文・鉄釉	ロクロナデ	回転糸切り	中期様式
299	SG1	検	青磁	椀		(5.6)	(1.8)	青磁釉	青磁釉	ロクロナデ	
300	SG1	F	青白磁	水注			(6.7)	青白磁釉	ロクロナデ		
301	SG1	F	瓷器系陶器	擂鉢	(14.7)		(3.4)	ロクロナデ	ロクロナデ		
302	SG1	F	珠洲	壺			(6.6)	タタキメ・スタンプ十字文	ロクロナデ		
303	SG1	F	珠洲	壺			(5.0)	タタキメ	オサエメ		
304	SG1	F	珠洲	甕			(7.7)	タタキメ	オサエメ		
305	SG2	検	青磁	椀			(2.8)	青磁釉	青磁釉		
306	SG2	F	土師質土器	柱状高台かわらけ		(6.8)	(3.2)	ロクロナデ・マメツ	マメツ	回転糸切り・板状圧痕か	

番号	遺構名	層位	種類	器種	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
307	SG2	検	珠洲	甕			(5.9)	タタキメ	ヘラナデ		
308	SG2	F	珠洲	壺			(3.9)	ケズリ	ヘラナデ		
309	SG2	検	瓷器系陶器	擂鉢			(3.9)	ロクロナデ・ナデ	オロシメ	静止糸切り	
310	6347	検	青磁	椀	(14.0)		(2.6)	鎬蓮弁文・青磁釉	青磁釉		
311	6347	検	珠洲	壺			(3.7)	タタキメ	ヘラナデ		
312	6347	検	瓷器系陶器	甕			(6.8)	ナデ	ヘラナデ		
313	6347	検	瓷器系陶器	擂鉢			(3.1)	ナデ	オロシメ		
314	6346	表	瓷器系陶器	甕			(5.7)	ナデ	ナデ		
315	6342	検	瓷器系陶器	甕			(4.6)	ヘラナデ	ヘラナデ		
316	6342	検	須恵器系陶器	甕			(6.2)	タタキメ	オサエメ		
317	6144	検	珠洲	壺			(2.5)	タタキメ	オサエメ		
318	5744	検	青磁	椀			(3.2)	青磁釉	劃花文・青磁釉		
319	5645	検	珠洲	甕			(10.9)	タタキメ	ヘラナデ		
320	5345	検	青磁	椀			(2.8)	鎬蓮弁文・青磁釉	青磁釉		
321	5246	検	瓷器系陶器	甕			(5.8)	ケズリ	ヘラナデ・ナデ		
322	5246	検	瓷器系陶器	甕			(6.8)	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		
323	5243	検	土師質土器	かわらけ	(8.6)	6.6	1.7	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
324	5145	検	瓷器系陶器	甕			(5.8)	ケズリ	ヘラナデ		
325	5145	検	瓷器系陶器	甕			(6.6)	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・漆付着		
326	5145	検	瓷器系陶器	甕			(5.9)	ケズリ・ナデ	ナデ		
327	5045・5046	検	青磁	椀			(2.5)	鎬蓮弁文・青磁釉	青磁釉		
328	5046	検	瓷器系陶器	甕			(5.5)	ヘラナデ・ケズリ	ナデ		
329	5046	検	珠洲	甕			(3.9)	タタキメ	オサエメ		
330	5046	検	須恵器系陶器	甕			(10.3)	タタキメ	ヘラナデ・オサエメ		漆継ぎ
331	5046	検	珠洲	甕			(5.2)	タタキメ	ヘラナデ		
332	5046	検	越前	甕			(5.0)	ケズリ・自然釉	自然釉		
333	5046	検	瓷器系陶器	甕			(7.9)	ケズリ	ヘラナデ		
334	5046	検	瓷器系陶器	擂鉢		(13.2)	(5.4)	ナデ	ナデ	ナデ	
335	4946	検	土師質土器	かわらけ		4.7	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ		
336	4946	検	瓷器系陶器	甕			(4.4)	ナデ	ナデ		
337	A区	表	瓷器系陶器	甕			(5.2)	ヘラナデ・自然釉	ナデ		
338	B区	検	珠洲	壺			(4.9)	タタキメ	ヘラナデ・オサエメ		

＊層位は略号で、覆土を「F」、床面を「Y」、掘方埋土（うめつち）を「掘」、検出面を「検」、表土を「表」とした。
＊計測値の単位はセンチメートルである。
＊口径・底径の（　）は復元した数値、器高の（　）は残存部分の数値を示す。

表 4　石製品観察表

番号	遺構名	層位	種類	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
339	SI5-EP7	掘	石製品	砥石	18.0	4.7	5.9	587.0	凝灰岩	
340	SI30	F	石製品	支脚石	19.1	7.0	5.2	592.0	流紋岩	
341	SI30-EL31	F	石製品	砥石	39.8	17.4	8.5	5500.0	砂岩	
342	SI72	Y	石製品	敲石	14.2	6.5	4.7	622.0	アプライト	
343	SI72-EL73	F	石製品	砥石	11.9	(10.5)	12.3	1281.0	安山岩	
344	SI116	F 上	石製品	磨石	9.4	6.4	3.5	148.2	凝灰岩	
345	SI116	F 上	石製品	砥石	17.7	9.8	9.1	2207.0	砂岩	
346	SI124-EK135	F 下	石製品	砥石	3.3	(4.3)	2.2	14.2	砂岩	
347	SI124-EK135	F 下	石製品	砥石	(6.3)	(5.9)	(2.1)	69.5	砂岩	
348	SI124-EK135	F	石製品	砥石	6.7	9.7	2.7	114.0	砂岩	
349	SI124-EK135	F 下	石製品	砥石	(12.6)	(10.4)	2.2	195.3	砂岩	
350	SI124	Y	石製品	台石	(9.4)	16.3	7.4	779.4	砂岩	上面に敲打痕
351	SE194	F	石製品	砥石	5.2	(8.6)	3.4	91.7	凝灰岩	
352	SE194	F	石製品	砥石	(4.7)	(4.7)	(4.9)	83.0	凝灰岩	
353	SD51	F 下	石製品	砥石	(12.3)	(9.0)	6.3	990.0	安山岩	
354	SD52	F	石製品	砥石	16.0	13.0	8.0	1750.0	砂岩	
355	SD76	F	石製品	砥石	(3.2)	4.1	3.2	32.9	安山岩	
356	SD76	F	石製品	礫	11.4	7.3	3.5	379.9	泥岩	油脂状付着物
357	SK202	F	石製品	砥石	(8.0)	4.7	7.7	154.8	砂岩	
358	6542	検	石製品	砥石	5.5	(4.5)	(5.2)	87.4	安山岩	
359	5948	検	石製品	砥石	(7.2)	12.1	4.3	423.5	安山岩	

＊層位は略号で、覆土を「F」、床面を「Y」、掘方埋土（うめつち）を「掘」、検出面を「検」とした。
＊寸法の計測値の単位はセンチメートル、重量の単位はグラムである。
＊寸法の（　）は残存部分の数値を示す。

表 5　鉄製品観察表

番号	遺構名	層位	種類	器種	長さ	幅	厚さ	重量
360	SI30	F	鉄製品	刀子	(5.7)	1.3	0.2	5.7
361	SI62	F 上	鉄製品	鉄釘か	(3.8)	0.7	0.3	2.1
362	SI124	F	鉄製品	不明	(2.5)	1.2	0.3	1.9
363	SI124	F	鉄製品	不明	(3.9)	1.7	0.2	6.5
364	SI124	F	鉄製品	紡錘車	4.7	4.7	0.2	3.9
365	SD37	F	鉄製品	鉄釘	(5.6)	1.3	0.6	10.9
366	SD165	F	鉄製品	鉄釘か	(3.9)	1.3	0.4	5.2
367	6047・6147	検	鉄製品	鉄釘	5.6	1.0	0.5	6.3
368	5046	検	鉄製品	鉄釘	(9.5)	1.3	0.7	20.4

表 6　土製品観察表

番号	遺構名	層位	種類	器種	長さ	幅	厚さ
369	NR2	検	土製品	土錘	3.8	1.5	0.6

表 7　木製品観察表

番号	遺構名	層位	種類	器種	長さ	幅	厚さ
370	5645	検	木製品	板材	(12.4)	2.9	1.5

＊層位は略号で、覆土を「F」、検出面を「検」とした。
＊寸法の計測値の単位はセンチメートル、重量の単位はグラムである。
＊寸法の（　）は残存部分の数値を示す。

Ⅳ　自然科学分析

1　土器付着物の材質分析

藤根久（パレオ・ラボ）

A　はじめに

沼袋遺跡の調査では、内面に黒色物が付着した土器が出土した。ここでは、この土器付着物の材質を調べるために赤外分光分析を行った。なお、一部の土器付着物については加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定も行われている（第 2 節「放射性炭素年代測定（1）」を参照）。

B　試料と方法

試料は、9 世紀代の土師器の内面付着物 3 カ所と 13 ～ 14 世紀代の瓷器系陶器内面付着物 2 点である。（表 8、第 72 図 1 ～ 3、第 73 図 1・2）。なお、分析 No.1 ～ No.3 の付着物は、同じ土師器の付着物であり、3 層構造が観察されたため、別個に採取して調べた。

分析用試料は、各試料から典型的な表面部分から一部を削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光 (株) 製 FT/IR - 410、IRT - 30 - 16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

C　結果と考察

以下に、各土器付着物の特徴と赤外分光分析の結果について述べる。なお、第 72 図 4 と 5 および第 73 図 3 と 4 の赤外吸収スペクトル図は、縦軸は透過率（%T）、横軸が波数（Wavenumber (cm^{-1})；カイザー）である。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（表 9）。

［分析 No.1 ～ No.3（報告書遺物番号 18）］

付着物は、厚さが 4mm 弱あり空洞が見られ、大きく 3 層構造が観察された。上層（表面 : 分析 No.1）が暗褐色の固結した層、中間層が褐色の粉末状、付着側の下層が褐色した固結層で斑状を示す。

赤外分光分析では、上層（分析 No.1）では生漆のウルシオールの吸収（第 72 図 4 の生漆吸収 No.6 ～ 8）が確認できた。一方、中間層（分析 No.2）と下層（分析 No.3）では生漆の吸収の No.9 付近の劣化に伴うゴム質の吸収が大きく、生漆のウルシオールの吸収は小さかった。

以上のことから、この土師器付着物は漆と考えられるが、中間層は粉末状であるために漆の保存状態が悪く、また下層も劣化などが考えられる。

［分析 No.4（報告書遺物番号 272）］

付着物は、発泡痕のある軟質の黒褐色付着物である。赤外分光分析では、生漆の吸収の No.9 付近の劣化に伴うゴム質の吸収が大きく、生漆のウルシオールの吸収は小さかった。

以上のことから、この瓷器系陶器付着物は漆と考えられるが、劣化したと考えられる。

［分析 No.5（報告書遺物番号 248）］

付着物は、軟質の黒～黒褐色の付着物である。赤外分光分析では、生漆のウルシオールの吸収（第 73 図 4 の生漆吸収 No.6 ～ 8）が確認できた。

以上のことから、この瓷器系陶器付着物は漆である。

D　おわりに

9 世紀代の土師器内面付着物 3 カ所と 13 ～ 14 世紀代の瓷器系陶器内面付着物 2 点に赤外分光分析を行った。

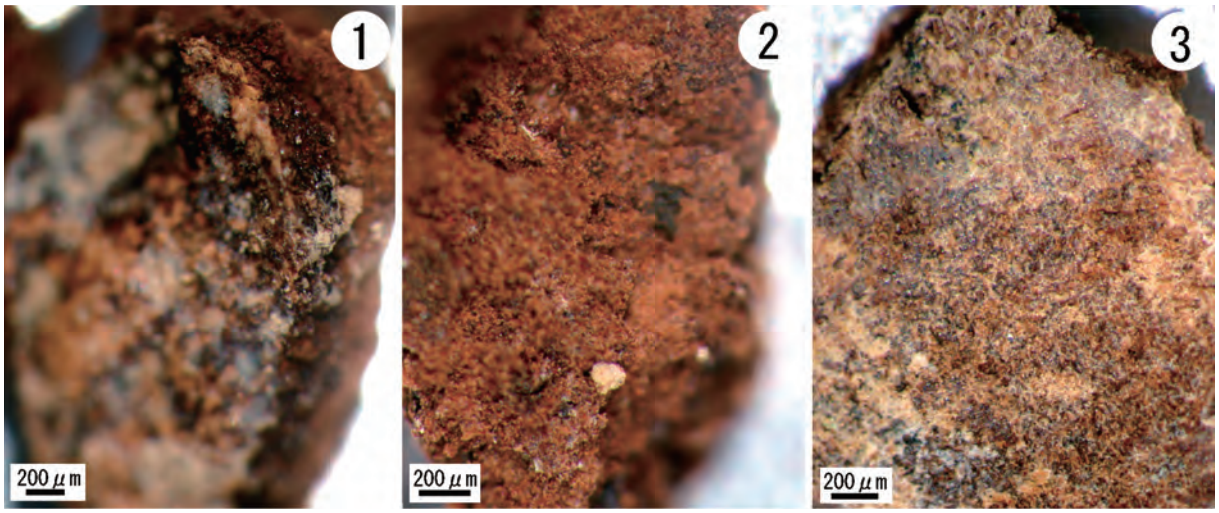
その結果、9 世紀代の土師器内面付着物（分析 No.1 ～ 3）は、漆と考えられるが、中間層と下層は劣化したと考えられた。13 ～ 14 世紀代の瓷器系陶器内面付着物は、いずれも漆であるが、分析 No.4 は劣化した漆であった。

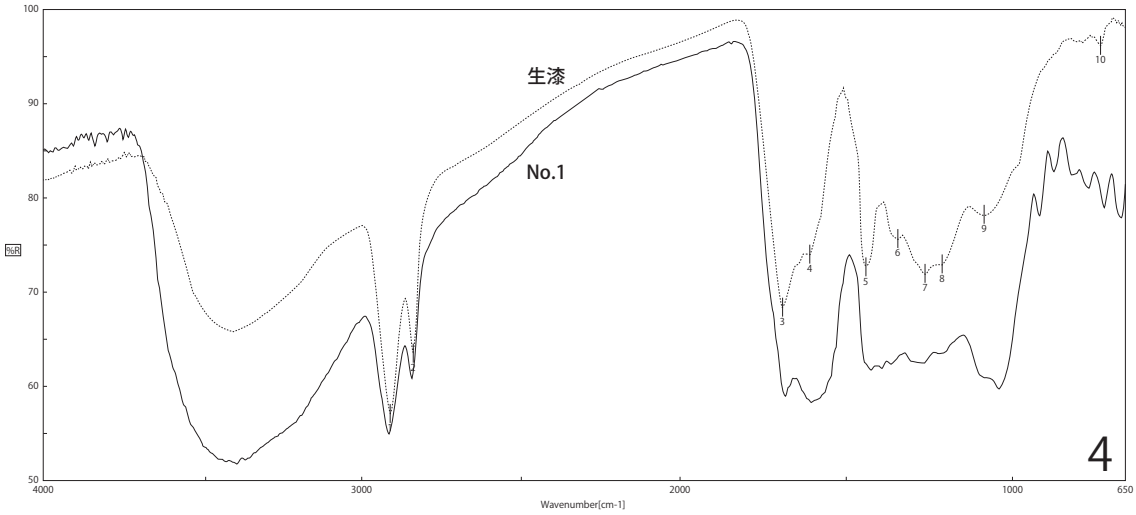
表 8　赤外分光分析を行った付着物とその特徴

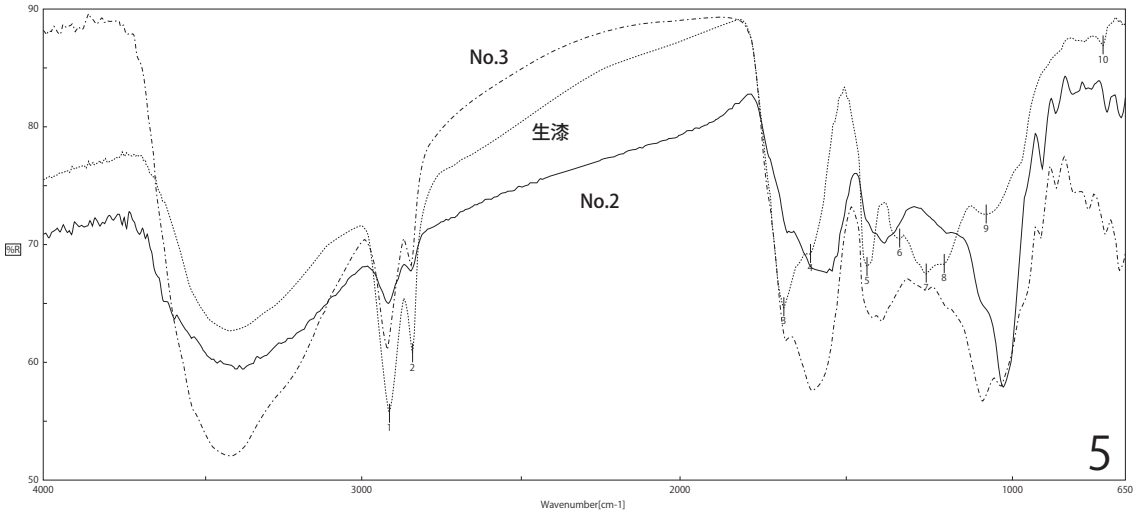
分析 No.	種類	器種	時期	付着位置	測定位置	遺構	層位	報告書遺物番号	付着物の特徴
1	土師器	杯	9 世紀代	内面	上層（表面）	SI30	F	18	暗褐色固結層
2	〃	〃	〃	〃	中間層	〃	〃	〃	褐色粉末状
3	〃	〃	〃	〃	下層（付着側）	〃	〃	〃	褐色固結層（斑状）
4	瓷器系陶器	甕	13 ～ 14 世紀代	内面	表面	SD88	F 上	272	黒褐色軟質層（発泡痕）
5	瓷器系陶器	甕	13 ～ 14 世紀代	内面	表面	SD51	F 下	248	黒～黒褐色軟質層

表 9　生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収 No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	75.389	

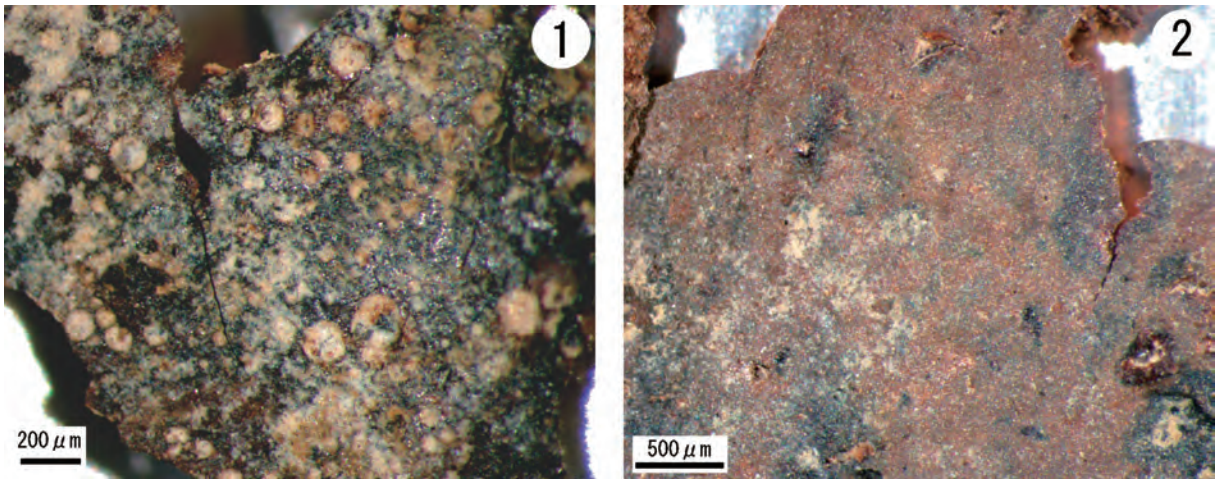


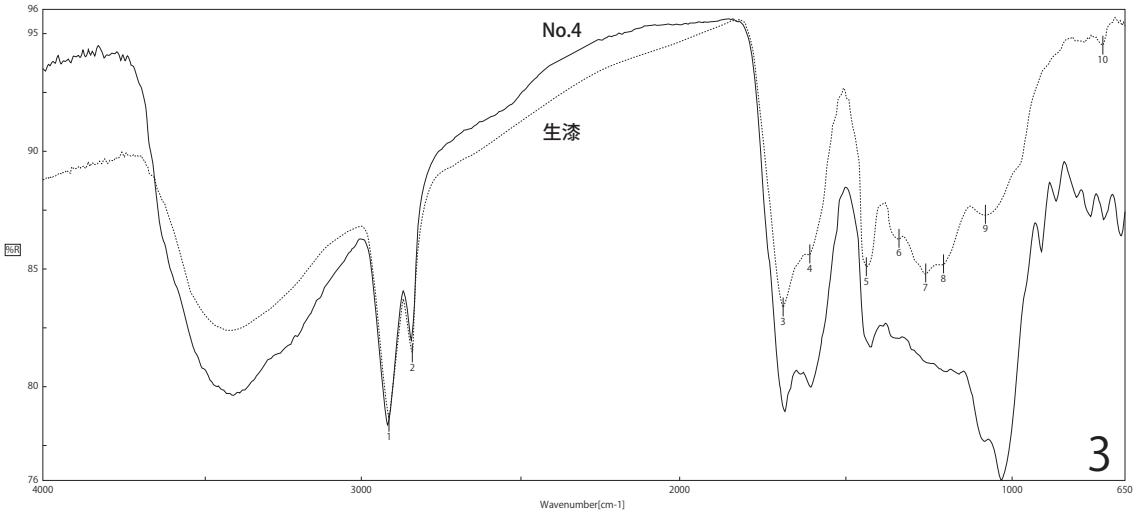


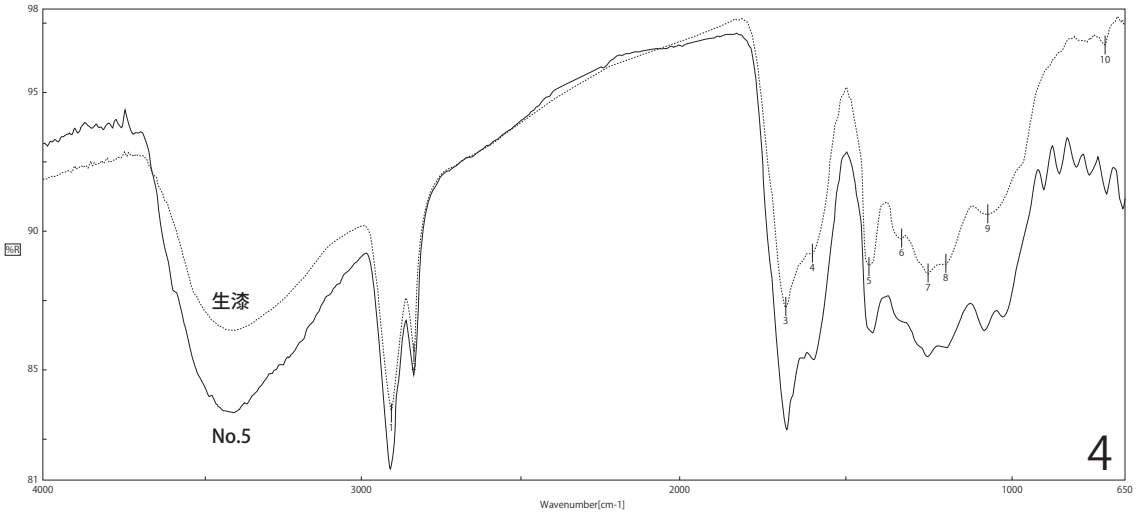


（縦軸：透過率、横軸：波数、数字：生漆の赤外吸収位置）
1. 分析 No.1（上層）　2. 分析 No.2（中間層）　3. 分析 No.3（下層）
4. 分析 No.1 の赤外吸収スペクトル図　5. 分析 No.2 および分析 No.3 の赤外吸収スペクトル図

第 72 図　土器付着物の顕微鏡写真と赤外吸収スペクトル（1）







（縦軸：透過率、横軸：波数、数字：生漆の赤外吸収位置）
1. 分析 No.4（表面）　2. 分析 No.5（表面）
3. 分析 No.4 の赤外吸収スペクトル図　4. 分析 No.5 の赤外吸収スペクトル図

第 73 図　土器付着物の顕微鏡写真と赤外吸収スペクトル（2）

2　放射性炭素年代測定（1）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・安昭炫・佐藤正教
廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根久

A　はじめに

沼袋遺跡の調査では、黒色物が付着した土器が出土した。ここでは、この土器付着物について加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

B　試料と方法

年代測定を行った試料は土器付着物 10 点である（表 10）。各試料は、調製した後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

C　結　　果

表 11 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

D　考　　察

以下に、各試料の 2 σ暦年代範囲に注目し、年代測定結果について述べる。

試料 No.6（PLD - 22123：報告書遺物番号 272）は 1296 － 1399 cal AD（95.4％）であった。13 世紀末～ 14 世紀末である。付着していた土器は中世陶器が遺物の主体である溝から出土した瓷器系陶器の甕胴部片であり、土器の時期に対して整合的な年代値と言える。

試料 No.7（PLD - 22124：報告書遺物番号 248）は 1316 － 1355 cal AD（51.7％）および 1388 － 1418 cal AD（43.7％）であった。より確率の高い範囲では 14 世紀前半～中頃、より確率の低い範囲では 14 世紀後半～ 15 世紀前半である。試料 No.6 と同様、中世陶器が遺物の主体である溝から出土した瓷器系陶器の甕の胴部片であり、土器の時期と測定された年代値は整合的であった。

試料 No.8（PLD - 22125：報告書遺物番号 110）は 236 － 348 cal AD（94.9％）および 373 － 376 cal AD（0.5％）であった。確率の高い範囲では、3 世紀前半～ 4 世紀中頃である。付着していた土器は底部に回転糸切り痕のある 9 世紀代と想定される土器であり、土器の時期に対して年代測定結果はかなり古い年代を示した。この鉢は灯明具の可能性が考えられ、海産の魚油などの使用による海洋リザーバー効果の影響で古い年代が得られている可能性を考慮する必要がある。

試料 No.9（PLD - 22126：報告書遺物番号なし）は 778 － 886 cal AD（95.4％）であった。8 世紀後半～ 9 世紀後半である。

試料 No.10（PLD - 22127：報告書遺物番号 30）は 679 － 820 cal AD（93.1％）および 843 － 859 cal AD（2.3％）であった。確率の高い範囲では、7 世紀後半～ 9 世紀前半である。SI78 竪穴建物は、底部が回転ヘラ

切りの須恵器類が主体で 8 世紀後半と推定されており、測定された年代値は整合的な結果であった。

試料 No.11（PLD - 22128：報告書遺物番号なし）は 684 － 826 cal AD（90.8％）および 840 － 863 cal AD（4.6％）であった。確率の高い範囲では、7 世紀後半～ 9 世紀前半である。試料 No.11 が出土した竪穴建物は底部に回転糸切り痕のある土師器類が遺物の主体で 9 世紀代と推定されており、付着物の年代としては、測定された年代値のうち 9 世紀の初頭～前半である可能性が高い。

試料 No.12（PLD - 22129：報告書遺物番号 45）は 777 － 891 cal AD（95.4％）であった。8 世紀後半～ 9 世紀末である。試料 No.12 が出土した竪穴建物は底部に回転糸切り痕のある土師器類が遺物の主体で 9 世紀代と推定されており、測定された年代値は遺物の時期とほぼ一致する結果であった。

試料 No.13（PLD - 22130：報告書遺物番号 45）は 663 － 724 cal AD（62.7％）および 739 － 771 cal AD（32.7％）であった。確率の高い範囲では 7 世紀後半～ 8 世紀前半、確率の低い範囲では 8 世紀前半～後半である。試料 No.13 が出土した竪穴建物は、底部に回転糸切り痕のある土師器類が遺物の主体で 9 世紀代と推定されているが、測定された年代値は遺物から推定される時期よりもやや古い年代値であった。

試料 No.14（PLD - 22131：報告書遺物番号 150）は 668 － 728 cal AD（58.5％）および 736 － 772 cal AD（36.9％）であった。確率の高い範囲では 7 世紀後半～ 8 世紀前半、確率の低い範囲では 8 世紀前半～後半である。SK181 土坑は、底部に回転ヘラ切り痕のある須恵器類が遺物の主体で 8 世紀代の前半と推定されており、測定された年代値は整合的な結果であった。

試料 No.15（PLD - 22132：報告書遺物番号 293）は 1221 － 1273 cal AD（95.4％）であった。13 世紀前半～後半である。付着していた土器は、口唇の形状、器形、卸し目の単位の間隔、胎土の特徴から 13 ～ 14 世紀代が想定されており、遺物の時期に対して整合的な年代値であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1)，pp.337-360.
中村俊夫（2000）「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』，pp.3-20，日本第四紀学会.
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51，pp.1111-1150.

表 10　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-22123	遺構 : SD88	種類 : 漆塗膜	超音波洗浄
	試料 No.6	器種 : 瓷器系陶器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 272	状態 : dry	
PLD-22124	遺構 : SD51	種類 : 漆塗膜	超音波洗浄
	試料 No.7	器種 : 瓷器系陶器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 248	状態 : dry	
PLD-22125	遺構 : SI183	種類 : 土器付着物・口縁部内面おこげ	超音波洗浄
	試料 No.8	器種 : 赤焼土器鉢	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 110	状態 : dry	
PLD-22126	遺構 : SB66-EP71	種類 : 土器付着物・胴部外面煤類	超音波洗浄
	試料 No.9	器種 : 土師器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 なし	状態 : dry	
PLD-22127	遺構 : SI78-EK80	種類 : 土器付着物・胴部外面煤類	超音波洗浄
	試料 No.10	器種 : 赤焼土器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 30	状態 : dry	
PLD-22128	遺構 : SI124-EK148	種類 : 土器付着物・胴部外面煤類	超音波洗浄
	試料 No.11	器種 : 土師器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 なし	状態 : dry	
PLD-22129	遺構 : SI124-EK143	種類 : 土器付着物・胴部外面煤類	超音波洗浄
	試料 No.12	器種 : 土師器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 45	状態 : dry	
PLD-22130	遺構 : SI124-EK143	種類 : 土器付着物・胴部下部外面煤類	超音波洗浄
	試料 No.13	器種 : 土師器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 45	状態 : dry	
PLD-22131	遺構 : SK181	種類 : 土器付着物・胴部外面煤類	超音波洗浄
	試料 No.14	器種 : 土師器甕	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 150	状態 : dry	
PLD-22132	遺構 : SD258	種類 : 土器付着物・胴部内面おこげ	超音波洗浄
	試料 No.15	器種 : 瓷器系陶器擂鉢	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N）
	報告書遺物番号 293	状態 : dry	

表 11　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-22123	-28.93 ± 0.15	616 ± 19	615 ± 20	1302AD(28.6%)1323AD	1296AD(95.4%)1399AD
試料 No.6（報告書遺物番号 272）				1347AD(26.9%)1367AD	
				1382AD(12.7%)1393AD	
PLD-22124	-27.83 ± 0.18	566 ± 18	565 ± 20	1325AD(35.2%)1344AD	1316AD(51.7%)1355AD
試料 No.7（報告書遺物番号 248）				1394AD(33.0%)1410AD	1388AD(43.7%)1418AD
PLD-22125	-23.12 ± 0.19	1749 ± 19	1750 ± 20	250AD(13.5%)262AD	236AD(94.9%)348AD
試料 No.8（報告書遺物番号 110）				280AD(54.7%)326AD	373AD(00.5%)376AD
PLD-22126	-25.56 ± 0.17	1194 ± 18	1195 ± 20	783AD(06.9%)790AD	778AD(95.4%)886AD
試料 No.9（報告書遺物番号なし）				810AD(61.3%)873AD	
PLD-22127	-25.38 ± 0.25	1251 ± 21	1250 ± 20	694AD(56.0%)748AD	679AD(93.1%)820AD
試料 No.10（報告書遺物番号 30）				765AD(12.2%)777AD	843AD(02.3%)859AD
PLD-22128	-17.23 ± 0.25	1246 ± 21	1245 ± 20	692AD(54.0%)749AD	684AD(90.8%)826AD
試料 No.11（報告書遺物番号なし）				764AD(14.2%)779AD	840AD(04.6%)863AD
PLD-22129	-22.86 ± 0.23	1186 ± 20	1185 ± 20	783AD(05.7%)789AD	777AD(95.4%)891AD
試料 No.12（報告書遺物番号 45）				810AD(62.5%)884AD	
PLD-22130	-23.69 ± 0.18	1299 ± 20	1300 ± 20	670AD(36.1%)695AD	663AD(62.7%)724AD
試料 No.13（報告書遺物番号 45）				700AD(07.6%)708AD	739AD(32.7%)771AD
				748AD(24.5%)766AD	
PLD-22131	-22.00 ± 0.21	1290 ± 19	1290 ± 20	676AD(41.5%)711AD	668AD(58.5%)728AD
試料 No.14（報告書遺物番号 150）				746AD(26.7%)767AD	736AD(36.9%)772AD
PLD-22132	-25.30 ± 0.21	781 ± 18	780 ± 20	1225AD(68.2%)1268AD	1221AD(95.4%)1273AD
試料 No.15（報告書遺物番号 293）					

3　放射性炭素年代測定（2）

株式会社加速器分析研究所

A　測定対象試料

測定対象試料は竪穴建物、区画溝等から出土した土器付着物（漆等）や炭化物等（No.16：IAAA-123539 ～ No.34：IAAA-123557）合計 19 点である（表 12）。試料 No.16、17 は同じ土器の内面に付着した塊状の漆で、付着物の表面側が No.16、土器に接する裏面側が No.17 である。No.18 は陶器内面に付着した塊状の漆の裏面側から採取された。No.19 ～ 22、24、25 は陶器内面の付着物、No.26 は断面の付着物でいずれも漆の可能性がある。No.23 は土器外面の付着物である。試料 No.16 ～ 25、27 ～ 33 は竪穴建物、ピット、土坑、区画溝、自然流路の覆土から出土した。No.26、34 は、遺構が集中する区域の遺構検出面から出土した。

B　測定の意義

試料が出土した遺構、層位の年代や、漆等の試料が付着した土器、陶器の年代を明らかにする。

C　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 12 に記載する。

（3）試料を燃焼させ二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E　算出方法

（1）δ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 12）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 12 に、補正していない値を参考値として表 13 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 12 に、補正していない値を参考値として表 13 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4

%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用いて OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 13 に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

F　測定結果

試料が出土した遺構の種類別に年代を検討する。

竪穴建物 SI30 F 出土試料の ^{14}C 年代は、土器内面付着漆の表面付近 No.16 が 1200 ± 20yrBP、同裏面付近 No.17 が 1210 ± 20yrBP、土器外面付着物 No.23 が 1290 ± 20yrBP である。同じ土器の内面に付着した塊状の漆から採取された No.16、17 の値は誤差（± 1 σ）の範囲でよく一致する。別の土器の外面付着物 No.23 は他の 2 点との間に若干年代差が認められる。暦年較正年代（1 σ）は、No.16 が 780 ～ 870cal AD、No.17 が 778 ～ 868cal AD、No.23 が 674 ～ 767cal AD の間に各々 2 つの範囲で示される。

ピット SP746 F 出土炭化物（木炭）No.33 の ^{14}C 年代は 660 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 1285 ～ 1384cal AD の間に 2 つの範囲で示される。

土坑出土試料の ^{14}C 年代は、SK202 F 出土炭化物 No.31 が 1310 ± 20yrBP、SK163 F 出土炭化物（木炭）No.32 が 1220 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は No.31 が 665 ～ 765cal AD、No.32 が 728 ～ 868cal AD の間に各々 3 つの範囲で示される。

溝出土試料の ^{14}C 年代は SD37 F 上出土陶器内面付着物 No.24 が 570 ± 20yrBP、SD88 F 上出土陶器内面付着物 No.25 が 580 ± 20yrBP、SD55 F 出土炭化物（木炭）No.29 が 790 ± 20yrBP、SD213 F 出土炭化物（木炭）No.30 が 690 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、No.24 が 1324 ～ 1411cal AD の間に 2 つの範囲、No.25 が 1320 ～ 1407cal AD の間に 2 つの範囲、No.29 が 1225 ～ 1264cal AD の範囲、No.30 が 1278 ～ 1297cal AD の範囲で示される。

溝 SD51 出土試料の ^{14}C 年代は、SD51 F 上出土陶器内面付着漆（裏面）No.18 が 610 ± 20yrBP、陶器内面付着物 No.19 が 540 ± 20yrBP、No.21 が 590 ± 20yrBP、同 F 下出土陶器内面付着物 No.20 が 520 ± 20yrBP、No.22 が 580 ± 20yrBP である。SD51 から出土した 5 点の間には、若干年代差が認められるが、誤差範囲で重なるものも含まれる。

自然流路 NR1 F 上出土炭化物（木炭）No.27 が 550 ± 20yrBP、No.28 が 590 ± 20yrBP である。NR1 から出土した 2 点の値は、誤差範囲で近接する。

暦年較正年代（1 σ）は、No.18 が 1304 ～ 1395cal AD の間に 3 つの範囲、No.19 が 1398 ～ 1426cal AD の範囲、No.20 が 1407 ～ 1430cal AD の範囲、No.22 が 1320 ～ 1408cal AD の間に 2 つの範囲、No.21 が 1315 ～ 1400cal AD の間に 2 つの範囲、No.27 が 1327 ～ 1416cal AD の間に 2 つの範囲、No.28 が 1316 ～ 1403cal AD の間に 2 つの範囲で示される。SD51 の試料は覆土の上層・下層から出土しているが、その上下関係による年代差は明確でない。

遺構検出面出土試料の ^{14}C 年代は、5046 グリッド出土陶器断面付着物 No.26 が 610 ± 20yrBP、5246 グリッド出土炭化物（木炭）No.34 が 910 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、No.26 が 1304 ～ 1396cal AD、No.34 が 1046 ～ 1166cal AD の間に各々 3 つの範囲で示される。

試料の炭素含有率を確認すると、No.23 以外の 18 点の試料はすべて 50％を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。No.23 の炭素含有率は 10％で、炭化物や漆等としては低い値となっていることから、測定された炭素の由来に注意する必要がある。

参考文献

Bronk Ramsey C.（2009）Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1)，pp.337-360.
Reimer, P.J. et al.（2009）IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4)，pp.1111-1150.
Stuiver M. and Polach H.A.（1977）Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3)，pp.355-363.

表 12　放射性炭素年代測定分析試料一覧

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-123539	No.16	SI30 竪穴建物　F	土器内面付着漆（表面付近）	AAA	-26.59 ± 0.43	1,200 ± 20	86.14 ± 0.25
IAAA-123540	No.17	SI30 竪穴建物　F	土器内面付着漆（表面付近）	AAA	-26.87 ± 0.56	1,210 ± 20	86.05 ± 0.26
IAAA-123541	No.18	SD51 区画溝　F 上	陶器内面付着漆（裏面）	AaA	-29.44 ± 0.48	610 ± 20	92.69 ± 0.27
IAAA-123542	No.19	SD51 区画溝　F 上	陶器内面付着物（漆の可能性）	AAA	-27.47 ± 0.64	540 ± 20	93.52 ± 0.29
IAAA-123543	No.20	SD51 区画溝　F 下	陶器内面付着物（漆の可能性）	AAA	-29.82 ± 0.39	520 ± 20	93.69 ± 0.28
IAAA-123544	No.21	SD51 区画溝　F 上	陶器内面付着物（漆の可能性）	AaA	-27.77 ± 0.33	590 ± 20	92.89 ± 0.27
IAAA-123545	No.22	SD51 区画溝　F 下	陶器内面付着物（漆の可能性）	AAA	-26.89 ± 0.40	580 ± 20	93.07 ± 0.27
IAAA-123546	No.23	SI30 竪穴建物　F	土器外面付着物	AaA	-25.75 ± 0.25	1,290 ± 20	85.15 ± 0.26
IAAA-123547	No.24	SD37 区画溝　F 上	陶器内面付着物（漆の可能性）	AAA	-27.20 ± 0.55	570 ± 20	93.19 ± 0.28
IAAA-123548	No.25	SD88 区画溝　F 上	陶器内面付着物（漆の可能性）	AAA	-27.04 ± 0.44	580 ± 20	93.05 ± 0.27
IAAA-123549	No.26	5046 グリッド　検	陶器断面付着物（漆の可能性）	AaA	-29.64 ± 0.48	610 ± 20	92.71 ± 0.28
IAAA-123550	No.27	NR1 自然流路　F 上	炭化物（木炭）	AAA	-26.42 ± 0.52	550 ± 20	93.33 ± 0.28
IAAA-123551	No.28	NR1 自然流路　F 上	炭化物（木炭）	AAA	-26.98 ± 0.43	590 ± 20	92.93 ± 0.28
IAAA-123552	No.29	SD55 区画溝　F	炭化物（木炭）	AAA	-24.44 ± 0.55	790 ± 20	90.68 ± 0.27
IAAA-123553	No.30	SD213 溝　F	炭化物（木炭）	AAA	-27.85 ± 0.52	690 ± 20	91.78 ± 0.26
IAAA-123554	No.31	SK202 廃棄土坑　F	炭化物	AAA	-28.76 ± 0.39	1,310 ± 20	84.98 ± 0.25
IAAA-123555	No.32	SK163 土坑　F	炭化物（木炭）	AAA	-23.76 ± 0.29	1,220 ± 20	85.89 ± 0.26
IAAA-123556	No.33	SP746（発掘時仮名）　F	炭化物（木炭）	AAA	-23.45 ± 0.43	660 ± 20	92.09 ± 0.27
IAAA-123557	No.34	5246 グリッド　検	炭化物（木炭）	AAA	-27.43 ± 0.28	910 ± 20	89.32 ± 0.27

表 13　暦年較正年代結果

測定番号	δ ^{13}C 補正なし Age (yrBP)	δ ^{13}C 補正なし pMC (%)	暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
IAAA-123539	1,220 ± 20	85.86 ± 0.24	1,198 ± 23	780calAD - 792calAD (10.2%) 805calAD - 870calAD (58.0%)	730calAD - 735calAD (00.7%) 771calAD - 892calAD (94.7%)
IAAA-123540	1,240 ± 20	85.72 ± 0.24	1,207 ± 24	778calAD - 830calAD (43.0%) 837calAD - 868calAD (25.2%)	721calAD - 742calAD (05.0%) 770calAD - 889calAD (90.4%)
IAAA-123541	680 ± 20	91.85 ± 0.25	609 ± 23	1304calAD - 1327calAD (28.2%) 1342calAD - 1365calAD (27.6%) 1384calAD - 1395calAD (12.4%)	1297calAD - 1402calAD (95.4%)
IAAA-123542	580 ± 20	93.05 ± 0.26	538 ± 24	1398calAD - 1426calAD (68.2%)	1320calAD - 1350calAD (21.2%) 1391calAD - 1436calAD (74.2%)
IAAA-123543	600 ± 20	92.76 ± 0.26	523 ± 23	1407calAD - 1430calAD (68.2%)	1328calAD - 1341calAD (05.2%) 1395calAD - 1440calAD (90.2%)
IAAA-123544	640 ± 20	92.37 ± 0.26	592 ± 23	1315calAD - 1356calAD (53.6%) 1389calAD - 1400calAD (14.6%)	1300calAD - 1369calAD (70.2%) 1381calAD - 1410calAD (25.2%)
IAAA-123545	610 ± 20	92.71 ± 0.26	576 ± 23	1320calAD - 1350calAD (44.3%) 1391calAD - 1408calAD (23.9%)	1307calAD - 1363calAD (61.7%) 1385calAD - 1416calAD (33.7%)
IAAA-123546	1,300 ± 20	85.01 ± 0.25	1,291 ± 24	674calAD - 712calAD (42.7%) 746calAD - 767calAD (25.5%)	667calAD - 773calAD (95.4%)
IAAA-123547	600 ± 20	92.77 ± 0.26	566 ± 24	1324calAD - 1345calAD (36.3%) 1393calAD - 1411calAD (31.9%)	1310calAD - 1360calAD (53.5%) 1386calAD - 1422calAD (41.9%)
IAAA-123548	610 ± 20	92.66 ± 0.26	578 ± 23	1320calAD - 1350calAD (45.5%) 1391calAD - 1407calAD (22.7%)	1306calAD - 1364calAD (63.0%) 1385calAD - 1415calAD (32.4%)
IAAA-123549	680 ± 20	91.83 ± 0.26	607 ± 24	1304calAD - 1329calAD (28.1%) 1341calAD - 1365calAD (27.7%) 1384calAD - 1396calAD (12.5%)	1297calAD - 1404calAD (95.4%)
IAAA-123550	580 ± 20	93.06 ± 0.26	554 ± 24	1327calAD - 1342calAD (24.6%) 1395calAD - 1416calAD (43.6%)	1316calAD - 1356calAD (40.7%) 1388calAD - 1428calAD (54.7%)
IAAA-123551	620 ± 20	92.55 ± 0.26	588 ± 24	1316calAD - 1355calAD (51.2%) 1389calAD - 1403calAD (17.0%)	1303calAD - 1366calAD (68.5%) 1383calAD - 1411calAD (26.9%)
IAAA-123552	780 ± 20	90.78 ± 0.25	786 ± 24	1225calAD - 1264calAD (68.2%)	1216calAD - 1276calAD (95.4%)
IAAA-123553	740 ± 20	91.25 ± 0.24	688 ± 22	1278calAD - 1297calAD (68.2%)	1271calAD - 1306calAD (73.6%) 1363calAD - 1385calAD (21.8%)
IAAA-123554	1,370 ± 20	84.33 ± 0.24	1,307 ± 23	665calAD - 694calAD (44.0%) 703calAD - 706calAD (03.1%) 748calAD - 765calAD (21.2%)	659calAD - 723calAD (67.0%) 740calAD - 771calAD (28.4%)
IAAA-123555	1,200 ± 20	86.11 ± 0.25	1,221 ± 23	728calAD - 737calAD (05.0%) 772calAD - 830calAD (42.9%) 837calAD - 868calAD (20.3%)	695calAD - 700calAD (00.8%) 708calAD - 748calAD (15.7%) 766calAD - 885calAD (78.9%)
IAAA-123556	640 ± 20	92.38 ± 0.26	662 ± 23	1285calAD - 1304calAD (34.2%) 1365calAD - 1384calAD (34.0%)	1280calAD - 1316calAD (48.4%) 1355calAD - 1389calAD (47.0%)
IAAA-123557	950 ± 20	88.88 ± 0.26	907 ± 24	1046calAD - 1093calAD (39.6%) 1121calAD - 1140calAD (14.8%) 1148calAD - 1166calAD (13.8%)	1038calAD - 1186calAD (93.9%) 1200calAD - 1206calAD (01.5%)

Ⅴ　沼袋遺跡で検出された礎石建物跡及び掘立柱建物跡の復元考察

日本建築学会　中村隼人

1　はじめに

本稿は沼袋遺跡（以下本遺跡）で検出された礎石建物跡及び掘立柱建物跡について考察を行う。本遺跡で検出された建物の具体について検証することにより、当該地域の古代集落及び中世前期の拠点集落における建築水準の一端を明らかにするのが本稿の目的である。

2　検出された礎石建物跡・掘立柱建物跡

復元の結果、礎石建物跡１棟・掘立柱建物跡 10 棟が検出された（第 74 図）。ここでは本遺跡で検出された礎石建物と掘立柱建物の特徴について概略を示したい。

A　柱穴形状による分類に基づく掘立柱建物跡の帰属年代

検出された掘立柱建物跡の柱穴形状に明確な差異が確認できたため分類基準を設定した。柱穴形状による分類基準は下記の通りである。柱穴埋土の共伴遺物の年代や他遺構との新旧関係などから考えると、Ａ類を古代・Ｂ類を中世前期に建築された掘立柱建物と想定することができる。

柱穴形状による分類基準

Ａ類（古代）　：柱穴形状が方形を基調とし、比較的大径である。ほとんどの柱穴で柱痕が確認できる。

Ｂ類（中世前期）：柱穴形状が円形ないし不整形で、比較的小径である。柱痕の検出比率はＡ類に劣る。

Ａ類：SB66，SB89，SB155，SB173

Ｂ類：SB22，SB38，SB56，SB106，SB214，SB224

平面形状・間尺の特徴・各部の仕様

次にＡ類（古代）、Ｂ類（中世前期）それぞれの掘立柱建物を平面形状によって分類したい。平面形状による分類基準は下記の通りである（第 74 図）。なお、二間分相当（十二尺、3636mm）以上の梁間寸法を持つ身舎梁間一間の建物は見かけ上の梁間間数が一間になるだけで、実質的には梁間二間建物に分類するのがふさわしい。以上の理由からここでは十二尺以上の梁間寸法を持つ身舎梁間一間建物は変則的な身舎梁間二間建物であると解釈し分類した（２'類）。また、大引を用いた床を持つ可能性が考えられる掘立柱建物については太線表記した。

平面形状による分類基準

１類　　：身舎梁間一間の掘立柱建物

２類　　：身舎梁間二間の掘立柱建物

　２ａ類：庇や下屋を持たない２類の掘立柱建物

　２ｂ類：庇や下屋を持つ２類の掘立柱建物

　２ｃ類：庇や下屋を持ち、さらに孫庇や又下屋を持つ２類の掘立柱建物

　２ｄ類：２類の身舎を複数連結させた掘立柱建物

２'類　　：妻のいずれかが二間分相当（十二尺、3636mm）の梁間寸法を持つ身舎梁間一間掘立柱建物

　２'ａ類：庇や下屋を持たない２’類の掘立柱建物

　２'ｂ類：庇や下屋を持つ２’類の掘立柱建物

　２'ｃ類：庇や下屋を持ち、さらに孫庇や又下屋を持つ２'類の掘立柱建物

　２'ｄ類：２'類の身舎を複数連結させた掘立柱建物

３類　　：身舎梁間三間の掘立柱建物

　３ａ類：庇や下屋を持たない３類の掘立柱建物

　３ｂ類：庇や下屋を持つ３類の掘立柱建物

　３ｃ類：庇や下屋を持ち、さらに孫庇や又下屋を持つ３類の掘立柱建物

　３ｄ類：３類の身舎を複数連結させた掘立柱建物

不明　　：既発掘調査区内で建物が完結せず、全容が不明な掘立柱建物

　　：既発掘調査区内で建物が完結しているが、

上部構造の様相が不明な掘立柱建物

Ａ類（古代）の掘立柱建物

２ａ類：SB66，SB155

不明　：SB89，SB173

Ａ類（古代）の掘立柱建物４棟中、平面形状の具体を知ることが出来るのはSB66とSB155の二棟である。いずれも梁間二間の掘立柱建物で、身舎中央に柱穴ないし床束を持つ平面が予想される。また、ここでは不明に分類したSB89とSB173も同様の平面になりうる柱穴配置を持っている。なお、ここで挙げた４棟はいずれも身舎の妻中央の柱が壁筋よりも柱穴径半分程度外側に位置する傾向がみられる。これらの柱は妻壁に近接する棟持柱であった可能性が高いが、いずれの掘立柱建物も建物が調査区内で完結しておらず、反対側の妻の様相を確認することは叶わない。なお、東北地方の古代の掘立柱建物では六尺から七尺程度の柱間寸法が多用される傾向にあるが、本遺跡で検出されたＡ類（古代）の掘立柱建物では六尺から六尺五寸の柱間寸法が多用されている。

次にＡ類（古代）の掘立柱建物の各部仕様について言及したい。

【屋根】前述したようにここで挙げた４棟は身舎梁間二間で近接棟持柱を持つ掘立柱建物である。小屋組及び屋根勾配については未詳だが、屋根葺材は草葺、屋根形状は切妻であった可能性が高い。

【壁】壁に関しては板壁・茅壁などの選択肢が考えられる。後述するように身舎中央の柱穴列を床束と考えると４棟はいずれも高床建物であった可能性が高い。高床建物を模した家形埴輪の多くに倣い、板壁と考えるのが妥当だろう。

【柱】柱痕の形状から考えると柱材は丸材である。Ａ類（古代）の掘立柱建物の柱痕径は200～400mm程度で300mm程度のものが最も多い。柱痕径と柱材径に大差はないと考えるならば、本遺跡のＡ類（古代）の掘立柱建物の柱材径もまた300mm程度になると考えられる。掘立柱建物の柱穴上端径は600～1000mm程度で800mm前後のものが一番多い。下端径は500～900mm程度で700mm前後のものが一番多い。

【床】いずれも身舎中央で床束が検出されており、高床建物であったと考えられる。大引を用いた床組が存在し、板床が敷かれていたと考えて大過ない。なお、東北地方の古代集落で確認される掘立柱建物の場合、いわゆる側柱建物といわれる身舎内部に柱穴列を持たない掘立柱建物の方が、身舎内部に柱穴列を持つ掘立柱建物に対し検出比率が高い。

【精度】古代官衙で検出される大型掘立柱建物などと比較すると精度に劣るものの、柱穴間の対応関係は良好で高い建築水準をうかがわせる。鉄製工具による木材加工技術が既に伝わっていた可能性も考えられる。

【廃絶】本遺跡のＡ類（古代）の掘立柱建物のように柱痕が多く残されている場合、建物が立った状態で廃絶した可能性や、柱材を抜き取らずに切断し土中に残した部材以外は転用した可能性などが考慮できる。

Ｂ類（中世前期）の掘立柱建物

１類　　：SB214

２ａ類　：SB22，SB56

２'ａ類：SB38，SB106

２'ｂ類：SB224

Ｂ類（中世前期）の６棟中５棟が身舎梁間二間（２類）の掘立柱建物であった。中世集落で最も多く検出される掘立柱建物は、この２類の掘立柱建物である。中世前期段階では庇や下屋を付設させ建物の内部空間を拡張させた身舎梁間二間の掘立柱建物（２ｂ・２ｃ・２'ｂ・２'ｃ類）は希少で、拠点集落で少数みられる程度である。平均的な集落では庇や下屋を付設させない身舎梁間二間の掘立柱建物（２a・２'a類）が主体をなすのが一般的である。検出棟数が少ないため一概に比較はできないが、本遺跡も同様の傾向にあると考えて良いだろう。なお、梁間桁行ともに六尺の柱間寸法が多用されているが、東北地方の中世前期の掘立柱建物としては比較的狭い柱間寸法である。身舎梁間三間の掘立柱建物（３類）、孫庇や又下屋を持つ掘立柱建物（ｃ類）、複数の身舎を連結させる掘立柱建物（ｄ類）は検出されていないが、これら複雑な平面を持つ掘立柱建物は東北地方においては中世後期の城館遺跡等で限定的に確認される事例である。本遺跡のような中世前期の拠点集落で同様の事例が確認されな

いのは妥当な結果である。

次にＢ類（中世前期）の掘立柱建物の各部仕様について言及したい。

【屋根】SB224 は身舎両平に身舎梁間一間分相当の寸法の庇ないしは下屋を出す掘立柱建物である。建物に広い庇空間を造る場合、身舎の桁位置を高く上げるかないしは屋根勾配を緩くする必要がある。緩勾配の屋根の場合、身舎筋の桁高さを極端に上げなくても、広い庇空間を作ることが容易である。対して、急勾配の屋根で広い庇空間を造ることを考えた場合、身舎の桁高さを相当に上げなければ、庇空間に十分な高さを与えることができない。一部の掘立柱建物を除き、一般的に掘立柱建物は簡単に立てられ、簡単に朽ちることを前提とした建物である。過剰な長大材や良材が、建築用材に選ばれたとは考え難く、庇空間に十分な高さを与えるために、桁位置を上げる（つまり長く太い柱を何本も用意する）ような選択がなされたとは考え難い。以上の条件から考えると、SB224 の小屋は和小屋系小屋による緩勾配屋根であったと推論したくもなるが、深雪地方である東根で十四尺五寸の梁間を一本の梁でとばす緩勾配屋根の大型掘立柱建物が造られたとはにわかに考え難い。地勢や気候を加味し SB224 の屋根について推論するならば、身舎にかかる大屋根はサス組系小屋による草葺急勾配屋根で、この両平に緩勾配の下屋が取りついていたと考えるのが妥当であろうか。SB224 を除く５棟に関しては小屋組・屋根勾配・屋根葺材のいずれについても未詳である。

【 壁 】土壁・板壁・茅壁などの選択肢が考えられるが、中世前期の東北地方で検出された施工精度の低い掘立柱建物に土壁が用いられていたとは想定がしがたい。板壁であった可能性が高いが、茅壁の可能性も十分に考えられる。

【 柱 】柱痕の形状から考えると柱材は丸材である。Ｂ類（中世前期）の掘立柱建物の柱痕径は 150mm（五寸）程度のものが最も多い。掘立柱建物の柱穴上端径は 250 ～ 600mm 程度で 300mm 前後のものが一番多い。下端径は 150 ～ 300mm で 200mm 前後のものが一番多い。

【 床 】施工精度が低く、木柄が細いことから大引を用いた床組はなかったと考えたい。転ばし根太に割板を敷くなど大引を用いない床組があったか、ないしは土座や土間であったと考えられる。

【精度】中世後期の城館遺跡で検出されるような施工精度の高い掘立柱建物に比べ、柱穴同士の対応関係が悪く、施工精度で劣る。本遺跡で検出されたＢ類（中世前期）の掘立柱建物は宗教建築や主殿建築などの、一定以上の施工精度を求められた建築群とは別文脈にある掘立柱建物と考えるべきで、在地の庶民層によって自作されたものであると考えて大過ない。また、柱間寸法が当該期のそれぞれの地方における建具や畳などの規格寸法によって規定されると考えるならば、本遺跡で検出された掘立柱建物の全てで既製の建具は用いられていない。

【廃絶】未詳である。

礎石建物の性質と年代

礎石建物が一棟検出されている（SB236）。礎石が散逸している箇所もみられるが SB236 の柱脚部には建物の礎石と考えられる面取りされない自然礫が据えられている。礎石の据え付け方法は、礎石よりも一回り大きく深い掘方を造り、掘方に土を充填し、このほぼ中央に礎石を据えている。礎石下部は掘方埋土に没するが、礎石上部は当時の地表面よりも一段高く、顔を出している。建物が調査区外に伸びる可能性が高く、全容は不明だが、残存する礎石列から想定できる同建物は、東西方向を棟方向とし、梁間二間桁行二間以上の身舎に三面以上の濡縁を付設させた建物であったと考えられる。身舎の柱間寸法は梁間桁行ともに七尺である。東北地方の中世遺跡で礎石建物が検出されること自体が珍しく、寺院や仏堂などの宗教施設を例外とすると、中世末期の一部の城館遺跡で主殿建築と比定される礎石建物が検出される程度である。なお、ここでは SB236 の用途は中世後期の小仏堂ないしは小社殿であったと推論したい。中世末期の主殿建築であったと考えるならば、身舎梁間が三間に大型化している可能性が高く（３類）、間尺も六尺半ばになる傾向がある。身舎梁間間数と間尺のいずれにおいても SB236 に該当しないことから用途に主殿建築を想定

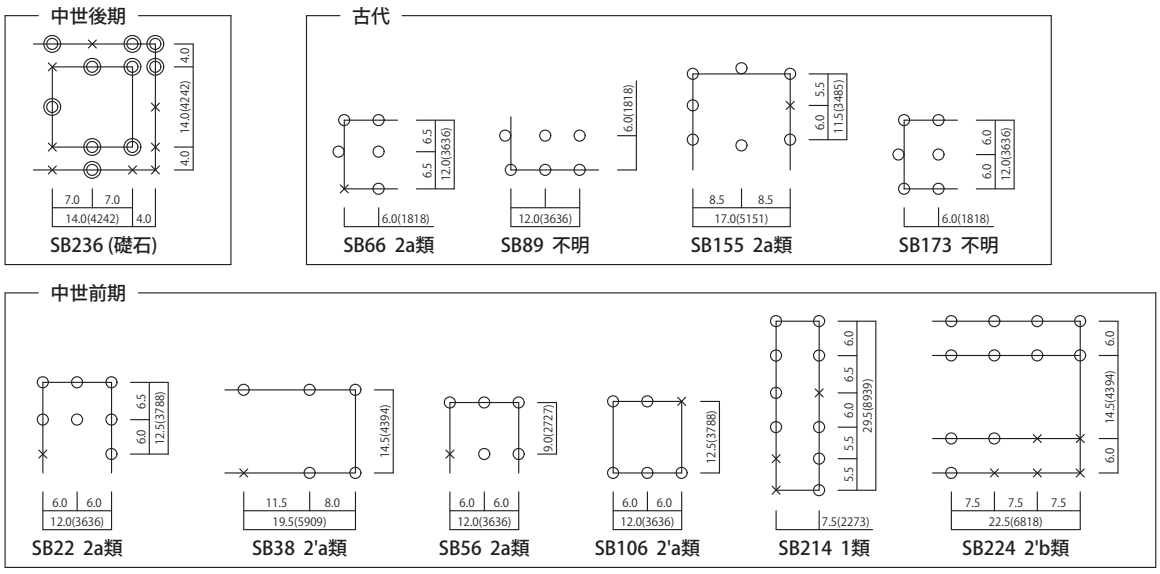
することは難しいと判断した。なお、この礎石建物を小仏堂ないしは小社殿と想定するならば、身舎の外に廻る一間四尺の礎石列は濡縁の縁束を据えた礎石列跡と考えるべきだろう。近世民家としての用途が想定される掘立柱建物で、身舎の平に身舎梁間寸法半間程度の庇を出す事例も確認されるが、三方以上にこれを廻す事例は殆ど確認されない。また近世期の掘立柱建物の間尺は六尺半ばから前半になる傾向がみられるため、やはり整合性に欠ける。SB236 の身舎に廻る一間四尺の礎石列を庇や下屋と考えることは難しい。

3．ま　と　め

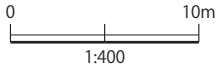
以上、本遺跡で検出された礎石建物跡と掘立柱建物跡について概観した。不詳な部分も多いが一定程度、当該期の建築文化について言及することができたと考えている。東北地方の古代・中世の建築文化を伝える文献史料は乏しく、必然的にその具体を知るためには考古資料に多くを頼らなければならない。沼袋遺跡で検出された礎石建物跡及び掘立柱建物跡は当該地域における集落景観と建築水準を語る上で非常に重要な史料である。

参考文献

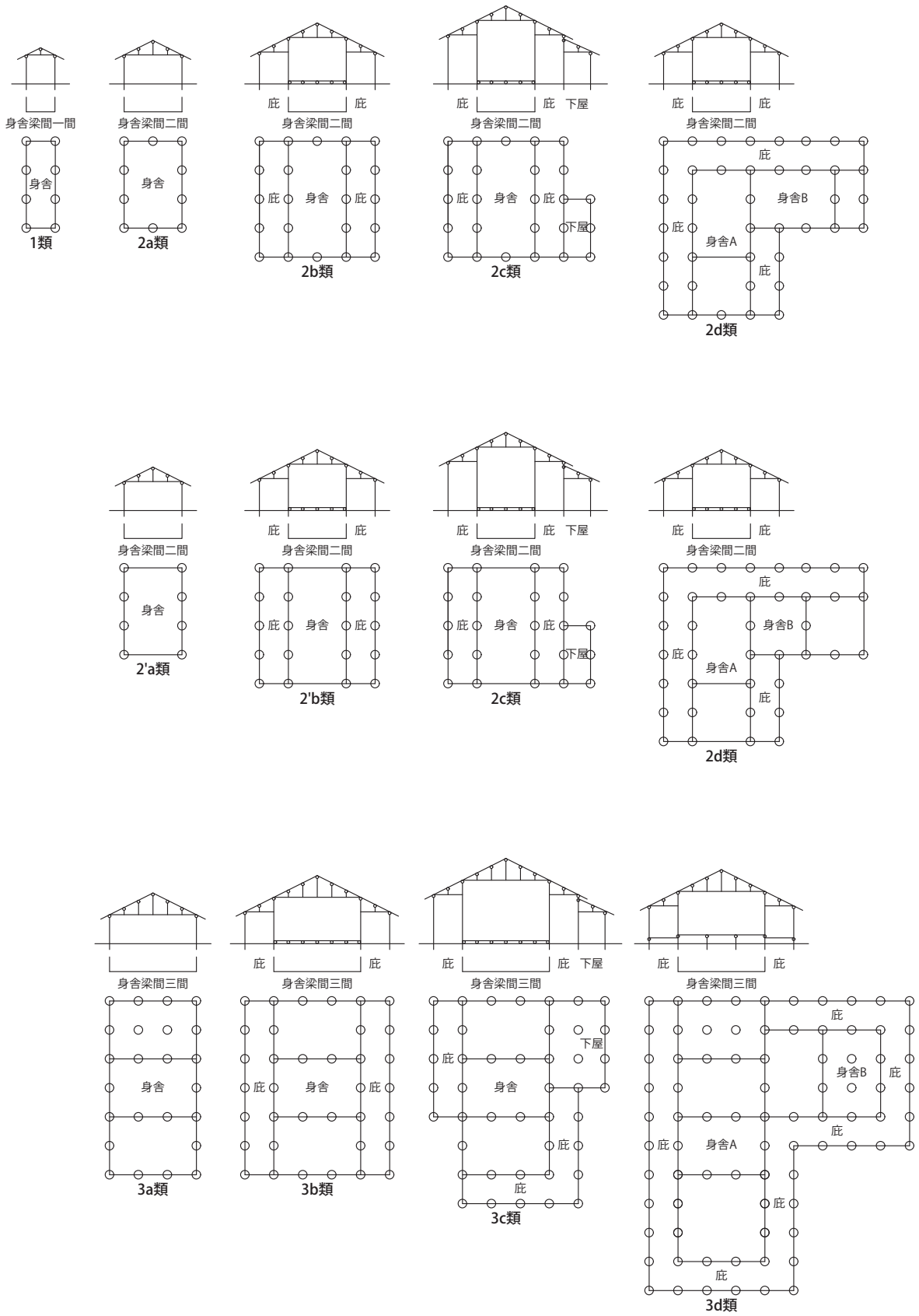
浅川滋男（2013）『建築考古学の実証と復元研究』，同成社.
中近世部会いわき事務局編（2000）『東北地方南部における中近世集落の諸問題―掘立柱建物跡を中心として』（平成 12 年度研究セミナー），福島県考古学会中近世部会.
中村隼人（2009）「掘立柱建物跡からみた十三湊の社会構造と安藤氏像」『研究紀要』第 14 号，pp.37-48，青森県埋蔵文化財調査センター.
――――（2012a）「福島城跡「内郭」の掘立柱建物跡―福島城跡「内郭」南東隅屋敷の空間秩序からみた十三湊安藤氏像」『福島城跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第 522 集，pp.134-138，青森県教育委員会.
――――（2012b）「鍋倉城本丸屋敷の空間秩序」『鍋倉城本丸跡発掘調査報告書』遠野市埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集，pp.103-110，遠野市教育委員会.
――――（2014a）「石江遺跡群で検出された掘立柱建物跡の機能と特徴」『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ―石江土地区画整理事業に伴う発掘調査』青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第 116 集，pp.223-253，青森市教育委員会.
――――（2014b）「新井田古館跡検出の掘立柱建物跡の特質」『新井田古館遺跡第 28 地点―集合住宅建築に伴う発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 147 集，pp.41-43，八戸市教育委員会.
日本建築学会東北支部歴史意匠部会編（1991）『東北地方における中世城郭建築の考古基礎資料』，日本建築学会東北支部.
宮本長二郎（1999）「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間―関口欣也先生退官記念論文集』，pp.3-24，中央公論美術出版.
三輪嘉六・宮本長二郎（1995）『家形はにわ』日本の美術第 348 号，至文堂.
森郁夫（2013）『柱』ものと人間の文化史 163，法政大学出版局.
山上雅弘（2014）「掘立柱建物」『中世城館の考古学』，pp.117-128，高志書院.



＊柱間寸法の表記単位は尺 (mm)



第 74 図　礎石建物跡・掘立柱建物跡模式図



第 75 図　掘立柱建物跡の分類と略平面・略断面

Ⅵ　総　　括

以下では、前章までの内容を要約し、調査の成果を沼袋遺跡が所在する地域の歴史の中に位置づける。また今後の課題についても若干触れたい。

1　発掘調査で得られた事実関係の整理

A　古　　代

発掘区を縦断する自然流路 NR2 の辺に、竪穴建物 10 棟・掘立柱建物 4 棟・廃棄土坑 1 穴などが連なり、集落の居住域を形成している。これらの遺構は、出土土器を当地の編年体系（阿部・水戸 1999）に位置づけることで、更に 3 時期に区分できる。

8 世紀中葉（8 世紀第 2 ～第 3 四半期を中心とする時期）

竪穴建物 SI5 はカマドから内黒土師器椀（4・5）と鉢（6）が出土した。当地では前者の椀は 8 世紀中葉が下限とされ（須賀井 2003）、覆土（薄層）から出土した 8 世紀第 3 四半期の須恵器高台付杯（3）も考慮し、遺構の時期は 8 世紀中葉と判断する。

竪穴建物 SI78 はカマド脇の甕据付穴から貯水用の赤焼土器甕（30）と水をすくう須恵器杯（27 ～ 29）が出土した。赤焼土器甕は「出羽型甕」（伊藤 2004・2005・2006）で、丸底は押し出し技法（利部 1997b）により作り出されている。須恵器杯は 8 世紀第 3 四半期に位置づけられ、赤焼土器甕（30）の放射性炭素年代測定値とも矛盾しない（表 11）。

竪穴建物 SI203 は床面（想定）から内黒の土師器椀（119）甕（122）と 8 世紀第 3 四半期に位置づけられる須恵器杯（123）が出土した。

土坑 SK181 は覆土から土師器甕（148 ～ 150）と 8 世紀第 2 四半期に位置づけられる須恵器杯（143 ～ 147）が出土した。土師器甕（150）の放射性炭素年代測定値とも矛盾しない（表 11）。

9 世紀前葉～中葉（9 世紀第 2 四半期を中心とする時期）

竪穴建物 SI96 は付属土坑 EK103 から土師器甕（35・36）と 9 世紀第 1 ～第 2 四半期に位置づけられる赤焼土器杯（34）が出土した。

竪穴建物 SI124 は当遺跡最大で、カマドは 2 度付け替えられて 3 基ある。カマド EL125 の火床で 9 世紀第 1 四半期の須恵器高台付椀（53）と同第 2 四半期の杯（71）が、竪穴底部の床面で 9 世紀第 2 四半期の須恵器杯（70）と同第 2 ～第 3 四半期の高台付杯（52）が共存した。これは甕据付穴に据えられた土師器甕（45）の放射性炭素年代測定結果とも整合的である（表 11）。総合的には時間に幅を持たせつつも、主体となる時期は 9 世紀第 2 四半期と判断する。

竪穴建物 SI116 は覆土上層ながら、9 世紀第 2 四半期に位置づけられる須恵器杯（39 ～ 41）がまとまって出土した。

掘立柱建物 SB66 は側柱 EP71 の柱掘方埋土から土師器甕（128）と放射性炭素年代測定試料 No.9 の甕（実測図未掲載）が出土した。測定結果は較正年代で 8 世紀後葉～ 9 世紀後葉である（表 11）。柱掘方に含まれる遺物は建築時期がそれより遡らないことを意味し（文化庁文化財部記念物課編 2010b）、当建物は 9 世紀中葉～後葉に属する竪穴建物 SI72 より古いため、遺構の時期は 9 世紀前葉～中葉と判断する。

9 世紀中葉～後葉（9 世紀第 3 四半期を中心とする時期）

竪穴建物 SI30 はカマド脇の甕据付穴から貯水用の赤焼土器甕（13）と中の水をすくう須恵器杯（16）が出土した。須恵器杯は 9 世紀第 3 四半期に位置づけられる。覆土出土の土師器杯（18）は漆パレット容器（小松 2010）で、付着漆の放射性炭素年代測定値も須恵器の年代観と矛盾しない（表 12・13）。

竪穴建物 SI72 はカマドから転用支脚の赤焼土器甕と 9 世紀第 3 四半期の須恵器杯（19 ～ 21）が出土した。

掘立柱建物 SB89 は側柱 EP91 の柱掘方埋土で 9 世紀第 2 四半期に位置づけられる須恵器杯（129）が出土した。これを上限とし、当建物は 9 世紀前葉～中葉に属する竪穴建物 SI96 より新しいため、遺構の時期は 9 世紀中葉～後葉と判断する。

そ の 他　竪穴建物 SI183 は、覆土上層から多量の土器（75 ～ 118）が出土した。9 世紀前葉～後葉（9 世紀第 2 ～第 3 四半期）と、幅を持たせて位置づけられる。

廃棄土坑 SK202 の覆土からも多量の土器（151 ～ 180）が出土した。やはり 9 世紀前葉～後葉（9 世紀第 2 ～第 3 四半期）と、幅を持たせて位置づけられる。

同様に掘立柱建物 SB155・173 の二棟もこの時期に収まるのではないだろうか。

B　中　　世

区画溝に囲われた方形の敷地に、竪穴建物 1 棟・掘立柱建物 6 棟・礎石建物 1 棟・柵 2 本・井戸 7 本・大型土坑 1 穴などを配する。これらの総体は村の屋敷地と考えられる（文化庁文化財部記念物課編 2010a）。

北 区 画　北区画は、区画溝 SD4 と SD37 が直交することで 4 区画が対角に面する。東辺は SD3・52 によって画され、西辺は発掘区外にある。北辺は自然流路 NR1 によって流失し、南限の区画施設は確認できない。

屋敷の構成は、掘立柱建物 SB22・38・56・106 の 4 棟が位置的に伴うか。いずれも梁間 2 間で建物規模は小さい。区画内の小柱穴は（後出の南区画に比べ）総じて少ない。ほかには大型土坑 SK65 が位置する。

屋敷では、SK65 覆土で 13 ～ 14 世紀の瓷器系陶器壺（241）、SD37 覆土から 13 ～ 14 世紀の瓷器系陶器甕（245・246）14 ～ 15 世紀のかわらけ（244）15 世紀の瓦質土器風炉が出土した。瓷器系陶器甕（246）の放射性炭素年代測定値とも矛盾しない（表 12・13）。重複関係を整理すると、区画内部を後に分割する SD64 が（後出の）中区画西辺 SD44 に切られるため、当区画は中区画より古い。主体となる時期は 13 ～ 14 世紀と判断した。

中 区 画　中区画は発掘区中央に位置する。北辺は SD45・46 が二重に巡り、西辺は SD44、南辺は SD114 によって画される。南辺中央には更に南北溝 SD113 が接続し、痕跡的ながら、南面にもう 2 区画が見て取れる。

区画内部の様相はよく分からない。北面の区画内に中世の遺構はほとんど無く、若干の小穴も柱痕跡は見当たらず。南面の 2 区画は（後出の）南区画と全体が重複するため、伴う遺構を厳密には識別できない。ただ、北面の様相を考慮すると恒常的な遺構の存在は予感させない。区画溝も極端に浅いことから（0.1 m以下）、土地利用の在り方が屋敷地とは異なるのではないだろうか。関連する遺構は未検出ながら、耕地の可能性も考えておきたい。

重複関係を整理すると、南辺 SD114 が南区画北辺 SD88 に切られる。当区画は上述の北区画より新しく、南区画より古い。

南 区 画　発掘区全体を見渡すと、区画溝 SD88 を境界に南北で遺構密度が大きく異なることが分かる。また同遺構は中世陶磁器の出土量が最も多い。したがって、SD88 以南を中世最盛期の空間とみる。すなわち南区画は、北辺はこの SD88、南辺は堀 SD259 によって画される。SD259 は上幅 4.0 m以上・深さ 1.7 mと、区画溝から隔絶した規模を持つ。中世城館の区画溝・堀の基本分類（宇留野 2014）に従い、本書ではこれを「堀」とする。堀 SD259 は、埋没過程で東側（発掘区外）から分厚く埋め戻されている。丁字形を成す堀の東隣に、土塁が存在した可能性が高い。

屋敷の構成は、二面廂建物 SB224 が主屋で、長棟建物（浅川 2013）SB214 を伴う。前者は後に同位置で礎石建物 SB236 に建て替えられる。SB236 は三面以上に縁が付く社殿ないし仏堂と推定される（前章）。このほか、竪穴建物 SI254、柵 SA117・189、井戸 SE195 ～ 200 などが屋敷に伴うとみられる。柵 2 本は古代の自然流路 NR2 の際に設置され、低湿地と高燥地を区画している。

屋敷では、北辺 SD88 の覆土から 13 世紀のかわらけ（275）13 ～ 14 世紀の中世陶器（258 ～ 274・278 ～ 284）14 世紀初頭の古瀬戸瓶子（277）が出土した。瓷器系陶器甕（272・281）の放射性炭素年代測定値とも矛盾しない（表 11 ～ 13）。堀 SD259 の覆土から 13 世紀前半の青磁椀（294・295）13 ～ 14 世紀の瓷器系陶器甕（296・297）が、竪穴建物 SI254 の覆土からも 13 ～ 14 世紀の瓷器系陶器が出土した。

重複関係を整理すると、当区画は北区画・中区画より新しい。それでも出土遺物の年代に差は認められない。主体となる時期は 13 ～ 14 世紀と判断した。

SD51 区画　当区画は発掘区中央東寄りに位置する。大

半を自然流路 NR1 によって流失し、発掘区の制限もあって北西の一角と西辺の検出にとどまった。屋敷の構成は不明である。

SD51 覆土から 13 ～ 14 世紀の瓷器系陶器甕（247 ～ 255）13 世紀の須恵器系陶器甕（256）壺（257）が出土した。瓷器系陶器甕（247 ～ 249・253 ～ 255）の放射性炭素年代測定値は矛盾しない（表 11 ～ 13）。

重複関係を整理すると、当区画は前出の 3 区画いずれよりも新しい。それでも出土遺物の年代に差は認められない。主体となる時期は 13 ～ 14 世紀と判断した。

2　地域の中での歴史的評価

A　古　　代

東根市域は古代村山郷に比定されながら、諸遺跡では部分的な発掘調査にとどまってきた。沼袋遺跡の調査成果は、古代村山郷に存在した集落の実態を知る上で注目される。

前節で整理したとおり、当遺跡から出土した土器群は山形盆地の編年に照らして齟齬はない。

8 世紀中葉は食器は須恵器杯類が主体で、土師器椀が僅かに伴う。須恵器は回転ヘラ切りで底径が大きい。土師器椀は平底で木葉痕やムシロ痕（以下ムシロ底（稲野 1995））を残す。国分寺下層式新段階（仲田 1989）の範疇で捉えられる。甕は非ロクロ土師器（以下土師器）甕と赤焼土器甕が共存する。前者は前代からの系譜でハケメやヘラナデ調整を多用する（植松 2008）。椀同様ムシロ底がみられる。後者はロクロ成形・酸化焔焼成の甕を指し（八木 2006a）、中には長胴丸底の出羽型甕を含む。

9 世紀前葉以降は食器の主体は須恵器杯類で変化ないものの、土師器椀は姿を消し、新たにロクロ土師器杯と赤焼土器杯が伴う。須恵器底部の切離しは回転糸切りに変化し、底径も小さくなる。甕は土師器甕と赤焼土器甕がなお共存するが、後者はサイズの大中小に分化する。

東北地方では平安時代初期の 8 世紀第 4 四半期～ 9 世紀第 1 四半期を画期としてロクロ土師器が導入される（吾妻 2004，仲田 1994，八木 2006b）。この転換は表杉ノ入式土師器（氏家 1957）の成立に対応し、広くは律令的土器様式（西 1982）の展開と理解されてきた（利部 1997a，坂井 1994，三浦 1994）。

こうした中で、当遺跡では新様式を受容してもなお在地の土師器甕を使用し続けている（SI30・72・96・124・183・SK202 など）。9 世紀初頭以降の土師器甕は奥羽北部に多く分布するため、ロクロ成形・平底の陸奥型甕（伊藤 1990）と丸底の北陸・出羽型甕から区別し、「北奥型甕」（八木・神原 1999）と呼ばれている。近年では北緯 40 度以南にも分布が確認され（菅原 2000）、従来あまり注意されてこなかった存在として注目を集めつつある（伊藤 2010，伊藤 2006，八木 2006b）。

当遺跡の 9 世紀の土師器甕は、8 世紀中葉の国分寺下層式甕と類似的で明確には分け難い。古墳時代から連綿と続く系譜の中で、生産は基本的に自家製から変化していないとみられる。ただ、例えば第 52 図 12 の外面のヘラケズリ化は、共存した同 13 の赤焼土器甕の影響を考えたくなる。第 58 図 112 ≒ 118、110 ≒ 第 55 図 58 など、ロクロ成形品と非ロクロ成形品で器形や寸法・調整技法が類似する現象は、新様式の特徴の一つとされる（村田 1994）。

一方でロクロ成形の赤焼土器甕は、須恵器生産との関わりの中から生まれたもので、土師器甕とは生産体制が異なる（仲田 1994，山中 2002）。当遺跡の場合、遺構単位で見ると赤焼土器甕の保有率は土師器甕より低い。沼袋集落で依然土師器甕が使われ続けるのは、伝統の根強さもさることながら、赤焼土器甕の生産が周辺集落まであまねく供給しようとしたものではなかったためであろう。

B　中　　世

区画溝に囲われた方形屋敷地が密集する中、発掘区南端で検出した堀 SD259 の特異性が際立つ。上幅 4.0 m 以上・下幅 1.6 m・深さ 1.7 mと、区画溝から隔絶した規模である。

SD259 は断面逆台形を呈するが、堀の断面形態は全国的に共通する部分があり、年代の指標となる可能性が見いだされている（宇留野 2009・2011・2014）。SD259 が分類される「堀 B」（箱薬研堀）は 13 世紀後葉に出現し、14 世紀末～ 15 世紀後半に大規模化を遂げる（宇留野 2014）。この大規模化は東日本における

方形館（やかた）の成立に対応し（橋口 2004・2005）、当遺跡のような溝区画の屋敷地とは明確に区別される。また SD259 の東隣（発掘区外）に土塁の存在を推定したが、その出現も 15 世紀以降のことである（水澤 2014）。

では SD259 をどう考えればよいか。第Ⅱ章第 2 節で触れたとおり、当遺跡の南に隣接する長瀞本楯館との関連を想定したい。

本楯館の年代は定かでないが、平成 16 年の試掘調査で 15 世紀代の古瀬戸などが出土した（山形県教育委員会 2006）。実測図が掲載された尊式花瓶は後期様式Ⅱ期（14 世紀末～ 15 世紀初頭）に位置づけられ（藤澤 2008）、堀の年代観とも矛盾しない。当遺跡と本楯館は山形県遺跡地図を基にした第 1 図で見ると、南端と北端が平行圏で重複する。実際には斜線で約 500 mは隔たるが、遺跡地図の真偽のほどは分からない（五十嵐 2005）。いずれにせよ SD259 が本楯館の影響下で造られた可能性は高く、その年代は 15 世紀に求められる。

ただ、SD259 の覆土からは 13 ～ 14 世紀の陶磁器が出土している。覆土一括の取上げゆえ、出土層位は不明である。それでも北区画の SD37 からは 14 ～ 15 世紀の土器が出土し、SD259 に近接する礎石建物（SB236）は平地城館では 14 世紀後半～ 15 世紀初頭に出現する（早川 2014）。したがって、当遺跡の主体は 13 ～ 14 世紀にあるものの、15 世紀の人間活動が全く無かったわけではない。その脈絡で SD259 を理解したい。

以上をまとめると、13 ～ 14 世紀に溝区画の屋敷群（村）が当遺跡に営まれ、15 世紀には新たな原理に基づく堀区画の方形館（本楯館）が成立する。その間の連続性、方形溝遺跡の中から領主居館が生まれてくるという展開は認めがたい（水澤 2014）。

3　課　　題

以上、当遺跡の発掘調査によって明らかになった事実は数多いが、一方で今後に残された課題も少なくない。

まず 9 世紀以降のロクロ成形品と非ロクロ成形品の共存する組成は、時間的・空間的にどこまでの広がりを持つのか。古代最上郡の地域性を考える上でも重要である。今後、村山郷や北に接する大倉郷（村山市域）に所在する遺跡の土器様式が、刊行を控える当センターの発掘調査報告書で明らかにされるであろう。

また堀 SD259 以南（長瀞本楯館）は本書の主題から外れるため、積極的な言及は控えた。今後は当遺跡（屋敷地）を介し、南の本楯館（方形館）側からのアプローチ（梅津 2010）や、北に臨む八反遺跡（墓域）（高桑 2013）の本報告に成果を委ねたい。

引用・参考文献

吾妻俊典（2004）「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第 6 号，pp.187-196，宮城県考古学会.

浅川滋男（2013）『建築考古学の実証と復元研究』，同成社.

阿部明彦・水戸弘美（1999）「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』，pp.63-112，第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会事務局.

五十嵐彰（2005）「遺跡地図論」『史紋』第 3 号，pp.99-107，『史紋』刊行会.

伊藤武士（2010）「平安時代におけるムシロ底土器の出現と展開」『北方世界の考古学』，pp.167-185，すいれん舎.

伊藤博幸（1990）「陸奥国における黒色土師器―その展開と終焉」『東国土器研究』第 3 号（特集：黒色土器―展開と終焉），pp.1-15，東国土器研究会.

――――（2004）「陸奥国の「出羽型甕」―その史的意義」『岩手考古学』第 16 号（菊池啓次郎先生傘寿記念），pp.113-124，岩手考古学会.

――――（2005）「古代東北の甕二題―陸奥型甕と出羽型甕」『第 31 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』，pp.241-248，古代城柵官衙遺跡検討会.

――――（2006）「陸奥型甕・出羽型甕・北奥型甕―東北地方の平安期甕の製作技法論を中心に」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集，pp.171-182，桂書房.

稲野彰子（1995）「いわゆるムシロ底について」『北上市立博物館研究報告』第 10 号，pp.1-12，北上市立博物館.

植松暁彦（2008）「出羽国創建期（7 ～ 8 世紀）の山形県の土師器の様相」『出羽国ができるころ―出羽建国期における南出羽の考古学』（第 16 回企画展展示図録），pp.108-114，山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館.

氏家和典（1957）「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯，pp.1-14，東北史學會（再録（1988）『東北古代史の基礎的研究』，pp.12-34，東北プリント）.

梅津操（2010）「長瀞本楯の字切図による考察」『さあべい』第 26 号，pp.79-89，さあべい同人会.

宇留野主税（2009）「中世城館の成立過程―白石遺跡と屋代 B 遺跡から」『Archaeo-Clio』第 10 号，pp.79-101，東京学芸大学考古学研究室.

宇留野主税（2011）「中世城館の構造と年代―茨城県内の事例集成と基準資料」『茨城中世考古学の最前線―編年と基準資料』第 1 分冊（発表資料編・基準資料編（県北・県央・鹿行・県西地区）），pp.89-110，茨城県考古学協会.
――――（2014）「堀・堀内障壁〔障子堀〕」『中世城館の考古学』，pp.33-46，高志書院.
利部修（1997a）「平安時代東北の長頸瓶」『生産の考古学』倉田芳郎先生古稀記念，pp.165-172，同成社（再録（2008）『出羽の古代土器』，pp.245-254，同成社）.
――（1997b）「出羽地方の丸底長胴甕をめぐって」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第 12 号，pp.1-18，秋田県埋蔵文化財センター（再録（2008）『出羽の古代土器』，pp.223-244，同成社）.
小松正夫（2010）「秋田城跡における漆工の展開」『北方世界の考古学』，pp.43-70，すいれん舎.
坂井秀弥（1990）「東北古代ロクロ土師器甕の二系譜と須恵器との関係―丸底の出羽、平底の陸奥」『新潟考古学談話会会報』第 6 号，pp.30-36，新潟考古学談話会.
――――（1994）「古代北日本の土器と生産」『北陸古代土器研究』第 4 号（特集：須恵器生産における 8 世紀中葉の画期），pp.164-177，北陸古代土器研究会（再録（2008）『古代地域社会の考古学』，pp.214-240，同成社）.
須賀井新人（2003）「出羽南半における黒色土師器の編年」『山形考古』第 7 巻第 3 号（通巻 33 号）（山形考古学会設立 30 周年記念特集号），pp.82-108，山形考古学会.
菅原祥夫（2000）「平安時代における蝦夷系土器の南下―蝦夷の移住をめぐって」『阿部正光君追悼集』，pp.131-142，阿部正光君追悼集刊行会.
高桑登（2013）「東根市八反遺跡の発掘調査」『北村山の歴史』第 13 号，pp.38-44，北村山地域史研究会.
仲田茂司（1989）「陸奥国における奈良時代土師器の地域性について」『歴史』第 72 輯，pp.73-104，東北史学会.
――――（1994）「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌』第 79 巻第 3 号，pp.56-91，日本考古学会.
西弘海（1982）「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集，pp.447-471，平凡社（再録（1986）『土器様式の成立とその背景』西弘海論文集，pp.1-28，真陽社）.
橋口定志（2004）「中世前期居館の展開と戦争」『戦争Ⅰ―中世戦争論の現在』（【もの】から見る日本史），pp.139-164，青木書店.
――――（2005）「東国の武士居館―中世前期から中世後期へ」『戦国の城』埼玉県立歴史資料館編，pp.27-44，高志書院.
早川圭（2014）「礎石建物」『中世城館の考古学』，pp.129-140，高志書院.
藤澤良祐（2008）『中世瀬戸窯の研究』，高志書院.
文化庁文化財部記念物課編（2010a）『発掘調査のてびき』集落遺跡発掘編，文化庁文化財部記念物課.
――――――――――（2010b）『発掘調査のてびき』整理・報告書編，文化庁文化財部記念物課.
三浦圭介（1994）「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学―南と北の地域性』，pp.149-174，吉川弘文館.
水澤幸一（2014）「平地の方形城館」『中世城館の考古学』，pp.169-184，高志書院.
村田晃一（1994）「土器からみた官衙の終末―東北地方の場合」第 3 回東日本埋蔵文化財研究会『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第Ⅰ分冊（問題提起・各地方の概要・追加資料報告），pp.46-65，東日本埋蔵文化財研究会.
八木光則・神原雄一郎（1999）「出土土器の検討」『前野遺跡―浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』，pp.133-136，盛岡市教育委員会.
八木光則（2006a）「北奥羽の赤焼土器」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古稀記念論文集，pp.743-758，匠出版.
――――（2006b）「陸奥北半における轆轤土師器の導入」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集，pp.155-170，桂書房.
山形県教育委員会（2006）「長瀞本楯館跡」『分布調査報告書 (32)』山形県埋蔵文化財調査報告書第 206 集，pp.18-21.
山中雄志（2002）「会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って」『福島考古』第 43 号，pp.71-86，福島県考古学会.

写真図版

発掘区全景（上が北）

竪穴建物 SI5 全景（北から）

竪穴建物 SI5 土坑 EK12（北から）

竪穴建物 SI5 カマド EL6（北から）

竪穴建物 SI5 柱穴 EP7 断面（北から）

竪穴建物 SI5 柱穴 EP9 断面（北から）

竪穴建物 SI30 甕据付穴 EK35 断面（東から）

竪穴建物 SI30 カマド EL31 遺物出土状況（東から）

竪穴建物 SI30 全景（東から）

竪穴建物 SI62 南北断面（東から）

竪穴建物 SI62 東西断面（南から）

竪穴建物 SI72 カマド EL73（北から）

竪穴建物 SI72 カマド EL73 断面（東から）

竪穴建物 SI72 土坑 EK74 断面（北から）

竪穴建物 SI72 全景（北東から）

竪穴建物 SI78 全景（北から）

竪穴建物 SI78 柱穴 EP87・カマド EL79 断面（北から）

竪穴建物 SI78 甕据付穴 EK80 断面（東から）

竪穴建物 SI78 甕据付穴 EK80（北から）

竪穴建物 SI78 土坑 EK81 断面（北から）

竪穴建物 SI78 土坑 EK81（北から）

竪穴建物 SI78 土坑 EK83 断面（西から）

竪穴建物 SI78 土坑 EK84 断面（南から）

竪穴建物 SI78 土坑 EK86 断面（北から）

竪穴建物 SI78 土坑 EK86（北から）

竪穴建物 SI78 土坑 EK85 断面（北東から）

竪穴建物 SI78 柱穴 EP87（北から）

竪穴建物 SI96 カマド EL97（北から）

竪穴建物 SI96 灰溜穴 EK98 断面（北から）

竪穴建物 SI96 全景（北から）

竪穴建物 SI96 柱穴 EP101 断面（北から）

竪穴建物 SI96 柱穴 EP104 断面（北から）

竪穴建物 SI96 土坑 EK102 断面（北から）

竪穴建物 SI96 土坑 EK102（北から）

竪穴建物 SI96 土坑 EK103 断面（北から）

竪穴建物 SI96 土坑 EK103（北から）

竪穴建物 SI116 断面（北東から）

竪穴建物 SI116 全景（北から）

竪穴建物 SI116 遺物出土状況（西から）

竪穴建物 SI124 カマド EL125 断面（北東から）

竪穴建物 SI124 カマド EL125（北から）

竪穴建物 SI124 カマド EL125 掘方断面（北から）

竪穴建物 SI124 全景（北から）

竪穴建物 SI124 カマド EL128 断面（西から）

竪穴建物 SI124 カマド EL126 断面（東から）

竪穴建物 SI124 カマド EL128（西から）

竪穴建物 SI124 カマド EL128 掘方断面（西から）

竪穴建物 SI124 柱穴 EP131 断面（北から）

竪穴建物 SI124 柱穴 EP132 断面（北西から）

竪穴建物 SI124 柱穴 EP134 断面（西から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK135 断面（西から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK136 断面（南から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK140（南から）

竪穴建物 SI124 灰溜穴 EK144 断面（西から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK146 断面（西から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK147 断面（南西から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK149 断面（北東から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK151 断面（東から）

竪穴建物 SI124 土坑 EK153 断面（北から）

竪穴建物 SI183 断面（南西から）

竪穴建物 SI183 遺物出土状況（南西から）

竪穴建物 SI183 土坑 184・185 断面（北東から）

竪穴建物 SI203 土坑 EK205 断面（北から）

竪穴建物 SI203 土坑 EK206 断面（北から）

竪穴建物 SI247 全景（北から）

掘立柱建物 SB66 柱穴 EP67 断面（東から）

掘立柱建物 SB66 柱穴 EP70 断面（南から）

掘立柱建物 SB89 柱穴 EP90 断面（東から）

掘立柱建物 SB89 柱穴 EP91 断面（北から）

掘立柱建物 SB89 柱穴 EP92 断面（北から）

掘立柱建物 SB89 柱穴 EP93 断面（北から）

掘立柱建物 SB89 柱穴 EP94 断面（西から）

掘立柱建物 SB89 柱穴 EP95 断面（西から）

掘立柱建物 SB155 柱穴 EP156 断面（北から）

掘立柱建物 SB155 柱穴 EP157 断面（北西から）

掘立柱建物 SB155 柱穴 EP158 断面（南から）

掘立柱建物 SB155 柱穴 EP159 断面（東から）

掘立柱建物 SB173 柱穴 EP174 断面（北から）

掘立柱建物 SB173 柱穴 EP175 断面（東から）

掘立柱建物 SB173 柱穴 EP176 断面（北から）

柱穴 SP171 断面（南から）

柱穴 SP168 断面（東から）

柱穴 SP209 断面（北から）

土坑 SK201・廃棄土坑 SK202 断面（北東から）

廃棄土坑 SK202 断面（南西から）

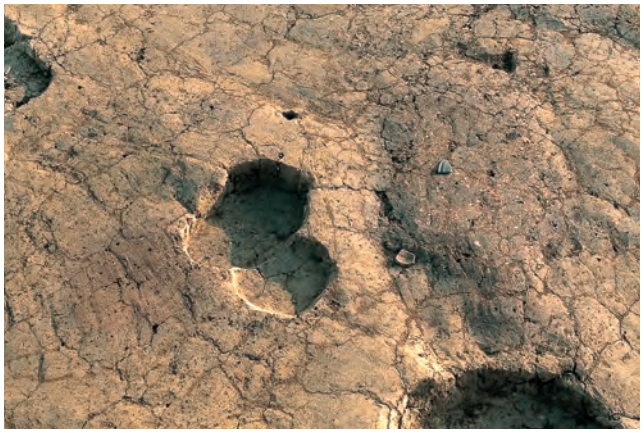
廃棄土坑 SK202 遺物出土状況（西から）

土坑 SK163 断面（東から）

竪穴建物 SI254 断面（北西から）

礎石建物 SB236 礎石据付穴 EP240 断面（東から）

礎石建物 SB236 礎石据付穴 EP245 断面（北から）



炉 SL20（北から）

炉 SL123（北から）

大型土坑 SK65 断面（東から）

井戸 SE194 断面（東から）

井戸 SE195 断面（北から）

井戸 SE196 断面（北から）

井戸 SE198 断面（東から）

基本層序断面（北から）

区画溝 SD4 断面（南東から）

区画溝 SD4A・4B 断面（南東から）

区画溝 SD37 断面（西から）

区画溝 SD64 断面（北東から）

区画溝 SD88 断面（東から）

堀 SD259 断面（北から）

1

2

3

6

4

7
10

5

8

9

11

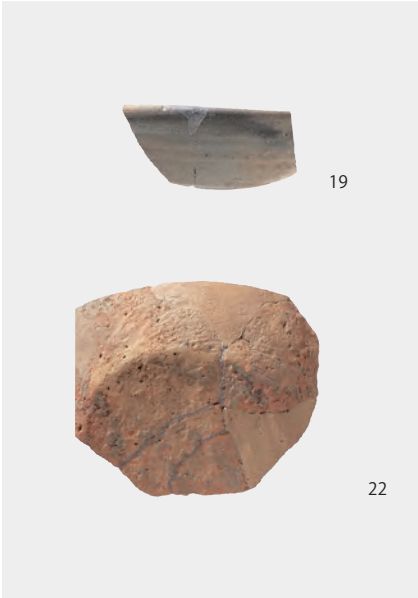
12

古代土器 SI5・30（1）

13

14

15 17


19 22

16

18

20

21

25

23

24

古代土器 SI30（2）～78（1）

28

27

29

26 31

32 33 34

30

35 36 38 37

39

40

41

古代土器 SI78（2）～ 116

42

43

44

46

50

47

51

55

56

45

45

48

52

57

49

53

54

古代土器 SI124（1）

古代土器 SI124（2）

68

70

83

69

71

84

75
76
79
80
89

77

85

78

86

81

82

87

古代土器 SI124（3）・183（1）

88

90

91

94

109

103

古代土器 SI183（2）

92
93
95
96
98
99
100
101
102
104
105
106
107
108
111
113
114
115
117
97
110
112
116
118

古代土器 SI183（3）

119

124

120 123

121

122

133

125 126

134

127

128

129

131

132

135

130

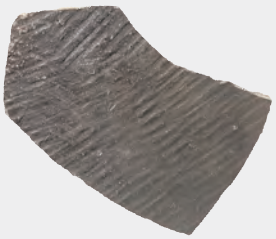
136

古代土器 SI203 ～ 254・SB・SP・SK19

138

137

139


141

142

140

143

148

144

145

146

147

149

150

古代土器 SK21 ～ 181

153

155

161

167

169

171

168

170

172

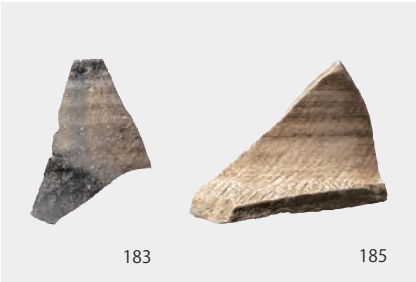
159

178

古代土器 SK202（1）

古代土器 SK202（2）

181
182


183
185

186

187

184

191
193

194
195

188
189
190

192

199
200
201
202

197

196

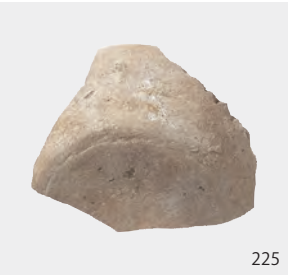
203
205
206

古代土器 SD・NR2（1）

古代土器 NR2（2）・グリッド（1）

221

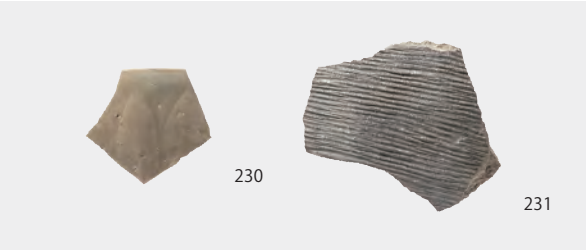
224


225

226

223

228


230 231

232 233 234 235 236 237 238

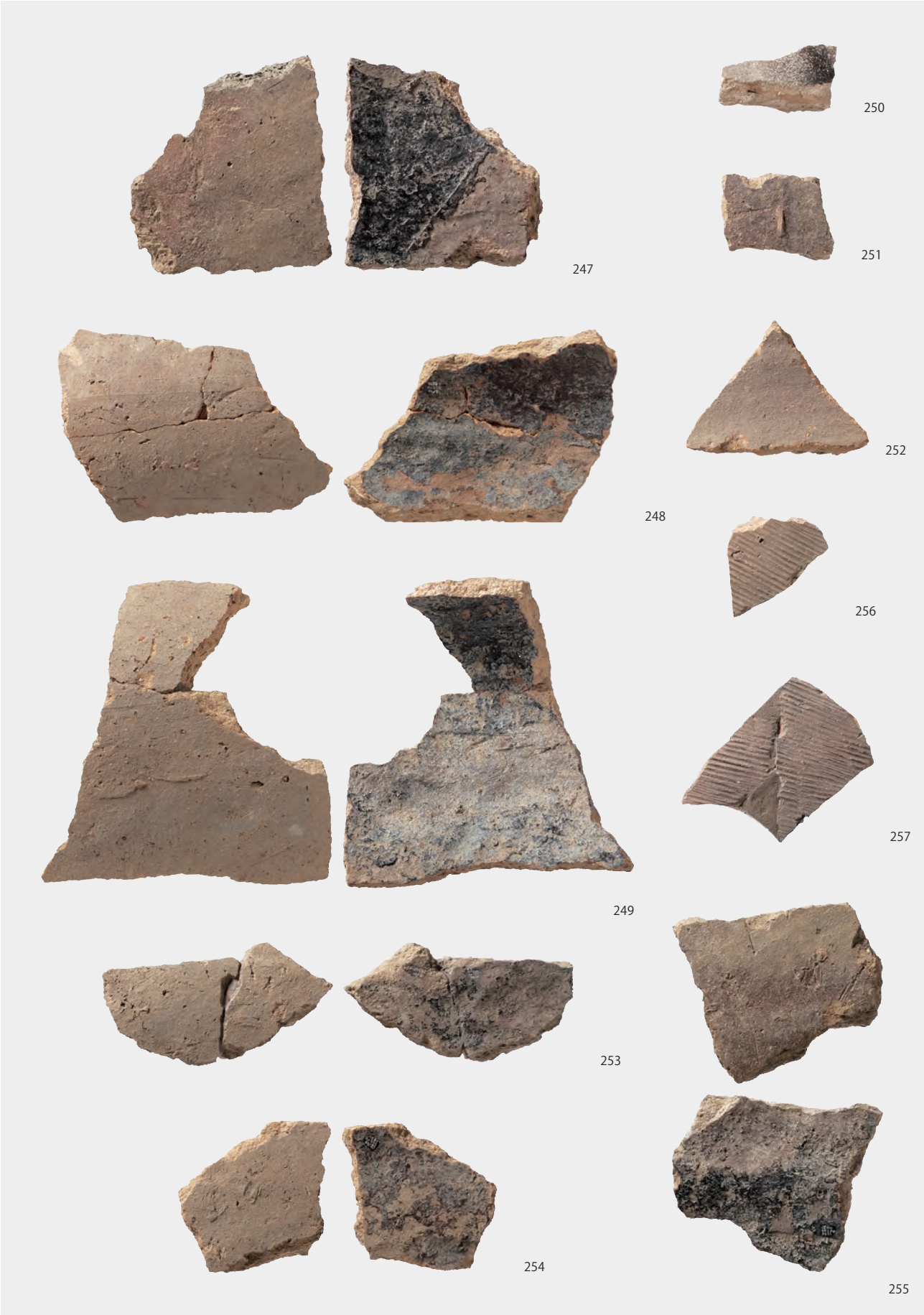
239 240

241

242

243 244 245 246

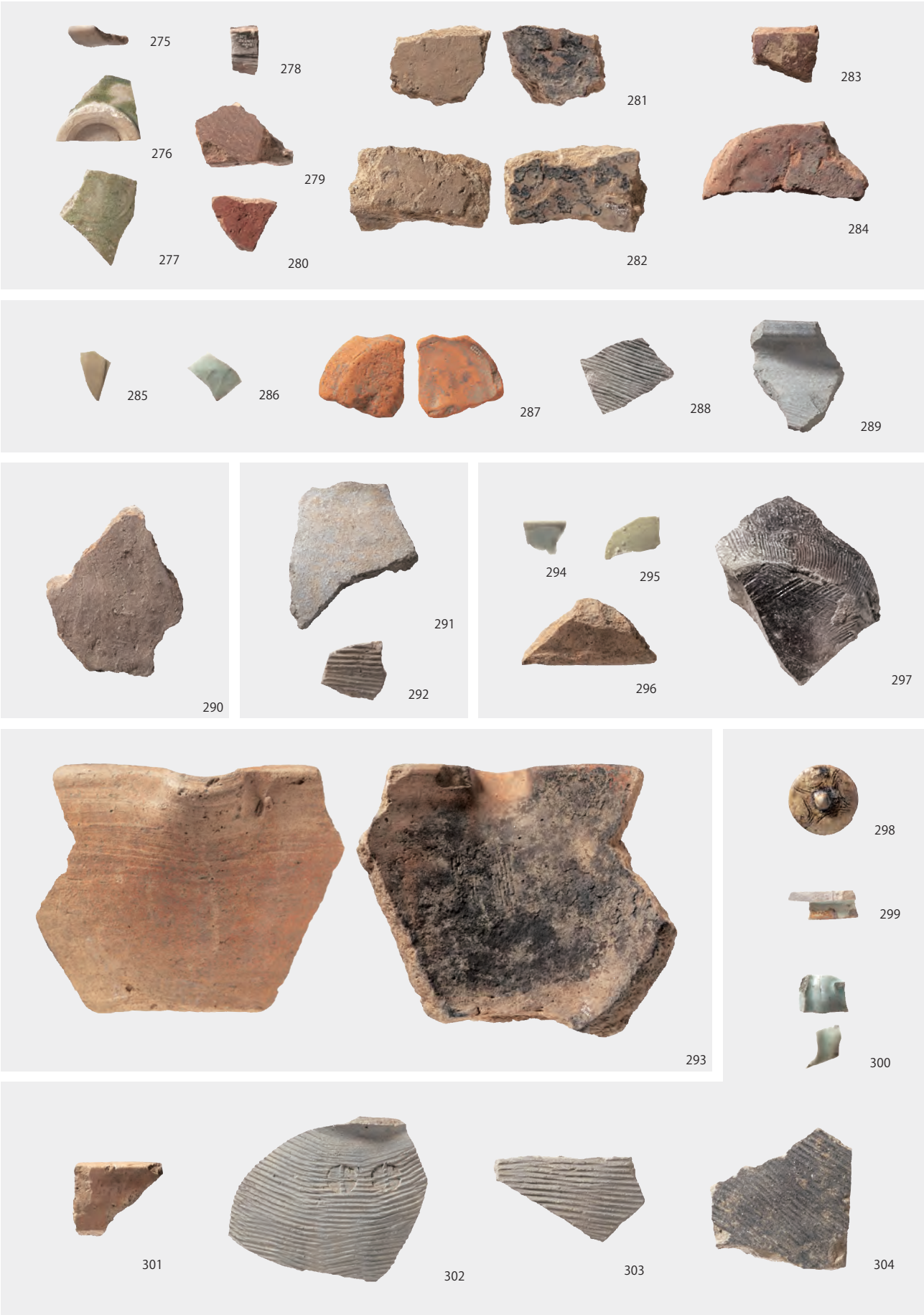
古代土器グリッド（2），中世陶磁器 SI・SE・SK・SD37



中世陶磁器 SD51

258
259
264
268
260
261
265
269
262
266
270
263
267
271
272
273
274

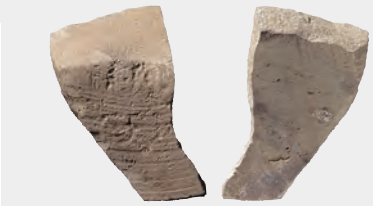
中世陶磁器 SD88（1）



中世陶磁器 SD88（2）～259・NR1

306

305 307 308


309

310 311 312 313

314

317

318

315 316

324 325 326

319

320

327

321 322

323

中世陶磁器 NR2・グリッド（1）

中世陶磁器グリッド（2），石製品 SI5 ～ 72（1）

343

349

350

345

346

347

348

344

351

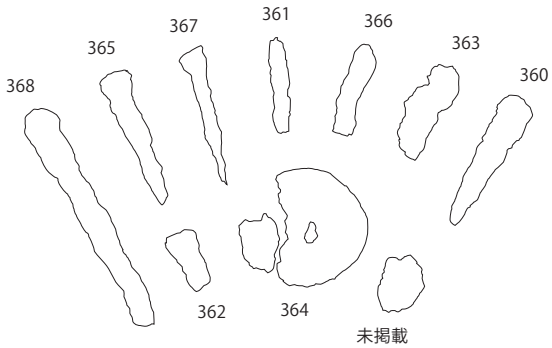
352

355

357

358

石製品 SI72（2）～ 124・SE・SK・SD76（1）・グリッド（1）



石製品 SD51～76（2）・グリッド（2），鉄製品，木製品

報告書抄録

ふ り が な	ぬまぶくろいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	沼袋遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第216集
編 著 者 名	菊池玄輝
編 集 機 関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷5608番地　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ぬまぶくろいせき 沼袋遺跡	やまがたけん 山形県 ひがしねし 東根市 おおあざながとろ 大字長瀞 あざぬまぶくろ 字沼袋	211	070	38°　27′　58″	140°　21′　33″	20110517 ～ 20111117	5,700 ㎡	東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ぬまぶくろいせき 沼袋遺跡	集落	古代	自然流路　1 竪穴建物　10 掘立柱建物　4 土坑・柱穴　多数	土師器 須恵器 赤焼土器 石製品、鉄製品	中世では、南に接する長瀞本楯館に関連する堀と、三面以上に縁が付く礎石立ちの社殿ないし仏堂を検出。 （文化財認定箱数：31）
	屋敷地	中世	竪穴建物　1 掘立柱建物　6 礎石建物　1 柵　2 井戸　7 区画溝・堀　16 土坑・柱穴　多数	土師質土器 瓦質土器 瓷器系陶器 須恵器系陶器 珠洲、越前、古瀬戸 青磁、青白磁 石製品、鉄製品	

要　　約

遺跡が所在する東根市域は古代村山郷に比定されながら、本格的な発掘調査には恵まれず、当地の集落の実態は不明であった。今回の調査では、縦断する自然流路の辺に、竪穴建物や掘立柱建物が連なる集落の居住域が見つかった。集落は9世紀に律令的土器様式を受け入れるが、前代からの伝統も固持し、なお在地の土師器甕を使い続けていた。この特徴的な土器様式がどこまでの広がりを持つのか、古代最上郡の地域性を考える上でも重要である。

また調査では、密集する中世の屋敷地も見つかった。区画溝に囲われた方形の敷地に、掘立柱建物や礎石建物・井戸などを配する。特筆すべきは発掘区南端で検出した堀で、周囲の区画溝から隔絶した規模を持つ。遺跡の南に接する長瀞本楯館（ながとろもとだてたて）との関連が想定され、堀の付近では社殿ないし仏堂と考えられる礎石建物も検出した。今回の屋敷地の調査は、南の長瀞本楯館（方形館）と北に接する八反遺跡（墓域）との関係から、中世の景観を考える上で重要な成果といえる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 216 集

沼袋遺跡発掘調査報告書

2015 年 3 月 31 日発行

発行　公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地
電話　023 - 672 - 5301
印刷　中央印刷株式会社
〒 990 - 0051　山形県山形市銅町一丁目 1 - 5
電話　023 - 631 - 5533